池波正太郎

真田太平記

（一）天魔の夏

新潮文庫

新潮文庫

真田太平記

第一巻　天魔の夏

池波正太郎著



新潮社

新潮文庫

真田太平記

第一巻　天魔の夏

池波正太郎著



新潮社版

3911

真田太平記

第一巻・天魔の夏


志賀高原
長野県
(信濃)
群馬県
(上野)
新潟へ
白根山
名胡桃城
沼田城
ぬまた
草津
岩櫃城
吾妻線
中棚
ながのはら
鳥居峠
嬬恋
丸岩城
吾妻渓谷
伊香保
しぶかわ
利根川
榛名山
榛名湖
上田城
真田の庄
浅間山
砥石城
まえばし
うえだ
かるいざわ
たかさき
上野へ
長野へ
こもろ
碓氷峠
信越本線
あんなか
妙義山
N

春の雪崩（なだれ）

一

「明日は、お前、死ぬる身じゃな」

急に、女のささやきがきこえた。

槍（やり）を両腕に抱いたまま、ようやく、仮眠の中へ分け入ろうとしていた向井佐平次（むかいさへいじ）の耳朶（じだ）へ、女の熱い息がかかり、

「死ぬる前に、女の躰（からだ）、抱きとうはないかえ……」

と、いう。

闇（やみ）の中で、なまぐさいまでにただよう女の濃密な体臭には、血の匂（にお）いもまじっているかのようだ。

「ほれ……」

背後から女の手が、佐平次の腕をつかみ、引き寄せた。

たちまちに、佐平次の掌（て）が、たっぷりと量感をたたえた重い乳房にふれた。

十九歳の今日まで、女の肌身（はだみ）を抱いたことも、ふれたこともない佐平次であったが、この

女の乳房の感触は、かねてから彼が夢想していたものと大分にちがっている。
なめらかではあったが、それは鞣した獣の皮のように強靱な感触がした。
「どうじゃ、若い人……」
うしろから、くびすじへ巻きつけてきた女のふとやかな腕を振り払い、向井佐平次は、
「いらぬ」
一語を投げたのみで、別の、ねむる場所を探すために立ちあがった。
女の、ふくみ笑いがした。
歩き出すと、土の香りのする闇が、女のかわりに佐平次を抱きすくめてきた。
（土が匂いはじめた。もう、春が来ていたのだな……）
佐平次は、そのことに、はじめて気づいたのである。
向井佐平次が半月ほど前に、長柄足軽の一員として、主人の小山田備中守にしたがい、この高遠城へ入ったころは、毎日のように冷雨がけむり、ときには雪が吹きつけてきたこともあった。
それが半月の間に、萌え出ようとする草の芽をふくんだ土が、鮮烈に匂いはじめていたのだ。
信濃の国の春の足音は、すぐ其処へ近寄って来るまで、ひそやかにつつましい気配をすら、人にさとられまいとするらしい。
その土の香りは、あの女の体臭とはくらべものにならぬほどに佐平次の若い胸を動揺させ

た、といってよいだろう。

新鮮な土の香りは、明日に死を迎えた佐平次の躰のすみずみにまで染みこんできて、

「生のよろこび……」

を、しきりにつたえてくるのである。

けれども、死は確実なものとおもってよい。佐平次のみでなく、この城にたてこもっている三千の将兵のいずれもが、生をあきらめていた。

城を包囲する敵軍は、約五万余と見られていた。十数倍の兵力だし、なお、その後から、敵の総帥・織田信長が七万とも十万ともいわれる大軍団をひきい、伊那へ進攻して来るらしい。

現在、高遠城を包囲している敵の大将は、信長の長男・左中将・織田信忠であった。

三峯川をへだてた彼方の台地には、見わたすかぎりに織田軍の篝火が燃えさかっていた。

信忠の本陣が、城の西方一里ほどのところにある貝沼の段丘へ構えられたのは、今日の午後であったが、それより二日前に、織田軍の先鋒三万余が、城を囲みつくしてしまっていた。

すでに、織田信忠は使僧を高遠城内へつかわし、

「降参せよ」

と、すすめている。

だが、城主・仁科五郎盛信は、使僧の両耳と鼻とを殺ぎ落とし、

「その面を城介（信忠）へ見せよ」

と、いった。

仁科盛信は、故武田信玄と油川氏の姫との間に生まれ、信玄にとっては五男にあたる。

盛信は、向井佐平次と同年の十九歳だそうだが、高遠城へ入ってから、佐平次は、はじめて仁科盛信の姿を見ることができた。

（これが、うわさにきこえた高遠の殿か……）

五人力とか十人力だとか、仁科盛信の武勇が武田家の領内に喧伝されている。しかし、見たところは小肥りの、青ぐろく冴えない顔色をした大将で、ただ双眸が大きく張り、しかも茶がかった色をしているのが異色であった。

盛信が侍臣を従え、向井佐平次の長柄組が入っている三の丸の曲輪を巡見にあらわれたとき、佐平次は、眼前を黙念と行きすぎる盛信を見た。

とても十九歳とはおもえず、三十にも四十にも見えた。

後世になってからではなく、その当時においても、

「古今無双の英雄」

という評価に、だれも異議をとなえなかったほどの武田信玄が急死したのは、九年前のことになる。それまでは、本国の甲斐から、上信二国、さらに東海地方を侵し、いよいよ上洛の途につき、天下の大権をつかむばかりの勢力伸張を見せていた武田家が、いま、織田・徳川の連合軍の大攻勢を受け、

「ほろびかけている……」

のである。

美濃から伊那谷を通って、甲斐へ攻め込もうとしている織田軍にとっても、本国の甲斐一国に押しつめられ、敵を防ごうと必死の武田家にとっても、高遠は最後の関門であった。

高遠が落ちれば、敵の大軍は雪崩を打って、甲斐の国へ突入するにちがいない。

高遠城は、むかし、伊那の豪族・高遠氏の居城であり、そのころ、向井佐平次の祖父も曾祖父も、高遠家の家来だったという。

そのことを佐平次に語った父・向井猪兵衛は、三年前に病歿していた。

高遠城の最後の主であった高遠頼継が武田信玄に降伏し、その後、信玄によって自決させられてから、高遠氏につかえていた家来たちの多くが、武田信玄麾下の諸将へ引き取られた。向井猪兵衛が、小山田備中守の長柄足軽として奉公をするようになったのも、このときからである。

二

今朝になって、向井佐平次が所属している小山田備中守の長柄組は〔三の丸〕からこの〔南曲輪〕へ移された。

南曲輪の外は切り立った断崖が三峯川へ落ちこんでいて、川の向こうに織田軍が押しつめて来ている。

明日は、おそらく南曲輪から大手口へかけて、織田軍の攻撃が開始されるにちがいなかっ

た。

佐平次は、南曲輪の左手にある〔法憧院曲輪〕をつなぐ土塁の内側に、身を横たえた。

見張りの兵が、土塁の向こうの、犬走りと称する小道を行ったり来たりしているほかには、佐平次と同じような兵士が其処此処に仮眠している。

曲輪内には仮小屋もあるのだが、その中で多勢の同僚と重なり合うようにして眠るのを、あまり、佐平次は好まぬ。

ことに……。

明日は、かならず、

（死ぬる……）

のである。

今夜だけは、しずかに、亡父・猪兵衛のことをおもいうかべながら、ねむりたかった。

母は、佐平次が七歳の夏に亡くなっていた。

それから佐平次は、亡母の妹で、これも小山田備中守の長柄足軽・坂山市松の妻となっていた叔母のもとに育てられた。猪兵衛は絶え間もなく、主人に従って戦争に出て行ったからである。

もっとも、生き残って帰って来ると、父と共に暮らすことができた。父の子は、自分ひとりであった。

「御屋形様の御顔は、何度も見たぞ」

と、父は、佐平次にいってきかせたことがある。

「そりゃもう、人間の顔とはおもえぬ。天の何処からか、われらの住む地上に舞い下って来た雷神のような御顔で……しかも、優しげな、人なつかしげな御顔よ。御眼がな、すこし、茶がかった色をしておられる。光が凝っていてな、めったにない御眼よ」

その父の言葉を、いま、突然、佐平次はおもい出した。

仁科五郎盛信の眼球が茶色なのは、父・信玄の血をうけているからなのだろうか。

「ふ、ふふ……」

何処かで、また、女のふくみ笑いがきこえた。

佐平次は、舌打ちをした。

あの女のことは、よく、見おぼえている。

六日ほど前であったが、衣類を血だらけにして、三の丸曲輪へ城外からもどって来た姿を見た。

法憧院曲輪の一隅に、細長い十坪ほどの仮小屋が建てられてい、女は、その中で寝起きしている。

「あの小屋は、忍びの小屋だそうな」

と、同僚の中屋伊助が佐平次にいった。

仮小屋の中には、十余人の男たちがいて、その中に、あの女がひとりだけ、まじっている。

彼らは、いずれも武装していない。

ほとんどが農夫の姿をしてい、あの女も、うす汚れた百姓女の姿であった。

彼らがいる小屋が〔忍び小屋〕だとすると、彼らは、したがって〔忍びの者〕ということになる。

向井佐平次は、うわさに聞くだけで、忍びの者の実態が、どのようなものであるかを知らぬ。

彼らは幼少のころから、きびしい鍛練をうけ、人間わざともおもわれぬ能力をもち、さまざまな忍びの術を体得し、諜報にはたらき、隠密の大事に暗躍するという。

「忍びはな、一日に四十里も、五十里も走るそうな」

と、父から聞き、少年のころの佐平次は驚愕したものであった。

戦場に出て、将兵たちと共にはたらく忍びの者のことを、

「戦忍び、と、いうらしい」

と、これもまた、父からきいた。

父の言葉によれば、いま、法憧院曲輪の仮小屋にいる十余人は、その〔戦忍び〕ということになる。

「あの忍びたちは、御城のどこからでも、出入りがおもいのままらしいぞ、佐平次」

中屋伊助がそういった。

なるほど、そういわれれば、あの女が三の丸へ入って来たときも、木戸口の番兵が何もいわなかった。

女は、顔も着物も血にそめてい、泥だらけの凄まじい姿をしていたが、別に傷を負っている様子はなく、これも百姓姿の、背丈の高い三十がらみの男と共に入って来て、三の丸を突っ切り、法憧院曲輪の方へ去って行った。

折しも夕暮れのことで、血だらけの女が、息をのんで見まもっている佐平次や伊助たちを見て、にんまりと笑って見せたものだ。

「あれは、手傷を負うたのではない」

「返り血だ」

「敵を殺したのか……」

「忍びの女じゃ。ふしぎはないわい」

足軽たちは、ささやき合った。

彼らが、どのような活動をしているのか、それは佐平次の知るところではない。

ただ、想像されるのは、近づいて来る織田の軍容を探り、これを高遠城へ報告するのみか、いまは、諏訪に本陣を構えている現武田家の当主・武田勝頼のもとへも逐一、知らせているのだろうということだ。

あの女は、織田軍を探っていて深入りをし、敵に見とがめられ、闘ったのであろうか……。

それで返り血をあびた。しかも平然として、

（おれたちを見て、笑った……）

のである。

あの女が、どれほどの年齢なのか、佐平次にはよくわからぬ。
大柄な体軀のもちぬしで、顔も手足も日に灼けつくしているかのようだ。どう見ても百姓女なのだが、あまりにくろいので眼鼻立ちも、はっきりとわからぬほどだし、ただ、笑ったときの白い歯なみのすこやかなことが、佐平次の目にやきついている。
その女が、先刻は、
「死ぬる前に、女の肌身を抱きたくはないか……」
といい、佐平次に擦り寄って来て、おのれの乳房へ、佐平次の手をみちびいたのである。
逃げて、この場所へ移り、長槍を抱きつつ亡父の面影を追っている向井佐平次の耳へ、またも女の、ふくみ笑いがきこえてきた。
「もし……」
あっとおもう間もなく、女の声が、佐平次の背中のあたりにせまってきていた。
あの、何ともいえぬ濃い体臭が、佐平次の鼻腔へながれ入ってくる。
「わたしが、嫌いかえ？」
「去ね」
「ま……強いこと」
「何の用だ？」
「向井佐平次どのじゃな？」
「そうだ。それがどうした？」

「わたしの名は、お江という」
「それが、どうした？」
「佐平次どのは、まだ、女の肌身を知らぬと見た」
「去ね」
「なれば、抱かれて進ぜようとおもうたに……」
「うるさい」
「おお、怖わ……」
「何で、おれにかまうのだ？」
「たのまれて……」
「何？」
「さる人に、たのまれてじゃ」
「たのまれて、おれを……？」
「そのお人のもとへつれて行く前に、わたしの肌身を……」
「知らぬ」
「うわさにきいた。佐平次どのの槍は大層なものじゃと……」
「もう、去ね」
「いや、頼うだお人のもとへ、佐平次どのをつれて行かねばならぬ」
いったい、だれが自分に会いたいというのだ。この女に自分をつれて来いといった人なら、

やはり、この女同様の忍びの者なのか……。
「嫌だ」
佐平次が、はねつけると、女が、
「そのお人は、お前さまの亡き父ごの友達じゃそうな」
と、いうではないか。
「何、父の……？」
「友どち、じゃそうな」
「ふうむ……」
佐平次は、おもわず半身を起こしていた。
父の友人が、この高遠城内にいるということは、すこしも、ふしぎではない。
同じ武田家に仕えている知人が、父にも多くいたにちがいない。
「その、お人は、どこにいる？」
「ついて、おいでなされ」
女が佐平次の手をとった。
先刻のざらざらとした感触とはちがい、女の掌が、しっとりと汗ばんでいる。
ならんで歩みつつ、
「その、お人はな、佐平次どの。お前さまを、ここで死なせとうはないと、いうていなさる」

と、女……お江がささやいてきた。
「何……？」
お江は、もう、こたえなかった。

三

〔法憧院曲輪〕は、高遠城の南端にある。
むかし、此処に法憧院という寺院があったところから、この名がついたものらしい。
法憧院曲輪は、各曲輪のうちで、三峯川をのぞむ断崖に、もっとも接近している。
したがって、この曲輪を中心に城兵も多く集結していた。
曲輪内の其処此処で、さかんに篝火が燃えていた。
これは、敵の夜襲を警戒するためばかりでなく、城内の威勢と闘志を織田軍へ、
「見せつけてくれよう」
というのであって、そこに城内の将兵の意気地を看ることができる。城兵たちに酒もふるまわれたし、栃の実が入った熱い粟雑炊もたっぷりと出た。もはや兵糧をたくわえておく必要もないというのだろうか……。
兵たちは元気よく食べ、飲み、放談し、そしていまは眠りについている。
すくなくとも、向井佐平次の眼には、そのように映った。
だれ一人、城から逃げる者もなく、織田軍へ内応する部将も出ていない。

「これ、佐平次どの……」
お江は、法憧院曲輪の北側から東側へ、佐平次をみちびいた。
細長い松林が、三の丸外の米蔵のあたりまでつづいている。このあたりまで来ると篝火も絶えていた。
「おお……」
松の木蔭で、男の声がした。
「ここじゃ、ここじゃ」
「はい」
お江がうなずき、佐平次へ、
「あれにいなさる」
「父の友どちが？」
「そうじゃ。さ、行ってごらんなされ。悪いはなしではないはず」
佐平次の背を、お江が軽く突いた。
木蔭から背丈の高い男があらわれた。
このあたりの農夫そのものであった。
とすれば、この男も〔忍び小屋〕にいる忍びの者なのであろうか。
「おお。亡くなった向井猪兵衛殿に、よう似ている」
「お前さまは、あの……？」

「壺谷又五郎と申す」
低く、しわがれた声ながら、一語一語がはっきりと佐平次の耳へ入った。
佐平次の闇に馴れた目がとらえた壺谷又五郎は、五十にも六十にも感じられる声音より、ずっと若い。
（三十五、六歳か……？）
おもいながら、佐平次が、
「私、向井……」
名乗りかけるのを又五郎が、
「どうじゃ。わしと共に、外へ出ぬか？」
と、いった。
「外へ？」
「この城を出ると申すことよ」
「城を出る？」
「逃げるのじゃ」
「な、何と……」
「もっとも、わしは逃げるのではないが……これから、わしは、わしの主人のもとへ帰る。なれば、共に連れて行ってやろうというのだ。どうじゃ？」
「明日は、織田勢の総攻めが……」

「なればさ。明日になればおぬし、死ぬということよ」
「はあ……」
「助けてやろうというのだ」
「いいえ、そのような……」
「おぬしは、父の代から、武田家へ奉公をするようになった。それも旧主が武田信玄公に討ちほろぼされたことによって、やむなく……」
「お前さまの主人とは、どなたでござる？」
「真田安房守昌幸様よ」
真田安房守昌幸の名は、佐平次も、よく知っている。
年少のころから昌幸は、父・真田幸隆や信綱・昌輝の二兄と共に武田信玄麾下にあって、父と二人の兄が亡くなったのち、真田家の当主となった。
武田家にとっては譜代の家臣ではないが、父や兄たちの代から、
「御屋形様が、たのみにおもわれている……」
ほどの、勇猛な戦将だということを、これも亡父・猪兵衛が佐平次に語ったことがある。
壺谷又五郎は、
（それなら、真田安房守様に奉公する忍びの者なのか……）
と、佐平次はおもった。
「よう聞けよ。佐平次。この高遠が落ちるのは知れたことであるし、諏訪に本陣を構えてお

わす御屋形様（勝頼）の軍勢を合わせ、いまの武田家が戦陣におもむく総勢は、およそ三万。敵はな、織田・徳川の両軍を合わせると二十万にもおよぼう」

きいて、佐平次は息をのんだ。

まさかに、敵が、それほどの大軍だとはおもいもよらなかったからである。

「これでは、御屋形様も、甲斐の国の内で敵を相手に戦するわけにはまいらぬ。すれば負けよ。何処で戦っても、この高遠と同じことになる」

壺谷又五郎のささやきは、あくまでもしずかに、冷ややかであった。

佐平次は憤然として、

「では、真田安房守様も、お逃げなさるのか？」

「さようさ」

「けしからぬことだ」

「これ、声が高い」

叱りつけて来た又五郎の低声が、刃物のように鋭い。

「あ……」

佐平次は又五郎に、頬を撲りつけられたような気がした。

又五郎は、ほとんど佐平次を抱きかかえるようなかたちとなり、

「逃げても、ただ、逃げるのではない。武田の御屋形様を共にお連れして逃ぐる。わしが、お前を連れて此処を立ち退くように、だ」

おもいがけぬことを、いい出したものである。
真田安房守昌幸の居城は、上野（こうずけ）の国（群馬県）にあると聞いている。
その真田の城へ、武田勝頼を奉じ、甲斐の国から脱出しようというのであろうか。
「わかったか、佐平次、ならば急げ。その槍を捨て、裸になり、これを着ろ」
壺谷又五郎が着物と帯を出し、佐平次へわたそうとした。
佐平次は、飛び退いた。
「これ、戦うて死ぬる場所は、これからもある。死に急ぐな」
「い、いや、私は……」
「わしはな。おぬしの父・猪兵衛殿とは、格別の因縁がある。だによって、おぬしを、いまは助けたい」
「どのような、因縁……？」
「いまここで、手短にはいえぬ」
風のように接近した又五郎が佐平次の手へ着物をつかませた。
長身で筋骨が引きしまっている壺谷又五郎の体臭は香ばしく、亡くなった父の匂（にお）いのようであった。
しかし、向井佐平次は無我夢中で又五郎の腕をはね退け、
「卑怯（ひきょう）なまねはできぬ。できぬ、できぬ」
いうや、槍を抱えて南曲輪へ走り去った。

壺谷又五郎が追いかけようとして、やめた。
見張りの兵三名があらわれたからである。
兵たちは松明の火で、又五郎をみとめると、一礼して行きすぎた。
木蔭から、お江が滲み出て来た。
「何故、とめなんだ？」
「いまの、見張りが来たので、つい……」
「ふうむ。わしも、だ」
「もう、仕方がありませんなあ、又五郎どの」
「む……」
「こなたも、急ぎませぬと……」
「わかっている」
間もなく、二人の姿が、高遠城内から消えた。

四

現・長野県上伊那郡高遠町の、月蔵山（海抜千メートル）の山裾が西へのびた地点に兜山とよばれる丘がある。ここに高遠城が構えられていた。
いまも高遠城址を訪ねると、若干の櫓門や櫓、草や木の生い茂る空濠、それに昔日の城郭の面影を濃厚にとどめている石垣などによって、この城が戦国の時代には伊那谷の中で、も

っとも堅固な城郭であったことがわかる。

背後に月蔵山を背負った城郭は、深い濠と、段丘や谷間を利用したいくつかの曲輪にわかれてい、大砲や航空機の破壊力をもたなかった当時の戦闘様式では、

「この城を攻め落とす……」

ことの難儀が、現在の城址をひとめぐりしただけで、たちどころにわかる。

もっとも、城郭を完璧に守備するためには、それだけの兵力を必要とすることというをまたない。

城内のみでなく、城外の砦や地形を利用し、連係して敵を迎撃する。もちろん、食糧も武器も兵力に応じて充分に用意されねばならぬ。

それでこそ、各曲輪の機能が生かされ、総合的な守備体制がととのうのである。

しかし、いま、高遠城にたてこもる武田勢は、城郭のすべてを完全に守備するだけの兵力をもたぬ。

外郭は、ほとんど織田軍に侵され、本丸を中心に、二の丸・三の丸・南曲輪などの中核を辛うじて、ささえているにすぎない。

ただ、城郭そのものの地形と、丹念に構築された堅固な石垣や土塁、櫓、塀などの防禦施設が敵の大軍を前に、声もなく厳然と、立ちはだかっているのである。

武田信玄が高遠城をわがものとして、伊那を平定したのは、三十年もむかしのことだ。

当時、信玄は二十五歳の若さであったが、二十一歳のころ、武田の社稷の存続と発展を

慮って、敢然と父・信虎を駿河へ放逐したほどの人物だから、

「信濃・高遠は、甲斐の国の関門である」

と、着眼をし、高遠城を武田家にとって、もっとも重要な拠点の一とした。

城の修築も絶えずおこない、現在も残っている〔勘助曲輪〕と名づけられた一郭は、信玄の軍師・山本勘助の縄張りによるものとつたえられる。

修築というよりも、全面的に築城し直したといったほうがよいだろう。

そして信玄は、弟の武田信廉を高遠の城将にした。

信玄亡きのち、武田家の当主となった武田勝頼は、叔父にあたる刑部少輔信廉をきらい、弟の仁科五郎盛信をもって城将に替えたのである。

武田信玄の五男に生まれた彼は、信濃安曇郡の名家・仁科氏の名跡をつぎ、別に家名をたてた。

仁科盛信については、種々の説があり、天正十年のこの時点で、二十六歳説もあるが、この小説では十九歳説を採って書きすすめて行きたい。

こうして……。

天正十年（西暦一五八二年）三月二日の朝となった。

この日は、現代の四月四日にあたる。

山峡に朝霧がたちこめ、敵軍のうごきをつかみにくい。

夜明けと共に、物見の兵が、城外の八方へ出て行った。
小山田備中守の長柄組は、南曲輪へつめきり、開戦の火ぶたが切られるのを待ち構えていた。
今朝も、栃の実入りの粟雑炊がたっぷりと出た。餅も多量に入っている。
「いくらでも食べよ」
と、いうのである。
これから先、籠城が長びくとすれば、兵士たちへこのような食事の出し方はせぬはずであった。
「後詰は、来ぬのか……」
「来ぬに決まっている」
雑炊をすすりながら、同僚が語り合っているのを、向井佐平次は黙念ときいていた。
今度の戦争は、これまで武田の麾下にあった木曾城（現・木曾福島町）の主・木曾義昌が、織田信長に内応したことにより、はじまったものである。
かの木曾義仲以来、信濃の木曾谷を領していた木曾氏を、武田信玄は、ほとんど平和裡に、わが親族とした。自分の第四女を木曾義昌と結婚させたのだ。
だから、義昌は、武田勝頼の義弟にあたる。
その義弟に叛かれたので、勝頼は奮然、一万五千をひきいて、木曾攻撃にかかった。
勝頼は出陣の前に、人質として迎えておいた木曾義昌の母や子たちを、釜無川の河原で

〔はりつけの刑〕に処している。

それは木曾義昌も覚悟の上で、織田へくみした。

ということは、かつての武田家の栄光と威勢が織田信長へ移ったいま、木曾の社稷をまもりぬくためには、

（母も子たちも、見殺しにするよりほかはない）

と、決意したからである。

木曾義昌は、織田の援軍があらわれるまで、雪の鳥居峠へ出陣し、武田軍の先鋒と猛烈に戦い、ねばり強い抵抗をしめした。

これを、もてあましているうちに、急報をうけた織田信長は、かねて戦備をととのえていただけに、すぐさま、息・信忠を先鋒として急行せしめたのである。

武田勝頼は、狼狽した。

いまは、

「木曾攻めどころではない」

ことになった。

織田と徳川の大軍が来攻するとなれば、こちらが守備をととのえねばならぬ。

あわただしく、飯田・深志・江尻など、国境の諸城の防備をかため、ことに高遠は、

「五郎のみにては、こころもとない」

と、勝頼は、重臣・小山田備中守昌辰を急ぎ高遠へ入城せしめた。

そうしておいて、勝頼は諏訪へおもむき、ここへ本陣を構えた。

このとき、武田勝頼が、新府の本城へもどらなかったのは、これら前線の諸城の戦況しだいにより、みずから後詰（援軍）として、

「撃って出てくれよう！」

という意志があったからだ。

ところが……。

敵の兵力は、あまりにも多く、意外に大きかった。

（これでは、飯田も高遠も、ささえきれまい）

つぎつぎに入って来る報告をきいているうち、武田勝頼の絶望は、もはやぬきさしならぬものとなってしまった。

そして勝頼は、すべてをあきらめ、本軍を引きつれ、蒼惶として新府城へ引きあげて行ったのである。

高遠からは、敵軍が近づくにつれて、何度も、急使が勝頼本陣へ駆け向かい、報告をおこなっていた。

ために、当然のことながら、

「後詰はなし」

とのうわさも、いつの間にか兵士たちの耳へつたわったものと見える。

すこし、風が出て来たようだ。

向井佐平次は、うすい鉄製の陣笠をかぶり、桶側二枚胴とよばれる軽い具足に身をかため、長槍をつかみしめ、約三百の同僚たちと肩をならべ、南曲輪の土塁の下に待機している。

〔長柄足軽〕というのは、槍隊の兵士のことで、武士の中で、もっとも身分が低い。

佐平次は一兵士にすぎぬが、亡父・猪兵衛は一組二十人を束ねる〔頭〕をつとめていたものだ。

合わせて十余組の長柄足軽を指揮するのは、小山田家の長柄大将をつとめる立木四郎左衛門であった。

その四郎左衛門が、長柄足軽の半数を、

「大手口へ、まわせ」

と、命令を下したとき、霧が風にながれはじめた。

佐平次は大手口へまわる組に入っている。

大手口は、城の表口であり、物見の偵察によって、敵が正面から押し寄せて来ることが察知されたのであろう。

城内の通路を大手門口へ向かいつつ、

（昨日の、壺谷又五郎という人は、もう、この城内にはおらぬのか……そして、あの、お江という女も……？）

佐平次は、ふと、おもい起こした。

しかし、いざとなって見ると、すこしも、死ぬことが恐ろしくない。これは佐平次の若さがそうさせるのであろう。同じ長柄足軽でも妻子がある中年の男たちは、おもてに出さなくとも、動揺が烈しいのである。

佐平次は、

（立木四郎左衛門様のためにも、卑怯なまねはできぬ）

と、これは以前からおもいきわめている。

父が亡くなったのち、佐平次が長柄組へ入り、はじめて戦場へ出たときから、そのつもりでいた。

それには、それだけのわけがある。

いまの佐平次は、武田家のために忠義をつくす、ということよりも、立木四郎左衛門と共に戦って、共に死ぬという一点に、すべてを凝結させていたのだ。

遠くの敵陣から、開戦を告げる法螺貝が鳴りはじめた。

五

向井佐平次の初陣は、一昨年の春であった。

そのとき、武田勝頼は二万に近い軍団をひきいて古府中（甲府）を発し、駿河へ進撃した。

敵は、徳川家康と同盟中の北条氏政であった。

相州・小田原に本城をかまえる北条家は、みずから、

「関東の盟主」
であることを誇っている。
武田軍を迎えた北条軍は、二万五千の大軍をあつめ、三島へあらわれた。
だが、初陣の佐平次も、小山田家の長柄組も、ついに敵兵と戦う折がなかった。
そのかわりに、両軍の軍船が、伊豆の海上で戦闘をまじえたのである。
古府中を出陣したときの、十七歳の佐平次の五体は、未知の死の世界へ向かって絶えず戦慄き、その烈しい緊迫感によって手も足も、
（まるで、おれのものともおもわれぬ……）
ほどに、硬直していたものだ。
故武田信玄が東海地方へ進出のために切りひらいた、甲州の陸合から梅ヶ島を経て駿河へ至る山道を行軍しているときであったが……。
長柄大将の立木四郎左衛門が、何とおもったか、馬を寄せて来て、
「お前か、向井猪兵衛のせがれは……」
と、佐平次に声をかけてよこした。
「はい」
佐平次は緊張をした。
立木四郎左衛門が長槍を揮って敵と戦うときのありさまを、亡父は、
「この世の人のものとはおもわれぬ。鬼神というのは、まさに、あのお人だ」

と、評していたのをおもい出したからであった。

その年の正月から、小山田備中守の長柄組へ編入された佐平次は、見るからに精悍な体軀・顔貌の立木四郎左衛門を畏怖するばかりで、亡父の言葉が、

（なるほど……）

と、うなずけた。

日に灼けつくした顔は、すこし離れて見ると目鼻立ちがわからぬほどにくろい。くろい顔に大きな白い眼が、ぎらぎらと光っている。

口は堅く引きむすばれてい、平常の四郎左衛門は、ほとんど声をたてなかった。

武田家中の人びとは、

「啞の四郎左」

と、よんでいるそうな。

年齢は三十を越えたばかりと聞いているが、佐平次の眼には、四十にも五十にも見えた。

部下の長柄足軽たちも、立木四郎左衛門の無言の圧力には、一も二もなく心服しているらしい。

そのためか、足軽たちは、いざ戦場へ出ると、どの武将の長柄組よりも勇猛果敢に戦う。

佐平次の叔母・もよの夫で、これも小山田備中守の長柄足軽をつとめている坂山市松は、

「のう、佐平次。今度、立木様といっしょに敵と戦って見れば、よくわかることだ。立木様は、口先では何も申されぬ。おれたちにこうせよと、先ず、御自分が仕てのけるのだ。何事

にも、身をもって、おれたちの眼にしめして下さる」
と、いっていたものだ。
一昨年のあのとき……。
駿河へ向かう山道で、わざわざ佐平次へ声をかけてきた四郎左衛門を、他の足軽たちは、何か、めずらしいものでも見るような眼ざしでながめていた。
馬から下りた四郎左衛門は、その馬の轡を佐平次に取らせ、
「ま、こちらへ寄れい」
すこし、軍列からはなれて共に歩みをすすめつつ、
「なあ、佐平次……」
「は、はいっ」
「だれでも、怖いのだ。わしだとて怖い。恐ろしい」
「は……？」
「敵もまた、わしたちを怖がっている。安心せい。お前なら大丈夫だ。いざともなれば、無我夢中のことよ」
「むが、むちゅう……？」
「なればこそ、恐ろしさが消えてしまうものだ。お前は、わしの傍についておればよい。わしの後から突き進めばよい。安心せい、安心せい。だれにでも仕てのけられることよ」
しずかな低声でそういい、立木四郎左衛門は馬へまたがりながら、

「お前の父は、強かったぞ」
こうささやき、はじめて笑って見せた。
くろい、たくましい顔に、かがやくような白い歯がのぞいたのを、いまも佐平次は忘れてはいない。

その四郎左衛門が、二年後のいま、黒の具足に身を固め、桃形の兜をかぶり、大手口へ向かう長柄足軽たちをひきいている。
その後ろ姿を見まもり、佐平次は心強くなってきた。
向井佐平次のような一介の兵士にとって、平常の折はさておき、生死をかけた戦場においては、
「武田家のために……」
というより、また、
「あるじの小山田備中守様のために……」
というより、何よりも自分たちと共に戦う直属の上官の人格しだいで、死ぬる覚悟もさだまるのである。
直属の上官に心服できぬかぎり、
「死ぬ気にもなれぬ……」
のが、兵士であった。

ことに、長柄足軽は、もっとも激烈な戦闘の渦の中へ、真っ先に突入せねばならぬ。
ために、長柄大将は、
「一城の主よりも、戦場においては責任が重い」
といわれているほどであった。
風に吹きながれる霧の中を、向井佐平次は同僚たちと肩をならべ、通路の坂を下って行った。
「向井佐平次」
いったん、霧の中に後ろ姿を消した立木四郎左衛門がもどって来て、佐平次によびかけた。
今日の四郎左衛門は馬に乗っていない。
武装は一昨年の出陣のときと同じである。
「はい」
佐平次は、われ知らず微笑をうかべていた。
「うむ……」
力強く、四郎左衛門が二度三度とうなずき、
「大丈夫の面構えだ。共に死のうぞ」
ほとばしるようにいった。
「はい」
「わしと共に来い」

「かまいませぬので？」
「かまうもかまわぬもない。みな、いっしょだ。ひとかたまりになって戦うのだ。わしたちには、いまこのときがあるのみよ。いまこのときに、無我夢中となればよい。そのことよ、そのことよ。うは、はは……」

六

織田軍の総大将・織田信忠の本陣から鳴りわたる法螺貝に応じ、高遠城を包囲している麾下の諸将の陣営から、いっせいに法螺貝が鳴りひびいた。
うすれかかる霧の彼方に、おびただしい織田軍の戦旗や指物・馬印などがうごきはじめた。
敵の軍馬のいななきが、城内の将兵の耳へ、はっきりとつたわって来るばかりでなく、命令を下す敵将の声までがきこえる。
織田軍は、搦手口の下と、藤沢川をわたって北側の三の曲輪の崖下へ押しつめて来た。
そして西側からの大手口、南の法憧院口と、いずれも嶮しい崖下までひしひしと敵は押しつめて来ている。
これに備えて城兵は、それぞれの持ち場をかため、息をころしていた。
「さ、寒いな……」
向井佐平次と肩をならべている中屋伊助が、ささやいた。
伊助の顔は灰色をしていて、唇までが白茶けていて、槍の柄をつかんでいる手がふるえてい

た。そういえば伊助も、これまでに敵と戦ったことはないそうな。
「おれは、熱い」
佐平次が、そうこたえた。
「熱いか……」
「躰中が何やら火照ってきた。汗をかいている」
「そ、そうか……」
小肥りの伊助の躰が、急に、がくがくとふるえ出した。
「案ずるなよ、伊助」
と、だれかがいった。
「それが武者ぶるいというやつなのだ。おれだって、ふるえている」
佐平次は、南曲輪で別れた叔父の坂山市松の顔も、
（紙のように白かった……）
ことを、おもい出した。
市松は四十歳になり、何度も戦場へ出ているはずだが、いざとなると、つやのよい赭ら顔が、
（あれほどに、変わるものか……）
と、佐平次は、おどろいたものだ。
叔父が駆け寄って来たときは、別人のように見えた。
「いさぎよく、な……」

この一言が叔父の別れの言葉であった。
佐平次は無言で、うなずいて見せた。
叔父は、強張った表情へむりな笑いをうかべ、自分の隊列へ駆けもどって行った。
城の大手門は、本丸の西北の方にあり、それから坂道が曲がりくねって西へ下っている。
その坂道の下に、敵は充満していた。
霧は、ほとんどはれた。
法螺貝と共に陣鉦の音もきこえ、織田軍の人馬が移動する響みが、諸方で起こりはじめた。
そのとき、本丸の櫓にいる小山田備中守から、
「立木四郎左衛門は、大手口へまわした長柄組をひきい、法憧院口へまわれ」
との命令がつたえられた。
「よし」
使番にこたえた四郎左衛門は、大手口から勘助曲輪へ入り、さらに崖の上の通路を法憧院曲輪へ急行した。
これならば何も、大手口へまわらなくてもよかったのだが、小山田備中守は織田軍の移動を見て、
「敵の攻撃があつまるのは、法憧院口じゃ」
と、看てとったらしい。
大手口は崖にかこまれた坂道で、大軍が集中攻撃をするのはむずかしい。

それをさとった織田信忠が、いま、将兵の移動をおこなっているらしい。

城将・仁科五郎盛信は、

「わしは戦う」

と、いい、総指揮を老練の小山田備中守へまかせてしまった。軽快な日根野鉢の兜をかぶり、赤い仁王胴の甲冑に身をかため、十文字槍をつかんで大手口の指揮をとることにしたのである。

法憧院曲輪は、城の南口にあたり、三峯川をわたって敵が攻めかけるには、傾斜もゆるやかで攻めやすい。

むろん、それは武田方でもよくわきまえていることだから、ここへは精強の将兵をもって備えせしめ、さらに、いま、小山田備中守の長柄組の半数を大手口からまわし、兵力を増強したわけであった。

うわあ……。

敵の喚声が、にわかに、法憧院口へせまって来た。

「ここだ、ここだ」

と、立木四郎左衛門が向井佐平次を手まねきした。

「はいっ」

うしろへぴたりとついた佐平次に、

「寒いか」
と、四郎左衛門が訊いた。
「いえ……躰中が火照っております」
「何と……」
四郎左衛門が躰をゆすって笑い出した。しかし笑い声は出ない。顔と躰だけが笑ってい、
「図太い奴め」
と、いった。
「は……？」
「はじめての戦で、躰が火照るほどなれば立派なものよ」
四郎左衛門のまわりにいた長柄組の人びとが、これは声をあげて笑い出し、
「向井猪兵衛のせがれだけのことはある」
「佐平次にとっては今度の戦が本当の初陣だ。この前のときは敵とわたりあうことがなかったのだからな」
などといい合い、また、笑い出す。
立木四郎左衛門の背後にかたまっている百五十余の長柄足軽たちの闘志が、凄まじく燃えあがってきつつあった。
敵味方の鉄砲の応酬が開始されたのは、このときである。
法憧院口攻撃の主力は、滝川一益の部隊だ。一益は織田信長麾下の猛将で、ときに五十八

歳。

一益は先頭に立ち、三峯川をわたって山腹の下まで押しつめるや、

「それっ！」

采配を左右に打ち振って部隊を散開させた。

鉄砲隊が前面へあらわれ、二段構えに折り敷いて城内へ猛射をあびせる。

これに対して城内からも鉄砲を撃つのだが、数量においては問題にならぬ。

七年前の天正三年に……。

三河（愛知県）の設楽原で、武田勝頼が織田信長に大敗を喫したのは、あまりにも織田軍の鉄砲の数量が多かったからだ。

「まさかに、それほどの鉄砲があろうとは……」

おもいもよらなかった。

ポルトガルから鉄砲が日本へ伝来したのは、四十年ほど前のことで、いまは貿易港の堺の町と、北近江の国友村で、このもっとも新しい科学兵器が造られている。この二つの場所を織田信長は自分の手におさめてしまった。

当時の火縄銃の価値は、現代の航空機にも相当したろう。

そのように貴重で高価な鉄砲を、織田信長は七年前に三千挺も用意し、設楽原へあらわれた。

この大戦を〔長篠の合戦〕とよぶ。

これは武田・織田両軍の命運をかけた決戦といってよかった。

織田信長は三千の鉄砲隊を三列横隊にならべ、陣地の前へ木の柵を設け、突撃して来る武田軍の精鋭を撃ちまくった。

これに対し、武田軍の鉄砲は五百挺におよばなかったという。

戦闘の火ぶたが切られて、双方が鉄砲を撃ち合う。つぎはもう、槍と刀の戦いになるのだという武田軍の認識が、長篠の戦争で完膚なきまでに叩きつけられた。

大量の鉄砲は、弾丸をこめ、火薬に火を点ずる手間をおぎない、つぎからつぎへと発射を容易ならしめる。

勇猛を誇る武田の騎馬隊は、ついに織田軍の木柵を突き破り切れぬまま、一万人もの将兵が戦死し、武田勝頼は取り返しのつかぬ大敗を背負って古府中へ逃げ帰ったのである。

ここに、故信玄が切りひらいた東海進出と、天下の大権をのぞむ武田家の上洛の道は完全に断ち切られた。

長篠の戦争において、

「武田家にとって、かけがえのない重臣や勇将の大半が討死をとげてしまった……」

と、向井佐平次もきかされている。

「もはや、武田の息の根はとまったも同様である」

織田信長は、長篠の戦争が終わったとき、豪語したそうである。

だが……。

高遠城のような山城を攻めるためには、あまり、鉄砲の効果はない。野戦においてこその鉄砲の威力であった。

だから織田軍も、いつまでも鉄砲を撃っているわけにはまいらぬ。

ひとしきり、威嚇のための射撃が終わると、織田軍は喚声をあげ、城の四方から攻めかかって来た。

「先ず、突きくずせ！」

立木四郎左衛門が叫んだ。

たちまちに、法憧院口の門がひらかれた。

小山田備中守の長柄組をふくめた約四百の城兵が、門外へ走り出た。

「えい！　えい！」

「おう！」

かけ声を合わせ、斜面をのぼって来る織田軍の中へ、立木四郎左衛門が真っ先に突入した。

その瞬間に、敵の槍が数本、宙へはね飛ぶのを向井佐平次はたしかに見た。

あとはもう、わからぬ。

おめき声を発し、佐平次は長槍を敵の群れへ叩きつけた。それでいて、ふしぎに、戦っているという意識がない。

苦痛もなかった。

何か、網膜へ霧がかかったようで、その中に刀や槍のようなものが煌めいていて、どしんどしんと自分の躰へ何か打ち当たっているようなのだが、その知覚がない。

耳の中が「うわあん……」と、鳴っている。

ただ、佐平次は、自分のななめ前で槍を揮い、戦っている立木四郎左衛門が甲冑の背中につけている二本靡の旗指物を見うしなうまいとした。

（おれは、死ぬるな……）

佐平次の脳裡のどこかに、そのおもいが重くたゆたっている。

時折、生あたたかいものが顔へかかり、槍をつかんでいる両腕へ鈍い衝撃が加わるのがわかった。

（ああ、死ぬる……おれは、死ぬる……）

このことのみが、只ひとつの意識だったといってもよい。

七

あとで聞くと、一時間以上もの戦闘であったらしい。

しかし、向井佐平次にとって、その無我夢中の時間は、

（あっという間に……）

すぎてしまったといってよい。

心ノ臓が張り裂けそうに苦しく、喉のかわきの烈しさに、
（水……水が、のみたい……）
ふしぎなことに、その一事をおもいつめていたのだ。
切なくて苦しくて、何度も足がもつれ、倒れかかった。
「佐平次。よく、やった！」
突然、耳もとで叫ぶ声がした。
「あっ。立木様……」
まさに、立木四郎左衛門である。
四郎左衛門の顔が、敵の血で真っ赤になってい、それを見たとたんに、佐平次は目がくらんで倒れかかった。
「これ。しっかりせよ」
四郎左衛門に、ぐいと片腕をつかまれ、佐平次は引き起こされた。
城内の何処かで、しきりに法螺貝が鳴っている。
長柄組の足軽たちは、いっせいに法憧院口へ引きあげつつあった。
敵は、いったん退却したらしい。
土埃が朦々とたちこめる中を、佐平次は四郎左衛門のたくましい腕に抱えられて、門内へ入った。
味方を収容した城門は、ふたたび厳重に閉ざされた。

法憧院曲輪に設けられた馬場の一角へ引きあげて来ると、佐平次はぐったりと身を横たえ、両眼を閉じた。ふしぎに手傷を負っていないらしい。顔も手足もねばねばと血にぬれていたけれども、それは敵の血であった。

「おどろいたな、佐平次……」

「はじめての戦だというのに、ようも、すばしこくうごけたものよ」

「山猿のように飛びはねていたわ」

佐平次のまわりで、足軽たちの声がする。

（それほどに、おれは、うごいていたのだろうか……？）

意外である。まったく、記憶がなかった。

ふと、おもいつき、眼をあけて、

「伊助は……あの、中屋伊助は？」

あたりを見まわしていうと、

「死んだぞ」

事もなげな返事が、どこからかきこえた。

「し、死んだ……」

「打って出て、すぐにな」

「そうか……」

法螺貝も陣鉦も聞こえていない。曲輪の内は、嘘のような静寂に包まれていた。長柄足軽

たちは、ひとかたまりになり、激闘のあとの放心状態に陥っている。
あたりに、異臭がたちこめていた。
血と汗の匂いばかりではなく、もっと、ひどい臭気なのだ。
佐平次は、以前、亡父・猪兵衛がこういっていたのをおもい出した。
「そりゃな、敵と切り合い、突き合うということは大変なものよ。怖いばかりではなく、知らぬうちに躰の中のちからがほとばしって出てしまう。それで、な、おもわず、糞がころげ出てしまうのだ。闘っているうちに出てしまうのだから、どうしようもないわい。いやもう、戦が終わるまでは腰から下が糞だらけよ。あは、はは……いや、まことのことだ。おれも何度、糞まみれになったことか……」
はっとして、佐平次は桶側胴の隙間から手をさし入れてみた。
（おれは、糞を出していない……）
おもわず、声もなく笑った。
そんなものにまみれて死にたくはない。
向井佐平次には、十九歳の若さがある。
戦は、まだ、はじまったばかりだ。
法憧院口から打って出た四百の城兵のうち百五十余が戦死している。敵は、その倍ほどの戦死者を残し、引いて行ったが、間もなく、つぎの攻撃を仕掛けてくるにちがいない。
戦闘は、法憧院口のみではなく、城の諸方で同時におこなわれ、いずれも果敢に城内から

打って出た武田の精鋭が、織田軍を撃退していた。

大手口の戦闘では、城将・仁科五郎盛信が、みずから十文字の槍をふるって突進し、目ざましいはたらきを見せたらしい。

仁科盛信に代わり、総指揮をとっている小山田備中守は、高遠城の防備施設を巧妙に利用し、いまのところは、一歩も敵を近寄せぬ。

と……。法螺貝が鳴りわたった。

今度は、織田軍が大手口へ攻撃をしぼって来たらしい。

佐平次たちも、すぐに立ちあがったが、大手口へまわされることなく、法憧院口に待機せよとのことである。

ふたたび、戦闘の響みがひろがりはじめた。

高遠城の大手口は、門外の道の両側へ高く土塁をめぐらし、これが長く延びている。幅が五間ほどの道を下から押しつめて来る織田軍へ、城兵たちは、諸方に設けた塀や枡形、虎口などをたくみにつかって槍隊をくり出したり、弓・鉄砲を効果的にはたらかせ、またしても織田軍をしりぞけた。

だが、織田軍も、さすがに攻撃の手をゆるめようとはしなかった。

それから二度、向井佐平次は同僚たちと共に城外へ出て闘った。闘うたびに同僚たちが死んでゆく。朝から、どれほどの時間がたったかもわからなかった。

昼すぎになり、城兵の疲労は目に見えて濃くなった。

矢玉もつきてしまったらしい。

戦死者が増えるにつれて、諸方の防備が手うすになるのは、どうしようもないことであった。

織田信忠は、この機を外さなかった。

「いまこそ！」

と、総大将の彼みずから千余の旗本をひきい、突如、三峯川をわたって、城の南面・搦手口へ殺到したのである。

織田信忠は、父・信長にもらった陣羽織を黒の具足の上へ着て、栗毛の馬にまたがっていた。この陣羽織は紺地の背中へ羽毛をかざり、揚羽蝶の模様を浮き出させ、腰から下は金襴という、いかにも信長好みの異国趣味横溢のものである。

「それっ！」

赤地へ金箔で瓜の模様を描いた大将旗を先頭に、信忠は、道もない斜面を一気に駆けのぼったという。

この信忠の本隊の奇襲をうけ、搦手口の一角が、ついに破れた。

「搦手口へ、まわれ！」

立木四郎左衛門が叫んだ。

しかし、法憧院口へ押しかけて来る敵を防ぐだけで、精一杯である。

あとから、あとから、敵は押しつめて来るのだ。

いくら闘い、いくら撃退しても、絶えることなく押しつめて来る。

とにかく、十倍余の大軍なのだから、どうしようもなかった。
時がたつにつれて減少する城兵を、諸方へくり出したり、まわしたりして奔命しているのだから、小山田備中守の指揮が、いかにすぐれていても限度があろうというものだ。
「わあっ！」
敵が法憧院口へ押しつめ、ついに、仕寄をつけて来た。
仕寄というのは、城攻めの道具のことで、このとき織田軍が用いたのは、丸太を組みあげた臨時の〔やぐら〕である。
〔やぐら〕に小さな車をつけて牛の皮をかぶせ、中へ足軽が数名入って、この〔やぐら〕を進めて来る。
そして〔やぐら〕を城の土塁や城壁の傍へ着けるや、兵がこれへのぼって城内へ矢玉を射かけたり、または〔やぐら〕を足場にして土塁や塀を飛びこえ、城内へ突入する。
これまでは何とか、敵に仕寄をつけさせずに防ぎ戦って来た城兵も、兵力減少のため、やむなくゆるした。
「引けい、引けい」
立木四郎左衛門は、約百名の兵をまとめ、法憧院曲輪を放棄することにした。
法憧院曲輪と南曲輪の間に空濠があり、橋が架かっている。
橋を駆けわたって、兵たちが南曲輪の木戸内へ入りきるまで、四郎左衛門は橋のたもとに立ち、城塁を躍りこえて来る敵を、ただ一人で迎え撃った。

「えい！　おう！」
あれだけ闘っていながら、四郎左衛門は猛虎（もうこ）のような気合声を発し、敵を突き伏せ、はね飛ばした。
「四郎左衛門殿、早う！」
木戸内の声をきき、
「応！」
身をひるがえして橋をわたりつつ、追いせまる敵を二名、反転した四郎左衛門が、あざやかに槍をさばいて空濠へ突き落とした。
四郎左衛門が木戸内へ入ると、城兵が、いっせいに矢を射かけて敵の追撃をふせぎ、この間に、橋へ火が放たれた。
橋は空濠の底へ焼け落ちて行ったが、これで法憧院曲輪は敵の手に落ちたわけだ。

それから後の、向井佐平次の記憶は断片的なものでしかない。
どこまでも、
（立木様と共に……）
と、ねがい、立木四郎左衛門の姿を見うしなうまいとおもった。
搦手口へ向かったことはたしかで、それから、四郎左衛門とはぐれてしまった。
大将の織田信忠が、みずから搦手の突破口をひらいたことを、父の信長は、のちにきいて、

「中将（信忠）の気負いぶりの、たわけたことよ」
と、苦笑したそうだが、しかし、なんといっても信忠みずからの猛攻が高遠城の、
「とどめを刺した」
といってよい。
信忠は、搦手口の木戸へ仕寄をつけさせ、これへのぼって、単身、城内へ躍り込んで来た。
木戸口がひらかれてからは三の丸の曲輪へ敵がなだれこみ、乱戦混戦となった。
このときに向井佐平次は、闘いつつ、城外へ押し出されていたらしい。
闘うといっても槍を叩きつけ、敵の躰ともみ合い、押し合って……佐平次のような兵士にとっては、闘いのながれに身をまかせているだけのことであった。
瞳孔はひらき切って、呼吸は切迫し、何の感覚もない。
数度、躰のどこかに、痛みを感じたことはおぼえている。
そして、何かの拍子に仰向いたとき、戦塵にけむる頭上の彼方に、春の青い空がはっきりと見えたことも……。
もしやすると、そのときに、佐平次は気をうしなったものか……。

八

暗い闇の底で、亡くなった母の声がきこえている。
遠く微かに、

「佐平次……佐平次……」
と、よんでいる。
（おれは、死んだのだ……）
死の世界へ踏み入った自分を、亡母が迎えに来てくれたのか。
それなら、
（父もいるはずだ）
であった。
だが、父の声はきこえない。
「これ……これ、佐平次どのよ。佐平次どの……」
急に、母の声が、耳の中へ飛び込んで来た。
「あ……」
眼がひらいた。
空が見える。
星がきらめいている。
夜空であった。
「これ、気がついたか……」
「母……」
「母ではない」

「う……？」
「わたしじゃ。声を忘れたかえ？」
「あっ……」
おどろいて身を起こそうとしたが、激痛が全身に疾り、佐平次はうめいた。
「おぼえていたらしい」
女の声である。
まさに、これは、法憧院曲輪の仮小屋にいた女忍びのお江ではないか。
お江は、佐平次に「死ぬ前に女の躰を抱きとうはないかえ」と、ささやき、佐平次がうけつけぬと、これをいざない、壺谷又五郎という真田家の忍びの者に引き合わせた。
あのとき、又五郎は佐平次へ、
「共に、この城を脱け出よう」
と、さそった。
だから、お江は壺谷又五郎と共に、昨夜のうちに城を脱出していたものと、佐平次はおもっていた。
「何故、ここに……」
辛うじて、佐平次が訊いた。
喉が、かわき切っている。
お江の返事を待たずに、

「水……」
と、いった。
「だめじゃ」
「み、みず……」
「いまは、のまぬがよい」
いいながら、お江は口の中で何やらしきりに噛んでいる。
「み、みず……たのむ……」
「お待ち」
「たのむ」
「さ、これを……」
いったかとおもうと、お江の顔が佐平次のそれへ押しかぶさってきた。
なまぬるい女のくちびるの中から、やわらかい粥のようなものが、佐平次の口中へ押し出された。
「う……」
佐平次は顔をしかめた。ひどく苦い。
「のみこむのじゃ、早う……」
顔をはなしたお江が、佐平次の口を押さえていった。
のみこんだときには、それほど苦くはない。たしかに、どろどろとしたものだったのが喉

を通るときは、まるで水をのんだようにながれ入ってきたのである。
「ここは、どこ……？」
「御城の近くじゃ」
「えっ……」
「なれど大丈夫」
土の香りが濃い。深い木立に包まれて、向井佐平次は横たわっていた。
「おれは、どうして？」
「金山坂の崖下の川の中へ落ちていたのじゃ」
おもいもかけなかったことであった。
金山坂は、高遠城の北口にあたる。つまり、大手口の近くだ。
佐平次は、南の搦手口で闘っていたのである。
どうして、そのあたりまで行ったのか、全く記憶になかった。
「お、御城は？」
「落ちたぞえ。ほれ、向こうの杉木立の間から、夜空が赤く見えよう。あれは、勝ちほこった織田勢の篝火が空に映っているのじゃ」
「殿様は？」
「どちらの？」
「仁科の殿様も、わしの、小山田備中守様も……」

「みな、死んだ」
「やはり……」
「すさまじい戦であったわ」
「み、見ていたのか？」
「おお、つぶさに……」
「おぬしは、あの、壺谷又五郎殿と共に城をぬけ出し、真田安房守様のもとへ逃げ帰ったのではなかったのか？」
「ほう。薬がきいたと見える」
「なに？」
「よう、しゃべるからよ」
お江は、まるで男のような口ぶりであった。
「くすり？」
「いま、わたしが、口うつしに食べさせてあげたではないか」
「立木四郎左衛門様は、いかがした？」
「そのような男のことなど、知らぬ」
「おれを、何故、助けてくれた？」
「壺谷又五郎どのに、たのまれたゆえ……」
「壺谷殿は、何故、おれを、これほどまでに？」

「知らぬわえ」
「知らぬ？」
「この、わたしを敵の城攻めの中に残して、又五郎どのが、佐平次どのを助けるようにいわれたからには、それだけのわけがあるのであろ」
「壺谷殿は、おれの父と知り合いだったそうな」
「わたしは知らぬ」
「なれど……」
「もう口をきかぬがよい。凝と、しずかにしているがよい」
お江は、佐平次とならんで身を横たえ、
「ともあれ、死なずにすんだな……」
やさしい声でいった。
昨夜、いきなり声をかけて佐平次の手を自分の乳房へみちびいたときの、お江の躰からは、なんともいえぬ生ぐさい匂いがしていたものだが、いまは、ちがう。
深い樹林の、芽吹こうとしている強い香りに女の体臭が消されてしまったものか……。
急に、佐平次は身ぶるいをした。
その身ぶるいが、たとえようもない悪寒を引き出した。
烈しくふるえ出した佐平次を、しっかりと両腕に抱きしめたお江が、
「まだ、安心するわけにはゆかぬが、何ともして、此処を落ちのびようぞえ。ま、わたしに

まかせておくれ、佐平次どの」
と、ささやいた。

九

お江が向井佐平次を救い出し、これを隠した場所は、三峯川と藤沢川が合流する地点の北側に突き出している山林の中である。
この山は、高遠城の北方にそびえる音見山・鉢伏山などの尾根につらなってい、三峯・藤沢の両川をへだてて、約二千メートルの彼方に高遠城をのぞむことができた。
「どうじゃ、佐平次どの。すこしは具合がようなったかえ？」
「あ……」
「これ……これ、佐平次どの」
「大丈夫だ」
「ふ、ふふ……わたしが口うつしにのませた薬が利いたらしい」
「何の、薬だ？」
「いろいろな草をまぜ合わせ、ねりかためたものよ」
たしかに、いくらかは気分がよくなったのが自分でもわかった。
躰に受けた傷も、お江が手当てをし、布を巻きつけてあった。
痛むが、激痛ではなく、鈍く重い痛みが若い佐平次の肉体には、かえって一種の快感をお

ぼえさせる。

傷の痛みに堪え、なおも生き生きと活動をつづけているおのれの肉体に、若者は無意識のうちに誇りをもつのである。

「城は、落ちたと……」

「あい」

「城が見えるか？」

「さ、見てごろうじ」

お江が佐平次を抱え起こし、

「歩けるはずじゃ。さいわいに、両脚とも傷を受けてはおらぬゆえ……」

「う……」

まさに、そのとおりであった。

「歩ける。お江どの、おれは歩ける……」

「よかったなあ」

佐平次の傷は、左の脇腹と背中の二カ所で、脇腹のほうが深く、敵の槍先が肉を抉りとっていた。あとは肩や頸の打撲傷で、これは槍の柄で叩きなぐられたのであろう。

杉の樹々の間から、眼下の山裾や彼方の高遠城にかけて、いちめんの篝火であった。

その、おびただしい炎を見ただけでも、織田の軍容のすばらしさが、佐平次にもよくわかった。

闇夜の空が赤いのは、城内の炎上が、まだ消えていないからだ。
むろん、勝てる戦ではないことは知れていたが、それにしても、これほどの大軍を、あれだけの小勢で迎え撃ったことに、いまさらながら佐平次は戦慄した。
同時に、
（生き残れたのがふしぎだ……）
と、おもい、そのふしぎさが烈しい歓喜に変わってゆくのを、佐平次は、どうしようもなかった。
だが、おそらく、立木四郎左衛門も討死をしてしまったろうし、
（そうだ、叔父ごは、どうなされたか……？）
城内で別れてから、義理の叔父にあたる坂山市松とは、戦闘中に一度も顔を合わせていない。
だが、討死をしたものと見るべきであった。
「さ、もうよかろう」
お江は佐平次を山林の中へ引きもどし、
「わたしの躰に寄りかかっているがよい」
土の上へすわり、女とはおもえぬひろい胸の中へ佐平次を抱えこむようにし、いつの間に出したのか、梅の実のようなものを一粒、佐平次の口へ入れてくれた。
「こ、これは……？」

「一日一粒、口にすれば飢えることがない」
「薬か？」
「そういってもよかろう。なれど、これはな、われら忍びの者が持って歩く食餌なのじゃ」
忍びの者の携帯食糧という意味らしい。
「それにしても、よう生き残れたものじゃ。わたしも、壺谷又五郎どのから、お前を助けよといわれたけれど、どうしようもなかった。城が落ち、日が暮れてから、金山坂の下の川づたいに、そっと城へ近づいて行くと、川に落ち込んでいる死骸の中から、人のうなり声がするではないか……見ると、それが佐平次どのじゃ。おどろくやら、よろこぶやら。ふ、ふふ……それにしても、このようなことはめずらしいことよ」
いいながら、お江の手が佐平次の乱髪を、しずかに撫でてくれる。それが、たとえようもなくこころよかった。

織田軍が城内へ雪崩こんで来てからも、時間は短かったが武田勢の反抗は激烈をきわめた。
城将・仁科五郎盛信は、最後に本丸の居館の中の大広間にたてこもり、小山田備中守昌辰以下三十余人の武将と共に猛戦をつづけたが、
「これまでじゃ」
機を見て、素早く具足をぬぎ捨てるや、短刀をもって右の脇腹から肋骨へかけ、突き立て掻き破り、腸をつかみ出し、これを広間の壁へ投げつけ、

「十左。わが首を打て！」

と、命じた。

介錯は、仁科盛信の侍臣・曾根十左衛門がおこなった。

盛信の死様、自決の仕方は、戦国の武将として理想的なものであった。

曾根は、主の首を打ち落とした太刀を口中へ入れ、そのまま俯せに倒れて死んだ。

小山田備中守以下も全員討死。

向井佐平次のように、奇蹟的に生きのびた者もないとはいえまいが、ここに高遠城を守る武田勢は全滅したといってよい。

その戦死者の数において、織田軍も、ほとんど同じだったといわれている。

十

安土城を発した織田信長の本軍が、岐阜へ到着したのは三月六日であった。

岐阜の城は、かつて信長の〔本城〕であったが、いまは息・信忠へ、これをあたえてある。

そこへ、仁科盛信・小山田備中守以下十七将の首級がとどけられ、信長はこれを実検したのち、長良川の河原へ〔さらしもの〕にした。

このとき信長は、七万の大軍をひきいて甲斐の国へ進軍したのだが、戦闘をするまでもなかった。

先鋒の信忠の軍と、駿河口から進撃した徳川家康の軍とで、武田家の息の根は完全に絶え

てしまうことになる。

高遠城を落とした織田信忠は、すぐさま、つい先ごろまで武田勝頼が本陣を構えていた諏訪に入ったが、すでに勝頼は新府城へ退去し、この本城をも捨て去ってしまっていた。

そこで信忠は、三月七日に、早くも古府中へ突入した。古府中の城下には、まるで、廃墟のような静寂がただよっていた。古府中は、かつて……というよりも、わずか数カ月前まで、武田家の本拠であった。

前年の十二月。武田勝頼は古府中から新しく築いた新府の城へ移った。織田・徳川の連合軍を迎えて、とうてい、古府中ではこれを支えきれぬと看たからだ。

勝頼の父・武田信玄は、敵軍が自分の本拠へ攻め込むのをゆるしたなら、それは、

「もはや、負けたも同然である」

と、いった。

「守るよりも、出て戦い、外に戦うことによって内を守る」

これが信念であって、信玄は生存中、只の一度も、敵が古府中に入るのをゆるさなかった。

ゆえに、古府中には城がない。

城構えの居館はあるが、もちろん、戦闘には耐えきれぬ。もしも敵が攻め込んだ場合は、近くの要害山へのぼって戦うことになっていたけれども、信玄は、そうしたことを夢にも考えていなかったろう。

また、要害山のような、小さな山の砦へたてこもったところで、今度の織田の大軍を迎え

撃つことは不可能であった。

そこで武田勝頼は、急遽、釜無川をさかのぼって約七里、韮崎に近い断崖の台地へ新しい城を築くことにした。

そこは、東に甲斐の盆地を見下ろし、西、北へは八方岳をはじめとする甲信の山岳にかこまれた要害の地である。

地形はよいのだが、なんといっても急造の城なのだ。

その粗末な築城工事を見たものは、土地の百姓でさえ、

「あのような城では、ひとたまりもないわい」

と、語り合っていたそうな。

父・信玄が領国の民政にゆきとどいていたのにくらべ、勝頼は領民たちを責め脅すことが多くなった。

武勇にもすぐれ、ひとかどの大将にはちがいないのだが、偉大な亡父と同じように自分も戦い、勝ちたいという一念が烈しい焦燥となり、無謀な長篠の戦争に大敗を喫してから、勝頼のすることは、領民に対して、

「苛斂誅求、ここにきわまれり」

と、物の本に記されるようになったのである。

武田信玄は、

「人は城であり、石垣であり、濠である」

といった。

このことは、耳に胝ができるほど、佐平次も父・猪兵衛から聞かされている。

向井猪兵衛は、信玄が亡くなったのちも、これを、

「御屋形様」

と、よんだ。

そして父・信玄の跡をついだ武田勝頼を、

「当代様」

と、いった。

「御屋形様はな、領民に慈愛をかけさせ給い、領民のこころを武田家のものとなさった。つまり、領民こそ、武田の御城じゃと、このようにおもわれてござったのじゃ」

猪兵衛は、感動をこらえきれぬように、そういったものだ。

充実した民政なくしては、

「戦もできぬ。敵の侵略をふせぐこともならぬ」

これが武田信玄の信条であって、事実、この戦国大名は、それを実行した。

あまりに民政へこころをかたむけたがため、天下統一の大業に、

「一歩、遅れをとった……」

と、いわれるほどだ。

攻め、勝ち、敵の国をわがものとし、それにいちいち丹念な民政をほどこし、完全に育く

んでから、次の戦争に移る。
そうして、いよいよこれから都へのぼり、天下の大権をつかもうとしたとき、信玄は病患に殪れた。
その跡をついだ勝頼は〔敗戦〕と〔徴発〕をくり返すばかりで、すっかり民心をうしなってしまっている。
このごろの武田勝頼に対し、領民たちは、つぎのような怨嗟の声をもらしていた。
「いっそ、織田や徳川に、打ちほろぼされてしまえ」

十一

新府城へ引きあげて来た武田勝頼に、すぐさま、
「いさぎよく、この御城を、お捨てなされ」
と、すすめた武将がいる。
これが、真田安房守昌幸であった。
「それがしの城、岩櫃へお立ち退きなされば、どのようにも御身をおまもりいたす」
昌幸の声は、自信にみちみちていた。
上州の岩櫃城は吾妻の山岳にかこまれていて、ここに立てこもり、精通した地形を利用し、たがいに信頼し合っている諸方の豪族や地侍を動員すれば、
「一年、二年は、かならず、もちこたえて見せましょう」

だから、おもいきって父祖代々の領国を捨てよ、と、昌幸は熱弁をふるった。

このとき、真田安房守昌幸は三十六歳の壮年である。

七年前に長篠の戦争で二人の兄（信綱・昌輝）が討死してしまったので、真田家の当主となった。

躰が矮小で、武田勝頼が少年のころに着た衣服を、

「つかわそう。着てみよ」

たわむれにわたしたら、昌幸は、その場で着て、

「かたじけなく……」

いただいてしまったそうな。

ちょうど、躰に合ったらしい。

勝頼は大兵である。

それにしても、立って勝頼とならぶとしたら、昌幸の頭は勝頼の胸のあたりにとどまって見えたろう。

躰は小さいが、顔は大きい。

大きい顔の上半部が額である。

顔の中央まで額があるように見える。

その下に、大きなくろぐろとした双眸が、いつも煌めいてい、ふとやかな鼻と、これも決して小さいとはいわれぬ口が一文字に引きむすばれている。

異相といってよい。

この大きな顔と、この小さな躰をもみ立て、振り立てるようにして、真田昌幸が、

「わが城へ立ち退かれたい！」

と、熱弁をふるう態を、居ならぶ諸将たちは、黙念と見つめていた。

昌幸の亡父・幸隆や、二人の兄については、武田の諸将たちも、かなりの認識をもっている。

真田家が、これまでに武田家へどれほどの奉仕をし、どれだけの実力をもっているかは、武田の人びとのだれもが知っていることであった。

しかし、真田昌幸に対しては、未知数なのである。

父兄の武勇と実績を、そのまま背負ってはいるのだが、まだ、だれも、昌幸の実力を見てはいない。

「上州へ引き退かれたとて、いつかまた、この甲斐へもどられるようになるやも知れませぬぞ。もはや、甲斐におりましては、息の根がとまるばかりでござる。それが、おわかりにならぬ御当代様ではござりますまい」

昌幸は、臆面もなくいいたてた。

諸将は苦い顔になったが、武田勝頼は昌幸の弁口に、こころをさそわれたらしく、やがて、

「安房守の申すこと、もっともであるとおもう」

と、いい出した。

「では、岩櫃へ、おこし下されまするか？」
「うむ……よし。立ち退こう」
勝頼は、ついに承知をした。
勝頼は昌幸より一つ年長の三十七歳である。
昌幸が少年のころから小姓として、父・信玄の側近く仕えていたので、気心も知れている。
二人して相撲をとったり、馬を駆けさせたり、乱暴に遊びたわむれたものであった。
それだけに武田勝頼は、真田昌幸が、
「好き……」
であったのだ。
それでなくては、このときの昌幸の弁口にうごかされはしなかったろう。
真田昌幸は、よろこびいさんで、
「かならず明日中には、お立ち退き下されい」
と、勝頼に念を入れ、自分は、この日のうちに、わずかな家来たちを引きつれたのみで新府城を発し、上州へ急行した。勝頼が来るとなれば、一時も早く、籠城の準備に取りかからなくてはならないからだ。
これが、三月一日のことである。
高遠城が落ちたのは、翌二日であった。
その二日に、武田勝頼の決心が変わった。

勝頼の息で、十六歳の信勝が、あくまでも武田の国である甲州を捨てることに反対をし、真田昌幸とても「信ずるに足らぬ」と、いい出した。

なるほど真田家は、武田家にとって譜代の家臣ではない。

信州の一豪族にすぎなかった真田家が武田の傘下に入ってから、昌幸で三代にすぎぬ。

「真田は、殿を上州へさそい出し、これを織田か徳川へ引きわたすつもりなのじゃ」

などと、いい出す重臣もいる。

武田勝頼に、迷いが出た。

もしこのとき、勝頼が岩櫃城へ逃げていたら、どうなっていたろう。織田信長は上州まで兵を進めはしなかったとおもう。

すると、甲州を攻略した信長は安土へ帰り、数カ月後に、明智光秀の謀叛によって、京都・本能寺で死ぬ宿命をもっている。

となれば、真田家と共に生き残った武田勝頼は、以後の戦国終末期に、どのような役割を演じたことか……。

ともかく、武田勝頼は上州への退却を変更し、それがために自滅することになる。

それはさておいて……。

女忍びのお江が、生き残った向井佐平次をつれて行こうとしているのは、ほかでもない真田昌幸の上州・岩櫃城だったのである。

脱出

一

武田勝頼は、新府の本城に火をはなち、立ち退くことにした。

この急造の城を見ては、怒濤のように押し寄せて来る織田・徳川の大軍を、

「ふせぎとめる手段はない」

だれの目にも、それは歴然たるものがあった。

そこで勝頼は、武田家譜代の重臣・小山田信茂が、

「先ず、それがしの城へ引き移られては……」

しきりにすすめる言葉へ、従うことにした。

姓は同じでも小山田信茂は、高遠で戦死をした小山田備中守昌辰とは、別に深い関係がない。

もっとも、先祖をたどれば同族であったろう。

小山田信茂の岩殿城（現・山梨県大月市）は、なるほど要害の山城だから、すくなくとも、敵の大軍の自由を殺ぐにちがいない。新府城にいて、むざむざと敵の餌食になるよりは、と、

それは、だれもが考えた。
しかし、勝頼が新府を立ち退いたとき、これに従う将兵は、半減していたのである。
主を捨てて、逃散してしまったのだ。
そして、武田勝頼が、かつての本拠であった古府中（甲府）へ入り、荒廃した城下町へ一夜を泊し、翌朝になって見ると、さらに将兵の大半が姿を消してしまっていた。
笛吹川をわたり、柏尾まで来たとき、勝頼に従うものは、わずか百五十余名にすぎなかったという。
諏訪の本陣を引きはらい、新府へもどり、真田昌幸が熱弁をふるって、
「上州の、わが城へ立ち退かれたし」
と、主張したときには、まだ、一万に近い将兵が新府にいたはずである。
逃げるのを、
「待て」
と、止める方法もなく、
「逃げれば罰するぞ」
と、威すだけの実力が、勝頼と武田家から消え果てていた。
逃げるにまかせ、これを茫然と見送るよりほかになすこともなかった。
夜が明けるたびに、兵が逃げ、村々から徴発した小者も消えてゆく。
小山田信茂は、一足先に新府を出て、岩殿城へ帰り、勝頼を迎えて籠城するための準備に

取りかかっているはずだ。

信茂は、自分の老母を、勝頼のもとへ置き残している。人質であった。

ところが、その人質が、駒飼の村へ来たとき逃げてしまった。

軍列に加わっていた信茂の従弟・小山田八左衛門が、信茂の老母を奪い、脱出したのである。

「おのれ！」

武田勝頼は激怒し、このとき、はじめて、小山田信茂に、

（はかられたのでは……？）

と、疑惑を抱いた。

疑惑の余地はない。信茂が裏切ったことは決定的な事実である。

それでもなお、哀しいことに武田勝頼は、

（これは、何やらの間ちがいなのではないか……信茂が、わしに叛くはずがない）

強いて、おもいつづけている。

ここまで追いつめられると、武田の総大将としての威厳や闘志が消滅するにつれ、大将としての判断が鈍くなり、

（藁をもつかみたい……）

という気分のみが、勝頼の行動を左右するようになってくる。

そして、また、

（わしはもう、信茂の岩殿城へ向かって歩をすすめるほかに、道が何一つ残されてはいないではないか……）

と、心身が虚脱しかけてきた。

駒飼の村を出るとき、微かに明るんでいる払暁の空を見あげた武田勝頼の脳裡に、真田安房守昌幸の顔がうかんだ。

妙に老成したように見える風貌や、そのくせ、いつも生き生きとして張りのある若わかしい音声や、小さな体軀の敏捷なうごきに自ずとただよう愛敬を、勝頼は好もしくおもっていたものだ。

亡父・信玄が少年のころの昌幸を側近く召し使っていて、昌幸のうごきまわる態を見ては、

「また、小猿めが跳ねておるわ」

と、よくいったものである。

「安房……」

朝空に、勝頼はよびかけてみて、自分の低い声の空しさに慄然となった。

信玄亡きのちも、しきりに東海地方へ打って出て、徳川家康を脅かしていたころの武田勝頼は、まさに〔猛将〕の名にふさわしい武人であった。

けれども、いまの勝頼には、高遠城内で凄烈な自決をとげた異母弟・仁科五郎盛信ほどの気魄も覚悟もない。

高遠陥落の日。立木四郎左衛門が、はじめて敵と闘う向井佐平次に、

「いまこのとき、無我夢中となればよい。われらには、いまこのときがあるのみだ」

こういって、はげましてくれたが、その、いまこのときを、武田勝頼は逸してしまった。

真田昌幸が、上州への撤退をすすめたのは、再起を目ざす闘志を、

「いまこのときに抱きしめ、燃やしつづけつつ、おもいきって父祖の国を捨てるべきである」

と、いうことなのである。

闘志をもって撤退しよう、逃げるのではない、といったのだ。

この朝が、三月九日であった。

すでに、織田信忠は古府中に入り、勝頼を追跡せんとしている。

織田信長の本軍は岐阜を発し、諏訪に向かいつつあったし、徳川家康の軍団は身延へ入りつつあった。

武田勝頼は、完全に包囲されていた。

駒飼に二日とどまり、小山田信茂の迎えを待っていた勝頼だが、たまりかねて出発した。

このときの勝頼に従う家来たちは、六十名に減じている。

「くれぐれも、甲斐の国に、みれんを残してはなりませぬ」

活力のこもった真田昌幸の声が、悄然と山道をたどる武田勝頼の耳の中に鳴っている。

「わが家の存続を思し召すならば、父祖の国を捨てねばなりませぬぞ」

であった。

山林に春の息吹が香りはじめていた。

勝頼夫人や、勝頼の妹・松姫につきそっている十五名の侍女たちは呼吸を乱し、汗みずくとなっていた。これまでに、けわしい山道などを歩いたこともない女たちばかりなのである。

空は青く晴れわたり、小鳥のさえずりがしきりで、これは、まぎれもなく、春を告げる鳥の声なのだ。

いま、馬にゆられて行く武田勝頼を、すくなくとも、新府城を発った真田昌幸が見たら、わずか数日の間の変貌に、

（これが、御当代か……？）

愕然としたにちがいない。

精強の武田軍団を指揮していたころの、精悍な勝頼を見知っている者が見たら、同じ人物だとは信じられなかったろう。

夫人と妹が乗っている輿の前に、のろのろと馬をすませて行く武田勝頼の、うなだれた顔の色は壁土のようだ。

一行が疲れきって、笹子峠へたどりつこうとしたとき、行列の前方をすすんでいた家来三名が駆けもどって来た。

彼らの形相には、絶望の色が濃かった。

彼らは山道を駆け下って近づきつつ、烈しく手を振った。

「何としたぞ？」

勝頼の重臣・跡部大炊介が問うと、
「峠へは、まいれませぬ」
家来たちが叫んだ。
「早く、早く下へ、おもどり下され」
「何じゃと？」
「小山田の兵が柵をもうけ、われらを捕らえんと待ちうけております」
ここで、小山田信茂の謀叛が、勝頼にとって明確なものとなった。
信茂は、主人を捕らえて、これを織田軍へさし出し、身の安泰をはかろうとしたのである。
織田信長は、小山田信茂のような謀叛の仕方を蛇蝎のごとくに嫌う。
のちに、小山田信茂は信長によって殺されてしまうことになる。
武田勝頼は、只一言、こういったのみだ。
「引けい」

二

この夜。
武田勝頼一行は、峠の下の鶴瀬という小さな村外れの林の中で野営をした。
うかつに、焚火をするわけにもゆかぬ。
このあたりの土民の群れが襲いかかって来るやも知れなかったし、彼らに発見され、ひそ

かに織田軍へ密告されることにも気をくばらなくてはならぬ。

古府中へ陣を置いた織田信忠は、先鋒部隊を指揮する滝川一益に、

「勝頼を追うてくれい」

と、命じた。

おそらく滝川部隊は、すぐ近くまで接近しているにちがいなかった。

この夜ふけに、またも数人が逃げた。

朝となって、これを知った武田勝頼は、もはや、昨日までの勝頼ではなかった。

「さようか……」

跡部大炊介から、その報告を聞いたとき、勝頼は事もなげに、

「逃ぐるなら、いまのうちじゃ」

と、いい、跡部の胸の底に染みわたってくるような微笑をうかべた。

今朝の勝頼の双眸に、ちからが加わっている。顔色が冴え、昨日までは重い具足にしめつけられ、奄々と喘いでいたかのように見えた体軀が、久しぶりで生気を取りもどしている。

それは、跡部大炊介が、おもわず目をみはったほどの変貌であった。

跡部と共に、これまで勝頼へつきそって来た重臣の長坂長閑も、

（一夜のうちに……）

生色を取りもどした主をふしぎにおもった。

いや、それは勝頼とても、自分の変貌を意識してはいなかったろう。

昨夜、勝頼は、めずらしく熟睡をした。
いっさいの希望が、完全に絶ち切られたからである。
あとは、
（死に場所をもとめて、死ぬるのみじゃ）
と、覚悟が定まったからだ。
あとは、我が身を死にみちびくために、
（生きねばならぬ！）
ことになった。
わずかな……おそらくは、今日か明日だけを生きるための努力をしようというわけである。
その、死ぬるための意欲が、ようやくに勝頼を支えてくれた。
跡部も長坂も、すでに死を覚悟していた。何故か、この二人が主人を捨てて逃亡したという説が、のちには真実としてつたえられることになった。それは、あやまりである。
勝頼は、この朝、これまでに何度もくり返してきた説得を夫人におこなった。
「明日になると、もはや機会をうしなってしまうゆえ、ぜひとも、帰ってもらいたい」
と、勝頼はいった。
帰れ、とは、夫人の実家へである。夫人は、小田原城主・北条氏政の実妹で、この二人の結婚は、武田・北条の両家が同盟をむすんでいたときにおこなわれた。いうまでもなく政略結婚であった。

ところがいま、北条氏政は、織田・徳川両軍に参加し、関東口から三万の軍団をひきい、甲州へ攻め入ろうとしている。

そこへ帰すのだから、略、勝頼夫人の安全は保障されているといってよい。

夫人の侍女や家臣たちの中には、輿入れのとき、小田原からつき従って来た者が十名ほどいる。

この十名をつけて、夫人を北条氏政のもとへ帰したい、と、勝頼はおもった。

まだ十九歳の、若い妻なのである。

「帰ってくれい、たのむ」

と、くり返す夫に、妻は、ひたむきな情熱を双眸にこめ、かぶりを振りつづけた。

ついに、勝頼はあきらめた。

死なすにはしのびないが、妻が共に死んでくれるというのは、こころうれしい。

勝頼の息・信勝も、

「生きのびて、家名を起こしてもらいたい。なんとしても上州へ落ちて行き、真田安房守をたのめ」

と、たのみ、すすめる父・勝頼に、

「われらは死に絶えるのが、ようござる」

との決意を、ひるがえさぬ。

信勝は、織田信長の養女・由理姫（実父は美濃・苗木の城主・遠山友勝）が十七年前に武田

勝頼のもとへ嫁いで来て生んだ男子であった。

由理姫は、信勝を生んで間もなく、病歿してしまい、のちに勝頼は北条家から現夫人を迎え、再婚したのだ。

十七年前のそのころ……。

織田信長は、まだ三十をこえたばかりで、ようやくに美濃・岐阜の城主となって、越後の上杉謙信と甲斐の武田信玄の、すばらしい実力と威風に対し、実に、こまやかな神経をつかい、巧妙な政治力を発揮し、両家の怒りを買わぬようにつとめたものである。

信長が武田家と同盟をむすび、養女との婚姻を熱望したのも、このためであった。

さらに、信長は、勝頼の妹・松姫を、

「せがれの信忠の嫁にいただきたい」

と、武田信玄へ申し入れて来て、婚約がととのった。

ただし、双方ともに童子と幼女であったから、正式の結婚は十年後にという約束が取りかわされた。

織田信長は、そのとき、

「十年後に、信忠は、武田のむすめに子を生ませることもあるまい」

ひそかに、侍臣へもらしたといわれる。

十年後の自分が、もはや武田家との同盟を必要とせぬ、と、いったのだ。

そうした信長の意中は、故信玄も、よくわきまえていたにちがいない。

果たして、松姫が信忠夫人となるまでに、両家は交戦状態に入り、婚約は破棄された。
その松姫が、二十二歳となって、兄の勝頼と共に此処まで来ている。
松姫は、いま、尼僧となり、
「新館の御料人」
と、よばれていた。
仏門に帰依しているだけに、松姫は、
「於松。そなたには、ぜひとも、われらの冥福を祈ってもらわねばならぬ」
勝頼にそういわれると、最後には、これを承知せぬわけにはゆかなくなった。
この朝。
松姫は二人の家来にまもられ、勝頼一行と別れ、脱出した。
のちに彼女は〔信松尼〕と号し、三十年近い歳月を生きることになる。
こうして武田勝頼は、もはや死に場所を目ざすだけとなった。
「天目山へ……」
と、勝頼はいい、馬へまたがった。

同じ朝、同じころ……。
向井佐平次は、ねむりからさめていた。
干し草と藁の中に、埋もれてねむっていたのである。

そこは、三坪ほどの小屋であった。
ただの小屋ではない。
小屋の半分が土中に埋もれている。
埋もれている部分は石で囲われてい、その上を丹念に粘土でぬりこめてあった。
小屋の上半部に竹で編んだ屋根がかぶせられ、その上へ、厚く萱がふいてある。
三日前に、お江は佐平次を、この小屋へ運びこんだ。
お江の介抱を受けて、気力を取りもどした佐平次だが、脇腹の深い傷は、すぐに癒るものではない。
高遠城の炎上するのを見た山林の中から、この小屋へ到着するまでには、ずいぶんと長い時間をかけ、お江は慎重に行動をした。
「どこを見ても、織田軍が、みちあふれておるぞえ」
と、お江はいった。
山の中をたどって来たわけだが、佐平次には、どれほどの日数を経たものか、それもわからぬ。
傷がまた痛みだしたし、一時は、
(死ぬる、やも知れぬ……)
と、おもったりしたほどだ。
目ざめた佐平次は、前日に小屋を出ていったお江が、まだ帰って来ないのを知った。

三

昨日の朝、お江は、
「この小屋から、一歩も外へ出てはならぬ」
きびしく、いいわたし、
「わたしは、様子を見て来る。もしも、今日のうちに帰れぬとしても案じるな、佐平次どの。わたしは、かならず此処へもどって来るゆえ」
「どこへ、行きなさる？」
「織田軍のうごきを見ておかぬと、此処から脱け出せぬではないか……」
「ひとりで、そのようなことができるのか？」
「ふ……」
お江は、苦笑をもらし、
「わたしひとりなれば、何処へでも行ける。佐平次どのをつれて逃げねばならぬゆえ、苦心をしているのじゃ」
「どうして、おれを、このようにしてくれる。どうもわからぬことだが……」
「生きのびたが、うれしゅうはないかえ？」
「そ、それは……」
「うれしいかえ？」

「う、うれしい」
「わたしは、壺谷又五郎どのに、たのまれたことをしているだけじゃ」
佐平次には、それがわからぬ。
これまでに何度も、亡父・向井猪兵衛と壺谷又五郎との関係について、問いかけてみたが、お江は「知らぬ」というばかりであった。
高遠落城の前夜に、
「わしは、おぬしの父・猪兵衛殿とは格別の因縁がある。だによって、おぬしを助けたい」
といった又五郎の声には、何やら秘密めいたものがただよっていた。
いずれにせよ、あの乱戦の中へ、又五郎がお江を残し、佐平次ひとりの安否をたしかめさせたというのは、
（ただごとではない）
と、若い佐平次にも感じられる。
又五郎とお江は、上州・岩櫃の城主で、三代にわたって武田家への臣従をしている真田安房守昌幸に仕える忍びの者だそうな。
伊那谷へ押し寄せて来る織田信忠の大軍にそなえ、武田家では何人もの忍びの者を出し、信忠が岐阜を発したときから、その軍容や進軍の状態をいちいち探り出し、これを武田本陣や高遠城へ報告した。
「なれどわたしたちが、いのちがけで、そのような忍びばたらきをしたところで、どうなる

ものでもなかったのじゃ。いかに、忍びの者がはたらいたとて、もはや武田家には、戦うちからが消え失せ、手をつかねているのみだったのだから……」

お江は、そういった。

忍びの者は、

〔間諜（かんちょう）〕

である。

間諜の仕事を生かす勢力が背後に消滅してしまっては、なるほど、どうしようもない。武田の勢力がおとろえるにつれ、信玄時代には、まさに「日本一」の実力を誇った武田家の間諜網も、しだいに統一をうしない、つぎつぎに犠牲者を出すようになってきた。

真田昌幸は、織田軍の高遠攻めにそなえ、又五郎やお江のほかに三名の〔真田忍び〕をさし向けた。

これは、武田忍びを助けるためでもあり、昌幸自身が彼らの耳と足によって、いち早く、敵の情況をつかみたかったからであろう。

「こちらへまわった真田忍びのうち、いまは、生き残ったのが、又五郎どのと、わたしの二人のみじゃ」

お江は嘆息していった。

「こなたにも忍びが出れば、敵方も忍びを出す。それがなあ、こたびは、まるで、勝負にならなかった……」

それが、どういうことなのか、向井佐平次にはよくわからぬ。
わからぬながらも、おぼろげに察することはできた。
軍団と軍団の戦闘以外に、双方の忍びたちにも激烈な闘いがおこなわれたにちがいない。
「この小屋は、どこに……？」
「山の中ばかり歩いて来たので、よう、わからぬもむりはない。ここは、高遠からも、さして遠くはない」
「えっ……」
「木曾の駒ヶ岳の山裾にちかいところじゃ」
「こまが、たけ……？」
駒ヶ岳は、木曾山脈の最高峰である。
木曾山脈の西側は木曾谷、東側は伊那谷であって、お江が、いま佐平次を連れこんだ小屋は、駒ヶ岳の東の、権現山の山腹にあるのだという。
小屋は樅や松の密林の中にあり、それにしては、念の入った造りに佐平次がおどろくと、
「この小屋は、忍び小屋というのじゃ」
お江が、笑って、
「三年ほど前に、こたびのような戦にそなえ、つくりあげたものよ」
この小屋は、つまり、武田家の忍びの者の基地になっていたのであろう。
「そのようなことは、もはやあるまいとおもうが……もし、わたしの留守に、だれかが、こ

の小屋へあらわれたなら、わたしの名か、壺谷又五郎どのの名を告げるがよい」と、いい置いて、お江は小屋を出て行ったのである。

向井佐平次が〔忍び小屋〕で目ざめたころ、武田勝頼の一行は、鶴瀬を出て天目山へ向かった。

山峡の、けわしい道を日川の川沿いにのぼって行くのである。

田野とよばれる小さな村の手前まで来たとき、後方を警戒していた家来の一人が追いついて来た。

「織田勢が、うしろへ、せまって来ております」

家来は報告し、すぐにまた引き返して行った。

新府から此処まで来た勝頼一行の行列を見かけた者は、何人もいるであろう。

織田の先鋒・滝川一益の部隊が、古府中から、諸方で聞きこみをつづけながら、勝頼一行の足どりをつかんだものと見てよい。

勝頼は、谷川に沿った小さな台地へ人数をあつめ「女たちは、早う逃ぐるがよい」と、いった。

最後の期がせまった。

勝頼が天目山を目ざしたのは、山中に隠れひそむためではなかった。

死に場所を得るためなのである。

あたりを見まわし、

「ここでよい」
と、勝頼がつぶやいた。
そして、夫人の輿入れにつき従って、武田家へ来ていた北条氏政の家来四人へ、
「小田原へ帰るがよい」
と、すすめた。
しかし、四人は承知をせぬ。
この四人にしろ、他の勝頼の家来たちにしろ、逃亡続出の中に……そしてそれが容易なことであるにもかかわらず、此処までつきそって来ただけに、いずれも覚悟が決まっていた。
そのとき、勝頼夫人が、
「わたくしの辞世を、兄上へとどけてくれますように」
と、いい出した。
これでようやく、四人は小田原へ帰ることを承知した。

黒髪の乱れたる世ぞ果てしなき　おもひに消ゆる露の玉の緒

これが、勝頼夫人の辞世である。
武田勝頼は、もう、此処からうごくつもりはなくなっている。
家来たちは、山の木を切り倒し、台地の周りに柵を立てはじめた。

何のためか……。
このような柵で、敵を防げるものではない。
しかし、何かしていなくては、居ても立ってもたまらぬ気持だったのであろう。
日が沈みかけるころになって、勝頼が、
「火を燃やすがよい」
しずかに命じた。
火を燃やせば、あたたかい粥を煮ることができる。躰も温められる。
そのかわり、敵の目にもつく。
だが、勝頼も家来たちも、もう、敵を恐れてはいなかった。

四

そのころ、権現山の〔忍び小屋〕では……。
向井佐平次が、深いねむりに落ちこんでいる。
いくらねむっても、
（ねむり足りぬ……）
おもいがした。
腹の傷の痛みは、すこしずつではあるが、うすれかかり、その鈍い痛みが却ってこころよいのだ。躰をうごかすと、おもわず声をあげるほどの痛みが疾るのだが、こうして干し草と

藁に埋もれ凝と身を横たえているかぎり、苦痛は去ったといってよい。

佐平次は、叔母や従弟・従妹の顔を夢に見ていた。

叔父の坂山市松の留守をまもり、叔母たちは、古府中にある小山田備中守の長柄足軽の長屋にいたはずだ。

小山田備中守は、信濃の尼飾（現・長野市松代町東条）城主ということになっているが、この城が武田家にとって戦略的な意味をもたなくなってからは、ほとんど古府中に在って武田勝頼を補佐した。

ために、備中守の家来と、その家族の大半が古府中へ移って来ていた。

佐平次の夢の中で、古府中の足軽長屋が火炎に包まれている。

燃えさかる焔の中で、叔母のもよが踠き苦しみつつ、それでもしっかりと、気をうしなった我が子の松之介の躰を抱きしめている。

そのありさまを、こちらで見ている佐平次に従妹のたまが、すがりつき、泣きむせんでいるのだ。

十五歳にしては、のびのびと豊かなたまの肢体から、日向くさい体臭が濃密にただよってくる。

夢に嗅覚があるものか、どうか、それは知らぬが、のちになって佐平次は、たしかに従妹の躰のにおいが夢の中でしていたようにおもえた。

実子同様に叔母夫婦が面倒を見てくれたし、佐平次も松之介やたまを実の弟妹とおもい、

古府中の足軽長屋で共に暮らしていたころは、たまに対して、この夢のように生なましい感じを抱いたことはなかった。

「助けて……兄さまよ、母を助けて……」

叫びつつ、ひたむきに、たまが躰を擦りつけ、双腕を佐平次のくびすじへ巻きつけてくる。

すると、いつの間にか……。

すぐ目の前に、焼死しようとしている叔母と従弟を見ながら、佐平次はたまを押し倒し、その着衣を押しひろげ、わずかにふくらんだ乳房へ顔を埋めているではないか。

「あっ。う、う……」

汗びっしょりとなって、佐平次がうめき声をあげ、目ざめた。

小屋の中に、焔がゆらめいている。

「目がさめたか、佐平次どの」

石で囲んだ穴の中で、火が燃えてい、小さな鉄の鍋が仕掛けられ、中のものが煮えているらしい。

その前に、お江がすわりこみ、こちらを見て笑っていた。

「あ……いつ、帰って来られた？」

「だいぶんに前じゃ。よう寝ていたので、起こさなかった」

お江は小屋を出て行くときと、身につけているものが変わっていた。農婦の姿ではあるが小ぎれいになり、黒いゆたかな髪につもっていた土埃がきれいに除れていた。

「久しぶりの粟粥じゃ。さ、お食べ」
「どこまで行かれたのだ？」
「諏訪から古府中……」
「何、古府中まで？」
「おお、行った」
「そ、そのようなところまで、女の足で、ひとりで……」
「わけもないこと。わたしひとりなら、もう、いまごろは岩櫃の城へ着いていようわえ」
それほどに、おれが足手まといになるのか、と、佐平次はいいかけたがやめた。
「こ、古府中は、どうなっていた？」
「織田信忠の軍勢が、みちあふれていたわえ。武田の御屋形さまは新府の城をお捨てなされ、どこぞへお逃げあそばしたらしい。もはや、これまでじゃ」
「御屋形様は、どこへ、お逃げあそばしたのだろう？」
「わからぬ。真田の殿さまは、こたびの戦がはじまる前から、御屋形さまを岩櫃へお連れ申すつもりだったそうな。だから、新府の城をお捨てなさるとき、そのことを御屋形さまへすすめられたにちがいない……けれど、御屋形さまは岩櫃へは向かわれなかったらしい。御領内のあちこちを逃げまわっておられるのであろ」
「真田安房守様も、か？」
「ふ……」

微かに、お江が笑い、
「真田の殿さまは、そのようなまねを、むざむざとなさるものか……」
と、いった。
（この女は、御屋形様をばかにしている……）
佐平次は、むっとなり、口をつぐんだ。
古府中に織田軍が充満しているとすれば、叔母たちは、その前に城下から逃げ出したにちがいない。安否はわからぬが、女と子供たちであるから、
（逃げのびられぬものでもない……）
と、佐平次はおもった。
「何を怒っているのじゃ、佐平次どの」
お江が近寄って来て、干し草に埋もれている佐平次を抱き起こそうとする。
「よせ」
お江の腕を振りはらい、半身を起こしたとき、佐平次の腹に激痛が疾った。
「う、う……」
「それ、ごらん」
しっかりと両腕に佐平次を抱えこみ、
「こうなったら、何も彼も、わたしにまかせるがよい。悪しゅうはせぬ、悪しゅうはせぬ」
やさしく、赤子でもあやすように佐平次の耳もとへささやきつつ、

「わたしが、これからは、佐平次どのの母ごになってあげよう。それならばよいであろ。な、な……」

お江の掌が、かたく引きしまった佐平次の躰をゆっくりと撫でさすってくれる。こころよかった。

おもわず佐平次は、お江のひろい胸へ顔を押しつけ、泣きむせんでいた。

朝になったとき……。

佐平次は、お江の胸に抱かれてねむっていた。

昨夜あれから、熱い粟粥を食べてすぐに干し草の中へころげこんでねむってしまったらしい。お江はいろいろな荷物を背負って小屋へ帰って来た。

粟粥を夢中で食べている佐平次に、

「明日は、佐平次どのの身につけているものを替えねばなるまい。その姿では、とてもとても、甲斐の国から脱け出ることはできぬゆえ、な……」

お江が、そういったのを、佐平次はおぼえている。

目ざめたとき、佐平次の目の前に、大きくてゆたかな、ふくらみが見えた。

白い、こんもりとしたふくらみに、茱萸の実のようなものがついている。乳首であった。

はだけた胸もとから、お江の左の乳房が露出しているのだ。

それをながめているうちに、われ知らず佐平次の呼吸が荒くなった。

なぜか、わからぬ。

昨日の夢の中で嗅いだまの日向くさい体臭とはまったくちがう、あたたかくて甘くて酸いような、お江の躰のにおいが佐平次を惑乱させつつあった。

と……。

両眼を閉じたままの、お江の手が佐平次の手をつかみ、それを、自分の胸へいざなった。

「あ……」

「佐平次どの……」

「う……」

「眼を閉じなされ。さ、早う……」

「こ、こうか……」

「それでよい」

いったかとおもうと、いきなり、お江の躰が佐平次の躰へやわやわと押しかぶさってきた。

ふしぎに、腹の傷が痛まなかった。

佐平次の唇を、なまあたたかいお江のそれがふさいだ。

「わたしのするがままに……凝としていなされ。大丈夫、大丈夫……」

そのころ、天目山の山裾の台地にも朝がおとずれている。

武田勝頼は、まだ少女のおもかげがどこかにただよっている若い妻と寄り添い、低い声で語り合っている。

家来や侍女たちは、わざと遠くはなれ、朝餉の仕度にかかっていた。
そこからは、奥の蔭になっていて、勝頼夫妻の姿も見えず、語り合う声はきこえても、言葉はききとれなかった。
時折、夫人の声が高まり、
「うれしゅうございます」
とか、
「生くるより、死ぬるは、たやすいことでございます」
とか、そうした言葉が侍女たちの耳へつたわってきた。
勝頼が、さびしげに笑う声もきこえた。
朝餉ができあがる前に、危急がせまった。
見張りに出ていた安田源三郎・皆井小介の二人が駆けもどり、織田の先鋒部隊が、すぐそこまでせまって来たことを告げたのである。
侍女たちの泣き声が起こり、土屋惣蔵という家来が、勝頼夫妻のいる台地へ駆けあがって来た。

五

土屋惣蔵は刀術にすぐれ、弓術も卓抜している。背丈は尋常であるが、その体軀は巌のような筋肉によろわれていた。

「御屋形……」

と、武田勝頼の前にひざまずいた惣蔵が、

「しばらくの間は、それがしが防ぎまする」

それだけをいい、勝頼を見あげた。

自分が防いでいる間に、

（こころしずかに、御自害をなされますよう）

そのおもいが、惣蔵の両眼にこもっている。

勝頼は微笑と共に、しっかりとしたうなずきを惣蔵へ送ってよこした。

土屋惣蔵が一礼をし、三名の家来たちと台地を駆け下って行った。

昨日の午後、この田野の村外れの台地から勝頼一行がうごかなくなったとき、家来たちは、すこしはなれた崖道へ二重三重に柵をもうけ、追跡して来る織田軍の先鋒を束の間でも、喰いとめようとしていた。

惣蔵と共に、崖道の柵の方へ駆け向かった家来たちの中に、

〔小畑亀之助〕

という者がいる。

三十前後の精悍な男で、新府の城を出てから今日に至るまで、ほとんど口をひらかず、黙念として勝頼につき従って来た。

小畑亀之助は、ふとい鼻の下から、張り出した顎へかけて、みごとな髭をたくわえてい、

なかなかに立派な顔だちをしている。

彼は、ここで、間もなく死ぬ。

いまのところは、それだけのことしか、彼についてはわかっていない。

だが、この物語がすすむにつれて、小畑亀之助の名が、おもいもかけぬところにあらわれてくるとおもう。

それゆえに、彼の名を、ここに書きとめておいた。

勝頼一行の後を追って来た織田の先鋒は、滝川一益の部隊である。

ようやくに勝頼一行の足どりをつかみ、鶴瀬から天目山への山道を押しのぼって来た。

土屋惣蔵たちが柵をもうけた崖道は幅三メートルほどのせまさで、それが惣蔵のねらいであった。

惣蔵は不敵に笑い、弓に矢を番えた。

風が出て来た。

谷間を吹きぬけて来る風は、意外に冷たい。

柵の向こうに、敵があらわれた。

惣蔵たちは、いっせいに矢を放った。

数名の敵が、悲鳴と絶叫をあげて切り立った崖下へ転落して行った。

せまい崖道にひしめき合い、わめき、叫んでいる敵を、惣蔵たちは、おもしろいように射倒した。

「武田勢じゃ！」
「退れ！」
などと、わめいているのだが、曲がりくねった崖道を下から押しのぼって来る滝川部隊の後部には、その声がとどかぬ。
敵は意外な混乱状態となり、矢を受けぬ者も足もとをみだし、崖から落ちた。
土屋惣蔵は自分の矢を射つくしてから、他の三人の矢を受け取り、
「よし。小畑亀之助だけ残れ。あとの二人は、この様子を御屋形様へお知らせ申せ。あと、しばらくはもちこたえて見せようが、もはや、長くはつづくまいとな……」
二人は駆け去った。
惣蔵は、なおも射つづけた。
亀之助が、
「わしも……」
というのへ、惣蔵は、
「おぬしには役目がある。すこし退って見ておれ」
といった。
敵は、崖道から、いったん姿を隠した。
そして、木の枝をたくさんに束ねたものを雑兵に担がせ、これを楯にして、ふたたび崖道へあらわれた。

敵の足をねらって矢を射かけつつ、土屋惣蔵が、
「亀之助。これまでじゃ。早く、御屋形様へ……もはや、御猶予はなりませぬと申しあげろ」
「いや、わしも闘う」
亀之助が太刀を引きぬいたのへ、
「どちらでも同じことじゃ。御屋形様のもとで死ねい」
「な、なれど……」
「行けい。行かぬか」
「は……では、まいる」
「早くせい、早く……」
小畑亀之助が駆け去るのを見て、惣蔵は、崖の曲がり角へ引き、太刀を抜きはらった。
敵は折り重なるようにして、木の枝の楯のうしろから得物を突き出し、柵を押しのけ、これを崖の下へ突き落とした。
鉄砲足軽が前進して来て、発砲をはじめた。
そして、だれもいないと見て、いっせいに喚声をあげ、崖道を走り出した。
曲がり角からあらわれた土屋惣蔵が、猛然と太刀を揮った。
崖の曲がり角が、敵の血で烟った。
敵の槍や太刀が、朝の日ざしに煌めき、たちまちに惣蔵を押し包んだかと見えたとき、惣

蔵は身をひるがえし、つぎの曲がり角へ身を隠している。
鉄砲の音が、山峡にこだまし、十人ほどの味方の死体を乗りこえた敵が惣蔵へせまった。
惣蔵は、われから突進した。
敵の槍がはね飛ばされ、悲鳴が起こった。
惣蔵は折れた自分の太刀を捨て、敵の死体から太刀をうばい取り、また、つぎの曲がり角へ隠れた。
敵は、惣蔵ひとりをもてあました。
せまい崖道だけに、惣蔵の肉体が疲れ切ってしまうまで、敵は惣蔵の餌食となったのである。
このときの彼の血闘が、のちに、
「惣蔵の片手千人斬り」
などと、よばれたものである。
しかし、ただ一人の奮闘には、当然、限度がある。
それでもなお、土屋惣蔵は敵の手に殪れることをいさぎよしとしなかった。
傷ついた自分の体力が限度に来たのを知り、惣蔵は短刀で喉を突き、自害をとげた。
敵は惣蔵の死体を崖の下へ突き落とし、奔流のように田野の村へ殺到した。
武田勝頼一行は、柵をめぐらした台地の上から姿を消していた。
勝頼は、田野の村の、すでに住人が逃げ散っていた民家へ入り、そこで自害することにし

たのであった。

武田勝頼は割腹し、三十七歳の生涯を終えた。

勝頼夫人も、十六歳の武田信勝も、最後まで供をした家来・侍女たちも、ことごとく、これに殉じた。

その中に、むろん、小畑亀之助もいたわけだが、もう一人、勝頼の侍臣で、樋口下総守鑑久という人物がいたことを書きとめておきたい。

殉死したときの年齢はよくわからぬが、この人は、武田勝頼をわが居城へ脱出させようとした真田安房守昌幸の義弟にあたる。

樋口下総守は、昌幸の妻〔山手殿〕の妹・久野を妻に迎え、一子・角兵衛をもうけている。

久野と、十二歳になる角兵衛は、上州・岩櫃の城へ先発した真田昌幸一行と共に甲斐の国をはなれていた。

その点、下総守は安んじて死ぬことができたのではあるまいか。

樋口下総守は勝頼につきそい、後から岩櫃へおもむくつもりでいたが、事態はおもいもかけぬところへ急転してしまった。

おそらく下総守は、何度も、

「安房守昌幸をたよりになされますよう」

と、勝頼にすすめたことであろう。

さて……。

武田勝頼・信勝父子の首級は、この日のうちに、織田信忠の前へとどけられた。

そして、ここに一時は天下制覇を目前にするほどの実力をそなえ、勢力を伸張し、無敵の強兵を誇った武田家の栄光は、完全に消滅したのであった。

六

それは丁度、武田勝頼が天目山の麓で自害をとげたころであったが……。

天目山から中径にして北西へ約八十キロメートル。甲府盆地と赤石山脈と伊那盆地をこえた彼方の、権現山の山腹にある忍び小屋でも、異変が起こりつつあった。

女忍びのお江にいざなわれるまま、向井佐平次は眩惑の時をすごしたのだが、何といっても、これは、佐平次にとってはじめての経験である。

かたくかたく閉じている眼の底に、火花が散っているようで、得体の知れぬ衝撃の連続だったといってよい。

お江が身をはなしたとき、佐平次は居たたまれぬほどの羞恥に、

「外へ出ていてくれ」

と、いった。

「まあ、何をいやる」

「行け。出て行け」

「怒ったのかえ……」
「怒らぬ」
「でも、怒っているではないか」
「怒らぬが、出て行ってくれ」
半身を起こしかけて、佐平次は腹部に疾る激痛に、
「あっ……あ……」
顔を引きゆがめた。
「それ、ごらん」
「むう……」
お江のなすがままに、まかせるよりほかはなかった。
あきらめて、ぐったりと、佐平次は眼を閉じた。
お江は、ついでに佐平次の衣類をはぎ取り、どこで手に入れたものか、洗いざらしではあるが垢も埃もついていない下着や着物に着替えさせ、傷の手当てをし、口中に嚙みくだいた薬を口移しに嚥下させた。
そのときである。
何かいいかけた佐平次の口を、お江が急に押さえた。
見上げると、お江が佐平次にかぶりを振って見せた。
お江の両眼が細められ、針のように光っている。

はだけたままの胸もとから、お江の左の乳房の一部がこんもりともりあがっていて、明かりとりの小窓から射しこむ光に、その乳房が何か別の生きもののように見えた。

「声をたててはならぬぞ」

男のように、きびしくささやいて立ちあがったお江が明かり窓の戸をしめ、革袋のようなものを左手につかみしめ、板壁の一部に仕掛けられた〔覗き穴〕から外を見張った。

だれかが、この小屋へ近づいて来るのを知ったらしい。

佐平次は息をつめ、お江を見まもっていた。

と……。

お江が小屋の戸を開き、外へ飛び出して行った。

名も知らぬ山鳥の声が、けたたましくきこえ、清浄な冷たい山気が小屋へながれこんできた。

すぐに、お江はもどって来た。

男をひとり、肩に担いでもどって来たのである。

男を横たえると、お江は小屋の戸をしめ、

「勘五どの。だれにも後をつけられてはいまいな?」

と、訊いた。

勘五とよばれた男が、うなずいた。

うなずくだけが精一杯らしく、あとは、ぐったりとなってしまい、お江が例の薬を嚙みく

だいてのませるまでは、口もきかなかった。
男の顔には、血と泥がこびりついてい、眼鼻立ちもよくわからぬほどであった。
小柄な男の躰からは異臭がたちのぼっている。躰にも、かなりの傷をうけてい、それが化膿しているらしい。
「み、水……」
男が、あのときの佐平次と同じようなことをいうのへ、
「勘五どのともあろう者が、何をいうのじゃ」
たちまちに、お江から叱りつけられてしまった。
佐平次は、顔をそむけていた。
お江が自分にしてくれたように、薬を口移しに、汚い男の口へもってゆくのを見たからである。そのことが佐平次にはおもしろくなかった。
（なぜ、おれと同じようにする……）
このことである
「勘五どのは、もはや、この世にはおらぬとおもうていた」
その、お江の声を佐平次は背中に聞いている。
「お江どのは、壺谷又五郎殿と共に、岩櫃へ行かれたのではなかったのか……」
「すこし、遅れてな」
「よも、この忍び小屋におられるとは、おもわなんだ」

「あれから、どうなされた？」
「この若者は？」
と、勘五が問いかけたのへ、お江はこたえた。
「壺谷どののゆかりの者じゃ。小山田さまの長柄組にいて、ずいぶんとはたらいたらしい」
「そ、そうか……」
語り合いながらも、お江は勘五の傷の手当てをしているらしく、
「まあ、ひどいことよ」
とか、
「この傷で、ようも此処まで来られたものじゃ」
とか、向井佐平次が聞いていて、さすがに（よく、あのようなことを、はっきりといえるものだ……）とおもうほどに、きっぱりとした口調で、
「勘五どの。これはもういかぬ。助からぬぞえ」
とお江がいいきるのである。
すると勘五もまた、平気で、
「やはり、な」
「傷口があまりにひろい。すっかり、血がながれてしもうた」
「む……血が、な……」
勘五は気力だけで、此処へたどりついたらしい。

佐平次は、

（この男も、武田家につかえていた忍びらしい。だが、お江どのや壺谷又五郎どのがつかえている真田家の忍びではないと見える）

と、看た。

「あ、うごいてはならぬ」

お江は、懸命に傷の手当てをつづけている。

「あの夜……われらは……」

「ふむ、ふむ……？」

「織田信忠の本陣を、襲おうとした……」

「五人でかえ？」

「いや、七人、あつまって……」

「ふむ、ふむ……？」

「失敗をしてしもうて……」

「そりゃ、むりじゃ、勘五どの」

「敵の忍びの眼が、諸方に光っていて、どうにもならなんだ……」

「なれば、わたしも壺谷どのも、あれほど押しとどめたではないかえ」

「だが、お江どの……ああなっては、敵の大将の、寝首掻っ切るよりほかに、もはや道はない、と……」

「ふむ、ふむ……あ、凝と……凝としていなされ」
「み、水を……」
「まだ、いかぬぞえ」
「この小屋へ、来れば、薬もあるし、手当てもできるとおもうて……」
「生き残ったのは、勘五どのひとりか？」
「たぶん、な……」
「これ、しっかりせぬか」
「み、水……」
勘五の喘ぎがたかまってきた。
異臭がひどい。お江が手当てをはじめたので血膿のにおいが、せまい小屋の中にたちこめ、おもわず佐平次は、躰の下に敷きつめてある干し草の中へ顔を埋めこんでしまった。
さすがのお江も、たまりかねたらしく、小屋の戸を開けて外気を入れようとした。
戸を開けた瞬間に、
「あっ……」
低いが、切迫したお江の声がした。
同時に異様な、するどい音が小屋の中へ飛び込んで来た。
何か鋭利な刃物が空間を切り裂いて飛び込んで来たような……と、佐平次が感じたとき、開けた戸を閉じたお江が、

「佐平次どの。どのようなことがあっても、決して、うごいてはならぬぞ」
と、いった。
佐平次は、こたえなかった。
お江の声に、自分の胃の腑をつかまれたようなおもいがした。
すると、お江が、
「うごかぬといえ」
叱りつけるように、催促をした。
「うご、かぬ……」
「よし」
その声がきこえたとおもうと、お江が小屋の中から姿を消していた。
戸口から出て行ったのではない。戸は閉じられたままであった。
勘五の、苦悶のうめきがはたと絶えた。

七

向井佐平次は、干し草の中へもぐりこみ、息を殺していた。
まだ、忍び小屋の中に、お江がいるとばかりおもっている。
佐平次にとっては一時間にも二時間にも感じられたが、あまりに、小屋の中も外もしずまり返っているので、

「お江どの……もし、お江どの……」
そっと、よびかけてみたが返事はない。
くびを擡げて見た。
（お江どのが、いない……）
それなのに、小屋の戸は閉まっている。
（ど、どうしたのだ……？）
半身を起こした佐平次の眼が、仰向けに寝たまま、凝とうごかぬ勘五の姿をとらえた。
（あ……）
その姿は、先刻までの勘五のものではない。
近寄って見ると、勘五は死んでいた。
「お、お江どの……」
佐平次の声が高くなった。
たまりかねた佐平次は、小屋の戸口へ這って行き、戸を開けようとした。
その瞬間に……。
小屋の戸が外から引き開けられたのである。
「あっ……」
「うおっ！」
佐平次の驚愕の声と、外から小屋の戸を開けた男の怒声とが、ほとんど同時に起こった。

男は、百姓の風体であったが、手に刀をつかんでいた。その白刃の煌めきと、目鼻立ちも定かではないほど汚れきった男の顔のするどい眼光とに、佐平次は怯え、圧倒された。

高遠城の攻防戦で、多勢の敵の中へ突進して行ったときは、無我夢中となり、ほとんど恐怖をおぼえなかった佐平次であるが、このときばかりは恐ろしかった。

出合いがしらの衝撃もあったろうが、それよりも、戸を開けて小屋の中へ飛び込もうとしている男の、人間ばなれしている剽悍な姿勢や、獣めいた眼の光に、

（殺される……）

と、佐平次は感じた。

事実、男は小屋へ飛び込んで来て佐平次を殺しかけたのである。

その凄まじい殺気が、戸を開けた瞬間に佐平次を撃ったのだともいえよう。

佐平次は、それでも必死に半身を起こし、両膝をつき、上体をのけ反らせた。それが、いまの佐平次には精一杯の防禦の姿勢であった。身をひねって、小屋の中の一隅へ逃げるだけの余裕はなかったといってよい。

佐平次は、眼を閉じた。

つぎの瞬間に、男の刃が自分の頭上へ叩きつけられることを、佐平次は感じていたのである。

と……。

男が怪鳥のような叫びをあげた。

佐平次は横ざまに倒れつつ、眼をひらいた。
男は、くるりと振り向き、気が狂ったかのように小屋の外へ飛び出して行った。
そのとき、生あたたかいものが佐平次の顔へはね飛んで来た。これは男が振り向いたとき、男の躰からふりまかれた血であった。
（ど、どうしたのだ……？）
咄嗟に、わからなかった。
佐平次は、戸口まで這いすすみ、恐怖に堪えつつ、外を見た。
深い樹林の間に、ちらりとうごいたものがある。
その人影が、お江のようにおもえた。
男は、小屋からすこしはなれた腐葉土の中へ伏し倒れている。
男のくびすじと背中のあたりから、夥しい血がながれ出ているのを、佐平次は見た。
「お江どの……」
たまりかねて、佐平次が叫んだ。
彼方の、樅の樹林に、今度はまさしく、お江の姿があらわれた。
「お江どの、早う……」
よびかけた佐平次の前へ、お江が駆け寄って来た。
佐平次は、茫然となった。
道を駆けて来たのではない。獣しか通らぬ樹林の中を駆けて来たはずだ。それなのに、佐

平次の眼は駆けて来るお江の姿をとらえることができなかった。それほどに速く、それは樹樹の間を吹きぬける突風に乗って来たかと、おもわれたほどだ。

それに、お江もまた凄絶な姿に変わっていた。

ふり乱した髪の下の顔から、喉、胸肌のあたりに血飛沫がかかって、右手につかんだ脇差に血あぶらがこびりついている。

白い眼で、お江は佐平次をにらみ据え、

「何故、出て来た」

重おもしい、しわがれた声で、

「うごかぬ、と、約束したではないか」

「だが……男が、戸を開けて……」

「戸を開けて、どうした？」

「おれを殺そうとした」

「殺されたか？」

「いや、殺されていたら、こうしてはおられぬではないか……」

「だから、うごくなというた」

「あの男は、どうして、急に外へ……？」

「わたしが殺した」

「えっ……」

「わたしは、あの男が小屋へ近づくのを待ち構えていた。なればこそ、うごくなというた」
「う……」
では、小屋へ入ろうとする男の背後から、お江が襲いかかったものか……。
そして、お江は男を討ち、さらに樹林の中へ駆け入った。これは何を意味しているのであろう。
「別の敵が、いたのじゃ」
と、お江は語った。
「勘五どのは、織田方の忍びに後をつけられていたのであろ。深い手傷をうけていたので、そのことに勘五どのは気づかなんだ。この小屋へ来れば、薬もあり、鹿の干し肉もあり、敵にさとられぬまま、傷を養うつもりでいたのであろ」
勘五の死体をたしかめてから、お江は脇差をつかい、小屋の中の柱や板壁に喰い込んでいる数箇の刃物のようなものを、穿り出した。
それは人差指ほどの長さと太さをもち、尖端はするどく、根元のあたりに二カ所ほど、爪をかけるための凹みがきざみこまれてあった。
敵は、お江が小屋の戸を開けた瞬間に、外から、この得物を投げ打ったのである。
お江は、手にしたそれを黙って見ている。
お江の両眼が細められ、針のように光っていた。
「お江どの。それは何だろう？」

問いかける佐平次に、お江は、ふところへ手をさしこみ、小さな革袋を出して佐平次へわたした。

中を見て、佐平次は、

「あっ……」

と、いった。

敵の忍びが投げつけて来た得物と同じような形状の物が、革袋の中に三箇ほど入っていたからだ。お江の物のほうが、敵のより、いくらか細く、そのかわり長目であった。

「忍びは、このような物を、投げるのか？」

お江は、こたえぬ。

そのかわりに舌打ちをし、敵の得物を放り捨てた。

「お江どの……」

「うるさい」

叱りつけられて、佐平次はうなだれた。

これまでのお江とはちがう。それは、いかなる人も、人のこころも言葉も寄せつけぬ冷やかな叱責の声であった。

「よいか。生きたいとおもうなら、二度と、わたしのいいつけにそむくな。かくなっては、この小屋もあぶない。傷も癒えかけているゆえ、わたしの助けがなくとも歩いてもらわねばならぬ。これから、すぐに、此処を発つ。わかったな、佐平次どの」

「う……」
「わかったか、と、訊いているのじゃ」
「わ、わかった」
「もう一度いうぞ。二度と、わたしのいいつけにそむくな」
「うむ……」
お江は身仕度を、素早くととのえた。
小屋の、土中に埋もれた部分の一隅を押すと、石の上から粘土でぬりこめられているものとばかり見えた一メートル四方ほどの箇所が、ぱっくりと口をひらいたのに、佐平次は瞠目した。
「さ、わたしについておいで」
お江は、こういって、その穴の中へ這い込んで行った。
「先刻は、此処から、外へ出たのか？」
「そうじゃ」
「知らなんだ。このような仕掛けがあったとは……」
「躰は大丈夫かえ？」
「うむ。痛さも忘れたような……」
「ふ、ふふ……」
お江が、はじめて、ふくみ笑いをもらし、

「おもいもかけぬことが、つぎつぎに起こったゆえ……」
といった。
穴の中を這って進むとすぐに外へ出た。
崖の下の、此処も息苦しいまでに樹林におおわれた昼なお暗い場所で、這い出て見ると、武田方の忍び小屋は何処にも見えぬ。
「さ、その杖にすがり、ひとりで先へお行き。この森の中を、まっすぐに行けばよい」
「お江どのは？」
「これよりは、わたしの姿が見えなくなっても、決して案ずるな。わたしのいうままに、うごけばよい。よいか、あの忍び小屋が、敵の忍びに見つけられたとなると、これから、わたしたちが、真田安房守さまの岩櫃の城まで、逃げ切れるか、どうか……それも、こころもとなくなってきた」
「そ、そうか……」
「そうじゃ。もしも、死ぬることになれば、共に抱き合うて死のう」
こういわれたとき、向井佐平次は、何か胸につかえていたものが一度に消えたおもいがした。
「お江どのに抱かれてなら、死ねる気がする」
「あまえてはいかぬぞよ」
「なれど……」

「ふむ。わたしも、もう別に、この世に心残りはないが……」
こうつぶやいて、お江は笑った。何か物さびしげな笑いであった。

岩櫃の城

一

上州（群馬県）の岩櫃城は、現・群馬県吾妻郡吾妻町にある。

国鉄・上越線の渋川から、吾妻の高原を西へ向かう吾妻線に乗り換え、約三十分で〔郷原駅〕へ到着する。

郷原駅で下車すれば、岩櫃城址が目の前に見える。

吾妻川に沿って西へすすむ道路の北から西側にかけて、屏風のような岩壁がそそり立っている。

これが岩櫃山で、海抜は七八八メートル。城は、その中腹に築かれてあった。

岩櫃城から吾妻渓谷をへだてて東南に上州三山の一、榛名山がそびえている。

そういえば、岩櫃城のことを、

「関東三名城の一」

などと、よぶ人もいる。

この城が、いつごろ築かれたものか、よくわかっていない。

建久六年（西暦一一九五年）に、藤原秀郷の後裔だと称する吾妻太郎行盛という豪族が、この地に居館を構え、その子孫が、やがて城を築いたという説もある。

その後。戦国時代に入ると、このあたりは、管領・上杉家の勢力下にあったが、管領家の衰退により、諸方の豪族が、それぞれに勢力を争いはじめた。

そのうちに、日本の諸国の小勢力が、いくつかの大勢力にふくみこまれて行き、ついに、上州へは甲斐の武田信玄が進出しはじめる。

そのころ、岩櫃城主は、吾妻行盛の子孫だといわれる斎藤越前守憲広という武将であったが、

「岩櫃は、ぜひとも、早いうちに、こなたの手に入れておきたい」

という武田信玄の意向で、当時、すでに武田家に臣従していた真田幸隆が、岩櫃城を攻め落としたのであった。

幸隆は、真田安房守昌幸の父である。

こうして、いったんは武田方のものとなった岩櫃城は、三年後に、ふたたび斎藤憲広に奪い返されている。

憲広が、越後の上杉謙信に応援をもとめたのだ。

永禄のそのころにおける上杉謙信と武田信玄の角逐は、あの〔川中島の決戦〕を見てもわかるように熾烈をきわめてい、したがって信州・上州から関東にかけて、この両勢力に参加していた武将や豪族たちが、境界も領地も、定かにはわからぬほどに点在し、接近し合い、

競い合っていたのである。

たとえば、岩櫃城一つにしても、上杉と武田が、この拠点を、何としても自分の物にしたいという執念があり、その代表選手として、斎藤・真田の両軍が、あくこともなく争奪戦を反復した。

斎藤憲広が死んでのちも、その子の基国が、越後の上杉軍の応援を得て、岩櫃へ攻めかけて来たし、真田幸隆も武田の援軍と共に、これを迎撃するということで、

「それはもう、あのころの父上の御顔は、人のものとはおもわれなんだわい。わしは、そのころ、源五郎というて十四、五歳でな。早くから親の手もとをはなれ、古府中（甲府）の御屋形の小姓をつとめていたが……一度か二度、父上が古府中へあらわれたこともあって、その御顔を見たときは、さすがに強情なわしも、おぼえず、泪をこぼしてしもうた」

と、のちになって、真田昌幸が述懐している。

つまり、それほどに絶え間もない連戦の苦労が烈しく、真田幸隆の顔貌が、幽鬼のように見えたというのだ。

真田昌幸が、少年のころ、古府中の武田信玄のもとで暮らしたのは、父が三男の昌幸を〔人質〕として、信玄にさし出したのである。

「われらが、いま、こうしてあるのは、すべて父上のおかげをこうむっているのじゃ。父上のなしとげられたことにくらぶれば、わしのしたことなどは、子供が玩具でもいじりまわして来たようなものよ」

とも、昌幸は語っている。

真田幸隆が、武田信玄のために……ということは、小勢力の自家を存続させるため、日夜、いかに辛酸をなめつくしたかを、昌幸は、

「一日たりとも忘れたことがない」

と、いう。

その父・幸隆は、八年前に亡くなっている。

幸隆が、

「このお人こそ……」

と、深い信頼を寄せ、身を挺して忠節をつくしてきた武田信玄が、待望の上洛の日をひかえて急死した翌年に、幸隆も病歿したのであった。

信玄が、信州駒場の陣中で死んだとき、真田幸隆は落胆のあまり、七日六夜の間、食を口にしなかったといわれる。幸隆の歿年は六十二歳。

幸隆亡きのちは、長男・信綱が真田家の当主となったのだが、その翌年に、三河・長篠の大戦が起こり、信綱は戦死した。信綱ばかりか二男の昌輝まで戦死してしまった。

そこで、三男の昌幸が当主となったのである。

昌幸は、三男でもあるし、まさかに家をつぐとはおもえなかったので、武田信玄が、甲斐の名家で、その名が絶えていた〔武藤〕の姓を、

「そちにあたえよう」

と、いい、昌幸はこれをうけて〔武藤喜兵衛〕と名乗っていた。
だが、父も二人の兄も亡くなったのでは、真田家をつぐものがいない。
そこで、武田勝頼は、武藤喜兵衛を真田家にもどし、
〔上州守護〕
を命じたのである。
ところで……。
武田勝頼を、上州岩櫃へ迎えるため、先発した真田昌幸について、つぎのような挿話が残っている。
昌幸が家族をつれ、ようやくに草津街道へかかると、兵糧もなくなってしまい、飢渇して歩くこともできなくなった。そこへ、湯本・鎌原などの吾妻武士が迎えにあらわれたので、一命をとりとめたとか、途中で野武士の群れに襲われ、九死に一生を得たとか……それに類したものだが、いずれも信ずるに足らぬ。
織田軍が高遠城を落とし、諏訪から古府中へ進出する以前においては、甲斐と上州との交通は信玄以来の便利がたもたれていたといってよい。
真田昌幸は、岩櫃へ帰るや、すぐさま、岩櫃山の南麓・古谷に、武田勝頼夫妻のための居館を造りはじめ、諸方の砦や出城をかため、籠城の準備にかかった。
そこへ、勝頼の死が報ぜられた。
この知らせを、先ず、岩櫃へもたらしたのは、真田家につかえる忍びの者・壺谷又五郎で

あった。

武田勝頼が天目山のふもとで自決したのは、三月十日であったが、早くも十五日の日暮れに、又五郎は岩櫃へ駆けつけて来た。

又五郎は、古府中の附近にいて、勝頼の首がとどけられたのを知り、すぐさま、笛吹川をさかのぼり、雁坂峠を越えて、武州の秩父へ抜けた。

それから、関東平野の北端を横切り、前橋から岩櫃へ入って来たのである。

これをきいて、真田昌幸は、

「なんと、なんと……」

あきれ果てて、しばらくは物もいわなかったけれども、ややあって、

「おかげにて、肩の荷が下りたようなものじゃが……」

何やら、複雑なおもいのこもった笑いをうかべ、

「御当代（勝頼）も、若いころは、こうではなかったが……」

とつぶやいた。

二

そこは、岩櫃城内の〔中城〕とよばれる曲輪の中の、城主の居館であった。

当時の、しかも真田安房守昌幸のような武将の居館といえば、いわゆる後世の大名の〔御殿〕などという華麗な形象からは程遠いものだった。

むしろ、大きな〔民家〕へ、戦闘の場合の防禦をほどこしたものといったほうがよいだろう。

構築は、がっしりとしていて、中城曲輪の中の一段高いところにもうけられた居館の周囲にも空濠がめぐっている。

〔二の丸〕と〔本丸〕は、中城曲輪の西北に屹立する山上に構えられ、いざ、敵が攻めかけて来るとなれば、城主は〔本丸〕へ入って指揮をとるのである。

いま、真田昌幸が壺谷又五郎と語り合っているところは、居館内の〔地炉ノ間〕と称する五坪ほどの板敷きの間であった。

大きく切った囲炉裏を前にして、昌幸は小さな躰を屈めている。

とても、三十六歳の精悍な武将とはおもえぬ。その姿は五十にも六十にも見えた。

壺谷又五郎は、すこし、はなれたところにすわっていて、ひとりで酒をのんでいる。

〔地炉ノ間〕には、二人きりであったが、この態を他国の大名や武将が見たら、

（なんということだ……？）

おそらく、理解ができかねたのではないだろうか。

壺谷又五郎は〔忍びの者〕であって、つまり、間諜である。

間諜は、あくまでも夜の闇の底に潜み隠れ、敵を探り、敵を討つ。

たとえ彼らが、明るい白昼の陽光の中を歩んでいたとしても、

「闇に溶けこんでいなくてはならぬ」

のである。

この仕事は、いうまでもなく常人の目には、

「卑しいもの……」

と、されていた。

単なる密事ではない。ときには味方さえも憚り、肉親をも欺かねばならぬからだ。

ゆえに、壺谷又五郎のような一介の忍びの者が、城主の前へすわりこみ、勝手に、ひとりで酒をのんでいるなどという情景は、まことに奇異なものだといわねばならない。

これは昌幸が酒を取り寄せておいて、二人きりになってから、又五郎へ、

「又五よ。ひとりでのめ。のみながら語れ」

と、いったのである。

さすがに昌幸も、他の家来の前では、こうした振る舞いはせぬ。

もっとも、それは又五郎にかぎったことではない。重臣たちであっても、主の前で、ひとり、酒をのみながら語ることなど、ゆるされるはずがない。

こうした真田昌幸の、壺谷又五郎への振る舞いは、死を賭してはたらきぬき、貴重な報告をたずさえて帰還してくれた者への、やさしい労りから出たものであった。

天目山における武田勝頼一行の滅亡について、又五郎は、かなりくわしい報告をもって来た。

のみながら、又五郎は語っている。

「ふむ、ふむ……」
と、うなずきながら聞き入っているかとおもうと、
急に、真田昌幸は手をあげて、
「待て」
又五郎を制し、しばらく沈思したのちに、
「それで……？」
と、うながす。
そのうちに、炉の前の熊の皮の上へ、昌幸は身を横たえてしまい、又五郎が語り終えたとき、嘆息をもらし、
「樋口下総守が、御当代に従って、共に腹掻っ切って死んだこと。間ちがいはないな？」
重苦しい声で、念を入れてよこした。
「はい」
又五郎のこたえは、きっぱりとしたものであった。
「そこまで、ついて行かずともよいに……」
昌幸が、軽く舌打ちをもらし、
「下総守は正直者ゆえ、どうしても、そうなってしまうのだ」
ぎょろりと眼をあげた昌幸が、だまっている又五郎へ、
「な……？」

返答をうながした。
又五郎は黙念としている。
返事の仕様に困る様子が、ありありと見えた。
この主の前では又五郎も、いっさいの警戒をせずにすむ。
「な……ちがうか？」
「……」
ともすれば、苦笑が浮いて出て来そうなのだ。又五郎は、それを堪えている。
「久野はさておき……」
いいさして昌幸が、また、舌打ちをした。
久野は、昌幸の妻〔山手殿〕の妹で、樋口下総守鑑久の妻である。
だから下総守は、昌幸にとって、〔義弟〕にあたるわけだ。
「角兵衛が可哀相に、な」
「はい」
これには又五郎も、こたえて見せた。
角兵衛は、下総守・久野夫妻の、ただ一人の男子である。
十二歳になる角兵衛は母・久野と共に、武田勝頼に従って甲州からこの岩櫃へあらわれるはずの父・下総守鑑久を待っている。
いまのところ、天目山の武田勝頼自刃の報をもたらしたのは壺谷又五郎以外に、だれもい

ない。

又五郎の報告を聞き取ったのは、いまのところ、真田昌幸のみである。

岩櫃へもどって来た又五郎を見た家来たちは、

「又五郎が甲斐から帰ったぞ」

と、いい合い、これを重臣たちへ知らせた者もないではない。だれもが、甲斐の国の情況を知りたがっている。

「あれほどに念を入れて、御当代（勝頼）に申しあげたのだ。間ちがいなく、岩櫃へまいられることとおもうていたぞ。それにしても小山田越前（信茂）ともあろうものが、何故、横合いから口を出した。小山田の城へ入ったところで、どうにもなるわけのものではない。それを知らぬ越前では……」

いいさした昌幸が半身を起こし、

「さては……」

と、いった。

「さては、小山田越前が織田方へ通じ、御当代を謀ったのであろう」

壺谷又五郎は、こたえぬ。

そこまで、たしかめたわけではないからである。

「こうなると、いずれもが、こころ弱くなり、あらぬところへ我が身を運んでしまうものじゃ。いやはや、敗け戦とは仕方がないものよ」

真田昌幸は、こういって立ちあがった。
「又五郎。夜ふけに、いま一度、此処へ来てくれい」
「は……」
「ともあれ、おれは、嫌な役目を果たしてまいらねばならぬ」
「御苦労にござります」
「察してくれい、又五よ」
昌幸が、はじめて苦笑をうかべた。

三

〔地炉ノ間〕を出た真田昌幸は、大廊下の隅にひかえていた侍臣の大久保弥兵衛に、
「三十郎をよんでおけ」
と、出て来たばかりの地炉ノ間を顎で指し、奥へ入って行った。
三十郎とは、矢沢但馬守頼康の若名である。
矢沢頼康は、昌幸の従弟にあたり、岩櫃城の城代をつとめていた。
そして彼の父・矢沢薩摩守頼綱は、上州・沼田城の城代をつとめている。
真田昌幸にとって矢沢頼綱は〔叔父〕にあたる。すなわち亡父・幸隆の実弟であった。
このように血を分けた親族でもあり、事実、昌幸にとって矢沢父子は、
「たのむに足る……」

人物であった。

現在、真田昌幸は、上州の岩櫃・沼田の二城と、信州の砥石城を自分の城にしている。

この三つのうちの、どれが、

（わしの本城か……？）

と、おもうとき、

（まだ、まだ、物足らぬ）

真田安房守昌幸は、三城へは、いずれも城代を置き、これをまもらしめていた。

昌幸自身は、数年前から、

（あの地へ、本城を築こう）

と、熱望している場所があった。

そのことは、武田勝頼にも願い出ていたのだが、許可を得ぬままに、主家は滅亡してしまったのである。

いまのところ、昌幸の妻子も岩櫃にいる。

これは、いうまでもなく、武田勝頼を迎え、織田・徳川両軍の進攻にそなえてのことであったから、先ず、岩櫃が、真田昌幸の〔本城〕ということになろう。

さて……。

昌幸は、いま、義妹でもあり、天目山で死んだ樋口下総守の妻でもある久野と角兵衛母子のいる部屋へ向かいつつある。

暗い小廊下をいくつも曲がって、昌幸は、その部屋の前へ立ち、板戸を開けた。
次ノ間にひかえていた侍女が二人、あわてて、昌幸を迎え入れた。二人とも甲州から久野母子につきそって来た女たちである。
昌幸は、奥ノ間にいる久野の耳へ、わざと聞こえるような声で二人の侍女に、こういった。
「御当代は、お亡くなりあそばしたぞ。武田家は、ほろびたのだ」
侍女たちは顔を見合わせ、青ざめて、声もなく身を竦ませた。
それへ、昌幸が、
「外に出ていよ。だれも入れてはならぬ」
と、いった。
「は……」
「よいか。束の間のことだ」
「は、はい」
武田勝頼が死んだとなれば、これにつき従っているはずの樋口下総守にも異変があったはずだ。そのことを昌幸が久野に告げに来た、と、侍女たちにもわかったらしい。
侍女たちが出て行き、昌幸が、奥ノ間へ入ろうとするときに、奥ノ間で泣き声が起こった。
久野である。
真田昌幸は顔を顰めたが、やむを得ないといった表情になり、
「聞いたか……」

声をかけてから、襖を開け、奥ノ間へ入って行った。
すぐに、襖は閉ざされた。
このとき、樋口下総守の遺子となった角兵衛は、奥ノ間にいなかった。
十二歳の角兵衛は、昌幸の次男・源二郎信繁の部屋へ遊びに出かけていたのだ。
閉ざされた襖の向こうから、しばらくは、久野の歔泣が洩れてきた。
安房守昌幸が低い声で、何かいいかけている。
そのうちに……。
久野の泣き声に、妙な音律が加わってきた。
絶え入りそうでいて、何やら甘やかな、聞きようによっては男女が忍び逢うてでもいるかのような……つまり、そうした泣き声に変わりつつある。
昌幸の声にも、多少の変化があらわれてきたようであった。
そのとき、侍女のひとりが板戸を開けて、次ノ間へ入り、緊迫した口調で、
「山手の御方さまの、おこしにござります」
奥ノ間へ、声をかけた。
真田昌幸が、あわてて奥ノ間から飛び出して来た。
昌幸の満面に、何故か、血がのぼっている。
奥ノ間の、久野の泣き声がはたと熄んだ。
開けたままの廊下へ、白い影が浮いて出た。

昌幸の妻・山手殿であった。
背丈の高い、反身の、細い躰に白の裲襠をまとい、山手殿は侍女二人を従えて、突如、あらわれたのだ。
「ここへ、何しにわせられまいた？」
夫・昌幸をとがめる口調なのである。
切れ長の両眼が廊下の闇に煌めき、引きむすんだ唇が、ほとんどひらかぬと見えていながら声を発する。
隆く細い鼻梁が夫を威圧するかのようであった。
傍へ来ると、小柄な昌幸が妻を見上げるかたちになる。
「御当代が、お亡くなりあそばしたのだ。武田の御家は、ほろびたのだ」
と、昌幸がいきなりいった。ほとんど叫ぶがごとくにいった。
さすがに、山手殿も衝撃をうけたらしい。一瞬、はっとなったが、すぐさま、屹となり、
「そのような大事を、わが妻よりも先ず、妻の妹に知らされまいたのか」
「おお……」
昌幸が生唾をのみこみ、
「下総守鑑久も、御当代に従い、腹切って死んだゆえ……なればこそ、先ず、久野に知らせた」
山手殿を突き退けるようにして廊下へ飛び出した昌幸は、侍女たちへ、

「すぐさま、せがれどもに地炉ノ間へまいるよう、つたえておけ」
いうや、走るように廊下を去った。
山手殿は見送りもせず、次ノ間へ入った。
「これ……これ、妹」
「はい」
やむを得ぬというかたちで、奥ノ間から久野があらわれ、
「御方さま。奥へ……」
「入ってもよいのか？」
「は……？」
「入ってもよいのか、と、訊いている」
山手殿の唇が、冷笑にゆがんでいた。
「男の残り香が、生ぐさく、ただようていよう」
こういわれて、久野は面を伏せた。
侍女たちは廊下にいて、押し黙っている。
また、久野が、か細く泣きはじめた。

この二人の女は、実の姉妹であった。
父は、いまも京の都に在り、天皇の側ちかくつかえている侍従・今出川晴季である。

今出川氏は、閑院家の分流であって、今出川兼季の代に、兼季が菊を好み、京の今出川にある屋敷で菊を多く栽培したので、世俗に、

〔菊亭〕

と、称されている。

今出川晴季の名も何度か、この物語にあらわれようが、ときには〔菊亭晴季〕の名をもってよぶことがあるやも知れぬ。

山手殿の名は〔典子〕という。

妹の久野は、姉とちがって、小柄だが肉置きのゆたかな躰のもちぬしで、双眸はくろぐろと大きく、いつも潤みをたたえてい、唇は紅く、いくぶん受け口であった。鼻孔が正面から見て、はっきりと露呈されているし、鼻すじもふとく低い。

形態の上から見れば、まさしく、姉のほうが美女である。

このとき、山手殿は夫・昌幸の二歳下の三十四歳。久野は三十歳であった。この姉妹は、今出川晴季の正室の子ではなく、晴季がある官女に生ませた子だという。

今出川晴季には、このほかにも妾腹の、女が、かなりいる。

「妹、聞くがよい」

「はい……？」

「下総守どのが亡くなられたとあらば、そなたも角兵衛も、われらの殿のもとに暮らさずばなるまい」

「は……」
「それとも、京へもどるか？」
「あ……それは……」
「嫌か？」
「おゆるし下されますよう」
「ならば、聞くがよい」
いちいち、山手殿は勿体をつくろう。
威厳をくずさぬためにである。
「真田の家に在るからは、二度と、わたくしに隠し事などしてはなりませぬ」
「は、はい」
「隠し事じゃぞよ」
といったのが、低い声であったけれども、久野にとっては刃物を胃ノ腑へ突き込まれたほどにおもえた。
ひれ伏した久野へ、
「わかればよい、わかればよい」
こういって、山手殿は裲襠の裾をひるがえし、廊下へ出て行った。
山手殿の姿が見えなくなるまで、これを見送っていた久野の侍女が駆け入って来て、
「御方さま」

叫ぶや、久野の躰にひしと取りすがり、声を忍んで泣いた。
山手殿の侍女たちには、到底、ゆるされぬことであった。
久野も両腕に侍女を抱えるようにし、泣いている。
主従が、ともに武田家の滅亡を嘆き、ひいては樋口家の悲運を哀しむありさまに、得もいわれぬ親密さがただよっていた。
ややあって、久野も、さすがに気を取り直したらしい。
「角兵衛を、つれて来てたもれ」
と、いった。
侍女が出て行こうとしたとき、板戸が開き、角兵衛がもどって来た。十二歳の少年ともおもわれぬ体軀であった。真田昌幸とならんでも、おくれはとるまい。
「何事が起こりましたか、母上」
と、角兵衛が訊いた。
少年ながら、顎の張り出した堂々たる顔貌をしてい、濃い眉も、ふとくて隆い鼻も、尋常の面相ではない。

四

久野は、泪ながらに、武田家が滅亡したことと、樋口下総守が〔御当代様〕に従って自刃したことを、角兵衛に告げた。

すると、十二歳の角兵衛が、泣きもわめきもせず、こう、つぶやいた。
「おれがついていたら、父上も死なずにすんだものを、な……」
のちに、このことをきいて真田昌幸が、
「ほう……」
眼を細めて、よろこび、
「そうか、そうか……角兵衛め、いまに味な男になろうぞ。わしが目をかけてやる。ひとかどの男に仕立ててくれよう」
と、久野にいったそうである。
家来たちも、これを耳にはさんで、
「殿の申さるるとおりじゃ。角兵衛様は末おそろしい大将になられよう」
などと、評判し合ったという。
もっとも、以前から、樋口下総守の子・角兵衛についてのうわさが高かった。
これは、まだ、彼が九歳のときで、父母と共に古府中の城下に在ったころの事だが……。
ある日。角兵衛が、樋口家の家来二人につきそわれて城下外れの野道を歩いていたとき、彼方から、狂い馬が、こちらへ向かって暴走して来た。
「あっ……」
「若様、あぶのうござる」
家来たちは、いったん、角兵衛をつれて道端の木蔭へ隠れたが、角兵衛は子供ともおもわ

れぬちからで家来たちの腕を振り放し、野道へ走り出るや、折しも眼前にせまって来た狂い馬の前へ飛び出し、いきなり、両手をひろげて立ちふさがった。

馬は、少年を蹴殺そうとして、棹立ちになった。

転瞬、角兵衛の躰が鳥のように斜めに飛んだ。

馬がいななき、前足をおろした。

馬は、おろした足をふたたびあげ、角兵衛の方へ向きをかえ、蹴り直そうとした。

角兵衛の躰が低く沈んだ。

狂い馬は、またも蹴り損ねた。

その馬の前足が地におりたかと思えたとき、角兵衛が躍り込み、馬の前足を腕で払った。

腕のちからだけで払ったのだが、馬は、足が地につく直前であったためか、見事、地響きを打って横転したのである。

角兵衛が、のしかかるようにして狂い馬を押さえつけた。

これを目撃したものは、角兵衛につきそっていた二人の家来のみではない。

武田家の士が、他に数名、これを見ていたというから、角兵衛の為したことは事実にちがいない。

このことをきいたとき、母の久野の方は、にんまりとして、

（血は、あらそえぬものじゃ）

と、おもい、さも満足そうにうなずいた。

血はあらそえぬ、とは、何のことか……。

少年にしては、あまりにも意外な強力と大胆をしめした我が子を、久野は、この言葉で自分自身に納得させたことになる。

しかし、夫の樋口下総守鑑久は、なるほど武人にはちがいないが、武田家にあって、その〔武勇〕をうたわれたほどの人物ではない。

どちらかといえば温和な人柄であり、それが、癇癖の強い武田勝頼の側近く仕える身としては、かえって効果があり、勝頼の信任も厚かったようだ。

こうしたわけだから、久野が、

（血は、あらそえぬもの……）

と感じたのは、夫・下総守の血をひいているがゆえに、

（わが子も勇猛である）

ということにはならぬ。

では、いったい角兵衛は、だれの血をひいているというのであろうか……。

「角兵衛……これ、角兵衛……」

父の死を聞いて、少年の角兵衛が、さすがに黙念となっているのへ、

「父上が亡くなられたというに、そなたは悲しゅうないのか？」

と、久野が訊いた。

沈黙してはいるが、角兵衛のくろぐろとして巨きな両眼には、一滴の泪すら浮かんでいなかった。

「これ、角兵衛……」

いいさした久野へ、いきなり角兵衛が、

「母上。父上のことを悲しんだとて、物事は始まりませぬ」

と、いいはなった。

「ま……」

あきれて、久野が、

「情のこわい子じゃ」

「いいえ……」

角兵衛が、かぶりを振った。

「何といやる？」

「私は情にもろいのです。ですから、構えて強ういたしております」

「まあ……」

「ごめん下され」

角兵衛は座を立ち、廊下へ出た。

暗い廊下を、いくつも曲がって行くと、突き当たりに〔塩部屋〕がある。

〔塩部屋〕とは、一種の納戸のようなところで、五坪ほどの板敷きの間が二つ、ならんでい

た。

ここは、居館の奥向きの品物を収蔵する塩部屋で、台所に近い場所の塩部屋には、それ相応の品物や食糧がおさめられてあるのだ。

角兵衛は、塩部屋の中に入り、重い板戸を閉めた。

漆黒の闇が角兵衛の大きな躰を包みこんだ。

のっそりと、角兵衛は器物を置きならべた棚の下へ来て、うずくまった。

しばらくして、角兵衛の、すすり泣く声が闇をみたした。

父・樋口下総守鑑久は、古府中の屋敷に在ったとき、妻にも子にも、ほとんど口をきかぬような人であったが、角兵衛だけには、無言の微笑を惜しみなくあたえた。

痩せていて、背丈の高い下総守が、姿勢よく形を正して歩むを見るのが、

「おりゃ、美しゅうて好きであったわ」

と、のちに角兵衛が述懐している。

何やら、あわれみのこもった、あたたかくて、しみじみとした微笑を下総守は角兵衛にあたえてよこした。

あの、狂い馬を取って押さえたときのことだが、めずらしく下総守が、

「角兵衛。両手をひろげて、狂い馬の前へ立ちふさがったとき、恐ろしゅうはなかったか？」

と、問うた。

そのとき九歳の角兵衛が、
「間を置かず、急に、馬の前へ両手をひろげて立ちますと、馬は蹴らぬものです。馬は、決して手の下をくぐりぬけようとはいたしませぬ。上を飛ぶのです。なれど、急に目の前へ立ちふさがられては、飛ぶに飛べませぬ。そこで、足をとどめるのです」
と、こたえた。
武将の父には、このようなことをいわずとも知れていることであったが、
「さようか……」
下総守は、うれしげにうなずき、短刀一振を角兵衛にあたえたものだ。
このように凛々しくて、強力無双の角兵衛は、少年のうちから、武田家中で知らぬ者がないほど、その将来を有望視されていたのである。
真田昌幸が、
「下総殿は、頭をまるめて経文をよむがふさわしき人だ」
と、妻の山手殿に洩らし、
「さようなことを、めったに、おおせになるものではござりませぬ」
きびしく、たしなめられたことがあった。
「なれど、角兵衛という子があって、樋口の家も安泰というものだ。それでよし、それでよし」
山手殿の険しい視線をのがれて、座を立ちながら、真田昌幸は、そう独り言ちたという。

いずれにせよ、このときの樋口角兵衛政輝が後年になり、それこそ、おもいもかけなかった変貌をとげ、奇怪面妖な生涯を送ることになろうとは、だれが予測し得たろう……。

五

角兵衛が塩部屋を出て行ったころ、矢沢但馬守頼康が、城内へ駆けつけて来た。

岩櫃の城代・矢沢頼康の居館は、南の山裾にあった。

「殿。お召しにござるか」

と、地炉ノ間へ入って来た頼康に、昌幸が、

「急に、忙しいことになったぞ。御当代が亡くなられたとよ」

そして、いまは地炉ノ間の片隅にかしこまって控えている壺谷又五郎をかえり見て、

「又五よ。三十郎とせがれどもへ、いま一度、語り聞かせい」

と、いった。

「申しあげまする」

又五郎が、語りはじめた。

囲炉裏の中央の、熊の皮の上に昌幸が胡坐していい、矢沢頼康は、昌幸と囲炉裏をはさんで向かい合い、やや離れて正坐している。

昌幸の左側に二人の息子が正坐していた。

長男の源三郎信幸は十七歳。

二男・源二郎信繁（のちの幸村）は十六歳であった。

兄のほうが源三郎で、弟が源二郎という名のつけ方が、すこしく奇異に感じられる。

名をつけたのは父の昌幸であるが、何故、そのように名づけたか、それは昌幸のみがわきまえていることであった。

ただし、真田家中の人びとは、真田家では代々長男の夭逝が相次いだので昌幸が、

（自分の子は、そうはさせぬ）

と、縁起を気にし、長男に源三郎の名をあたえたということで、納得をしている。

ただし、

「そのとおり……」

だと、昌幸は一度も口にしたことがない。

長男・源三郎信幸は、まさしく、生母・山手殿のおもかげをつたえていた。

肩幅も胸幅もひろく逞しいのだが、背丈が高いので、衣服の上からは肩や胸の筋肉の厚味がさほどに感じられぬ。

切れ長の両眼や、ととのった鼻すじ、意志の堅固さをあらわす引きしまった口元など、生母そのものといってよい。

ただし、源三郎の双眸の光は、生母の烈しさ強さがなく、いつもあたたかい潤みをおびている。

源三郎の相貌の中で父・昌幸に似ているのは、ひろい額であった。その挙動や、重おもし

げな口ぶりは悠揚としていて、源三郎が幼童のころ、昌幸が、
「源三めは、鈍物よな」
吐き捨てるようにいったのを、侍臣のひとりが耳にしている。
さすがに、いまは、昌幸もそうしたことはいわぬ。資性のすぐれたところを、みとめたからであろう。
そのかわり、寡黙な長男を、
「源三め、父のわしにも肚の内をつかませまいとする。小癪なやつ……」
いつであったか、沼田城代の矢沢薩摩守頼綱にもらしたところ、矢沢頼綱は、主でもあり甥でもある真田昌幸を屹と見て、
「殿。おもいすごしをめさるな」
たしなめた。
昌幸も、この叔父には一目置いているところがあった。

ところで、二男の源二郎信繁だが……。
これはもう、父の昌幸を彷彿とさせる。
目鼻立ちが似ているというよりも、小柄な体軀をきびきびとうごかす態や、活力にみちた口ぶりや、何気もない仕ぐさが、
「殿そっくりじゃ」

などと、家来たちもいうのだ。

両眼は細く、いつも、たのしげな笑いをたたえてい、面だちはふっくりとしてい、躰つきも十六歳にしては肥えて見える。そうした容姿の特徴は、かなり父・昌幸のそれとかけはなれているといってよい。

それなのに、似ている。

だれが見ても、

「父子」

と、わかるのである。

では、源二郎の相貌の中に、山手殿との相似を見出すことができるかというと、

「できない」

のである。

山手殿は、源二郎に対し、ほとんど口をきかぬし、源二郎もまた、近づこうとしなかった。

この、一つちがいの兄弟が、樋口下総守の死を聞いたとき、顔を見合わせ、同時に、

「角兵衛が可哀相に……」

「角兵衛が……」

と、いった。

兄弟は、従弟にあたる樋口角兵衛を、実の弟に向ける愛の眼で見つめていたからであろう。

「角兵衛のことは、後でよい」
と、昌幸が、
「おりゃ、御当代を無事に、この岩櫃へお迎えすることができたならば、それなりに仕様を考えていたのだが、こうなっては万事終わった」
「はい」
矢沢頼康が、
「ともあれ、このことを、すぐに沼田へ知らせたく存じまするが……」
「いかさま」
「では、それがし、すぐさま手配りを……」
「待て。明朝でよい」
「なれど、殿……」
「明日の朝に、織田勢が上野の国へ攻め入って来るわけでもあるまい」
昌幸は笑った。
主家が、その領国を追われることを、昌幸は覚悟していたらしい。
だが、御当代の武田勝頼までが、むざむざ敵の大軍がなだれ込んで来る甲州に居残って、
（いのちをちぢめなさることはない）
と、考えていたのである。
その一事のみが狂った。

狂ったが、しかし、今度は武田家という〔主家〕のことに思い煩うことなく、万事に行動ができることになった。

けれども、そのことが、

（おれが家に益するか、どうか……？）

であった。

いずれにせよ、上信二州にかけては、その武勇と謀略と実力を天下に知られるようになった真田家ではあるが、この戦乱の時代に、孤立することはゆるされないのである。

「よう聞け、三十郎」

と、昌幸が矢沢頼康に、

「御当代は亡くなられたが、武田家中の人びとが、われらにたよって来ることも、いまのうちに考えておかねばなるまい」

「いかさま……」

矢沢但馬守頼康は、このとき、三十歳であった。

頼康の少年のころは、ちょうど、いまの樋口角兵衛そのものであった。

背丈も六尺におよぶ。源三郎信幸よりも、いささか高い。

背丈のみか、横幅もひろく厚いのである。

武田家と真田家の因縁は、まことに深い。

故武田信玄は、信州と上州の攻略の先鋒として、真田家を駆使したのだし、真田家もまた、武田家の戦力として上信二州に地盤を築くことを得たのであった。

ゆえに真田昌幸が、武田信玄によって甲斐の名家（武藤）の姓をあたえられたように、真田の親族が甲斐にはすくなくない。

たとえば……。

真田昌幸の長女で、源三郎・源二郎兄弟の姉にあたる〔村松どの〕は、この年の正月に、武田家の家臣小山田壱岐守へ嫁いでいる。

小山田壱岐守は、信州高遠城の攻防戦で討死をした小山田備中守の長男であって、信州・佐久郡の内山城をまもっていて、そこで敗戦を迎えたはずだ。

また、真田昌幸の、すぐ下の弟の真田信尹は、これも武田信玄の命によって、甲斐の名家・加津野氏をつぎ、

〔加津野市右衛門〕

と、称している。

しかし彼は、武田家滅亡後、ただちに真田姓へもどっているから、以後は真田隠岐守信尹の名をもってよびたい。

信尹は、早くから、武田家の将来に見きわめをつけていた。

信玄亡きのちの、勝頼を見て、

（これは、もはや、いかぬ……）

と、看た。

そこで信尹は、ひそかに、徳川家康と通じていて、このたびの織田・徳川両軍の甲州攻めには、家康のために、相当な暗躍をしていると見てよい。

そして真田昌幸も、そのことは充分に、わきまえているのである。

六

今年に入ってから、織田信長と徳川家康が、甲州攻略の準備を遺漏なくととのえつつあったことを、真田安房守昌幸は知悉している。

弟の信尹からも、何度か、密使が昌幸のもとへ駆けつけて来たものだ。

「兄上、もはや、御当代（勝頼）の救われる道はありませぬ。戦うちからが失せてなお、御当代は戦をなさろうとしておられる。兄上が常々申さるるごとく、戦とは負くるためにいたすのではござらぬ。勝つために……勝つというのぞみがあればこそ、戦うのでござる」

と、信尹は力説する。

力説されるまでもなく、昌幸は、

（わかっておるわ）

なのだが、

「そこで、兄上……」

と、弟・信尹が、いまのうちに、徳川家康に対し、ひそかに、

「好誼を通じておくがよろしいとおもわれます。それがしが取り持ちをつかまつる」

すすめてきたときには、昌幸もさすがに、おもい迷った。

信尹によると、徳川家康の武田家に対する心情には、一種、特別のものがあるそうな。

徳川家康は、永禄五年に織田信長と同盟をむすんで以来、約二十年にわたり、信長のために、

「忠節をつくしぬいてきた……」

のである。

尾張から美濃を席捲し、実りもゆたかな領国の経済力と、当時の日本諸国のうちで、もっとも交通のひらけた文明地帯を利した信長が、戦闘と建設との二輪を同時に押しすすめつつ、さらに近江へ進出し、天皇と将軍が存在する首都（京都）への道を切り拓いて行く間、家康は、その背後を守った。守りぬいた。

信長が京都を目ざし、天下の覇権をのぞんで進む背後から、ようやくに充実した戦力をととのえ終わった武田信玄が追って来る。

これを、悪戦苦闘のうちに喰いとめ、ふせぎつづけて来たのが徳川家康であった。

その辛さ、苦しさは、

「おそらく、筆にも口にもつくせなかったことであろう」

と、昌幸も察知している。

家康は、もっとも信頼し、嘱望していた長男・三郎信康をも、信長のために失っている。

十年前の元亀三年の十二月。

五十二歳の武田信玄は、三万余の大軍をひきいて東海地方にあらわれた。

怒濤のような侵攻に、そのときの家康は遠州・浜松の城へ押しつめられ、信玄は圧倒的に三方ヶ原へ進出して来た。

東海における徳川家康の勢力は、いくつかの支城や砦もろとも、武田の軍団に奪い取られ、切り裂かれ、粉ごなになっていたのだ。

だが、家康は三十一歳の血気を押さえかね、一万の兵をひきいて三方ヶ原へ打って出たのである。

信玄は、これを、

「待っていた」

とばかりに迎え撃った。

風と雪の中での激戦のうちに、徳川軍は敗北し、浜松城へ退却した。

そのときの徳川家康は、後年の彼ではない。

みずから槍をつかみ、馬を駆って血戦し、退却の折には、家来たちの後にふみとどまり、一時は武田勢に包囲され、危うかったほどだ。

そのころは、織田信長も苦闘の最中であった。

すでに信長は、京都と自分の本城・岐阜との間を貫通させ、京都の経営に乗り出していたけれども、姉川の戦闘で破った近江の浅井長政や越前の朝倉義景の蠢動にも備えなくてはな

らず、近畿や大和の大名・豪族たちもさわぎはじめてい、
「京をまもりぬくためには……」
寸時も手がはなせなかった。
「忍ばれよ、浜松の城へ立てこもり、凝と忍ばれよ」
信長は家康に、そういってよこした。
しかし、家康は、忍びかねて出撃をした。そして敗北した。
だが、この敗北は家康にとって、大きな実りをもたらした。
三河の国に徳川家康ありという意気地をつらぬき通したことによって、諸国の大名も、また家康の家来たちも、
「信ずるに足る大将」
として、家康の器量を見直したというのである。
さらに、おもいがけぬ幸運が、信長と家康を見舞った。
武田信玄が、急に発病し、年を越した翌年の春、信玄は軍団と共に甲斐へ帰る途中、信州の駒場で歿した。
信玄が、あと十年……いや五年の余命をたもっていたら、おそらく、日本の歴史は大きく変わっていたにちがいない。
信長や家康にとって、信玄の急死は、
「夢のような、すばらしい贈り物……」

であったろうが、それだけに武田家が受けた打撃の痛烈さは、昌幸の亡父・幸隆（ゆきたか）が悲歎のあまり、七日六夜の間、食を絶ったことを見てもわかる。

このように、精強無比の武田軍団に苦しめられつづけて来た徳川家康なのだが、

「ゆえにこそ、信玄の偉大さを、もっともよく、わきまえているのは自分である」

と、後年ものべているように、家康は信玄を、むしろ尊敬の念をもってながめていたらしい。

真田信尹によると、家康は、ほろびかけている武田家を、ひそかに好意の目で見まもっているようだ、と、いうのである。

「兄上を徳川家へ取り持ちすることなれば、それがしは……」

自信をもって工作を開始するが、いかがであろうか、と、この怜悧（れいり）な弟は、しきりに兄をさそった。

これに対して、昌幸は、はっきりとした返事をあたえていない。

あたえきれなかった。

なぜというなら、昌幸としては、どうあっても、

（御当代を捨て切れぬ……）

心境だったからである。

だが、武田勝頼をして、徳川家に屈せしめることはできない。

そうした外交の駆け引きが、もしも、勝頼にあったなら、武田家も、

（ここまで、押しつめられることはなかったろうに……）
なのである。
そこで、真田昌幸は、
（おれは、おれなりに……）
何とか、打開の工作をこころみようとした。
それは、小田原の北条家への打診であった。
北条家と武田家は、かつて、緊密な協力のもとに、越後の上杉謙信の関東進出を頑強に阻止して来た。
そして、北条家の先代・左京大夫氏政の実妹は、武田勝頼夫人なのである。
勢力の均衡がやぶれた現在、北条氏政は織田・徳川両軍に協力をしている。
けれども、北条氏政ならば、
（もし、御当代が甲斐の国を出て、おれの城へ入られたとき、武田の命運を絶やさぬための取りなしは、してくれるのではないか……）
と、昌幸はおもった。
この正月に、木曾義昌が武田家に叛き、織田信長へ内応したので、激怒した〔御当代様〕が出陣の命令を発したとき、昌幸は、
（いまこそ！）
と感じ、すぐさま、沼田城から武州・鉢形城主の北条氏邦のもとへ密使を送っておいた。

先ず、自分が、北条家の傘下へ加わりたい、と、申し送って見たのだ。
北条氏邦は、氏政の弟にあたり、かつて昌幸と交誼があった。
北条家の当主は、二年前から、氏政の長男・氏直となり、氏政は隠居の身であるが、依然、実権を握っている。
北条氏邦は、昌幸の密書を見たが、そのまま、返事をよこさぬ。
そして、武田勝頼が死んだ翌々日の日付をもって、
「……武田家も、かくなっては、まことに気の毒と存ずる。この上は、小田原へ忠節をつくされるように……」
と、密書を送ってよこした。
この密書は、壺谷又五郎が岩櫃へ到着した翌日の午後に、昌幸の手もとへ届けられた。
いずれ、北条氏政からの指示があったのだろうが、駆け引きは巧妙なものだ。
勝頼がいない真田家なら、
「何とかしよう」
と、いうのである。
北条氏政にしても、武田がほろびたのちは、何らかの形で、織田・徳川を向こうにまわさなくてはならぬ。
ことに、織田信長は甲州を平定したのち、あとは中国の毛利氏との対決を残すだけで、ほとんど、日本の天下は彼の手中につかみ取られたといってもよい。

その信長を相手に、北条氏政も戦うつもりはあるまいが、自分の主張を通すために、わが勢力圏内に有力な大名なり武将なりが一人でも多く参加してくれることは、まことに、ころ強いはずであった。

（それで、わしがほしいのか……）

真田昌幸は苦く笑って、

「かくなっては、どうにもならぬわ。何も彼も、振り出しにもどってしまった……」

吐き捨てるようにいった。

七

前夜おそくまで、矢沢頼康と密談をつづけた昌幸は、北条氏邦からの密書を持った使者が岩櫃城へ到着するまで、地炉ノ間で引きこもったまま、姿を見せなかった。

地炉ノ間の奥に、昌幸ひとりがねむる寝所があった。

そこで、昌幸はいつまでも身を横たえている。

朝餉も食べなかった。

昌幸は矢沢頼康に指令し、沼田と砥石の両城へ使者をさし向けた。

その使者たちは、今朝早く、岩櫃の城門を騎乗で走り出て行ったはずだ。

武田勝頼が自刃し、武田家が滅亡したとき、他国の属城や砦を守っていて甲斐にいなかった諸将がいる。

そのうちの何人かは、
「わしをたよってまいろう」
と、昌幸はいった。
そして、その人びとをすべて、
「引き受けるつもりである」
との決意をしめした昌幸は、沼田・砥石の城代へ、この旨を明確につたえるため、使者を出したのであった。
これが、手はじめなのである。
今後の真田家の進退について、昌幸には、まだ決しかねているところがある。
午後になって、北条氏邦の密書が届き、これを読み終えてから、昌幸は湯漬けを食べた。
それから寝所へもどり、また、身を横たえた。
寝所は畳敷きの、せまい部屋である。
地炉ノ間との境は重い板戸が二重に仕切られてい、寝所には明かり窓ひとつ無い。
まるで牢屋をおもわせる暗い部屋なのだ。
昌幸が平常の折にねむる寝所は他にある。
しかし、何か思案をめぐらすとき、昌幸は地炉ノ間へ引きこもってしまう。
これは、どうも亡き武田信玄の習慣を、いささか真似ているところがないでもない。
かつて、信玄が住み暮らしていた古府中（甲府）の本丸曲輪にあった居館は、四十五度の

傾斜をもつ大切妻屋根の建物であったが、その西側に、

〔御くつろげ所〕

と、よばれる信玄の居間があった。

真田昌幸の〔地炉ノ間〕は、これを真似たものだ。

そして〔御くつろげ所〕につづいて〔看経ノ間〕というのがあり、信玄はこの仏間に先祖の位牌をまつり、経文をよむ。

看経ノ間の奥に、信玄専用の厠がある。この便所は六坪であった。

畳敷きにして十二畳ものひろさをもつ便所に、信玄は朝と夜の二回、かならずといってよいほど入る。入って数時間は出て来ない。

領国の政治から、戦陣の研究、他国への外交など、いっさいの思案が便所の中でおこなわれる。

小姓をつとめていたころの昌幸は、信玄に可愛がられ、御くつろげ所までは入ったことがあるけれども、看経ノ間と厠だけは見たことがない。

単なる厠ではなかったろう。

畳も敷いてあれば、脇息も置いてあったろうし、机、筆紙の用意もおそらくととのえてあったにちがいない。

また、そこで信玄が、

「用を足した……」

ことも事実であったろう。
信玄の好む香がたきこめられ、物音ひとつせぬ厠の中で、ひとりきりになった武田信玄はどのような顔つきをしていたであろうか……。
すなわち、この厠が、真田昌幸の場合は狭い寝所に変わっているわけだ。
これは昌幸が、わが眼にたしかめたことではないけれども……。
信玄の厠の床下は、単なる床下ではなかったらしい。
「御くつろげ所の床下には、人が住んでおるのじゃ」
などと、武田の家臣たちは、ひそかに語り合っていたものだ。
（さもあろう）
と、真田昌幸は、いまも信じている。
信玄は、厠にいて、何かおもいついたり、火急に秘密の用事が起こったときなど、床下に絶えず詰めている忍びの者に合図をし、隠密の指令を発したというのだ。
その真似を、昌幸もしている。
現に……。
いま、北条氏邦の手紙を読み終え、しばらくは沈思していた真田昌幸が、寝所の一隅にあるふとい柱へ近寄って行く。
昌幸が屈み込み、柱の下方へ手をかけた。
すると、手をかけた柱の箇所が、からりと剝がれたのである。

柱の一箇所が、黒い穴をあけた。
その穴の中へ、昌幸が手に持った鉛の玉を一つ、しずかに落とし入れた。
鉛玉が落ちて行く間を置いて、微かに、穴の底が水音をたてたようである。
昌幸は、わずかの間、何か考えていたようだが、さらに一つ、鉛玉を落としこみ、柱の仕掛け穴を閉じた。
そしてまた、寝褥の上へ身を横たえた。
岩櫃城内・中城曲輪にある昌幸の居館が空濠にかこまれていることは、すでにのべた。
空濠の一部は、昌幸の地炉ノ間の床下へ通じてい、そこにのみ、いつも水がたたえられてある。
居館は中城曲輪の台地に建てられている。
したがって、地炉ノ間の床下は、同じ曲輪の台地の下の地面に位置していることになる。
昌幸が、床下の水へ落とした鉛玉の音を、だれかが聞いている。
昌幸が岩櫃に在城しているかぎり、昼夜の別なく、だれかが、何処かで、昌幸の合図を待っているのであった。
鉛玉が落ちる数によって、昌幸によびつけられる者の名がきまっている。いま、昌幸は、壺谷又五郎をよんだ。
又五郎ならば何も、こうして秘密めいた所業によってよびつけなくともよいのであるが、しかし、昌幸はむしろ、こうすることを、たのしんでいるかのようなところがあった。

昌幸夫人の山手殿が、眉をひそめて、
「殿には、いまもって、童癖がおぬけあそばさぬ」
といったことがある。
つまり、
「いつまでも、子供っぽい」
と、いったのだ。
その、山手殿の批判が、鉛玉を落とす昌幸に適切なのか、どうか……。
壺谷又五郎が地炉ノ間へあらわれる前に、だれかが、ことわりもなしに入って来たようだ。
昌幸にことわりもなく、地炉ノ間へ入れる者は、ただ一人しかいないはずであった。
二重の板戸の向こうに、人の気配を感じた昌幸が、半身を起こした。
「もし……」
板戸の向こうから、声がかかった。

八

その声が、
「父上……父上……」
と、よんでいる。
それは、まさに、地炉ノ間へ無断で入ることを昌幸がゆるした者の声であった。

「いま、行く」
昌幸はこたえ、二重の板戸を開け、地炉ノ間へ出て行った。
奥庭に面した板戸は閉じられてあったが、明かり窓から春の夕暮れの光が、淡く射しこんでいる。
ちろちろと火が燃えている炉の向こうに昌幸の二男・源二郎信繁（げんじろうのぶしげ）がすわっていた。
源二郎は、ふところから二片の丸い餅（もち）を出し、炉の熱い灰に埋めた。
「もはや、日暮れか……」
「父上。いささか、おもいついたことがあります」
「お前が、か？」
「はい」
十六歳の二男が、もっともらしい顔つきで、大人のような口をきくのは、めずらしいことではない。
「何を、おもいついた？」
「織田信長に……」
いいさして源二郎が、笑いをふくんだ眼を向け、
「信長に、馬一匹、とどけて見てはいかが？」
と、いった。
「馬を、な……」

真田昌幸から贈られた馬を、織田信長が受け取るか、どうか……。
受け取ったとして、そのときの反応はどうか、先ず、
「ためされて見ては、いかが？」
と、少年の二男が、謀略に長けている壮年の父へすすめているのである。
「ふうむ……」
昌幸もまた、源二郎に対しては、子供のくせに何をいうのか、という態度を決して見せぬ。
うれしげに、たのもしげに源二郎をながめ、またしても、
「ふうむ……」
うなずいて見せるのである。
「馬、一匹でよいのか？」
「さよう。そのほうが却って、信長のこころを計ることができるでありましょう」
「ふうむ……」
「いかが？」
灰の中の餅を手指でさぐりつつ、源二郎が、上眼づかいにちらりと父の反応をうかがった。
ひとかどの軍師を気取っているようなところもあって、人によっては「小癪な……」と看るだろうが、昌幸はむしろ、こうしたときの源二郎を微笑ましげに感ずる。
何しろ、生まれたときから、
「目に入れて痛うない……」

ほどに可愛がって来た二男なのだ。
あまりに昌幸が溺愛するものだから、これを見かねた矢沢薩摩守頼綱が、
「源二郎様の御為にならぬ」
といい、八歳のとき、強引に手もとへ引き取り、十二歳になるまで、昌幸へ返さなかったことがある。
真田家の重臣であり、自分の叔父でもある矢沢頼綱に、昌幸は一目も二目も置いていた。
「まさに……」
昌幸は、素直に、矢沢頼綱の言をいれたということだ。
源二郎は、よほどに、頼綱からきびしく育てられたらしい。
源二郎が十歳になると、早くも槍を持たせ、馬へ乗せ、頼綱みずからが馬術と刀槍の術を教えたといわれる。
頼綱の槍に叩きのめされ、血だらけとなった源二郎が、馬から落ちることなどは数え切れぬほどで、矢沢の家来たちが、
「見てはおられぬ」
顔をそむけるほどであったと、昌幸は、のちになって聞いた。
父のもとへ帰って来た源二郎の口からではない。
源二郎は、そうしたことを一言も洩らさぬ。
源二郎が手もとへ帰って来ると、昌幸はまた、臆面もなく可愛がりはじめた。

しかし、矢沢頼綱は、これを耳にしても、
「かまわぬ。これよりは、御当代がいかに源二郎様をあつかおうとも、悪しゅうはならぬようにしておいたわ」
と、自信ありげに笑ったそうな。
昌幸があまりに源二郎を溺愛することで、山手殿との間に、争いが絶えなかった。
山手殿が愛する源三郎信幸に対して、なるほど昌幸は長男としてのあつかいをくずさぬが、そもそも、この二人の息子を見る眼ざしがちがう。あたえる言葉も声も、はっきりとちがうのである。
長男へ向ける威厳は、二男に対して、
「とろけるような……」
笑顔に変わってしまう。
だからといって、源三郎へ冷酷なのではない。ないが、父性のあたたかさを露呈したことは、ほとんどないといってよい。昌幸は長男に対し、威厳をしめすと同時に、何となく面映ゆいような、場都合がわるいような表情を見せることもあった。いずれにせよ源三郎の養育について、昌幸はむかしから無関心のようである。
源三郎のほうは十二歳のときから、矢沢頼綱が手もとへあずかった。
そのころ、源二郎もまだ頼綱の手もとにいて、この兄弟は一年ほど、共に〔大叔父〕のもとで暮らしたことになり、源二郎信繁が父の手もとへ帰った二年後に、源三郎も帰って来た

のである。

矢沢薩摩守頼綱が、甥であり主人でもある真田昌幸の二人の男子へ、どのような〔教育〕をあたえたものか……。

それは、この長い物語の進行につれて、源三郎・源二郎兄弟がしめす言動に、自ずとあらわれて来よう。

源二郎が、灰の中でふくれあがった餅を引き出し、灰をはらってから、一つを昌幸へさし出した。

「うむ……」

うなずいて、その餅を昌幸が口中へ入れ、両眼を細め、

「うまい」

といった。

「今朝から、何も、お口へ入れぬとか……」

「よう気づいてくれた。うまい」

「父上」

「うむ？」

「馬一匹を……」

「わかった。だれが信長へとどけるのだ？」

と、今度は昌幸が真面目顔で、源二郎に問いかけるではないか。
「但馬殿です」
断定的に、源二郎がこたえる。
矢沢頼綱の息・矢沢但馬守（三十郎）頼康は、この岩櫃城の城代をつとめ、昨夜もおそくまで昌幸と密談をかわしている。
「よし。三十郎に行ってもらおう。三十郎へ、つたえて来てくれ」
「はい。では……」
「あの、な……一刻ほどのちに、此処へまいるようにつたえよ」
「心得まいた」
「角は、どうしている？」
樋口角兵衛のことだ。
「今朝は、兄上と共に、馬を責めておりまいた。元気のように見うけまいた」
「ふうん……」
長男のことにふれると、昌幸は、強いて無関心を装うようなところが、
「ないとはいえぬ……」
のである。
源二郎信繁が出て行って間もなく、影のように、壺谷又五郎が地炉ノ間へあらわれた。
音も気配もさせず、いつの間にか、昌幸の前へ両手をついていたのだ。

源二郎は、兄・源三郎の居室へおもむいた。
「兄上。行ってまいりました」
「どうであった？」
「父上は、腹が空いておられたようで、餅を塩部屋から……」
「口に入れられたか？」
「はい。むしゃむしゃと……」
「ふ……」
源三郎が苦笑をうかべ、
「それで、馬一匹のことは？」
「兄上のお言葉どおり、しかとつたえまいた」
「おれの言葉としてか？」
「いえ、私の……」
「それでよい。おぬしの申すことなら、父上は何でも聞く」
「はい」
と、源二郎は、いささかも悪びれぬ。
「で、使者は？」
「兄上のお言葉どおり、但馬殿、まいられます」
「む……それはよかった」

「兄上。これから先、天下がどうなりましょうか？」
「わからぬ。それ、矢沢の大叔父もいうておられたではないか、人の世の行く手は、一日先のこともわからぬもの、と……」
「さようでした」
「源二郎」
「はい」
「そろそろ、夕餉だ」
「いかにも」
「その前に、酒をのもう。塩部屋から盗んでまいれ」
「はい」

九

「疲れは、とれたか？」
と、真田昌幸が、地炉ノ間へあらわれた壺谷又五郎にいった。
又五郎は、この居館の東側の曲輪にある三棟の建物にいる。
この建物を、真田家の人びとは、
「草屋敷」
と、よんでいる。

〔草屋敷〕に住み暮らしているのは、いずれも真田家に仕える忍びの者たちであった。

草屋敷は、中城曲輪との境に築かれている高い土塁にぴたりと密着して建てられてい、草屋敷だけが一つの〔曲輪〕として成り立っている。

だが、その小さな曲輪は高い土塁と立木に囲まれてい、外部からは、そこに何が在るのか、ほとんどわからぬ。

それに、草屋敷の曲輪へは、家中の何者も、立ち入ることを禁じられているということだ。

草屋敷の中には、鍛冶場があるらしく、槌の音が外へきこえてくることもある。

草屋敷から中城曲輪への通路が何処にあるのか、それもよくわからぬ。

ともかく、その秘密の通路をぬけて、壺谷又五郎は主人の居館へ出入りをするにちがいなかった。

昌幸は、織田信長へ馬一匹を贈って見ることを又五郎へ語り、

「いかが、おもうな？」

「結構と存じます」

「さようか、よし」

「御屋形……」

又五郎は昌幸と二人きりになると、不遜というのではなく、親しみのこもった、遠慮のない口ぶりになる。それを昌幸は、とがめようともせぬ。

「なんじゃ？」

「実は、まだ仕残したことがござる。甲斐へもどって見たいと存じますが……」
「何を、仕残した？」
「私事と、申してもよいかと……」
「ほほう……」
昌幸が又五郎を凝視した。
昌幸の、くろい大きな双眸に光が加わると、これに向かい合っている者は、
「おのれの躰のちからが、おのれの眼から抜け出し、殿の眼の中へ吸い取られてしまうような……」
おもいがする、などという。
しかし壺谷又五郎は、たじろぎもせず、昌幸を見返している。
「わたくしごと、と、いうが……わしに申せぬことか？」
「お江を敵の中へ残しておいたまま、立ちもどりましたゆえ……」
「お江……おお、草屋敷のうちでも、手足の者という……」
「さよう」
「共に、もどったのではなかったのか」
「はい」
「ふうむ……」
にんまりと、真田昌幸が、

「又五、お江に手をつけたな。又五らしゅうもない、それで、おもい乱れておるのか」
「まさかに……」
又五郎の苦笑には、いささかの翳りもない。
「こりゃ、おれのおもいすごしか」
「まさに……」
「ともあれ、お江の安否を、さほどまでにたしかめたいと申すのだな」
「はい。草屋敷には欠くことのできぬ女でござる」
「それが、私事か。そうではあるまい」
「お江に、たのみごとをいたしてござる」
「何のたのみごとを？」
「いわでものことでござる」
「女のことか？」
「御屋形と又五郎とはちがいまする」
「申したな、こいつ……」
ずけずけと又五郎にいわれても、昌幸は怒らぬ。
怒らぬのみか、こうした又五郎との会話を、たのしむようなところさえ看てとれる。
「何かは知らぬが……よいとも、行け」
「かたじけのうござる」

「その前に、おれのたのみごとをすませておけ」
「何処(いずこ)へまいりますので？」
「甲斐へ……と申したいところだが、いま、何処におることか……」
「何者のもとへまいりますので？」
「隠岐守(おきのかみ)のもとへ、よ」
隠岐守信尹(のぶただ)は、真田昌幸の弟である。
「これは……」
と、壺谷又五郎が両手をつき、頭を下げた。
主人の弟を「何者……」などとよんだことに、そうした仕ぐさで謝意をあらわしたのである。
隠岐守信尹が、早くから徳川家康と通じていたことを、昌幸も知っている。
昌幸が新府の城を出て、岩櫃へ急行したとき、隠岐守信尹は、たしかまだ、古府中(こふちゅう)の屋敷にいたはずだ。
武田勝頼にしたがって、家臣の大半が新府へ移ってのち、古府中にはだれもいなくなってしまったかというと、そうではない。
古府中には、信玄以来の居館もあり、家臣たちの屋敷もあって、ここは武田家の城下町なのである。
それに城下の町民たちは、勝頼につき従い、すべてが新府へ移ったわけではなかった。

敏感な彼らは、城主に従って新府へ行けば、近いうちに、かならず織田・徳川の連合軍の攻撃をうけて、新しい城下町が戦火に包まれることを予感していた。

武田勝頼は令を発し、町民たちの移住を強制したが、結局は、古府中にいた町民の三分の一ほどが新府へ移住しただけだし、その中にも、家族を古府中へ残して置く者が多かったといわれる。

急造の城は何とか出来あがったけれども、新府はまだ、城下町としての体裁をととのえていなかった。

勝頼が、古府中から新府城へ移ったのは、去年の十二月二十四日で、年が明けると早くも、木曾義昌が謀叛を起こし、織田信長へ通じた。

新しい城下町の建設どころではなく、武田勝頼は出陣の準備に取りかからねばならなかった。

こうしたわけで、古府中に残っていた家臣たちも、すぐさま新府へ駆けつけることになったが、隠岐守信尹は尚も古府中に居残っていたようである。

隠岐守が勝頼の命令に服さなかったのかどうか……それとも、隠岐守へは古府中守備の指令があったものか、その辺のことはよくわからぬ。

しかし、真田昌幸が岩櫃から新府城へ駆けつけたとき、武田勝頼は、隠岐守について、

「不埒！」

とはいっていない。

家臣たちからも、昌幸は弟のことについて、ほとんど風評を聞かなかったし、またわざとこちらからも尋ねようとはしなかった。

（弟のことだ。よほどに、うまく立ちまわっているにちがいない）

と、昌幸はおもっていたのである。

だが、織田軍が古府中を占拠したとき、隠岐守信尹も家族や家来たちと共に姿を消していた。これは又五郎も見とどけたことなのである。

「いずれにせよ、隠岐守の居所を探り出し、おれの手紙を届けてもらいたい。いま、手紙を書く。又五も読め」

真田昌幸がいうと、

「かしこまった」

壺谷又五郎が立ちあがり、料紙や筆墨の用意をととのえはじめた。

十

真田昌幸が、弟・隠岐守信尹へあてた密書の大要は、つぎのようなものであった。

「……御当代が天目山（てんもくざん）において生害（しょうがい）なされたことは、すでに、おぬしの耳へも入っていることとおもう。

新府を出られて、われらがおもいもかけぬ小山田越前のすすめにより、岩殿の城へ入られることになっていたというが、どうしたことか……その辺の、くわしい事情は自分も知らぬ

が、いずれにせよ、織田勢に追いつめられ、天目山のふもとで生害なされた。御当代が天目山をのぞんですすまれたのは、でき得るかぎり、この岩櫃を目ざし、山越えに信濃へ出るおつもりではなかったかと、何やらおもわれてならぬ。なれば、ひとしお御当代があわれでならぬ。

自分は、御当代を岩櫃にお迎えしたところで、織田・徳川に何処までも刃向かうつもりはなかった。これは、おぬしもかねがね承知のことと存ずる。

息をつく間もなく、織田・徳川の軍勢が、はるばると岩櫃まで押し寄せて来るならば、御当代と共に、一戦して、手強いところを見せてくれるつもりであったが、先ず甲州を手におさめたからには、信長も家康も、いったんは兵を引きあげるにちがいなしと、自分はおもいきわめていた。

そこで、御当代をふくめて、真田家の行く末をはかるため、北条か徳川か、そのどちらかをたのむつもりでいたが、御当代が生害され、武田家がほろびたいまは、われらの家ひとつをまもりぬいて行けばよいので、いくらかは、こころも軽うなっている。

そこのところを、よくよく思案してもらいたい。

自分も、小田原（北条家）へは、すでに通じてあるが、これからの天下の成り行きをおもい看るに、小田原では、やはり、こころもとない。これが先々代（氏政の父・北条氏康）のころなれば、また別のことであるが、いまの小田原は腰もくだけかかり、たのむには足らぬとおもいはじめている。

おぬしが、徳川家とわれらの間を取り持ちしてくれることはありがたい。よしなにたのみ入る。

それにつけても、おぬしは、父祖以来の真田家が、どのようにして戦い、上信二州を必死にまもりぬいて来たことを忘れてはおらぬはず。そのことをよくよくわきまえた上で、万事を取りはからってもらいたい」

かなり、長い密書である。

壺谷又五郎は、これを読み下した。

ほんらいならば、このように重要な事柄を書面にするべきではない。

敵に密書を奪い取られることを考慮しておかなくてはならぬ。口頭から口頭へつたえるのが、もっともよいのだけれども、それには使者へ対する相手の信頼が、深く厚いものでなくてはならなかった。

又五郎は、これまでに二度ほど、昌幸の密使として、古府中の屋敷にいた隠岐守信尹をたずね、目通りをしているが、今度の場合は、やはり、昌幸の親書が必要だとおもった。

また、これを確実に隠岐守へ届ける自信が、壺谷又五郎にはある。

「それでな、又五よ」

「はい？」

「おれと隠岐守との、これからの連絡に遺漏なきよう、たのむぞ」

「心得まいた」

又五郎は、草屋敷にいる者のうち、四名ほどをつれて行かねばなるまいと、考えていた。
（事は、むずかしい……）
と、おもう。
武田家に対し、同情を寄せているという徳川家康はさておき、織田信長が、こころよく真田家の存在をゆるしてくれるであろうか。
これは、又五郎の推測だが、いま、昌幸が読ませてくれた密書の内容からもにおい出ているように、真田昌幸は、祖父や父が悪戦苦闘をくり返しながら、ようやく築きあげた現在の上信二州における地盤を、決して手放そうとはすまい。
織田信長が、それを、
「召し上げる」
というのなら、おそらく昌幸は全滅を覚悟の上で戦うにちがいないと、又五郎は看ているのだ。
織田信長は、かつて、またとない同盟者であり、その忠節によって何度も自身が危急をのがれ得たほどの徳川家康の長男・三郎信康を生害せしめたことがある。
三郎信康の妻徳姫は、信長のむすめである。
天正七年の夏……。
徳姫は、信康の母・築山殿（家康の妻）が、武田勝頼と通じ、三郎信康をひき入れ、
「謀叛のたくらみをしている」

と、父・信長へ密告をした。

これは徳姫と築山殿の間に、絶えず紛争があって、徳姫が、これを恨みにおもい、父に訴えたという説もあるが、信長に呼びつけられた家康の重臣・酒井忠次へ、

「それは、まことのことか？」

信長が尋ねたのに対し、酒井忠次は、

「まことでござります」

と、こたえてしまったので、徳川家康もいい逃れる余地がなくなった。

築山殿は、今川家の一族に生まれ、徳川家康の妻となった女だが、気位も高く、こころが乱れがちの女で、三郎信康を生んだのち、夫の家康とも仲がよくなく、別居して苦労していた。

築山殿と三郎信康夫妻は岡崎の城にいて家康は浜松城にいた。

そのときに、事件が起こったのである。

築山殿が武田家と密かに連絡をとっていたことについて、真田昌幸も、これをはっきりとは知らぬ。

ただ、

（あり得ること……）

と、考えていた。

しかし、三郎信康が、そうした陰謀に加担しているはずはない。

信長は、それも承知の上で、

「三郎信康殿の始末をつけるように」
きびしく、家康へいってよこした。
家康・信康父子もおどろいたが、もっとも驚愕したのは徳姫であったろう。
仲の悪い義母が、
「夫までも謀叛に引きこもうとしております。どうぞ、助けて下さいませ」
と、徳姫は父へ、あまえて、うったえ出たと見てよい。
父・信長が、たとえむすめの聟であろうとも、こうしたときには疑惑を疑惑のままとして、これを根こそぎ刈り除ってしまう直截的な決断をする、断固として処置をする人であることを、徳姫はわきまえていなかった。そこが女である。
それにしても酒井忠次は、自分の若主人が不利になるようなこたえを、何故にしてのけたのか。これも、わからぬ。
壺谷又五郎は、
「酒井忠次と三郎信康とは、事々に反目し忠次はこれを不快におもっていたのではないか……」
と、草屋敷の者たちに洩らしたことがある。
そして、もしそのときまで、武田信玄が生きていて、武田家の威風がおとろえていなかったなら、徳川家康は敢然と信長にそむき、信玄の傘下へ、
「馳せ参じたに相違ござらぬ」

又五郎が昌幸にそういったとき、真田昌幸は笑って、信玄が在世中ならば、信長もそのような難題を、

「家康にもちかけるものか……」

と、こたえたものだ。

徳川家康は、織田信長の激烈な気性を知りつくしている。我が子を生害せしめぬときは信長と戦う覚悟が要る。

ついに、家康は、自分がもっとも嘱望していた長男に、腹を切らせる決意をした。

その前に、家康は、妻の築山殿を、浜松に近い富塚の向かい谷というところへつれて行き、殺させた。

二十一歳の三郎信康は、岡崎から二股の城へ移され、

「おれは天地の神々に誓って、いささかのやましいところはない。これは、父上も御承知のことだ！」

凛々といいはなち、信康は腹を切った。

さすがの家康も、三郎信康の死後、しばらくはおもいなやんで、病床に就いたそうな。

徳姫は父のもとへ引き取られて行き、家康の信長へ対する忠勤は、依然、変わらなかった。

「辛抱強い男よ」

と、真田昌幸が呆れ顔に、

「おれなら、我が子を殺しはせぬ。ほろびてもよいわ、信長と一戦してくれる」

こういったとき、折しも側にいた山手殿に、
「その我が子とは源二郎がことでありましょうな。源三郎ではございますまい」
きめつけられて昌幸は、閉口の面持ちで立ちあがりつつ、
「似ている、似ている……」
つぶやいたというのだ。
おそらく、自分の妻が、徳川家康の悪妻・築山殿に、
「似ている……」
と、いったつもりなのであろうが、山手殿はその点、まだしも都育ちの大様なところがあり、昌幸のつぶやきの意味をうけとりかねていたようである。

十一

しばらくして、壺谷又五郎は草屋敷へもどって来た。
板屋根ではあるが、がっしりとした造りの三棟のうち、二棟には、女たちも住んでいるようだ。
岩櫃城の〔草屋敷〕は、真田家にとって本格的なものではない。
真田家の発祥の地である信州の〔真田の庄〕には、草屋敷というよりも、忍びの者たちのみでつくられた村があるのだ。そこが〔草屋敷〕の本拠といってよい。
岩櫃での又五郎は、女たちが住んでいない一棟にいる。

大きな土間は台所を兼ねてい、炉が切られてい、この土間を中心に、屋根裏と階下を合わせ、七つほどの部屋があった。

又五郎は自分の部屋へ入る前に、土間の炉端にいた若い男に、

「甚八と弥五兵衛をよんで来てくれ」

といった。

階下の奥にある又五郎の部屋は、板壁の三坪ほどのひろさで、ほとんど、道具も置いてなかった。

ねむり燈台に火がともっている。

何やら、よくわからぬが、獣の敷き皮が板敷きの上にあって、又五郎は、そこへ寝そべった。

間もなく、

「ごめん」

声をかけ、二人の男が入って来た。

一人は、姉山甚八といい、まだ三十前の、見るからに精悍な風貌の男である。

別の一人、奥村弥五兵衛は三十をこえていよう。ものやわらかな態度と、温和な顔貌をうしなわぬ落ち着いた男であった。

「ま、すわれ」

と、壺谷又五郎は酒瓶と木盃を出し、二人に酒をすすめた。

「いま、御屋形のもとへまいった」
「何か、御指図でも？」
「そうだ、弥五兵衛。隠岐守様へ使いをせねばならぬ。古府中を引きはらわれたのち隠岐守は何処におることか？」
「すでに、浜松へでも御立ち退きなされているものとおもわれます」
遠州・浜松は、徳川家康の城下である。
「うむ、浜松へは、おれが甚八と行くが、弥五兵衛には別のたのみがある」
「何事で？」
「先夜もはなしたとおり、お江のことよ。消息をたしかめてもらいたい」
「心得まいた」
「二人とも、いわずともわかっていようが……これよりは、いろいろと、むずかしゅうなる。御屋形は、おれの手をつかみしめられ、草の者が頼みだ、と、おおせられた」
弥五兵衛と甚八は、顔を見合わせた。
無言であったが、あきらかに、二人の面上へ感動と興奮の色がにじみ出ている。
真田家では忍びの者……つまり、間諜活動にたずさわる者たちのことを、
「草の者」
と、よんでいる。
確とした語源は、あきらかでない。

だが、一種の感覚として、のみこめるようなおもいもする。

〔草莽（そうもう）〕という言葉がある。

手もとにある辞書を引いて見ると、

一、草が茂っているところ、草原。

二、在野、民間。

とある。

また〔草莽の臣〕という言葉もある。

これは、官職につかず、民間にある人、と記してある。

およそ、こうした意味をふくんだ感じが、真田家の〔草の者〕にも〔草屋敷〕にもただよっている。

人の足に、わけもなく踏みにじられ、事もなげに刈り取られる草のようなもの、という意味ではない。すくなくとも、真田家においては……。

真田家の〔間諜網〕は、真田昌幸の父・幸隆（ゆきたか）の時代に拡張され、ととのえられたといわれる。

いうまでもない。幸隆が心服し、臣従した武田信玄の影響をうけたものであろう。

それまでは、近辺の勢力を争って、たがいに城を奪ったり奪われたりする、いわば戦国の世の小勢力同士の戦闘が反復されてい、謀略も間諜活動も、主人や家来たちがおこなって用が足りたのであった。

ところが、真田家のような小勢力が、しだいに、武田、上杉、織田などの大勢力にふくみこまれてゆき、大勢力と大勢力との激突によって、戦乱の波動が日本の首都である京の都を中心に煮つめられはじめた。

こうなると、真田家のような小勢力でも、単に、自分が臣従し、追従している大勢力のことのみへ眼を向けていたのではすまなくなってくる。

今度の、武田家の滅亡に際しても、真田昌幸のように、

「深く頼む……」

草の者たちをうごかし、京の都から近畿一帯、近江から尾張、東海地方にいたるまで、諸国の情勢を探り取らせていた武将たちには、危急に対応する術も、おのずから生まれて来るはずであった。

真田昌幸は、真田家の当主となって以来、ことに、間諜網の整備を痛感し、その完成を目ざし、ちからをそそいで来ている。

ことに、昌幸が壺谷又五郎を得てより、真田家の間諜網は、目に見えて充実しつつあった。

又五郎は、いわゆる〔伊那の忍び〕であって、信玄在世のころから武田家につかえていたのを、昌幸が武田勝頼に請うて、もらいうけたのである。

真田昌幸が、上州・沼田城を攻略したとき、勝頼は昌幸を沼田城代に任命し、

「のぞみがあれば、何なりと申せ」

と、いった。

父・信玄が東海地方や美濃の国まで伸張させた上洛の進軍路と基地を、織田や徳川の反撃により一つ一つ奪い返されつつあるときに、昌幸が、関東における要衝として武田家が絶対に必要とする上州・沼田城を確保したことに、勝頼は大満足であった。

さすがに、

「沼田をやろう」

とはいわなかったが、甲斐の国の内で、昌幸が好む領地を、

「あたえよう」

と、武田勝頼が、

「申せ、申せ」

しきりにいったとき、昌幸は、

「それなれば、いささか、のぞむところがござります」

「何じゃ？」

「人ひとり、それがしへ下しおかれますよう」

「人ひとり……だれじゃ？」

「壺谷又五郎と申す者でござる」

「つぼ、や……？」

と、勝頼はそのとき、しばらくの間、又五郎の名が脳裡に浮かばなかったらしい。

昌幸は、苦笑をもらした。

勝頼の代になると、総帥と間諜網とのむすびつきが、これほどに遊離していたのである。

「忍びの者の申すことなど……」

勝頼は、いつも、吐いて捨てるようにいった。

間諜の活動を、

「卑しきものである」

といった。

そして、勝頼自身の主観のみで軍団が戦わされた。

真田昌幸が、上州攻略以前から、武田家から借りうけていた壺谷又五郎の身柄を、あらためていただきたいと説明するや、

「わけもないこと。褒美はそれのみでよいのか？」

勝頼は、むしろにがにがしげにいい、

「埒もないことよ」

顔をしかめたものであった。

草の者

一

真田昌幸が、武田勝頼のために上州・沼田城を得て、その周辺を平定したとき、武田忍びとして昌幸の謀略に生命を吹き込んだのは、壺谷又五郎であった。

（おれがところの草の者を、又五郎のようにすぐれた男に束ねさせたいものだ）

と、昌幸はおもった。

しかし、そのときは胸におもうだけのことで、現実は、

（むずかしかろう）

あきらめていたのである。

武田信玄在世のころなら、又五郎をゆずり受けることなど、絶対に不可能であったし、間諜活動をあまり重く看ていない御当代（勝頼）にしても、

（まさかに、御承知はなさるまい）

と、昌幸は考えていた。

味方同士といっても、これは主家の間諜網と秘密をわきまえつくしている忍びの者が、臣

下の家へゆずりわたされたら、どういうことになるだろう。
戦乱の時代なのだ。
武田家の軍事的な秘密事項や間諜組織を又五郎によって移植した真田家が、武田家に叛くこともあり得る。
これは、常識として、願い出られるわけのものではない。
また、昌幸と又五郎が個人的な約束をし、又五郎自身の希望として真田家へ移したらどうか……。
これは、取りも直さず、又五郎が武田家に叛いたことになる。
忍びの者として、掟に叛いた壺谷又五郎を、他の〔武田忍び〕が黙って見のがすはずはなかった。
真田昌幸が、沼田周辺における北条氏の勢力を駆逐し、沼田入城を果たしたのは、一昨年の夏であった。
これで、一応は、壺谷又五郎の役目も終わったことだし、昌幸とても、沼田確保のために借り受けた又五郎なのだから、
「又五郎。おぬしは御当代に願い出て借り受けた男じゃ。そろそろ、古府中へもどらねばなるまい」
そういうと、
「さよう……」

しばらく考えていた又五郎が、
「まだ、これで終わったというわけでもございますまい」
「何と申す？」
「小田原（北条氏）も、このまま、おとなしゅう引き下がっておりますまいし……」
「それは、いかにも……」
いかにもそのとおりだが、これからの北条氏に対しては、昌幸が立ち向かわねばならぬことであった。
「おぬしに、居てもらいたいのは山々のことなのだが、なれど、いつまでも……」
「あ、いや。いますこし、居らせていただきましょう」
「かまわぬのか？」
「はい」
「なれど、御当代が……」
「御当代は……」
いいさして、又五郎が薄く笑い、
「それがしごときものを、おこころにとめておられましょうか」
と、いった。
そのときに、昌幸は、
（又五郎は、おれのことを好いていてくれる……）

直感したのである。

二人の呼吸が、このときに、はじめて、血の通うものとして合致したといえよう。

それにしても、武田忍びを束ねている柏木市兵衛高忠へは、

「なんと、ことわりをいうたらよい？」

昌幸が問うと、又五郎は、

「このままで、よろしゅうござる」

「まことに？」

「はい」

柏木市兵衛は、武田家の一部将にすぎぬが、武田家のためにはたらく忍びの者のすべてを統轄しているらしい。ただし市兵衛自身は忍びの者でもなければ、忍びの技術に精通しているわけでもない。市兵衛をこの役目に登用したのは、故・武田信玄であった。

昌幸も、古府中で二度ほど、柏木市兵衛に会ったことがある。

市兵衛高忠は五十をこえた、ものやわらかな人物で、昌幸の眼には、ごく平凡な部将としか映らなかったものだ。

「おぬしに居てもらうことは、おれも心強い。だが、後になって面倒が起きても困る」

「それがしが責任を負いまする」

「よいのか？」

「案ずるにもおよばぬのではないか、と、それがしは考えます」

「む……それならば、よし。いますこし、居てもらおうか」

又五郎が残っていてくれてよかった。

翌年……というのは、去年のことになるわけだが、昌幸にとって、おもいもかけぬ敵が突如、沼田城攻撃にあらわれた。

去年の三月のことである。

当時、岩櫃城にいた真田昌幸は、壺谷又五郎をともない、急ぎ、沼田へ入城し、この敵を迎え撃つことになった。

その折の又五郎の活躍ぶりがどうであったかということよりも、二人の胸と胸がぴたりと合い、なんとしても、

（又五郎を自分の物にしたい）

という決意を昌幸にかためさせたことにおいて、又五郎の残留がよい結果を生むことになったわけである。

二

上州・沼田城は、赤城山の北麓にある。

北面に細長く展開する盆地の村々を穀倉とするこの城は、片品、利根、薄根の三川が合流するところの丘陵に構えられていた。

このあたりは、長年にわたって沼田氏の支配下にあり、関東と越後、さらに東北地方や信

州とをむすぶ要衝であった。

上州の沼田氏の発祥については、いろいろな説があり、はっきりとしたことはわからぬ。

遠い先祖は、平清盛につかえていた大友経家だといわれている。

経家は平家ほろびてのち、源頼朝に従い上州へ移り、利根・勢多の二郡を支配したが、その子の実秀のときから、本拠とする利根郡・沼田の地名をとり〔沼田氏〕を称するようになった。

沼田氏十二代の沼田万鬼斎のころ、沼田の台上に新しい城が築かれ、蔵内城とよんだ。

これが、沼田城の前身である。

薄根川の断崖上に築かれた城は、まことに立派なもので、沼田氏が、この地においてつちかってきた実力をしめすものであった。

戦国時代は、そのころ、ようやくに終局を目ざしての、激烈な様相を見せてきはじめた。

沼田万鬼斎が、永禄二年に、越後の上杉謙信に服したのも、戦乱の苛烈をよそに、ひとり超然としてはいられなくなったからであろう。

七年後に、万鬼斎は家督を弥七郎朝憲へゆずり、隠居した。

その後に、万鬼斎は、正夫人が生んだ我が子の弥七郎を、川場村の隠居所へさそい出し、謀殺してしまった。

永禄十二年の正月五日のことだ。

これは、万鬼斎が愛妾に指嗾され、愛妾が生んだ子の平八郎景義を沼田城主にすえるため

の謀略であった。

だが、万鬼斎は老い果てていて、その結果がもたらすものを誤算していたといえよう。

弥七郎朝憲が殺害されるや、弥七郎夫人の実父で、上州・厩橋（現・前橋市）城主だった北条弥五郎が兵をひきいて沼田へ駆けつけて来た。

沼田の家臣たちが、北条弥五郎と共に、川場へ押し寄せ、先代の主人であった沼田万鬼斎を攻めつけたのは、よほどに万鬼斎の人望が下落していたものと見える。

万鬼斎は、愛妾ゆのみと、子の平八郎をつれ、吹雪の中を脱出し、山中を彷徨しつつ、ようやくに会津・黒川の城主・芦名盛氏のもとへたどりついた。

万鬼斎と盛氏は、かつて同盟をむすんでいたことがある。

愛妾は、この脱出行で死んだ。

一説には、沼田勢の矢に肩を射ぬかれて死んだともいう。

このはなしが、のちになって、真田昌幸と壺谷又五郎の間に出たとき、

「殿。これは他人事とは聞けませぬな」

ずけりと、又五郎がいったものだ。

「ふむ……」

昌幸は、にやりとして、

「おれがことをいうのか？」

「いかにも」

「心得てあるわ」
「のちのちのことまでもでござるか？」
「おうよ」
昌幸は、自信ありげに、
「おれは万鬼斎とちがうぞ」
と、いった。
「おれもちがうし、女どももちがう」
と、いうのだ。
女どもとは、だれを指すのか……そこまでは昌幸も口に出さなかったけれども、わずか数年の間に、真田昌幸と壺谷又五郎とはこうした間柄になっていた。
主従とはいえ、それは城主と〔草の者〕の関係であった。草の者は正規の扶持をうけてもいないし、真田家の〔分限帳〕にも〔侍帳〕にも、その名は記載されていない。
したがって、一個の武人としての立身ものぞめぬ。
昌幸は、又五郎を正規の家臣にし、その上で、
「草の者の束ねをしてもらいたい」
と、いい出たことが何度かあった。
又五郎のこたえは「否」である。
「何故か？」

と問えば、その資格がないという。その資格とは何のことかと尋くと、
「あまりに生臭うて語ることもなりませぬ。その匂いが隠れているうちはようございますが、もしも、明るみに出たるとき、それがしごとき男を家来にした真田家に疵がつきまする」
壺谷又五郎が、そういうのだ。
「その生臭いはなしをいたせ」
「なりませぬ」
「おれも肚を打ち割って、おぬしのみへはいろいろと聞いてもろうた。聞いておいてもらわねばならぬとおもうたゆえ……」
「かたじけないことでござります」
又五郎は、昌幸の信頼に対して、礼をのべたのである。
「なれば、おぬしが身状も聞かせてもらいたい」
「お聞かせいたさずとも、よいことでござる」
又五郎は頑として応じなかったが、あまりに昌幸が追求するものだから、ついに、
「子が、ひとり、おりまする」
むしろ、吐き捨てるようにいった。
「男か？」
「はい」
「何処におる？」

「甲斐の国に……」
「甲斐の国の何処に？」
「さて……」
ここまでが限度であった。
又五郎は貝のごとく口を閉ざし、いかに昌幸が押しても突いても語らなかった。
真田昌幸は、壺谷又五郎の過去の中で、男の子が一人いるということだけしかいまも知ってはいないのである。

去年の三月に、沼田城奪回の兵をあげたのは、沼田万鬼斎妾腹の子の、沼田平八郎である。
父・万鬼斎が、会津・黒川で病死したのち、平八郎は芦名氏や、上州・金山（現・群馬県太田市）の城主・由良国繁などの庇護をうけてきた。由良国繁は織田信長に服している。
そのときは、まだ、武田勝頼がほろびてはいない。
信長としては、武田家につかえる真田昌幸の沼田城を、由良国繁によって奪回させてもよいと、考えていたようだ。
由良家に、沼田平八郎が身を寄せていると知った織田信長は、
「沼田を奪うたときは、そこもとへ、上州一国をあたえよう」
と、由良国繁へ誓紙を送っている。
国繁は勇躍した。

沼田攻めに、沼田平八郎を利用するつもりになった。
もとより平八郎は、父祖の城であった沼田を奪い返すことに、生涯を賭けている。
由良国繁は、二千五百の兵を平八郎にあたえた。
沼田平八郎は、去年の三月一日に金山城を発し、たちまちに、赤城山の北麓・阿曾の断崖上へ陣を構えた。
この断崖から、沼田城を見下ろすかたちになったのである。
疾風のごとき進出であった。
これには、真田昌幸も瞠目した。
そして、
「油断はならぬ」
と、感じた。
沼田平八郎は、進撃開始に先立ち、旧沼田衆や、地侍たちによびかけ、さらに領内の農民たちの援助を受けることに成功した。
沼田領南方の領民たちは、旧主・沼田氏の血をうけた平八郎の進撃をよろこんでいたようだ。
こうした領内の雰囲気が、真田昌幸にとって無視できぬ。戦争が兵力と武器でのみ勝ちとられるものでないことを、昌幸は充分にわきまえている。
昌幸は、沼田平八郎が由良国繁のもとに身を寄せていることを知っていたが、その軍勢が

領民たちの案内と援助によって、ひそかに赤城山の間道をぬけ、突如、阿曾の断崖へあらわれた事実を、重視した。

会津の芦名氏のもとで、沼田平八郎は何度も戦場に出ていて、その豪勇を昌幸はつたえ聞いていた。

このとき、沼田城には約五千の兵力があった。

こころみに戦って見ると、滝棚原というところで、真田方の猛将・海野能登守が、沼田平八郎に打ち破られてしまった。

「なに、能登守が……」

真田昌幸は、信じられぬといった顔つきになった。

その敗北ぶりが、あまりにもひどかったからである。

沼田平八郎は、さらに、藤田・塚本などの真田諸部隊を突きくずし、沼田城の南から北へ大きく移動し、沼田城を眼下に見下ろす戸神・高尾の両山へ陣を構えてしまった。

「これは、いかぬ」

さすがの真田昌幸が、狼狽をした。

沼田平八郎の兵力は戦勝がつづくにつれ、増加しつつある。

沼田の旧家来や、地侍・領民たちが続々と戦陣へ加わったからだ。

金山を出たとき二千五百だった兵力が、四千に近くふくれあがっていた。

そのとき、

「殿。申しあぐることがござる」
と、壺谷又五郎が、沼田城内の、昌幸の寝所へあらわれた。
又五郎は沼田勢の軍容を、くまなく探り取って、昌幸に報告していた。
「困ったな、又五郎……」
「はい」
武田勝頼も、織田・徳川の進攻に圧迫され、喘ぎを高めているところであったし、うかつに、岩櫃の兵力を沼田へ持ってくるわけにもまいらぬ。
武田家の応援を請うこともならぬ。
そこで、壺谷又五郎が、一つの謀略を昌幸に進言した。
聞いて、昌幸は、
「むずかしい」
と、いった。
「さようでござりましょうかな……」
「むずかしい。あぶない」
「あぶないことは、いまも同様でござる」
「それは、そうだが……」
又五郎は、沼田平八郎の祖父にあたる金子新左衛門という老人を、
「利用したい」

と、いうのだ。

金子新左衛門は、平八郎の生母ゆのみの実父である。

むすめが沼田万鬼斎の愛妾となってより、新左衛門は、利根郡・追貝村の名主から、一躍、沼田家の家老となった男だ。

むすめと共に万鬼斎をそそのかし、かえって沼田家を滅亡させたのは、この金子新左衛門であったらしい。

しかし、新左衛門は沼田家がほろびてのちも巧妙に立ちまわり、上杉・北条両家につかえ、沼田城へ居残っていたのだ。

真田昌幸が沼田へ入城したときも、金子新左衛門は取り入って、臣従することを得た。

もとより昌幸は、すべてを知っていたが、老い朽ちかけている新左衛門を歯牙にもかけなかった。

むしろ、四十年にわたって、沼田領内の治政に通じている新左衛門を利用することを考えたのである。

壺谷又五郎は、この新左衛門を利用し、

「一兵も損ぜずに……」

沼田平八郎を、

「討ち取ろう」

と、進言したのである。

それは、謀略に長じている真田昌幸が呆れるほどの大胆不敵なものであったし、何よりも、昌幸自身が一命を賭けて、尚、成功する見通しを得ることができぬものであった。

三

真田昌幸は、武田勝頼の〔城代〕として沼田へ入城したとき、旧沼田の家来たちをそのまま自分の家来にしてしまった。

それを、

「いさぎよしとせぬ……」

旧沼田衆は、

「それがし、退散いたす」

と、沼田を去って行った。

そのとき、昌幸は、

「おもうままにいたせ」

と、しかるべく金銀を分けあたえてやり、

「沼田へもどりたいとおもうたときには、すこしも遠慮するな。帰ってまいれよ」

と、こころよく彼らを出してやったものである。

それは、自分や武田勝頼に対しての、彼らの反感を出来得るかぎり、やわらげておきたかったからであろう。

そのときに城を出て行った旧沼田衆の大半が、今度の沼田平八郎の挙兵に参加しているものと見てよい。

「おれはな、新左衛門。平八郎を討ち取るつもりは、いささかもないのだ」

と、真田昌幸は金子新左衛門にささやいた。

かつては、むすめが生んだ平八郎を沼田城主に据えるために、陰謀のかぎりをつくした金子新左衛門も、七十をこえ、耄碌しかけている。

「おれが平八郎を討ち取ることなど、わけもないことだ」

「は……」

「なれど、おれが平八郎を討てば、この沼田の民百姓たちのこころも、それだけ、おれから離れてしまうことになる。このことじゃよ、新左衛門。わかるか」

「は、はい……」

「なんと申しても、旧主の沼田家を慕う領民たちのこころは無下にはできぬ。そうではないか」

「はい、はい」

新左衛門は、泪ぐんでいた。

老いた心身のおとろえは、何事につけても泪をさそい出すのであった。

沼田平八郎の攻撃が開始されて以来、金子新左衛門はじめ、沼田に残っている少数の旧沼田衆は、沼田城内の二の丸へ隔離されてい、戦況については、まったく知らされていない。

彼らには、沼田平八郎が戦果を拡大しつつあることなど、到底、信じられぬことであった。

「おれは、平八郎殿と手をむすびたい」

と、昌幸はいった。

「手をむすび、共に、武田勝頼公のためにはたらきたいとおもう。もし、このことを平八郎殿が承知してくれるならば、この沼田城をゆずりわたしてもよいとおもう」

「な、なんとおおせられまする」

新左衛門は、驚愕した。

「おどろくにはおよばぬ。そうではないか、新左衛門」

「は……？」

「おもうても見よ。この城を、おれは武田家からあずかっているのだ。この真田安房守は、武田勝頼公の城代なのだ。おれの城ではない。おれの城は上州の岩櫃と信濃の砥石にある。そうではないか、ちがうか」

「は。まさに……」

「それ見よ。ならば平八郎殿が沼田城代となっても同じことではないか。おれは此処にいるより、平八郎殿がいてくれたほうがよい。すれば旧沼田の家来たちも帰って来ようし、何よりも領民がよろこぶ。これが何よりのことだ」

これまでの真田昌幸は、しきりに取り入ろうとする金子新左衛門を冷然と見まもっていた。

昌幸の、らんらんと光る双眸に見据えられると、新左衛門はおどおどするばかりで、ろく

に口もきけぬほどであった。
その昌幸が、両眼を細め、愛猫の喉でもさすっているような声で、やさしく、新左衛門に相談をもちかけているのである。
「おことば、かたじけのう存じまする」
新左衛門は、あふれる泪をぬぐおうともしなかった。
「新左衛門。おぬしも孫の平八郎が可愛いのであろう」
「は、はい……」
平八郎が可愛いのかどうか、それもわからぬ。新左衛門の泪は泪を生み、わけもなく、その自分の泪が醸し出す情緒へひたりこんでいるにすぎないのである。
「なれど、それには、平八郎殿が武田家へ忠義をつくしてくれなくてはならぬ。そのことを談合したいのだ」
「はい、はい……」
「どうだ。おぬし、平八郎殿へ使者に立ってくれぬか」
「私めに……」
「首尾よう事がすめば、おぬしに、利根川の西方、千貫文に価する土地をつかわそう。どうじゃ？」
真田昌幸に、そうもちかけられ、金子新左衛門は無我夢中となった。
「承知、つかまつる」

「使者に立ってくれるか」
「はい」
すぐさま、昌幸は筆を取って、武田勝頼の朱印がある起請文をしたためた。これは古府中にいる勝頼へ、昼夜兼行の早馬の使者を送り、その許可をも得ていたことになるのである。
一も二もなく、金子新左衛門は昌幸の言葉を信じた。
この夜。新左衛門は、沼田城外の自邸へもどることをゆるされた。
翌々日の朝に、新左衛門は、沼田平八郎の本陣へおもむくことになっている。
と……。
翌日の午後になって、真田昌幸は重臣たちをあつめ、軍議をひらいた。
その席へ、金子新左衛門も呼び出された。
新左衛門は恐懼しつつ、列席した。
ここで、はじめて、沼田平八郎の軍容とその果敢な戦闘ぶりを新左衛門は知ったのである。
「おどろいたか……」
と、真田昌幸がいった。
「実はな、このように、われらは平八郎殿を、もてあましておるのじゃ」
「はあ……」
「この上、むだな戦をしたくはない」
「いかさま……」

と、新左衛門は、急に胸を張った。

この夜、自邸へ帰った金子新左衛門は、ぐっすりとねむった。

同じ夜ふけに……。

壺谷又五郎の指揮によって、城兵が、沼田城・大手門前のひろい道の両側へ、深い横穴を掘りはじめた。

一種の塹壕（ざんごう）のようなものである。

こうした横穴が、十数カ所も掘られ、その上に板をわたし、土を盛り、雑草が植えこまれた。

大手門の前の風景は、元のようになり、だれの目にもわからぬ。

作業は、空が白むまでに終わった。

穴を掘った城兵たちも、なんで、このようなことをするのか、まったく、わけがわからなかったのである。

夜が明けて、何も知らぬ金子新左衛門は家来三名を従えたのみで、戸神山に本陣を移していた沼田平八郎のもとへ向かった。

十二年ぶりに、祖父と孫が出会うことになる。

四

「これは……まだ、沼田におられまいたのか……」

沼田平八郎は老いた祖父を迎え、瞠目した。

「久しぶりじゃのう、平八郎……」

金子新左衛門は、またしても泪ぐみつつ真田昌幸の言葉を平八郎につたえた。

むろん、ただちに信用できることではない。

まして、平八郎は、由良国繁・織田信長の援助によって沼田を攻めようとしているのだ。

その庇護者たちに叛き、真田家と共に武田勝頼へ奉公することなど、

（おもいもよらぬ）

ことなのである。

それに、武田家は往年の威力と栄光をうしない、織田・徳川の攻勢に圧倒されつつあるではないか。

（真田昌幸も、いまは、沼田にかかずろうているわけにもゆかぬ、と見える）

と、平八郎は感じた。

緒戦の勝利が、彼にそう感じさせたのであった。

いざとなれば沼田城どころではない。織田・徳川の大軍が甲斐の国へ攻めかけて来れば、真田昌幸も兵をひきいて駆けつけねばならぬはずだ。

昌幸は、沼田城を開けわたしたのちも、沼田周辺にあるいくつかの小城や砦を、

「真田家のものにしておくこと」

と、条件に出している。

そのことに、平八郎は〔信憑性(しんぴょうせい)〕を感じた。

（あるいは、真田家も、真に困っているのやも知れぬ。このおれを、もてあましはじめたのか……）

このことであった。

「いったん、入城してしまえば、武田に味方をしようが、織田方につこうが、おぬしのおもいのままじゃ。わしは、いったん、真田家の人質となって、岩櫃へおもむくことになろうが……なに、大丈夫。かならず沼田へ逃げもどって見せるわえ」

と、金子新左衛門がいった。自信があるらしい。この老人は、それなりに、策をめぐらしていたのであろう。

祖父がいうように、うまく事が運ぶものかどうか……まるで、夢の中のはなしにもおもえたが、ともかく、沼田平八郎は、こころみに、こちらからも条件を出して見ることにした。

すなわち、沼田城の引きわたしについては、真田昌幸自身が、

「城外の町田の観音堂(かんのんどう)まで出て来ていただきたい」

と、いうものである。

しかも、昌幸に従うものは、わずか二十騎。それも平服のままでというのだ。

「平八郎。それは、到底、通らぬことじゃぞ」

金子新左衛門もあきれ顔になった。

「ともあれ、そのように真田安房守へ申しつたえて下され」

「なれど……」
「かまいませぬ」
「う……」
仕方なく新左衛門は、あまりにもきびしく、戦陣での常識をこえた平八郎の注文を沼田へ帰って、昌幸につたえた。
果たして、昌幸は破顔し、
「それでは、わけもなく、おれの首を打ち落とされてしまうわ。その上に沼田もあぶなくなる。平八郎殿は、どうも、この安房守をうたごうているらしい。よいか、わしは降参をするのではない。平八郎殿へ沼田をゆずろうと申している。そこのところを、よくよく、平八郎殿へつたえて、わしの体面を汚さぬよう、いま一度、談合してまいれ」
もっともなことであった。
新左衛門は、その日のうちに、ふたたび平八郎の本陣に向かい、昌幸の返事をつたえた。
平八郎の返事は、
「否(いな)」
である。
自分のいうことがきけぬならば、ただちに沼田攻撃を開始するといいきった。
新左衛門は、沼田に引き返し、さらに、夕暮れとなって、またも平八郎の本陣へおもむいた。

「なりませぬ」

依然、沼田平八郎の拒絶は断固としている。

「今夜のうちに真田安房守の返事がなければ、明朝、沼田へ攻めかけまする」

交渉が何度もおこなわれるうちに、平八郎は、いよいよ、真田昌幸の困惑が真実のもののようにおもえて来たし、同時に、一歩も退かぬという闘志に掻き立てられた。

夜が更けてから、真田昌幸の最後の返事を、金子新左衛門がたずさえて来た。

新左衛門は勝ち誇った声を張りあげ、こういった。

「負けたぞよ、安房守が負けたぞよ、平八郎。うむ、うむ、もはや、どうしようもないという顔つきになってしもうたわえ。おぬしのいうままにいたすそうな。明日の朝、安房守は二十名をつれたのみで、観音堂へ出てまいると、よ」

その朝が来た。

天正九年三月十五日である。

一年後の春に、武田家が滅亡することを、真田昌幸も壺谷又五郎も、まだ予知してはいない。

昌幸は、平八郎との約定どおりに、壺谷又五郎をふくめた二十名の家来を引きつれ沼田城を出た。

昌幸の馬側に、又五郎が馬首をすすめて来たとき、

「おりゃ、どうも、おぬしの口先に乗って、取り返しがつかぬことをはじめてしもうたような気がするぞ」

と、昌幸が顰め顔でいった。

「なれど、みごとに乗ってまいりましたな」

「おれが、か……」

「いや、沼田平八郎でござる」

「おれは、どうなる？」

「真田の殿……」

よびかけた壺谷又五郎が、ひたと昌幸の眼へ自分の視線を合わせて、

「たとえ万一のことあっても、殿のみは、又五郎がいのちに替えて救いまいらせます。御案じめさるな」

むしろ、叱りつけるように、ささやいてきたものである。そのささやきに、昌幸への愛情がにじみ出ていた。

「うむ……」

昌幸と又五郎の呼吸が一つになった。

この瞬間に、昌幸は、

（なんとしても、又五郎を、おれのものにしよう！）

決意をしたのであった。

戸神山の沼田平八郎本陣から沼田城までは、薄根川沿岸の小さな盆地をへだてて、中径約一里ほどだ。

平八郎は戌ノ刻に本陣を出た。武装の将兵五百が平八郎を護衛している。

昨夜から、今朝にかけて平八郎は間者を出し、沼田城の動静を探らせていた。

そして、沼田城からは、いっさいの戦旗が消え、城の内外は、しずまり返っているとの報告を受けた。

会見の場所の観音堂は、沼田から来て薄根川をわたったところにあり、こんもりとした木立に包まれている。此処へも、平八郎は前夜から約二百の兵を出し、警戒させていた。

異常は、まったくなかった。

真田昌幸一行が観音堂へ到着するまで、沼田勢五十騎が前後して、これを監視しつづけた。

異常はない。

昌幸を、はじめて見たとき、平八郎は意外におもった。

まだ四十前の年齢だときいていたが五十をこえて見える老顔で、小柄だし、にこにこと自分へ笑いかけて来る人の善さそうな昌幸を見て、平八郎の警戒が解けた。

平八郎は、完全に、昌幸が気おくれてしまっていると看た。

昌幸は、平八郎の武勇をほめたたえた。

沼田平八郎と停戦のため談合を終えるや、真田昌幸が、

「さ、沼田の城を、おわたしいたす。いざ……」

と、いざなった。

平八郎は、このまま沼田へ入城するつもりではなかった。日をあらため、全軍をひきいて沼田へ乗りこむつもりでいたのだが、昌幸のいざないぶりが、水のながれるような自然さで、すこしもこだわりがなく、平八郎も、

（そうするのが当然……）

という気分になってしまい、

「では……」

馬へまたがった平八郎は、使番二名を戸神山の本陣へ派し、全軍山を下って沼田へすすむように命じた。

やがて……。

真田昌幸と沼田平八郎は馬首をならべ、沼田城・大手門前へ到着した。

城門はひらかれている。

その向こうに、真田家の武士たちが礼装で、平八郎を迎えようとしている。

平八郎の背後には、武装の五百騎がつづいていた。

もっとも、そこは広野ではない。城門前の道は決して狭くないけれども、限りがある。平八郎の家来たちは、おそらく四列縦隊ほどのかたちで、つき従っていたものとおもわれる。

そのとき、城門の内から、

「殿、おなつかしゅうございます」

平八郎へよびかけ、走り出て来た者がある。
旧沼田衆の山名弥惣という男であった。
「おお、弥惣か……」
平八郎は忘れずにいた。
「殿。この日を、どれほど、待っておりましたことか……」
いうや、山名弥惣が平八郎の馬の轡をつかみ、するすると城門の内側へ引き入れた。
真田昌幸も、すかさず馬を寄せ、城門を入った。
その瞬間であった。
正面の水の手曲輪の石垣に突如、姿をあらわした真田の鉄砲隊が、平八郎へ向けて一斉射撃をおこなったのである。
同時に……。
城門の外に掘られてあった数カ所の隠し穴の蓋を、土や草と共に突き破った武装の真田兵が、平八郎の背後から城門へ入ろうとする沼田勢へ、いっせいに矢を射かけた。
おもいもかけぬ急襲であった。
開城するものとばかりおもいこみ、出迎えにあらわれていた真田の家臣たちの大半が、主人の、この謀略に気づいていなかったという。
事前における昌幸と又五郎の手際が、よほどにあざやかだったのであろう。

五

大手門前の道へのぼって来た沼田勢は、名状しがたい混乱に陥った。
沼田平八郎の後から城門へ入ろうとした家来たちは、いくつもの隠し穴から猛射される真田勢の矢を受け、土けむりをあげて馬から転げ落ちた。
馬も矢を受けて狂奔し、転倒する。
ふり落とされた沼田勢へ、的確に矢が射込まれた。
大手の城門は、沼田平八郎一人を呑みこみ、早くも閉ざされている。
平八郎は、どうしたろう。
水の手曲輪へあらわれた鉄砲隊の狙撃を受けた平八郎の乗馬が、悲鳴をあげ、横ざまに倒れたとき、
「謀ったな！」
地上へ投げ出された平八郎は、銃弾を身に受けていない。
猛然と、はね起きようとする沼田平八郎へ、
「御覚悟！」
叫びざまに、山名弥惣が脇差を引き抜いて躍りかかった。
弥惣の脇差は、平八郎の喉元を切り抉った。
「うおおッ……」

平八郎が咆哮を発し、立ちあがりざまに弥惣の躰を突き放した。
まるで毬が投げられたかのように、弥惣の躰は宙に浮き、彼方へはね飛ばされたという。
沼田平八郎の顔は、喉元から噴出するおびただしい血汐にぬれ、目鼻もわからぬ。それでもなお、太刀を引きぬいた平八郎の躰へ数条の矢が射込まれた。
地響きを打って、平八郎の巨体が倒れ伏し、うごかなくなった。
真田昌幸は、壺谷又五郎とうなずき合い、
「後をたのむ」
事もなげにいい捨てるや、水の手曲輪の方へ去った。
大手門外の沼田勢は、隠し穴の矢に射すくめられ、
「退け、退けい！」
「早く、殿を……」
「いや、退くが先じゃ。退いてから押しつめろ！」
叫び合いつつ、いったんは引き退いたが、体勢を立て直して反撃に移る間もなく、今度は、三の丸の城門を押しひらき、約四百の真田勢が横合いから襲いかかって来た。
このときの戦闘で、平八郎に従って来た五百の沼田勢のうち、その半数が死んだという。
退却した沼田勢は、大将を失って、散り散りとなるよりほかに仕方もなかった。
ところで……。
真田昌幸の謀略を、金子新左衛門は、まったく気づいていなかった。

異変が突発したときの、新左衛門の驚愕はどのようなものであったろう。

しかし、顔面蒼白となり、痩せこけた老体を蹌踉と運び、息絶えた孫・沼田平八郎の傍へ歩み寄った金子新左衛門は、真田の家来たちが見まもる中で、わなわなとふるえる手に小刀を抜き持ち、

「お、のれ……」

微かに声をもらし、孫の死体へ一太刀つけた。

これは、真田昌幸への忠誠を、とっさにあらわしたつもりなのであろう。

だが、真田の家来たちが新左衛門へ向けた眼ざしは、侮蔑以外の何ものでもなかった。

山名弥惣は、壺谷又五郎によって、完全に籠絡され、謀略に参加した。

弥惣が飛び出して来て、

「おなつかしゅうございます」

と、よびかけ、有無をいわせずに平八郎の馬の轡を取り、城門内へいざなった呼吸はまことに見事なものであり、平八郎も、この旧臣の顔を見て、おもわず気がゆるんだにちがいない。

山名弥惣は、この年が暮れるころに、急死している。

健康な彼が、何故、急に病死をしたか、それはだれも知らぬ。

金子新左衛門は、昌幸から千貫文の土地をもらえるどころか、

「失せよ」

ただ一言のもとに沼田を追放されてしまった。

その後、新左衛門は吾妻の山中に住む縁者・一場太郎左衛門をたより、間もなく、病歿したといわれる。

沼田平八郎の歿年は、三十歳であった。

ここに、沼田氏の血は絶えたといってよい。

真田昌幸も、さすがに、平八郎の亡骸を、

「丁重に葬るよう……」

と、命じたが、沼田城下の僧・行芝の請願によって、遺体を引きわたしてやり、行芝は、これを、沼田氏の旧城（小沢城）址へほうむり、ここに一庵をむすび、法喜庵と号した。行芝は、故沼田万鬼斎の庇護をうけた僧侶であったそうな。

こうして、真田昌幸は沼田城を確保することを得たのだが、その、わずか一年後に、主家の武田家が滅亡しようとはおもわなかった。

武田信玄は、死にのぞんで、息・勝頼をまねき、

「父の為したることを真似ようとおもうな。これよりは、越後の上杉と手をむすび、ちからを内に移して、家をまもるがよい」

と、遺言した。

しかし、当主となってからの武田勝頼は、偉大な亡父の威風を、そのまま自分のものとし

たい野心に燃えたち、無理な戦争を重ねつづけたのである。
けれども、長篠・設楽原における徹底的な敗北をうけてのち、
（かくなってしまっては、上杉家と手をむすぶよりほかに道はない。そうして、遠く毛利家とも通じ合い、いずれは、足利将軍家を押したてて、織田・徳川を打ち倒さなくては……）
と、おもいをあらためたようだ。
勝頼が、老臣高坂弾正昌信を、越後・春日山城の上杉謙信のもとへさし向けると、謙信は、こころよく高坂昌信を迎え、勝頼の請いをうけいれてくれた。
そのとき、上杉謙信は、苦笑とも自嘲ともつかぬ複雑な笑いを浮かべ、
「かくなるのであったら、晴信（信玄）殿と、はじめより手をむすんでおればよかったものを……」
と、いい、さらに、
「さすれば、信長・家康ごとき、すでに、この世に生きてはおらぬことよ」
謙信にしては、めずらしく愚痴めいた言葉をもらしたという。
愚痴ではあったろうが、その言葉は誇張でない。
戦国末期に最強の軍事力をそなえていた武田・上杉の両家は、それゆえに、牽制し合い、二人の偉大な総帥は、あくこともなく戦闘をくり返し、貴重な年月を空しく消耗してしまうことになった。
上杉謙信のみでも、あと五年ほど世に在ったら、

「天下の様相も、どのようになっていたか、知れたものではないわ」

というのが、真田安房守昌幸の愚痴であった。

上杉謙信は、武田家との同盟成って間もなく、四十九歳の若さで急死してしまった。

信玄と謙信……。

もっとも恐るべき大敵が相次いで病死してしまったことによって、授けられた信長と家康の強運を、つくづくと、真田昌幸はおもい知らされたにちがいない。

昌幸は、

「高坂弾正殿が、亡くなられたのも、謙信公御他界のため、落胆なされたからだ」

ともいう。

謙信亡きのちの上杉家は、景勝・景虎の両養子が相続の争いをはじめ、武田勝頼は、この二人を和解させるため、ずいぶんと骨を折ったものだが、ついに、二人は戦火をまじえることになった。

そして景虎は、景勝に破れて自殺をとげた。

上杉家は景勝が相続をしたが、昔日の威勢を駆って京都へ攻めのぼるだけのちからは、もうなくなっている。

その上杉景勝だが……。

武田家がほろび消えたとなれば、旧武田領であった信州や上州へ、いち早く、上杉家の「楔」を打ちこもうとするであろう。

むろん、織田信長も徳川家康も、これを見逃しておくわけにはゆかぬ。

上信二州の武将や豪族たちも、こうした新しい勢力移行を眼前にして、おそらく騒然となるにちがいなかった。

そうなって来ると、真田安房守昌幸という武将の存在は、上杉景勝にとっても、織田・徳川両家にとっても、

「迂闊に、手をつけられぬ……」

ものとなって来るはずであった。

そこに、真田昌幸のねらいもある。

上信二州における昌幸の、武将としての実力は、

「味方にすれば、これほどたのみになるものはあるまいが、敵にまわせば取り返しのつかぬ悔いを残すであろう」

と、昌幸自身が嘯くだけのことは、たしかにあるのだ。

兄・昌幸を、徳川家康の傘下へ迎えようとしている真田隠岐守信尹も、こうした兄の立場と実力をわきまえての上で、家康に取り持ちをするつもりなのであろう。

六

壺谷又五郎は、姉山甚八・奥村弥五兵衛の二人をつれて、岩櫃の城を出て行った。

又五郎は、真田昌幸が弟・信尹へあてた密書を懐中にしている。

城を出た三人は、二手に別れた。

又五郎と甚八は、上州・沼田の城へおもむき、城代・矢沢頼綱に昌幸の意をつたえてから、真田信尹のもとへ駆け向かうことになっていた。

甲州から美濃、近江から関東にかけて点在し、それぞれの間諜活動に従っていた真田家の草の者は、いま、いっせいに引きあげて来つつあると見てよい。

彼らは、それぞれに情報をあつめながら、沼田・岩櫃の両城に向けて帰還の途についていることであろう。

また、そのうちの何人かは、あらかじめ定められた場所に居残り、壺谷又五郎の指令を待っているはずだ。

奥村弥五兵衛は、吾妻高原を西へ走り、鳥居峠を越えて信濃へ入り、真田の庄の草屋敷へ立ち寄ってから、そこにいる草の者を三名ほどつれ、上田平から和田峠を越え、甲斐の国へ入り、お江の行方を探ることになっている。

弥五兵衛は、深い朝霧の中へ消えて行った。

その朝。

真田昌幸は、目ざめるや、すぐに寝所を出て、地炉ノ間へ入り、

「三十郎をよべ」

と、侍臣に命じた。

岩櫃城代の矢沢但馬守頼康があらわれたのは、それから間もなくのことだ。

「但馬でござる」
「三十郎か、入ってくれい」
「ごめん」
地炉ノ間へ入って来た矢沢頼康が、
「信長公へ進物にする馬でござるが……これは、沼田の城にてえらびましたほうがよいと存じます」
「うむ、うむ……」
「殿。壺谷又五郎が、また、出て行きましたな」
「知っておったか？」
「ちょと、あいさつにまいりました」
「おお、おお……」
「それがしも、そろそろ仕度にかかりませぬと……」
「あ、よい」
「は？」
「信長へ馬をとどけるのは、おぬしでなくともよい」
「さようで……」
「又五郎へことづけ、沼田へいい送ってやったわ」
すべては、矢沢薩摩守（さつまのかみ）へまかせた、という意味らしい。

「それよりも、三十郎は、おれの側にいてもらわねばならぬ。いつにても戦ができるようにしておけ。いやなに、織田・徳川が相手ではない。このあたりの者どもが騒ぎはじめれば、いずれにせよ、一戦せねばなるまい」

「いかさま」

「手配りをたのむ」

「心得まいた」

「肝心なことは、此処と沼田との間の風通しをよくしておくことじゃ」

といったのは、岩櫃・沼田間の連絡を絶やさず、交通路を完全に真田家で制圧せねばならぬことを指したのである。

それは、壺谷又五郎たちが岩櫃城を発した翌々日の午後のことだが……。

信州の上田平と、同じ信州の深志（現・長野県松本市）をむすぶ行路に、真田家の草の者お江と向井佐平次を見出すことができる。

この日は、二人が高遠城を脱出してから、十七日目にあたる。

同じ日に……。

織田信長は本軍をひきいて上諏訪へ入り、徳川家康は古府中（甲府）を出て、信長の本陣へ向かいつつあった。

お江も佐平次も、汗と垢にまみれた百姓姿である。

佐平次は、長い竹の杖にすがり、お江は小荷物を背負っていた。
二人は、深志から、この道をたどって来たのではない。
これで、もう五日も、深い山の中の道もない場所を、すこしずつ、すこしずつ、お江は佐平次をいざない、ようやくに、上田平への行路へ出たのであった。
佐平次の背中の傷は、癒えかけてきている。
だが、脇腹を敵の槍先で抉られた傷は重く、
「ゆるりと歩めばよい。何も急く旅ではないゆえ……急いては、かえって危ないのじゃ。痛むときはやすむがよいし、苦しければ、わたしが抱いてあたためてあげよう」
と、お江がはげまし、いたわってくれなかったら、
（おれは、きっと、死んでいたろう……）
佐平次は、そうおもわずにいられなかった。
山中で野宿するときの冷気は、春が来ているとはおもえぬほどのものであった。
お江は、山へ分け入ってから、
「火は焚けぬぞえ」
と、いった。
権現山の小屋で、敵の忍びの者に襲われて以来、一度も、あのような恐ろしい目には合っていない。
けれども、お江は一刻一刻を、一日一日を緊張しつづけているように見える。

「ことに、わたしと、壺谷又五郎どのは、いのちをねらわれている……」
「敵の、忍びの者にか？」
「大将と大将が兵をひきいて戦うこととは別に、わたしたちも、それぞれに、深く因縁がまとわりついた戦をしているのじゃ。これは、忍びの者だけがもつ業というものであろ」
「そ、そういうものか……」
「ふ、ふふ……」
「何が、おかしい？」
「佐平次どのには、わからぬこと。いえ、わからいでもよいことじゃ」
それは、たしかにそうなのだが、お江の警戒ぶりは尋常のものではない。
ことに、人里をはなれ、山中へ分け入ってからが、
（どこを、どのように歩いているのか？）
佐平次には、まったく、お江のすることがわからなくなってきている。
山腹の樹林から渓流の淵を指して、
「佐平次どのは、わたしが声をかけるまで、あの谷川の淵の日だまりに寝ているがよい」
などと、お江がいう。
「何故だ？」
「何故でもよい。わたしのいうことをきかぬと、二人とも死ぬるということを忘れたのか」
きびしく叱りつけられ、杖にすがった佐平次が、単身、渓流の岸へ下りて行き、いわれた

場所に身を横たえる。

すると、お江は樹林の何処からか、これを見下ろしているらしい。

そのまま、四時間も五時間も時がすぎてから、お江が下りて来て、

「さ、行こう」

せっかく下りて来た斜面を、ふたたび登ったりするのだ。

お江は、こういった。

「権現山のとき、わたしは敵の忍びを一人、逃がしてしもうた。それが怖い。わたしひとりなら怖くはないが、佐平次どのを無事に又五郎どのへわたすためには、敵を恐れなくてはならぬ」

そういわれると、佐平次には返す言葉がなかった。

七

武田家が崩潰（ほうかい）したいま、このたびの戦争に出た真田家の忍びの者のうち、生き残った者は、いうまでもなく真田家の本拠へ帰って行くことになる。

ゆえに、権現山の忍び小屋にいたお江が、それから、どのような道すじをたどり、信州へ入るかは、敵の忍びの目にあきらかなはずだ。

そこは、たがいに忍びの者だけに、たがいの裏をかきながら、追いつ追われつしているのであろう。

と、そのあたりまでは、向井佐平次にも察しがつく。
それにしても、わからぬことばかりであった。
「いったい、ここは、どこの山なのだ？」
問いかける佐平次に、お江がにっと笑い、
「いうたら、佐平次どのは魂消るにちがいないぞえ」
と、こたえたり、または、
「それ、その山の向こうには、織田の軍勢がひしめいている」
と、いったりした。
夜になって、山中の寒気に歯を鳴らし、ふるえている佐平次を抱きしめてくれるお江の躰は実にあたたかい。
これが、佐平次にはふしぎでならぬ。
「どうして、お江どのは、このようにあたたかいのだ？」
尋くと、お江は、
「忍びの女の躰は冷えもすれば、温もりもする」
「ほう……」
「自由自在じゃ」
「まことか？」
「まことじゃ。けれども、そのかわり、長生きはできぬ」

「何故？」
「いうにいえぬことよ」
山へ入ってからの、お江の躰からは獣のような匂いがただよいはじめた。
女の体臭とは程遠いものである。
汗と脂にまみれつくしているからであろう。
ときに、
「さ、背中へ……」
と、佐平次を背負い、お江は山の尾根を猛然と走ることもあった。
女のものとはおもえぬ、ひろい背中なのだ。
「それにしても……おれのような者を、どうして、このように大切にしてくれるのだ。それが、わからぬ」
「わたしは、壺谷又五郎どのにたのまれたゆえ、していることじゃ」
「いのちがけではないか……」
「そのとおり」
「見ず知らずのおれのようなものを、女のおぬしが、いのちがけで救うてくれた……」
「あい」
「わからぬ」
「そのことは、いずれ壺谷又五郎どのに尋ねるがよい」

「あのお人は、いったい、おれの父と、どのような関わり合いがあったのだろう？」
「わたしは知らぬ」

こうして、二人は、ようやくに上田平を七里の彼方にのぞむ行路に出たのであった。
この路は、後年の松本街道である。
路へ出たとき、
「ああ……」
お江は、ふかいためいきを吐き、
「これで、どうやら……」
と、いった。
「ここは……この道は何処へ行く？」
「塩田平から上田平へ……そして、真田の庄へ……」
「さなだの、しょう？」
「真田家の発祥の土地じゃ」
「ほう……」
「そこに、わたしの住む小屋もある」
「まことか？」
「あい、まことじゃ」

「そこへ行くのか？」
「その前に、立ち寄るところがある」
「何処へ？」
「いまに、わかる」
曲がりくねってのぼる山道を歩みながら、お江の双眸が、にわかに輝いてきた。
もはや、敵の忍びの追跡を、
「絶ち切った……」
という安堵のおもいが、はっきりと、お江の顔貌に看てとれた。
杖にすがっている向井佐平次の足取りも、軽くなった。
「お江どの……」
「あい？」
「もう、安心なのか？」
「と、おもうてもよい」
「そ、そうか……」
「あと、一里ほどで、地蔵峠へのぼりつめる。そこまで行けば、わが家へ帰ったもおなじことじゃ」
「そうか、そうか……」
「疲れたかえ？」

「いや、大丈夫だ」
山道は樹林に包みこまれている。
切り立った崖の下から、渓流の音がきこえていた。
名も知らぬ山鳥が鳴きかわし、陽光は、まさに春のものであった。
「佐平次どの……」
と、お江が、ふとやかな腕を佐平次の腋の下へ差し入れ、背中を抱えて、傷ついた若者の歩みを助けつつ、
「どうじゃ。これから、真田家へつかえて見る気はないかえ？」
「おれが？」
「うむ」
「奉公が、できるのだろうか？」
「大丈夫じゃ」
「お江どのが取り持ちをしてくれるのか？」
「してもよい。なれど、わたしよりも壺谷又五郎が、うまくはかろうてくれよう」
「そうか……そうなれたら、よいが……」
「なれるとも」
「おれも、忍びの者になれようか？」
「ならぬがよい」

お江が、叱りつけるようにこたえた。
「何故？」
「ならぬがよい」
「なってみたくなってきた」
「ならぬがよい」
抑揚のない声で、何度も同じ言葉を返してくるお江が、突然、足をとめた。
「お江どの……」
「だまって……」
「え……」
「叱っ」
山道に立ちつくし、佐平次の背中を抱えているお江の横顔が、見る見る血の気をうしなってきた。
沈黙したお江の眼が、青く光っている。
「どうしたのだ？」
たまりかねて、佐平次がささやいた。
お江は佐平次を抱えて歩き出しながら、
「後を、つけられているようじゃ」
「え……」

「歩みをとめてはならぬ。すこし、急ごう。苦しいか、痛むかえ？」
「大丈夫だ」
「いま、すこしのところへ来て、見つけられたらしい」
「どうしてわかる？」
お江は、その佐平次の問いにはこたえず、苦笑をうかべて、
「佐平次どのが相手では、蟬脱もできぬし……」
と、いう。
「せみ、ぬけ……？」
何のことか佐平次には、すこしもわからなかった。
山道は、曲がりくねって地蔵峠へのぼっている。
向井佐平次は息を切らし、汗みずくになってきた。
「苦しいかえ？」
「う……だ、大丈夫……」
「いや、そうでない。むりもないことじゃ。まだ、傷が癒えきっておらぬゆえ……」
「さ、行こう、お江どの」
「お前を捨てては行けぬし……このまま、お前と歩いていたのでは、みすみす、敵の餌食になってしまう」
「それなら、おれを、捨てて行け」

「殺されてもよいのかえ？」
「仕方がないではないか」
「これ、怒らずともよい」
「だが……」
そのとき、またも、お江が立ちどまり、
「そうじゃ」
右側の樹林のあたりを見まわしはじめたお江の眼に、たちまち精気がみなぎってきて、
「そうじゃ、このあたりに、たしか……？」
「どうした？」
「地蔵峠への、ぬけ道があったはず」
いいながら、お江は背中を向けて屈み込み、
「早う、背中へ……」
「よいのか」
「早う、早う。もしやすると、助かるやも知れぬぞえ」
佐平次を背負い、お江は黒松の樹林へ飛び込んだ。
深い樹林の中に、道ともいえぬ道がついている……ように、すくなくとも佐平次にはおもわれた。
なぜなら、お江が平地を走るように駆けはじめていたからである。

やがて背後に、はっきりと追いかけて来る人の気配を佐平次も感じた。
お江の背中から、くびをねじまげて振り向いて見たが、何も見えぬ。
「あった……」
と、お江がいった。
何が、在ったのか……。
「おどろくな。声をたてるな」
押しころしたような、お江の声に、佐平次はうなずいた。
お江は木々の間を必死にすりぬけて行き、
「しっかりと、つかまって……」
いうや、さらに速度を速めた。
つぎの瞬間、佐平次はお江の背中にしがみついたまま、地の底へ落ちこんでいた。

八

そこに、穴が掘られてあった。
お江は、それと知って、われから穴の中へ飛び込んだのである。
ということは、この樹林の、この場所に、この穴が掘られてあることを知っていたからに他ならない。
この穴を、真田家の草の者は、

「逃げ穴」

と、よんでいる。

穴のふちに細工がほどこされていた。

細い縄のついた板が立てかけてあり、そのまわりに、土が堆く盛られてある。

穴の中へ飛び込んだ者が、飛びこみざまに板についた縄を引くと、板が穴の口をふさぎ、その上へ腐葉土がくずれてきて、穴を隠してしまうのだ。

これは尾行者の目を晦ますためのものであって、忍び小屋の近くには、かならず設けてあるものなのだ。

伊那の権現山の忍び小屋のまわりにも、二カ所ほど、この〔逃げ穴〕が設けられてあったのだが、お江が用いなかったため、佐平次は知らなかったのである。

武田忍びの勘五という男が、敵の忍びに権現山まで尾行をゆるしてしまったのは、逃げ穴の所在を知っていなかったのであろう。

お江は、佐平次を背中から振り落とし、荷物を捨てた。

暗い穴の上を、人が走りすぎるのを佐平次は感じた。

お江は、佐平次を抱きしめ、うごかなくなった。

それから、夜に入るまで、二人は一言も口をきかず、穴の中にもぐっていたのである。

どこからか、外気が穴の中へ吹きこんで来るらしい。息苦しくなるようなことはなかった。

夜がふけてから、たまりかねて、佐平次が尋いた。

「いつまで、この穴にいるのだ？」
「わからぬ」
「ああ……」
佐平次が、うめいた。
「どうした？」
「お江どの。ゆ、ゆ、小便が……」
「なんのことかとおもうたら……」
と、お江が笑い、
「かまわぬ、そこへしておしまい」
「よ、よいのか」
「かまわぬ。わたしとても、我慢がならなくなったときは、そうする」
「ああ、もう……たまらぬ……」
「かまわぬというに……」
「ゆ、ゆるしてくれ」
佐平次は、ついに、穴の中で用を足した。
臭気が穴の中にたちこめた。
「お、お江どの……」
佐平次は、さすがに若い。

女の前で、このような失態を見せたことがたまらぬらしい。声がふるえていた。
「ふ、ふふ……」
「笑うてくれるな」
「なれど……」
「怒るぞ、おれは……」
「声が高い」
いうや、お江が立ちあがった。
穴は、お江の背丈ほどの深さに穿たれてあった。
「どこへ行く？」
「外を見て来ようわえ」
「おれも行く」
「ならぬ」
「もう、いない。敵は去ったにちがいない」
「知りもせぬくせに、よけいなことをいうのではない。よいか、佐平次どの。わたしがもどるまで、この穴から出てはならぬ」
「またか」
「死にたくなければ、出るな」
「わかった」

「今夜のうちにもどらなくとも、案じることはない。凝と、待っていやれ」
「うむ」
お江は、荷物の中から、ふくらんだ革袋を出し、腰に結びつけた。
そして、しずかに穴の蓋を押しあげ、樹林の闇の中へ出て行き、蓋を閉め、土をかぶせた。
そのまま、かなり長い間、お江は穴の上に身を屈めていたようである。
佐平次は、懸命に頭上のお江の気配をうかがっていた。
やがて、いつの間にか、お江が消えた。
向井佐平次が目ざめたとき、朝の光が、わずかに、穴の中へ射し込んでいた。
腐葉土と蓋の隙間から、穴の中へ洩れてきているのだ。
疲労しきっていたためか、佐平次は穴の中でねむりこんでしまった。
息苦しくて、目ざめたのである。
通風孔は穴の壁を小さく穿ち、これを穴から離れた場所へ掘りぬき、節をくりぬいた竹を通してあった。
そこから、冷たい外気が穴の中へながれこんでくる。
しかし、それだけで、およそ一昼夜をすごしたのだから、息苦しくなるのも当然であったろう。
ふしぎに、傷の痛みを感じなかったが、躰が冷え切ってしまっている。
（まだ……お江どのは、もどらぬ）

どうにも、これ以上、穴の中に屈んでいることに、佐平次は堪えられなくなってきた。
同時に、
（もしや、お江どのが、敵の忍びに討たれたのでは……？）
と、おもった。
恐る恐る、佐平次は蓋を押しあげにかかった。
意外に、重い。
苦しい脱出行と傷の痛みが、若い佐平次の体力を相当に奪い取ってしまっている。
お江は一昨日の午後、樹林の中を歩みつつ、
「佐平次どのが、元の躰になるのは、半年後のことじゃ」
と、いった。
（それほどのことはあるまい）
そうおもっていたが、いざ、お江から離れ、自分ひとりで行動を起こすとなると、われながら、なさけないまでに体力がおとろえていることを知った。
すこしずつ、蓋を押しあげ、蓋の上の腐葉土を振り落とし、ようやくに佐平次は、穴の外へ這い出した。
黒松の密林は陽光をさえぎっている。
しかし、密林の幕の切れ目から、晴れわたった青空をうかがうことができた。
その、わずかな隙間から落ちて来る陽光が地にとどく前に、猛々しい密林の枝葉が、これ

を曇らせてしまうのである。
（朝……いや、昼近い時刻になっているのやも知れぬ）
佐平次は、穴に蓋をかぶせ、土を盛った。
それから、這うようにして、穴からすこしはなれた黒松の幹の蔭にうずくまった。
あたりの気配に耳をすました。
密林の中は、しずまり返っている。
春を迎えた樹や土の匂いが、生ぐさいまでにたちこめていた。
どこかで、名も知らぬ山鳥の声が鋭く鳴きわたった。
（お江どの……）
胸の中で、よびかけて見て、佐平次は不安に居たたまれなくなった。
われ知らず、佐平次は位置を移して行った。
それでも、穴の地点を見失わぬよう、何度も何度も振り返りつつ、移動したのである。
忍びの者たちの〔世界〕は、向井佐平次にとって、無縁のものであった。
佐平次は、どうもわからぬ。
このときの佐平次は、まだ、武田勝頼が天目山のふもとで自害したことを知っていない。
それは、お江も同じだが、武田家が、もはや二度と起ちあがれぬ敗北を喫したことだけは、わかっている。
それなのに何故、敵の忍びは、これほどの執拗さをもって、お江を追うのであろうか……

それが、佐平次にはわからなかった。

九

すこしずつ、すこしずつ移動しながら、佐平次は、お江の姿を探しもとめていた。
お江の口ぶりでは、地蔵峠という〔峠〕が近いらしい。
そして、地蔵峠へ到着すれば、危険から逃れることができるようなことを匂わせていた。
この樹林の中には、
（地蔵峠への、ぬけ道があったはず……と、お江どのはいうていたが……）
その、ぬけ道とは、いったい何処にあるのか……。
這うように樹林の中を移動していたのだが、
（これは、いかぬ。やはり、お江どのからいわれたように、穴の中へもどっていたほうがよい）
と、佐平次はおもった。
あまりにも樹林が深いので、佐平次は、何やら深海の底にでも、
（ただよっているような……）
不安に囚われてきたのであった。
それで、佐平次は引き返した。
引き返しているつもりであったが、いつまでたっても〔逃げ穴〕の場所が見当たらなかった。

いや、その場所を通りすぎてしまったのやも知れぬ。
黒松の樹林には、目星にする目標もない。
佐平次は、それなりに目星をつけていたつもりなのだが、
（し、しまった……）
いまは、もう、自分が何処にいるのだか、わからなくなってしまった。
たとえば、さまざまな目標が容易に見出せる町すじにしても、往路と復路とでは、眼に映る風景がまったくちがってくるものだ。
まして、どこを見ても黒松ばかりの樹林なのだから、佐平次が迷ったのは当然なのだ。
なればこそ、お江は、自分がもどって来るまで、
「穴から出てはならぬ」
と、きびしく、いい置いて行ったのである。
（困った……どうしたらよいのか。どうしよう）
佐平次はあせった。夢中で、行きつもどりつしはじめた。
と……。
左の樹間の彼方に、陽光が煌めいているのを見た。
近づくにつれ、その光の明るさに、佐平次は抵抗しきれなくなってきた。
佐平次の五体が危疑と懸念につつまれていただけに、彼は本能的に光をもとめていたのであろう。

樹林が、しだいに浅くなり、空間がひろがりはじめた。
ついに、樹林を出た。
そこは切り立った崖になっていて、はるか下方に渓流が泡を嚙んでいる。
崖と崖の狭間は二十メートルほどで、向こうの崖も鬱蒼とした樹林におおわれていた。
（ここは、どこなのか？）
あたりを見まわしたが、何もわからぬ。
狭間の頭上には真っ青に晴れあがった空が在った。
いずれにしても、あの〔逃げ穴〕のある場所からは、大分に離れたところまで、来てしまったらしい……）
のである。
（ああ……どうしたらよい、どうしたら……）
空間を当所もなく彷徨っていた向井佐平次の視線が、何かをとらえた。
（あ……？）
崖の下の渓流のあたりに、何か、うごいたものを見たような気がしたのである。
渓流の淵の岩間のあたりに、人影のようなものが、
（ちらりとうごいた……）
ような気がした。
（もしや……お江どのではないか？）

佐平次は崖のふちへ俯せとなり、一心に瞳を凝らした。
そのあたりは、日が翳っている。
何しろ三十メートルも下なので、視力がおとろえているいまの佐平次には、よく見きわめがつかぬのである。
と……。
やはり、うごいた。
岩間に、人の頭が見えた。女の頭である。
お江であった。
驚喜した佐平次が、よびかけようとして、おもいとどまった。
（徒事ではない）
と、感じたからだ。
お江は岩と岩の間に身を隠していて、それが、急にうごき出した。
そのとき、渓流の岸の木の間から別の人影があらわれるのを、佐平次は見た。
これは、男であった。
三十メートルもはなれた崖から見下ろしているだけに、顔かたちは佐平次の眼に定かではない。
男は、お江に気づかぬらしい。

佐平次は高処から俯瞰しているので、二人のうごきを共に見ることができるのだ。
三十メートル下の情景は、おのずとちがっていよう。
男は渓流へ片足を入れ、頸をのばし、あたりの気配をうかがっているようであった。
お江は、また、岩間に隠れた。
烈しい渓流の音が、男の聴覚を惑わせているらしい。それを利用して、お江が接近しつつある。
（あの男が、昨日、おれたちを追うて来ていたのか……？）
息をのんで、見つめているよりほかに、どうしようもない佐平次なのだ。
男が渓流の中へ躰を浸しはじめた。
渓流をわたるつもりらしい。
つまり、佐平次がいる崖下へわたって来ようとしているのだ。
男が胸のあたりまで水につかり、川をわたりはじめた。
押しながそうとする川水に逆らい、それでも、しっかりと姿勢をくずさず、男は渓流の中ほどまですすんだ。
そのとき、岩間から大きな魚が跳ねて飛んだ。
とっさに、魚としかおもえなかった。
人間の、しかも女の躰が、あのように跳躍するものであろうか……。
だが、それは、お江であった。

身を潜めていた岩間から、お江は渓流の中の男へ飛びついた。
身をくねらせ、大きく弧をえがいて飛んだお江の躰が、男の背後に落ち、その瞬間に振り向いた男のくろい顔の、大きく開いた口から、白い歯が妙にはっきりと佐平次の瞳孔へ飛びこんで来た。
二人の躰は、渓流の中に没した。
「あっ……あっ……」
われ知らず叫び声を発し、身を乗り出した足もとの土が崩れ、あやうく、崖下へ転落しかけて、
「うわ……」
佐平次は木の蔓にしがみついた。
もがいて、ようやく足場をさだめ、
（お江どのは……？）
渓流へ眼をやったとき、飛沫をあげて、お江の上体が水の中から飛び出した。
お江の手に、短刀らしき刃物が光っていた。
佐平次は、渓流の泡の中に赤いものを見たような気がした。
（血だ……）
そう感じたが、烈しい水流は、見る間にこれを押しながしてしまった。
岩に打ち当たりながら、俯せとなった男の躰が水にながされて行くのを、佐平次は見た。

（お江どのが、勝った……）

のである。

お江は刃物を口にくわえ、両腕を前後に大きく振りつつ、渓流を押しわたって行く。

そのとき、いま、お江に討ち取られた男が出て来た木の間から、別の男が一人あらわれた。

（また、来た……）

佐平次は、血が凍りつくような恐怖におもわず、

「お江どの。あぶない！」

わめいた。

お江が、その声に気づいたらしい。

岸へ這いあがり、佐平次の方を振り仰いだ。

「あぶない、あぶない」

男も渓流の中へ足を踏み入れながら、こちらを仰ぎ見ている。

「あぶない、うしろ……うしろ、あぶない！」

お江が男を見た。

男もお江を見たが、二人とも、あわてることなく、申し合わせたように、また、佐平次を仰ぎ見ている。

「そこを、うごくな！」

と、お江が佐平次に向かって叫んだ。

十

その男が、
（味方らしい……）
と知り、向井佐平次は安心をし、張りつめていた気力が一度に萎えた。
すると、全身の血が、にわかに引いてゆくようで、崖上の土へ倒れたまま、いつしか気をうしなっていった。
気をうしないつつ、
（これで、死ぬやも知れぬ）
そうおもったことを、おぼえている。
事実、佐平次は相当に出血していた。
まだ完全にふさがっていなかった腹の傷口から、じくじくと血がにじみ出し、夢中で樹林の中を這いまわっているうち、出血の量は増えた。
「これ……これ、佐平次どの……」
ゆり起こされたとき、佐平次を見つめている二つの顔があった。
お江と、味方らしい男である。
「ああ……」
「気がついたか。よかった、よかった」

「すまぬ、穴をぬけ出して……」
「よいわえ。すんだことじゃ」
日が、傾きかけていた。
依然、空は青くかがやいていたけれども、高い山肌の向こうへ落ちかかる日ざしは、もう、佐平次が横たわっている場所からはなれ、樹林の中は冷え冷えと暗い。
佐平次の躰を抱きしめたお江が、
「おお……躰が冷えてしもうた」
「どれ……」
男が、佐平次の腕をとり、脈搏をしらべてみて、
「弱っている」
と、つぶやいた。
佐平次は丸薬のようなものと、水を、お江から口うつしにのまされた。
お江の躰は、意外にあたたかかった。
そして、その躰は強烈な汗とあぶらの匂いを発散しており、さらに土の香りが濃かった。
お江は、着ているものが渓流の水にぬれつくしているので、諸肌ぬぎとなり、佐平次を抱きかかえている。
「これ、佐平次どの」
「う、うう……」

「このお人は、われらの味方じゃ。壺谷又五郎どのも承知のお人じゃ」
「うむ……」
「奥村弥五兵衛どのというお人じゃ。わかったかえ？」
「わ、わかった……」
「これ、どうした。しっかりせぬか」
「ね、ねむい……」
「これはいかぬ」
と、奥村弥五兵衛がいった。
先日、壺谷又五郎と共に岩櫃城を発した弥五兵衛は、おもいのほかに早く、お江とめぐり合ったことになる。
のちになって、佐平次にもわかったことだが、お江は佐平次を穴の中へ隠し、地蔵峠の忍び小屋へ向かった。
そして、小屋にいた奥村弥五兵衛と会い、すぐさま、追いかけて来た二名の〔敵〕を、今度は、こちらから追いもとめるかたちになった。
小屋には、真田家の草の者が三名ほどいて、彼らもお江たちに協力をした。
この三名は、弥五兵衛が岩櫃を発つときに、つれて出た者たちではない。
岩櫃の草の者は、すでに甲斐の国へ入り、お江の行方を探しているはずであった。
弥五兵衛は昨夜、小屋へあらわれたお江に、

「明後日は、小屋を発って、おれも深志から甲斐へ入るつもりでいた」
と、語った。
地蔵峠は、上田・塩田と深志をむすぶ行路の分岐点で、峠を越えて塩田平へ入れば、そこはもう、真田家の勢力範囲といってもよい。
このため、地蔵峠の忍び小屋は、真田家の草の者たちにとって、重要な〔基地〕であり、連絡所でもあった。
「お江どのが無事ならば、かならず、この道をぬけて来るとおもうていた」
と、弥五兵衛はいった。
なればこそ、まる二日を小屋に待機していたのであろう。
「これ、ようきけ、佐平次どの」
「ねむい……ねむい……」
「わたしは、これから引き返さねばならぬ」
「えっ……」
「一人、敵の忍びを逃してしもうたゆえ……」
「追うて行くのか、お江どの……」
佐平次はおどろき、夢からさめたように緊張した。
「そうじゃ」
「何故、そのようなまねをする」

「佐平次どのには、わからぬことじゃ」
お江は両眼を閉じ、軽く、かぶりを振った。
そのお江の横顔を、弥五兵衛が凝と見つめている。
「これは、わたし一人のことゆえ、自分ひとりで、始末をつけねばならぬ」
「何の始末を……」
「なんでもよい。佐平次どのは、これから弥五兵衛どのと共に行くがよい。もう大丈夫。弥五兵衛どのといっしょなれば、恐るるものは何一つない」
という声が何やら哀しげに、ふるえているようなのだ。
「どうしても行くのか。別に考えようはないのか？」
奥村弥五兵衛も、お江が一人きりで敵を追って行くことに、同意ではないらしい。
「これは、わたし一人のことじゃ、弥五兵衛どの」
お江は、また同じことをいうのである。
「どうしても行くというのなら、草の者に助けてもらうがよい。おれが岩櫃からつれて来て、いまごろは甲斐へ入っているはずだ」
「わたし一人のことゆえ、迷惑はだれにもかけとうない」
「はて、強情な……」
「強情でない草の者があろうか……」
弥五兵衛は苦笑をうかべたのみで、こたえなかった。

そして、お江の腕から佐平次を抱き取り、仰向けに寝かせ、傷所をしらべにかかった。
「どうじゃ？」
と、お江も顔をさし寄せてきた。
「うむ。膿んではおらぬようだな。これは、お江どのの手当てがよかったからと申してよい」
「伊那の権現山の忍び小屋には、よい薬が置いてあったゆえ、助かった……」
弥五兵衛は、自分の着物の両袖を引き裂き、佐平次の傷口へ当て、その上から、佐平次の帯をしめ直した。
激痛が五体をつらぬき、
「うわ……」
たまりかねてうめく佐平次の右手を、お江が、しっかりとつかみしめて、
「大丈夫か、弥五兵衛どの……」
「ともあれ、早く、地蔵峠の小屋へ運ばねばならぬ。おれの背中へ、そっと乗せてくれぬか」
「心得た」
お江は佐平次の躰を抱えあげ、弥五兵衛の背へ移した。
「よし。では行くぞ、お江どの」
「佐平次どのをたのみましたぞ」

「案ずるな」
この場から、お江は別れてしまうらしい。
「お江、どの……」
弥五兵衛の背中から、佐平次は幼児のような甘え声をあげ、お江へ右腕をさしのばした。
「おお、よし、よし……」
お江もまた、佐平次の亡母のような口調で、その腕をにぎり、
「おとなしゅうしていることじゃ」
ささやいてよこした。
「どうしても、行くのか？」
「生きてあれば、また、会えよう」
「死なないでくれ、お江どの……」
奥村弥五兵衛が、樹林の中に向かって歩みはじめたので、お江の手は佐平次の腕からはなれた。
「あっ……」
身を捩り、振り向こうとして、腹の傷の激しい痛みに、佐平次は悲鳴をあげた。
「しずかにしていろ。傷口が破れるぞ」
たしなめた弥五兵衛が立ちどまり、躰の向きを変えてくれた。
お江の姿が見えた。

お江は、狭間（はざま）をみたしている夕暮れの光を背後に、黒い影となって立ちつくしている。その姿は、すこし前までの、男にも負けぬ猛々（たけだけ）しさをそなえたお江のものではなく、たよりなげな、さびしげなものであった。

真田の庄

一

岩壁に穿たれた穴から湧き出している温泉は、板と丸太を組み合わせた四坪ほどの浴槽から惜しげもなくあふれていた。

ふとい柱にささえられた板屋根の浴舎は、まことに素朴なものだが、この温泉のゆたかさ、すばらしさは向井佐平次にとって、瞠目すべきものであった。

はなしには聞いていても、温泉に身をひたしたことは、かつて一度もない。

（これが、地から湧き出る温泉というものか……）

日に二度ほど、温泉へ身を沈めるたびに、感嘆せずにはいられない。

（いで湯とは、まことに、ぜいたくきわまるものだ）

であった。

戦陣の間はむろんのこと、古府中城下の足軽長屋に住み暮らしていたときでも、湯をわかして入浴するのは月のうちに三度か四度で、夏になれば、川での水浴が当然だったのに、ここでは、昼も夜も、とめどなく温泉が湧き、あふれ出ている。湯浴する人のあるなしにかか

わらずである。

浴舎には、温泉の硫黄の匂いが、湯けむりと共にたちこめていた。

（いまごろ、お江どのは、何処にいるのだろうか……？）

このことを、おもわぬ日はない。

温泉に入るたび、物を食べるたび、ねむるたび、起きるたびに、佐平次はお江のことをおもいうかべる。

お江と別れてから、十日ほどが経過していた。

あれから、佐平次を背負った奥村弥五兵衛は、地蔵峠を東へ下った鞍部に在る忍び小屋へ行った。

そこには、三人の草の者がいて、すぐさま、佐平次の傷の手当てにかかった。

痛みをおぼえるよりも、極度の疲労が襲いかかり、佐平次は昏々とねむった。

暗く、深い穴の底へ引きずりこまれるような感覚で眠りの中へ落ちて行きながら、

（おれは、このまま、死んでしまうのやも知れぬな……）

と、おもった。

半ば意識をうしないかけている佐平次の耳へ、奥村弥五兵衛が草の者たちへ、

「おれは、甲斐へ行って見る。今日のことを、岩櫃の城代様へおつたえしてくれ」

という声が、きこえたことをおぼえている。

事実、それから三日ほどは、

「うまく助かるかどうか、知れたものではなかったぞ」
と、草の者の小助から、のちになって聞かされた。
小助は細っそりとした躰つきの、壮年の男で、佐平次の治療を一手に引きうけてくれた。
あとの二人は、それぞれに小屋から出て行ったり、もどって来たりしていた。
この三人のほかにも、数名の男たちが出入りしていたし、一夜を泊まって行くものもいた。
いずれも、百姓か木樵の姿をしている。
杉の密林に囲まれた忍び小屋は、権現山のそれとはくらべものにならぬ。
五坪ほどのひろさがあるし、屋根裏にも、人が寝泊まりできるようになっていた。
佐平次が、長いねむりからさめたとき、奥村弥五兵衛の姿は、すでに小屋から消えていた。
「まる二日の間、ねむりこけていたのだ」
と、小助がいった。
小助は、木の実のような両眼に優しげな光をたたえ、凝と佐平次の顔を見まもりながら、
「これがもし、草の者の手当てを受けなんだら、おぬしは、二度とねむりから目ざめなかったろうよ」
と、わずかに得意げな色を、顔にうかべて見せた。
佐平次は六日ほど、忍び小屋に寝たきりであったが、七日目の朝になり、
「これなら、大丈夫」
傷口をしらべて見た小助が、大きくうなずき、

「佐平次どの。別所の温泉へ行くぞ。そこで、いましばらく躰をやすめることだ」
「べっしょの、ゆ……？」
「いで湯のことよ」
「はあ……」
温泉といわれても、佐平次には実感がともなわなかった。
その朝。
小助は佐平次を背負い、忍び小屋を出た。
細くて長い小助の背中は、肉置きが堅く引きしまってい、板のような感触をつたえてきた。すっかり痩せおとろえてしまった佐平次の胸や腹が、その背中の圧迫に痛みをおぼえたほどである。
曲がりくねる山道を、小助は息も切らさずに下って行く。
「佐平次どのは、壺谷又五郎様の縁者か？」
「いや、別に……」
小助は又五郎を「様」とよんだ。
そこに敬愛の念がこもっている。
「いずれにせよ、又五郎様にとって大事の人であれば、おろそかにはできぬ」
「すみませぬ」
「なんの、なんの……」

「実は、私にもわからぬのです」
「何が？」
「どうして、壺谷又五郎どのが、私を、大事にあつこうてくれるのか、それが……なんでも、又五郎どのは、私の亡父と親しかったようなのですが……」
「同じ武田の御家に仕えていた身じゃもの。それだけで充分ではないか」
ここ数日の間に、山々は姿を一変させていた。
うす緑色の靄のようなものに包まれ、土の香りのみか、物の芽のふき出る生ぐさい匂いが山道にたちこめている。
名も知らぬ草花も咲いていた。
（ああ。おれは、生きていた……）
つくづくと、そうおもわずにはいられなかった。
高遠城で嗅いだ土の春の香りは、佐平次の〔死〕とむすびついていたが、いま、胸いっぱいに吸い込んでいる春の大気は、彼の〔新生〕に直結している。
そのときの自分を、後年になって向井佐平次は、こう語っている。
「御当代様（武田勝頼）が天目山で自害なされたことは、地蔵峠の小屋で、小助殿から聞いた。お気の毒とはおもうたが、武田の御家がほろび消えたことは、すでに、わかっていたゆえ、さほどのおどろきもなかった。それよりも、死にかかった一命を取りとめ、日毎に躰のちからがもどって来るし、食物もうまく、われながら手足の肌の色がよみがえってくるのを、

はっきりと知った。

こうなると、やはり、生きていてよかったと、おもうた。行く手のことは知らず、また、わけも知らぬながら、又五郎殿やお江どのの口ぶりから察して、これからは真田安房守様へ奉公をし、またも長柄組へ入れていただき、精根のつづくかぎり、はたらいてみたいとおもうたものだ。そうなると、お江どのも何やら生きてもどってくれるような気がしたし……それに、行方も知れずとなった叔母のもよや従妹のたまにも、かならず、いつの日にか、めぐり合えるような気がした」

二

別所に、安楽寺という禅寺がある。

小助は、この寺へ佐平次を連れ込んだ。

安楽寺へは、真田安房守昌幸が寄進を絶やさぬので、真田家のために、いろいろと便宜をはかってくれるのだそうな。

藁屋根の黒門を入ると、突き当たりに、これも藁屋根の本堂があった。

安楽寺は、鎌倉の時代に、宋の国から日本へ帰った留学僧の樵谷惟仙が開いたものとつたえられる。

「そのころは、もっと境内もひろく、いろいろな御堂もたくさんにあったと聞いている。その後、火にもかかり、むかしの面影はないが、裏山になまことに見事な三重塔があるぞ。

その塔だけは、むかしむかしのままじゃとよ」
と、小助が説明をしてくれた。
佐平次は僧房の一間をあたえられ、小助の介抱をうけた。
「いつまでも、私の傍にいて下されてありがとうござるが……かまいませぬのか？」
「おれのことか、かまわぬとも」
「これより、私は、どうしたらよいのでしょう？」
「わからぬ。いずれにせよ、岩櫃の御城へ佐平次どのが此処にいることをつたえてあるゆえ、追っつけ、指図がとどくだろうよ」
「わかりました」
草の者の小助は、むだな口をきくことはないが、介抱の一つ一つに親愛がこもっている。
小助は佐平次に好感を抱いたらしい。
また、佐平次も、小助と語るよりも、ねむりこけるほうが多かった。
「よう、ねむることよ」
小助が、あきれた。
食べてねむり、ねむりからさめるたびに、体力が充実してくるのを佐平次は感じた。
「この近くに、塩田の城があって、そこも真田家の城のようなものだ。安心しているがよい。むかし、このあたりでも、ずいぶんと激しい戦があってな。これが鎮まるまでには、武田の御先代様（信玄）も、真田の御屋形も、それは大変な苦心をなされたものよ。さようさ。お

れの兄も、そうした戦の中で死んでしもうたが……」
目を半眼にして、小助は淡々と語るのである。
ときに小助は、
「おとなしゅう、ねむっておれよ」
そういって、安楽寺を出て行くことがあった。
昼すぎに出て、まだ日が沈まぬうちに帰って来る。
「どこへ？」
佐平次が問うと、
「真田の庄まで行って来た」
「それほどに、近いのですか？」
「七里は、あるまいな……」
「小助どのの足は、ずいぶんと早い」
「草の者の間では、遅いのだよ、おれの足は……」
「私も、真田の庄へ行くのでしょうか？」
「それは、わからぬ」
それにしても、真田家では〔草の者〕を非常に大切にしていることが、佐平次にも看てとれる。
草の者が〔忍びの者〕であることを、いまや佐平次は、わきまえていた。

これまでの、佐平次の浅い経験でも、忍びの者が大名や武将に、どのようなあつかいをうけているかは歴然としている。

高遠城内でもそうであったが、彼らの間諜活動に対し、武士たちは一様に軽侮の眼を向けていたものだ。

彼らの活動を必要としながらも、

「地潜りめが……」

などと吐き捨てるようにいう将兵を、高遠城内で、佐平次は何度も見ている。

城内の法憧院曲輪に、武田忍びの仮小屋があり、戦陣のこととて、彼らが出入りするのを将兵たちはにがにがしげに見やっていた。

彼らもまた、他の将兵たちへは絶対に近づかず、あくまでも孤立しつつ、それが当然のように、いのちがけではたらいていたのである。

しかし、お江や弥五兵衛や小助を見ていると、佐平次が見て来た武田忍びとは、まったくちがうのびやかさがあるのを否定することができない。

忍びの者は、知行も俸禄も貰えず、家臣としてあつかわれぬという。そのかわりに、金品の報酬が多いのだとも聞いている。

真田における〔草の者〕は、どうなのであろう……。

「さて、明日は、裏山へのぼり、三重塔を見せようかな」

と、小助が佐平次を背負い、浴舎へつれて来てくれたのは、つい先刻のことだ。

「おれが迎えに来るまで、ゆるりと入っているがよい。寺へ帰ったら、夕餉だぞ」
湯壺へ入れた佐平次を残し、小助は何処かへ出て行った。
別所の温泉は、いま、佐平次が入っている浴舎のほかに、三カ所の湯源があるそうな。
このあたりの村人はもとより、その効能を知っている人びとが、遠く上方や中国すじから湯治にやって来ることもあるという。
効能は、佐平次の切り傷にもよいし、種々の躰の痛みや胃ノ腑の病にもよい。
旅宿はない。
湯治する者は近辺の農家や寺へ泊まる。
別所は古代からひらけたところで、往古には〔七久里の湯〕ともいわれていた。天神岳の山ふところにある別所は夫神岳・女神岳とよばれる二つの山の下にあって、しずかに湯けむりをあげている。

明るんでいた窓が湯けむりを吸いあげているように見えたのが、いつの間にか、白い湯けむりだけが窓の口をふさいでしまったかのようにおもえた。
夕暮れが来たのだ。
浴舎の中が暗くなり、
（小助どのは、どうしたのか……？）
佐平次は湯壺から出て、窓へ近づいて行った。

夕闇が意外に濃い。
佐平次が入浴するとき、これまでは小助が、かならず共に温泉へつかった。
（遅い。何か、間ちがいでも……？）
急に、不安がきざしはじめた。
お江との脱出行で、こうした経験を何度も味わってきているだけに、
（よいことのつぎには悪いことが……安心のつぎには、かならず心配が来る……）
と、おもいこむようになって来ていたのやも知れぬ。
浴舎の窓の外は、わずかな空間をへだてて崖になっている。
その空間へながれ出た湯けむりが外の冷気に散ってゆくさまを見つめているうち、向井佐平次は、わけもなく眼が熱くなってきた。
そこは、まだ、なんといっても十九歳の若さであった。
同じ十九歳でも、高遠の城将として最後まで戦いぬき、最後は本丸居館の大広間で腹を掻き切り、腸をつかみ出して壁へ投げつけた仁科五郎盛信とは、くらぶべくもない。
佐平次は、まだ、少年の名残を身心にとどめていた。
と、そのとき……。
音もなく、浴舎へ入って来たものがある。
浴舎には、冬でも戸がない。
だれでも、出入りが自由であった。

出入りの戸口は、いま、佐平次が顔をのぞかせている小窓の反対側にあった。
そこから、一人の男が入って来た。
うす暗い上に湯けむりがたちこめている浴舎の中ゆえ、男の顔かたちも定かではない。
佐平次は男に背を向けている。
まったく、気づかない。
男は髪を無造作に束ねてい、袴もつけてはいぬが、大小の刀を腰に帯していた。素足のまま入って来て、するすると着物をぬぐ。
小柄であるが、筋骨はたくましい。別所へ通りかかった旅の牢人のようにもおもわれた。
男は、音をたてぬように温泉へ身を沈め、窓際で悄然とうなだれている向井佐平次の後ろ姿を凝視している。
どれほどの時間がすぎたろう。
「おい……」
たまりかねたように、男が声をかけた。
「あっ……」
振り向いた佐平次が驚愕の叫びを発した。
「これ、どうした……？」
「小助どの。小助どの！」
佐平次は連呼し、腰を低く身構えた。

身には一糸もまとっていないし、何一つ武器を持ってはいなかった。
「何、小助だと……」
「小助どの、来て下され。小助どの……」
「うろたえるな。おれは、お前の敵ではない」
と、男の声が生き生きとして、
「ま、湯へ入れ。春になったとは申せ、このあたりは日暮れから冷ゆる。さ、入れ。入れ」
「旅のお人か？」
問うた佐平次へ、男の顔が湯けむりの底でうなずき、
「そのとおり」
「あ……」
安堵（あんど）のためいきが、おもわず出た。
「敵に追われているのか？」
「いえ……ちがう」
「では、何で、おどろく？」
「あまり、急に……」
「急ではない。おれは、すこし前から、ここで、お前を見ていた」
「えっ……」
男が、ふくみ笑いをもらし、

「お前は、ひとりか？」
「さよう」
佐平次は、すこしずつ、湯壺の中へ入っていった。
どこかで、馬の嘶きがきこえた。
佐平次が、はっと湯壺の中で腰を浮かせた。
男が愉快そうに笑い、「おれの馬だ」と、いった。

三

「お前、いま、小助の名をよんだな」
と、小柄な牢人が佐平次に問いかけてきた。
その声が、意外に若わかしい。
落ちつきはらい、妙に威張った物の言いかたをするくせに、口調が磊落である。
湯けむりを透して見える牢人の胸のあたりの肉置きが、もりあがっていた。
顔は、まだ、よくわからぬ。
「ま、もちっと、こちらへまいれ」
「は……」
「小助を、どうして知っている？」
佐平次は、おもいきって、

「お前さまのお知り合いか？」
と、反問してみた。
「おお、いかにも」
「お前さまは、旅のお人ではないのか？」
「ああ、そうだ」
うなずいた牢人が、
「ははあ、そうか……」
急に、何かおもいあたったことがあるらしく、湯壺の中に立ちあがり、佐平次へ近づいて来た。
「あ……」
本能的に、湯けむりを乱して逃げようとする向井佐平次の腕が、牢人の手につかまれた。
「う……」
おもわず、佐平次はうめいた。
おそろしいほどの握力である。
「や、すまぬ」
「う、う……」
「痛かったか？」
「な、何の……」

「わかったような気がする……」
いいさして、牢人が佐平次の顔をのぞきこむようにした。
このとき佐平次は、はじめて、牢人の顔を間近に見た。
そして、おどろいた。
顔は、まだ少年のものといってよい。
佐平次も、いくらかは少年の面影を残しているけれども、
（な、なんだ。おれよりも年下の……まだ、子供ではないか……）
であった。
すくなくとも佐平次には、そう見えた。
これでは〔牢人〕ともいえまい。
「お前は、地蔵峠から来たのだな？」
と、少年がいう。
「し、知らぬ」
「ふ、ふふ……」
いたずらめいた含み笑いをして、
「安心をしろ。おれは、どうやら、お前の味方らしいな」
少年が、そういった。
「味方……」

「おお……」

依然として、少年は威張っている。

（なんだ、このような子供に、おれは虚仮にされて……）

くやしかったが、おもわず、つりこまれた佐平次が、

「では、おぬし、小助どのの知り合いか？」

「うむ、うむ」

「だれだ？」

「真田源二郎」

「え……？」

その名は知らぬが、真田の姓は知っている。

（では、この子供……真田様に縁がある家のお子なのか？）

佐平次は、狼狽した。

「草の者のお江が、子供をひとり、甲斐から連れもどったということを、おれは今日、砥石の城で聞いた。それが、お前だな。よし、名は何と申す？」

声は少年のものだが、態度には威厳があって、佐平次も足軽奉公をし、戦場へも出ただけに、

（これは、よほどの家の子だ）

と、おもわざるを得ない。

年下の少年に自分のことを「子供」とよばれ、うろたえてしまい、佐平次は身をすくめ、頭を下げ、
「向井佐平次と申します」
「よし、わかった。や……？　その腹の傷は、どうした？」
「は……あの……」
「あの？」
こうなれば、もう仕方がないと覚悟を決めた佐平次が、
「伊那の高遠城の合戦にて受けた傷で……」
こたえると、真田源二郎が瞠目し、
「何、高遠で戦うたと……？」
「はい。小山田備中守様の長柄組に入っておりました」
「ほう。備中殿の……それは、大変なことであったな」
源二郎の声が、いたわりをこめたものに変わった。
「それは、よう、はたらいてくれた。おれからも礼をいおう」
「と、とんでもない……」
なんとなく、佐平次は泪ぐましい気持になってきて、うつむいたまま、しばらくは顔もあげられなかった。
「よいわ、よいわ。ま、湯へひたるがよい」

源二郎は佐平次の肩をやさしく押して、その躰を湯壺の中へ沈めてやり、
「よう生き残れたな。めでたい、めでたい」
何度も、佐平次の肩のあたりを撫でてくれるのである。
十九歳の佐平次は、年下の少年にやさしくいたわられ、なぐさめられ、わけもなく泪にぬれた。
（おれというやつは……ほんに、気の弱い男なのだな）
つくづくと、そうおもうのだが、このときは年下の源二郎が、十も十五も年上の男に感じられたのであった。
それにしても、この少年は、まことに真田源二郎なのか……。
真田安房守昌幸の次男の、源二郎なのであろうか。
そのとおりであった。
間もなく、浴舎へ入って来た小助が、
「やあ、佐平次。おそくなってすまなんだ。地蔵峠の小屋へ出かけて、お前の、これからの身の振り方につき、いろいろと談合して来たものだから……」
いいながら、着物をぬぎかけ、
「や……？」
はっと身構え、
「何者だ？」

するどく、源二郎を誰何した。
「小助。この者の身の振り方は、もう決まった」
と、源二郎が小助に顔を見せた。
「あっ……若様ではございませぬか」
「久しいな」
「ま、まことに……」
「元気で何よりじゃ」
「おそれ入り……そ、それにいたしましても、御供の者は？」
「おらぬ」
「ま、まさかに……」
「ひとりよ。ここの温泉へ入りたくなり、だまってぬけて来た。前に、兄上と共に来たときは、五年前の秋のころであったが……」
「いずこより、おいでなされましたか？」
「昨日から砥石へ来ておる。岩櫃にいても、退屈なのでな」
事もなげに、源二郎がいうのだ。
「これ、佐平次……」
あわてて、着物の前を掻き合わせつつ、小助がいった。
「若様の御側で、湯につかっているやつがあるか。何をしている、早くあがれ。あがれ」

「は……」

佐平次が、ななめに身をよじり、周章して這いあがろうとする臀部を、源二郎がひたひたと叩き、

「出なくともよいわ」

「若様……」

「小助。お前も入れ。かまわぬ。入れというたら入らぬか」

「は、はい」

小助も、ついに裸体となり、同じ湯壺へひたることになってしまった。

佐平次は、驚倒している。

（こ、このようなことが、本当にあるものなのだろうか？）

家柄や身分の上において、高遠城主だった仁科盛信については、むろん、真田源二郎とはくらべようがない。

盛信は、真田家にとって主筋にあたる武田信玄の五男であり、高遠城主であった。おそらく、源二郎が盛信の前へ出たとしても、同じ浴槽に身をひたすことなど、おもいもよらぬことであったろう。そして、それがそのまま、いまの源二郎と佐平次にあてはまる。いや、盛信と源二郎の立場にくらべて、佐平次の場合は、まったく、問題にならぬといってよい。

しかも、源二郎にすすめられると、草の者の小助が、あまり悪びれもせずに、湯壺の中へ入って来たではないか……。

（真田様の、これが御家風なのか……）

どうかは、いまの佐平次にとって、まったくわからぬ。

高遠城内で、佐平次が二、三度、見かけたことのある仁科五郎盛信は、

（これが、おれと同年の大将……？）

どう考えても、信じられなかったものだ。

髭をたくわえ、茶がかった双眸がらんらんと光り、侍臣を従えて悠然と歩む武装の仁科盛信を、長柄足軽の佐平次たちは、ただもう恐れ入ってひれ伏し、通りすぎるのを待つのみだったのである。

それが真田家では、主・安房守昌幸の〔若君〕が、ひとりきりで気まま勝手に温泉へ入りに来たり、袴もつけぬ着物の裾をからげて馬へまたがり、好き自由にあたりを駆けまわっている……としか、おもえない。

そればかりか、武士の中で、もっとも身分が軽い佐平次や、草の者の小助と、何のこだわりもなく、入浴をたのしんでいる。

これは、事実だ。

まぎれもなく佐平次が、いま、おのれの眼によってたしかめたことである。

「おれは、この向井佐平次が気に入った。よし、おれがもらい受けよう。このことは、おれから父上にも申し上げておく。そうしておけ。それでよい、それでよい」

と、真田源二郎が小助にいう声を、向井佐平次は夢うつつに聞いていた。

そのうちに、ぐらりと佐平次の頭が湯の中へ沈んだ。
あまりに長時間を湯壺につかっていたので、湯あたりを起こしたのであった。

四

小助が佐平次を背負い、安楽寺の僧房へ運びこんだとき、真田源二郎も後からついて来た。
栗毛の馬にまたがった源二郎は、尻をからげた腰へ大小の刀を差しこみ、素足に藁草履をはいている。
これには、小助も呆れた。
風体を見ただけでは、戦うべき場所もなく、しかるべき主人も持たぬ溢れ牢人そのものなのである。
こうした牢人は諸国に増える一方で、彼らが隊を組み、野臥りや盗賊と化し、町や村を襲うので、領主たちも頭を痛めているそうな。
「おい、小助。腹がへった。何か食わせろ」
などと、源二郎が僧房で乱暴な口をきく。
こういうところに、源二郎の無邪気さが「たまらなく、よく、あらわれている」と、のちに小助から聞かされた佐平次は、何が「たまらなく……」なのか、はじめのうちはよくわからなかった。
「粟粥しか、ございませぬが……」

「よいとも。早く、食わせろ」
「はい。すぐさま、お仕度を……なれど源二郎様。砥石の城では、御一同さまが御身を案じておられましょう」
「おれを探しまわっているだろうよ。だが、まさかに、別所へ来ているとはおもうまいな」
源二郎は得意である。
「私めが困りまする」
「何故？」
「あとになって、お叱りを受けまする」
「ばかを申せ。お前には関わり合いのないことよ」
「なれど……」
「佐平次のぐあいは大丈夫のようだな。二日三日のうちに、砥石へ連れてまいれ」
「かしこまりまいた」
「おい、早う粥の仕度をせぬか」
「ただいま……」
「安心しろ。粥を食べたら、もう、ねむる」
「えっ。では砥石へ、おもどりになりませぬので？」
「明日の朝でよいわ」
「では、私が、このことを一応、砥石へお知らせを……」

「砥石まで行くことはない。地蔵峠の小屋にいる草の者が、もしやすると、此処へあらわれよう」

と、源二郎がいうのだ。

「何故、地蔵峠の草小屋の者が……？」

「おれは何度も、草小屋へ行っている。砥石へ来るたび、あそびに出かけている。もっとも、供をつれてだが……」

「ははあ……」

小助は源二郎の鋭い推測に感心をした。

源二郎は、兄の源三郎とちがい、草の者の活動に、いたく興味をそそられ、彼らの、常識をこえた肉体の機能を讃嘆してやまない。

以前は、しきりに父・昌幸へ、

「私を草の者の頭にしていただきたい。さすれば、どのようにも、父上の御役に立つことができます」

せがみぬいたということだ。

源二郎にはあまい父親の真田昌幸も、このときだけは苦い顔つきになり、

「ならぬ」

きびしく、はねつけてしまった。

「それでな、小助。砥石からは、きっと、地蔵峠の草小屋へ、おれを探しに行くだろう。そうなれば、草の者のことゆえ、こちらへ……つまり、お前のところへも知らせが来る。草小屋の者たちは、おれが別所の温泉が好きなことを知っているはずだ」

と、源二郎が粟粥を食べながら、そういった。

「ははあ……」

「そういうことだ、小助。おれだとて、行く先がわからぬようにはしていない。な、そうだろう」

「はい。それは、まあ……」

果たして、それから間もなく、地蔵峠の小屋に詰めていた七郎という若い草の者が、安楽寺へあらわれた。

すでに、夜に入っている。

寺の門も僧房の戸口も堅く閉ざされている。

だが、七郎は案内も請わず、猿のように塀を飛びこえ、小助と佐平次がいる部屋の外庭へ来て、ひそやかに戸を叩き、

「小助どの。七郎でござる」

と、声をかけた。

「ほれ。な……」

源二郎が、得意げに笑う。

佐平次は、うつらうつらと夢の中をさまよっている。
小助が戸を開けると、一陣の風が吹き入ったかのように七郎があらわれ、
「やはり、ここにおわしましたか」
源二郎へ平伏をした。
「砥石から、たれぞ草小屋へ行ったのか？」
「はい」
砥石城から、源二郎を探しに出た家来たちは、地蔵峠へ立ち寄ったが、見当たらぬので去ったという。
「それでよい。あの者たちも、実は、さほどに、おれのことを案じているわけではないのだ。間もなく帰って来るにちがいないと、おもいこんでいる」
たしかに、そうしたところも、
（ないではない）
と、七郎はおもった。
先刻、砥石城から来た二人の士も、
「もしも、この小屋へ見えられたなら、すぐさま、おもどり下さるよう、源二郎様へ申しあげてくれ」
といったのみで、さほど緊張をしている様子もなく、すぐに小屋を出て行ったのだ。
源二郎は、いま十六歳になるが、二年ほど前から単独で何処かへ出かけ、何処かに泊まっ

て帰ることがたびたびとなった。
後年の大名の家では、おもいもおよばぬことだが、戦国の武将の子が単騎、野外へ飛び出して行くことなど、めずらしいことでもない。
「なれど、城を明けるのはいかぬ」
と、真田昌幸が源二郎をいましめた。
遠くまで行きすぎて日が暮れると、一泊せぬわけにはゆかぬらしい。
源二郎は、領内から外へ出ては行かぬというが、領内だとて、隅から隅まで領主の威令が行きわたっているわけではないのだ。
兄の源三郎には、弟のような言動がほとんどなかった。
無口で怒ることもなく、また、声をあげて笑うこともない。
子供のころから物静かであって、父母の叱責をうけることは、ほとんどない。
「子供らしゅうもないやつ」
父・昌幸は源三郎について、
「そのくせ、源二郎とは頭を寄せ合い、ひそひそと何やら、あきれるほどの長話をしておるがふしぎじゃ」
と、いった。
「おりゃな、小助。七郎。ひとりきりで、おもいきり馬を走らせていると、風が躰の中を吹きぬけるようなおもいがする」

と、源二郎はいった。

そこまではよいのだが、つぎに、

「その風が、おれの躰を吹きぬけるとき、おれの心ノ臓や腸や肝が、風といっしょに躰の中から外へ飛び出してしまうような気がして、まことに凄まじく、こころよい」

というのだ。

十六歳の少年の言葉として、この言葉は尋常の表現とおもえぬ。内臓が吹きぬける風と共に躰から飛び出して行くという感覚も異常なら「凄まじく、こころよい」という物のいいぶりも、小助と七郎には何か奇妙におもわれる。

源二郎は、たのしげに語りつづける。

小助と七郎は、顔を見合わせた。

五

同じ夜。

上州・岩櫃の城へ、甲斐の国からの急報が入った。

この報をもたらしたのは、甲州に残存し、このたびの戦争の大勝利に酔っている織田軍の、その後の動向を探っていた真田家の草の者であった。

去る三月二十三日。

上の諏訪の法花寺に本陣をかまえた織田信長は、味方の諸将の論功行賞をおこなった。

「こたびの勝利は、三河守殿が長年にわたり、武田の攻勢をささえぬいてくれたからである」

ときには、凄まじいばかりの傲岸な言動をあえてはばからぬ織田信長が、そういって徳川三河守家康を称揚した。

これは、隠れもなき事実だ。

徳川家康が滅亡の一歩手前まで落ちこみつつ、単身で、武田信玄・勝頼父子の猛攻をこらえぬいてくれたからこそ、信長は美濃・近江を平定し、上洛を果たし、日本の首都（京都）の経営をおこなうことを得た。

さすがの信長も、三河守家康の実直無類の忠誠と、辛抱の強さに瞠目したものと見える。

これほどにたのもしい同盟者が、他に存在するであろうか……。

そしてまた、十二年前の近江・姉川の戦争において、家康の救援がなかったら、おそらくは信長は敵（浅井・朝倉軍）の猛攻をささえ切れず、

「わが首を、獲られていたやも知れぬ」

のである。

古府中に入っていた徳川家康が穴山梅雪斎をともない、上の諏訪の信長本陣へ挨拶にあらわれたとき、

「ようも、ようも……」

信長は、みずから出迎えて家康の右手を、わが両手で包みこむように握りしめ、これを何

度も打ち振りつつ、

「ようも、これまで、辛抱をして下されたな」

興奮を抑えきれぬ体であったという。

信長は、武田家を討滅したことによって、

「天下平定の熱望」

を、八分通り成しとげたとおもったろう。

残る二分は、中国と九州の経略であったが、

「積年の、武田家と争うて来た苦労にくらべたなら、いうもおろかなことよ」

と、いったそうな。

ところで、家康のうしろにかしこまっている穴山梅雪斎（信君）は、故武田信玄の姉聟（あねむこ）にあたる。武田勝頼には伯父というわけだが、彼は早くも武田の命運に見切りをつけ、また、自分の進言を甥（おい）の勝頼が、

「到底、聞きいれてはくれまい」

と、おもいきわめ、徳川家康と通じ、主家と主人を裏切り、家康の甲州攻めの案内をつとめた。

織田信長は、こうした内応者を、ことのほかに嫌（きら）う。

だが、それをよくわきまえている家康が穴山をかばい、取りなしたものだから、信長もわべはこころよく、穴山梅雪斎を引見（いんけん）したのである。

このとき穴山は、おのれの死が目前にせまって来つつあることを、まったく知らない。
また、天下人の栄光を至近にのぞむ四十九歳の織田信長も、約二カ月後に自分を待ちかまえている狂暴な死の手を夢にもおもわぬ。
徳川家康の体面を慮かり、穴山梅雪斎をゆるした織田信長だが、武田勝頼を裏切って天目山に自殺せしめた小山田信茂については、
「汚き男め。ゆるせぬ！」
激怒して小山田を捕らえ、殺してしまっている。
ともあれ論功行賞の第一位は、徳川家康である。
かねてからの約束どおり、信長は家康に、駿河の国（静岡県）をあたえた。
家康にひきかえ、小田原城主・北条氏政に対して、織田信長は不快を隠そうともしなかった。
北条氏政には、
「関東口から甲斐へ攻め入られたし」
と、信長が指令を送っていた。
しかし、氏政はなかなかに兵をうごかさなかった。
どうも氏政は、甲州攻めに意欲的でない。
自分の妹が武田勝頼の妻だということもあったろう。
だが、関東の盟主を自負している北条氏政にとって、信長の下に屈従したかたちで戦うこ

とは、あまりこころよいものではなかったらしい。

祖父・氏綱や父・氏康にくらべると、北条氏政は、はるかに劣っている。その凡庸さは、父・信玄と比較されたときの武田勝頼よりも見劣りがする。勝頼には戦将としての豪気があって、その敗北の仕方にもいさぎよいものがある程度は感じられる。

北条氏政は、天目山で勝頼夫妻が自決したことを知るや、すぐさま、兵を引いて小田原へ帰ってしまった。

それでいて、やはり、内心では織田信長を怖れている。

ひそかに、氏政は手をまわし、信長へ対面を願おうとした。

「会わぬ」

一言のもとに、信長は拒否した。

さらに、

「中国を平定したのちは、関東の北条をこらしめてくれる」

と、いった。

このような信長本陣での情況が、ほとんど、岩櫃にいる真田昌幸の耳へ急報された。

おもいのほかに、真田家の諜報網はととのっていたようである。

北条氏政への、信長の怒りは激しかった。

自分の意にかなわぬものは、あくまでも冷酷にこれを追及し、弾圧を加えるのが、織田信長であった。

徳川家康につづいて、木曾義昌が、木曾谷二郡を、
「これまでどおりに……」
安堵された。
義昌の、開戦当初の活躍を信長は高く評価している。
上の諏訪の本陣へあらわれた木曾義昌が、駿馬二頭を信長に献じるや、
「さぞ、辛かったことであろう」
信長は、ねんごろに義昌をいたわり、太刀一振に黄金百枚をあたえた。
これは、木曾義昌が武田家へ〔人質〕として差し出していた母と息子と女を犠牲にして、木曾谷をまもりぬき、信長に味方したことへのいたわりである。
罰するときは一片の情をもかけぬ信長だが、味方の犠牲には細心な目をとどかせ、決して見すごしにはせぬ。それが木曾義昌への褒賞の仕方によくあらわれているとおもう。
織田信長は、先鋒軍をひきいて伊那・高遠を落とした息・信忠の戦功に対し、何の褒賞もあたえなかった。
「信忠は、いずれ、自分の跡をついで天下人となる男じゃ。いまさら誉め称えてもはじまらぬことよ」
であった。
信忠はまた、父の処置にいささかの不服も抱かぬ。
伊那の国は、毛利河内守へあたえられた。

甲斐の国は、信長の父・信秀のころから織田家に仕えてきた重臣・川尻肥前守秀隆へあたえられ、信州の一部を森長可が受けた。

そして……。

高遠攻めに勇戦した滝川左近将監一益が、信州の一部と上州一国をもらいうけた。真田昌幸の勢力圏へ織田信長の命によって、森・滝川の両将が入って来ることになったのである。

滝川一益は、信長に仕え、諸方に転戦し、戦功が大きい。

森長可にあたえられたのは、信州の内の高井・水内・更科・埴科の四郡で、滝川一益は上州と信州の内の佐久・小県の二郡をあたえられた。

この小県の一郡こそ、真田家の本拠といってよい。

甲斐から岩櫃城へ馳せつけて来た二名の草の者は、およそ、これまで書きのべてきたことを、真田昌幸に告げたのであった。

六

「三十郎。わしは、沼田の城へまいろうとおもう。どうじゃ？」

と、真田安房守昌幸が、矢沢頼康にいった。

場所は岩櫃城・居館内の、例の〔地炉ノ間〕であった。

甲斐からもどって来た草の者は、すでに草屋敷へ引き下がっている。

炉には、まだ、火が燃えていた。

すでに、季節は春から夏へ移ろうとしているのだが、高原の夜の冷気は、ときに冬をおもわせるものがある。

「父上は、沼田にまいられたほうが、よろしいとおもいます」

このときまで、沈黙していた長男の源三郎信幸（げんざぶろうのぶゆき）が、急に口をさしはさんだ。

矢沢頼康が、

（めずらしいことがあるもの……）

とでもいいたげに、源三郎を見やってから、その視線を真田昌幸へ移した。

昌幸は、不快げに押し黙っている。

十七歳の源三郎に、

「子供の知ったことではない」

そういいたいところなのだろうが、何やら、いいきれぬらしい。

また、子供だとおもうのなら、何も、わざわざ地炉ノ間へ呼びつけ、草の者の報告を聞かせなくともよいはずであった。

そうした昌幸の意中が、矢沢頼康には、どうもわからぬ。

これがもし、二男の源二郎信繁（げんじろうのぶしげ）がいい出たことなら、

「おお。お前も、そうおもうか」

満足そうに、昌幸はうなずいたにちがいない。

源三郎・源二郎兄弟について、矢沢頼康は、家臣として口外すべきではない、一種の秘密

めいた一事を知っている。

これは、七年ほど前に、父の矢沢薩摩守頼綱から、

「これは、おぬしの耳だけへ洩らしておきたい。いや、他に、このことを知っている人びともあろうが、おぬしへは、この父の口から申しつたえておきたいのじゃ。真田家の臣として、おぬしには心得ておいてもらいたい。と申すのも、このわしとて、いつ、この世を去ることがあろうやも知れぬとおもうゆえ」

こう前置きをされて、ある大事を打ちあけられたことがあった。

もっとも、大事といえば大事なのだが、考え方によって、

「埒もない事」

といってよい。

ただ、その一事を胸の底におさめた上、源三郎・源二郎へ対する真田昌幸の言動を見ていると、

（どうも、わからぬ……）

ことが多いのである。

「父上は、沼田へまいられたほうが、よろしいとおもいます」

またしても、源三郎が同じ言葉を同じ口調でいった。

昌幸は、じろりと長男の顔を見るや、何かいいかけたが黙った。満面に血がのぼってきている。

「父上は……」
「わかった！」
昌幸が叫ぶようにいった。
「ごめん下され」
両手をつき、ていねいに父へ頭を下げてから、源三郎が地炉ノ間から出て行った。
「何故……」
と、昌幸が呼吸をはずませるように、
「何故、きゃつめ、あのようなことを、わしにいい出たものか……？」
矢沢頼康としても、この問いにはこたえようがない。
（殿は、源三郎様の差出口を怒っておわす）
頼康は、昌幸から眼をそらし、しばらく炉の火を見つめていてから、ふと、昌幸の顔を見あげたとき、
（……？）
いささかだが、おどろいた。
真田昌幸が、微笑しているのだ。
その両眼は、天井を見あげている。
「殿……」
「源三郎も、わかっておるらしいな」

「何をで……？」
「何でもよいわ」
と、昌幸は、ひとりで、のみこんでいるのだ。
「三十郎。わしは明朝、沼田へ発つ。仕度をしておけい」
「心得まいた」
「おぬしは、この城の城代だ。ぬかりなくたのむぞ」
「はい」
「源二郎は砥石へ出かけておると申したな」
「いかさま」
「何をしに出た？」
「さて……」
「わしにもことわらずに、勝手気ままなことをするやつだ。ゆるせぬ！」
ゆるせぬといいながら、昌幸の眼には、怒りの色も浮かんではいない。
「また、あそびに出たのか……」
「供を十名、つけましてござる」
「何故、出した？」
「殿のおゆるしを得たと、源二郎様が……」
「嘘だ」

「はあ……」
「すぐに呼びもどし、沼田へさし向けよ。わしが叱りつけてくれる」
「心得まいた」
矢沢頼康が出て行ったあとで、真田昌幸は炉端へ寝そべった。
左腕を手枕にし、熊の敷き皮へ身を横たえた昌幸の躰が、ひどく小さいものに見える。
昌幸は、大きく張り出した額を右掌をもって軽くたたきはじめた。
これは昌幸が思案にふけっているときの癖なのであった。
ここ十日ほどの間に、甲斐から駆けつけて来た草の者は五名。つぎつぎに貴重な報告を昌幸へもたらしてくれた。
織田信長という大名には何事にも隠微の言動がない、ようにもおもわれる。
だからこそ、信長本陣の模様が容易に探り出せるのであろう。それが真実であるかないかは、別のことだが……。
多勢の人びとが見ている前で、信長はすべてをおこなうかのようにおもえる。賞することも罰することもだ。ために、そのときのうわさがすぐにひろまる。真田家の草の者は、そのうわさを拾って来る。
いや、うわさのみではない。
真田昌幸の草の者の中には、ごくわずかではあるが、織田家へ奉公をしている者がいた。
身分の軽い……たとえば、長柄足軽の向井佐平次のような奉公をさせてある。むろん、ひ

そかに入りこませておいたものだ。年月が浅いので、いまのところ、その程度にしか、真田家の諜報網はひろげられていなかった。

だが、それも、壺谷又五郎の助言があったからこそだ。

いまここに、たとえ充分でなくとも、遠くはなれた上州の地にいて、甲斐の動静をすぐさま知ることができるのも、

（又五郎のおかげだ）

と、おもわざるを得ない。

いずれにせよ、

（織田信長に臣従せねばならぬ）

ことを、昌幸は決意しなくてはならない。

どの国の、どの大名・武将たちも、いまや信長の威光の前に屈服しつつあることを、昌幸は確認した。

となれば、信長の憎悪を、断じて、

（買ってはならぬ）

のである。

上信二州において真田家を存続させるためには、

（是非もないこと……）

と、なった。

おそらく、滝川一益は、
「上州の厩橋（現・前橋市）へ入城するであろう」
先刻、昌幸は矢沢頼康にそういったし、頼康も同意見であった。
昌幸の沼田城と厩橋城は、中径にして三十キロメートルほどの近距離なのだ。
昌幸は先ず、上州へ乗り込んでくる滝川一益を歓迎しなくてはならぬ。
そして、一益の心証をよくしておかなくてはならぬ。そのことが織田信長の真田家へ対する心証をよくすることになる。
同時に、弟・真田信尹の口ぞえを得て、徳川家康からも信長へ周旋してもらわねばなるまい。
「ああ……おれとしたことが……」
真田昌幸は、くやしげにつぶやいたかとおもうと、突然、はね起きて、地炉ノ間の床板を激しく踏み、蹴りはじめた。

七

真田家は、昌幸の父・幸隆の時代に、甲斐の晴信（信玄）と同盟した。
そして、武田軍の信州進攻の先鋒をつとめ、その勢力を背後にし、みずからも伸暢して来たのであった。
真田幸隆や、その子の信綱・昌輝・昌幸が、主家である武田氏の、

「天下制覇」を、夢見ていたことは、いうまでもない。

武田信玄が、

「天下人」

となる日のために、苦戦奮闘を厭わなかったのである。

信玄の威望のもとに、日本諸国の戦乱が絶えたとき、

「上信二州は、真田家の所領となる……」

ことを信じてうたがわなかった。

いや、そのように事が進んだとしたら、真田家の熱望は、おそらく達成されていたろう。

信州・小県郡の一豪族にすぎなかった真田にとって、それは武田・織田などの大勢力が天下を目ざした事と、同じことなのである。

その当時の武人たちが、混沌たる戦乱に苦しみ、喘ぎつつも戦ったのは、何も、

「好きこのんで……」

のことではない。

生き残るために戦い、勝ちぬかねばならなかっただけのことだ。

だれもが、平和を熱望し、夢見ていた。

その夢の中に、他人はともかく、自分だけは断じて、

「生き残らねばならぬ」

と、おもった。

そして、小勢力と小勢力の戦闘が、しだいに大勢力にふくみこまれ、五本の指に数えられるほどの大勢力同士の角逐となった。

その時期が来たとき、真田家は、武田信玄という最も強力な大勢力の中にふくみこまれてい、外様ながら、武田家にとって、

「ぬきさしならぬ……」

重要な戦力となり得ていたのである。

あと、一息であった。

そのときに、激変が来た。

武田家にとっても、麾下の諸将にとっても、

「神のごとき……」

威風をそなえた指導者が急死し、その跡をついだ若き指導者は、見る見る勢威をうしない、ついに、滅亡した。

武田氏という大勢力にふくまれていた小勢力のすべてが、出発点にもどったといってよい。しかも、いまは、他の大勢力へ新たに参加したところで、

「実績を残す……」

ことが、むずかしい。いや、できぬ。

戦国の時代は、織田信長という破天荒の英雄の出現によって、いまや終わりを告げようと

しているのである。

わずかに残された活動の場において、新参の小勢力が実績をあげる余地はあるまい。

「おれが、信長に頭を下げて出て、さいわいにゆるされたとしても、おれのちからを揮う機会はない！」

真田昌幸の叫びは、これであった。

その機会がなければ、得るものも少ないのは当然なのである。

上信二州は、織田信長の家臣にあたえられた。

彼らは軍団をひきい、上州へ、信州へ進駐して来るであろう。

これを、

「おれが、笑い顔をして迎えに出るのか！」

であった。

それがくやしい。

「くやしければ、信長を向こうにまわし、一泡吹かせてくれようか！」

それをおもうとき、真田昌幸の戦将としての血が燃えたぎって来る。

しかし、どう考えても、むだであった。

武田の遺臣として、自滅を覚悟で戦うのなら、それもよい。

一泡どころか、二泡も三泡も吹かせてやれよう。

だが、

（おれは……真田の家はほろび、血は絶える……）

ことを、覚悟しなくてはならぬ。

昌幸は、まだ、おのれの目で織田信長を見たことがない。

ないが、信長の威風は圧倒的なものだということを、嫌でも肯定せざるを得なかった。

いま、信長の宿将・羽柴秀吉と戦っている毛利氏も、今度の甲州攻めの大勝利を知ったなら、考え方をあらためるにちがいないと、昌幸は看ている。

降伏はしまいが、和睦には応ずるであろう。

そのときの条件を有利にみちびくための戦闘ならしてのけようが、そうなれば、もはや時日の問題である。遠からず毛利氏も、信長の意に従うことになろう。

毛利氏は、古くから安芸の国（広島県）吉田の地頭職をつとめ、毛利元就の時代に、にわかに擡頭し、中国・山陰を席捲した。

そして、元就が歿したときの毛利氏は、中国・山陰の両地方において十カ国を領有するにいたった。

これまた大勢力の一である。

もっとも、毛利氏は、武田信玄や織田信長のように、われから首都へのぼって、

「天下をつかみとろう」

というのではなく、あくまでも皇室と足利幕府を日本の政治の中核にしておき、みずからは領有する国々のみを、

「まもりぬいて行こう」
という考え方らしい。
皇室や足利将軍の実力は、おとろえつくしており、権威といってもかたちだけのことだが、そのかたちを諸国大名が尊重し、まもりぬいて行くことによって、
「平和を招来しよう」
というわけだ。
元就の子たちは、いずれも名高い武将であり、一門の結束は、すこぶる堅固である。
（もし……）
と、真田昌幸は、想わずにいられなかった。
（もしも、毛利家が、この信濃の近くにいたら……）
である。
（おれも、このように、不様に、信長へ頭を下げはすまい）
このことであった。
その意味で、越後の上杉謙信が健在だったなら、ためらうことなく真田昌幸は、上杉のふところへ飛びこんでいたろう。
いまの上杉家は、謙信の養子、景勝が跡をついでいるが、謙信亡きのちの内乱によって、ちからはおとろえ、到底、織田信長に対抗できるものではなかった。
（仕方もないことよ……）

昌幸は地炉ノ間の炉端へ、また寝そべった。
もはや、どうにもならぬことなのだ。
先刻も、矢沢頼康と語り合ったことだが、これからは織田方の下に在って、織田家のために、勝手知った上信二州を、
「治めやすいように……」
するため、はたらくよりほかに、生き残る道はないのだ。
（だが、おれは、どうも……）
どうも、織田信長という人物が、
（好きになれぬ）
と、昌幸はおもう。
亡父の幸隆も、また自分も、故武田信玄に、
「惚れこんでいた……」
のである。
いやいやながら、忠節をつくしたのではない。
もしも、信玄を嫌っていたら、幸隆も昌幸も、上杉謙信のもとへ参じていたろう。
信長を見たことはないが、信長の戦いぶりや、草の者の口から入って来る印象によって、
（おれとは気が合うまい）
と、昌幸は予感していた。

だから、なおさらに気が重いのだ。
昌幸は自分の体内にひそむ感情の烈しさと血の熱さが、どうも、信長には合わぬようにおもえてならない。
嘆息をもらし、昌幸は地炉ノ間を出た。
何か、真田昌幸の体内に勃然としたものがあった。
昌幸は暗い廊下をいくつも曲がり、妻の〔山手殿〕の寝間の前へ立った。
板戸を引き開けると、宿直の侍女二名がねむっている。
侍女たちが、はね起きて、
「あれ……」
叫びかけたが、昌幸と知って、
「と、殿さま……」
「うむ……」
うなずいて見せ、昌幸は中へ入った。
昌幸が、妻の寝所をおとずれるのは、ひさしぶりのことであった。
「寝ておれ」
と、昌幸が侍女たちにいい、山手殿の寝間の境の襖をしずかに引き開け、中へ入った。
襖が閉まったとき、二人の侍女は顔を見合わせた。

八

山手殿の寝間には、香が薫きこめられている。
寝息もたてずに、山手殿は、こちらに背を向け、ひっそりと臥床に横たわっていた。
真田昌幸が、妻の寝間を訪れるのは何カ月……というよりも、何年ぶりのことであろうか。
三十六歳の夫と、三十四歳の妻なのである。
「これ……これよ……」
立ちはだかったまま、昌幸が低く声をかけてみた。
返事はない。
昌幸は、せかせかと袴をぬぎ捨てつつ、
「これ……これ……」
なおも、よびかけたが、山手殿は押し黙っている。
昌幸は舌打ちをもらし、むしろ、猛然として妻の臥床へ突きすすんだ。
そして、妻の背中へ寄りそい、腕を背後からまわし、寝衣をまさぐり、胸へさし入れた。
肌は、絹のようになめらかである。
しかし、肉置きはまずしい。
これは、山手殿が昌幸のもとへ嫁いで来たときから、すこしも変わっていない。
そのくせ山手殿は丈夫な体質らしく、京都そだちなのに、山国の甲斐や信濃で暮らして、

一度も病を発したことがなかった。

「これ……これ……」

うすい、小さな乳房を昌幸がつかんだとき、山手殿は、わずかにうめいたようであった。

昌幸の左腕が、たちまちに妻の下半身へのびた。

「う……」

かすかに、うめき、山手殿が身をよじった。

昌幸の手に、指に、妻の躰の骨があたる。

やわらかな肌の下に、すぐ、骨組みがあるようにしかおもえぬ妻の肉体であった。

骨をおおい、肌に血を送り、凝脂をにじませるべき肉がないとしかおもえぬ。

もっとも、まったく肉が無ければ、それは骸骨になってしまうのだから、山手殿とて、うすい肉が肌の下には息づいているのだ。

だが、

（あまりにも、たよりない……）

昌幸は、はじめて、この妻を抱いたときもそうおもった。

昌幸にとっては、たっぷりとして、

（この両腕に抱えきれぬほどの、ゆたかな肉置きの女がよい）

のである。

今夜、自分が何故、突如として妻の寝間を訪れる気になったか、それは昌幸にもわからぬ。

ただ、体内に荒れ騒ぐ自分の血汐の熱さを、昌幸は、
（もてあました……）
のやも知れなかった。
「これ……これ……」
昌幸が妻の肩をつかみ、その躰を向き直らせようとしたとき、それまでは喘ぎをたかめていた山手殿が、
「何をなされますのか」
切りつけるようにいった。
背を向けたままで、
「いまさら、何をあそばす」
きめつけた。
「い、ま、さら……とは、何じゃ？」
「お引きとり下され」
「何だと……」
騎虎のいきおいで、昌幸は山手殿へのしかかった。
その瞬間である。
山手殿が、狂ったように笑い出した。
ふくみ笑いというような、なまやさしいものではない。

寝間の襖が破れるかとおもうほどの、凄絶な高笑いであった。
「う……」
昌幸の手が、とまった。
昌幸の血が、冷えた。
次の間にいる二人の侍女の、不安そうな、緊迫をたたえた微かなざわめきがつたわってきた。
昌幸は憤然と立ちあがり、袴をつけた。
山手殿の高笑いが、ぴたりと熄んだ。
その熄み様が、異様である。
昌幸は気味がわるくなり、
「これが、夫婦か……」
辛うじて、いい捨てた。
次の間へ出ると、侍女たちがひれ伏している。
足音荒く、真田昌幸は廊下へ出て行った。
わずかな沈黙があって、
「これ……これ……」
寝間から、山手殿の声がした。
「宇乃はおるか？」

「は、はい」
侍女のひとりが、あわてて襖へ近づくと、
「入るがよい」
「は……」
「早う、早う」
「は、はは」
入って、襖を閉ざした侍女の宇乃へ、
「早う。殿が、久野の寝間へわたったかどうか、二人して見とどけよ」
と、山手殿が命じた。
「はい、お方さま……」
「行け、早う」
二人の侍女が、寝衣の上へ小袖を羽織るようにし、廊下へ走り出て行った。
寝間の闇が、わずかにゆれうごいたようである。
そのまま、森閑となった。
と……。
何か、聞こえはじめた。
だれも、その声を聴いてはいない。
山手殿が、泣き嘘んでいるのである。

しばらくして、侍女たちがもどったとき、山手殿の嘘び泣きは熄んでいる。
昌幸が、地炉ノ間へ入ったことを襖ごしに告げる宇乃に、
「わかった……」
山手殿の、ものやわらかな声が返ってきた。
自分の侍女たちに対して、平常の山手殿は、しごく優しい。
そのころ、真田昌幸は、地炉ノ間のせまい寝所へ入っていた。
困惑しつつも、後をつけて来た侍女たちへ、
「去ね」
と、昌幸は叱りつけた。
「は……」
あたまを下げながらも、二人の侍女は去ろうとせぬ。
こうしたところは鈍いというのか、頑強というのか、山手殿の威力を信じ切っている女たちだけに、昌幸を恐れつつ、もじもじとしながらも、決して退こうとはせぬ。
織田信長は、いつぞや、自分の外出中に、侍女たちが息ぬきのささやかな酒宴をおこなったことを後になって知り、
「そのようなことで、武士の城の留守居がつとまろうか！」
激怒し、侍女たちの首を切ってしまったそうだ。
（おのれら、それを知っておるのか……）

いまいましげに、昌幸は地炉ノ間へ入ったのである。
寝間の闇の底で、真田昌幸は、まだ両眼をひらいている。
騒いでいた体血は、完全にしずまっていた。
「おれが……」
と、昌幸は声にのぼせていってみた。
「おれが、わるいのか……妻がわるいのか……」
だが、明日からの真田昌幸にとって、そうしたことへ思念をめぐらす余裕はなくなるにちがいない。

九

朝が来た。
草の者・小助が運んで来た朝餉をすまし、真田源二郎は向井佐平次に、
「どうだ、躰のぐあいは？」
「はい。もう、大丈夫です」
「そうか。それなら、おれといっしょに砥石の城へ来ぬか？」
佐平次は、小助を見た。
小助が、うなずいて見せた。
「案ずることはない。おれが、うまくはかろうてやる」

と、源二郎が、さもたのしげに、

「おれは、かねがね、お前のような小姓がほしいとおもうていたのだ」

「かまいませぬか、私のようなものでも……」

佐平次は、何ともなしに、胸がはずむおもいがしている。

昨夜、草の者の七郎が地蔵峠へ帰ったあとで、源二郎は、小助や佐平次と枕をならべてねむった。

小助と佐平次の寝具をならべ、源二郎を二人がはさんでねむったのである。

ずっと後年になって、大名の家の格式や制度などが複雑となり、虚飾が生活の弾力を奪い取ってしまうような時代がやって来るのだけれども、戦国の世も末期に入ったそのころは、武家の主も、女も子も、いまのわれわれの想像外に質実で、むだのない生活をいとなんでいたようである。

それにしても……。

真田源二郎の、活潑でいて、物事にこだわらぬ明るい言動は、向井佐平次を、

（われ知らず……）

魅了させずにはおかなかった。

安楽寺でも、真田家の〔若殿〕が来ていると知ったなら、和尚や寺僧たちも、おそらく、それ相応のもてなしをするにちがいなかった。

しかし源二郎は、そうしたことに、まったく無頓着のようであった。

枕をならべて、源二郎は佐平次に、
「高遠攻めのはなしを聞かせてくれ」
と、せがんだ。
佐平次が、一介の長柄足軽としての経験を語り、目撃した事実をおもい起こしながらのべてゆくのを、
「ふむ、ふむ……」
とか、
「おう、おう……」
とか、しきりに興味と感嘆の声をあげ、その自分の声が、さらに興奮をさそうらしく、
「それから……それから、どうした？」
身を擡げ、佐平次の顔をのぞきこんだり、腕をつかんだりした。
おもわず佐平次も、はなしに熱が入り、夢中になって喋りつづけたものだから、ついには声が枯れてきた。
すると、源二郎は、
「あ……これは、すまぬことをした」
すぐさま、枕元の水差しを取り、佐平次へ水をのませてくれたりする。
少年とはおもえぬまめまめしさであったし、
（真田の若殿が、おれを介抱して下さる……）

若い佐平次だけに、感動をおぼえずにはいられない。
こうした源二郎の振る舞いを、小助は見なれているらしい。
すこしも口を出さず、二人のありさまをながめているのである。
「疲れたろう。これは、いかぬことをしてしまった。これから、いくらでも、ゆっくりと聞けるはなしを事急ぎせずともよかったのに……おれも、どうかしている」
などと、源二郎がいう。
それから三人は、ねむった。
向井佐平次は、たちまち、地の底へ引き込まれるような落下感のうちに意識が絶え、夢をも見ずに朝を迎えたのであった。
目ざめたとき向井佐平次は、これまでになく、精気が五体にみなぎっているのを感じた。
小助も、
「や……今朝の佐平次の顔色は、昨日までとは別人のようだ」
そういうと、真田源二郎が勿体をつけた重おもしい口調で、
「血色が、冴えて見ゆる」
と、いった。
「私も、砥石まで御供をいたしまする」
という小助に、源二郎が、
「よいわ。おれが佐平次をつれて行く。今日から向井佐平次は、おれが家来だ」

「はい。なれど……」
「かまわぬ」
「なれど佐平次は、まだ砥石まで歩いてはまいれませぬ」
「そうよ、そのとおりだ」
「なれば、私が背負うてまいりませぬと……」
「は、はは……おれが馬に乗せて行くわ」
この源二郎の言葉が、またしても佐平次を感激させた。
（若殿の御馬に、おれを乗せて下さる……）
武田家の将・小山田備中守に奉公していたときには、夢想だにしなかったことではないか。
（よし！）
向井佐平次は、勃然となった。
（おれは、源二郎様に、このいのちをかけよう！）
このことであった。
こうして……。
昨日、別所の湯壺の中で真田源二郎と出会ったことが、向井佐平次の生涯を左右することになる。
もしも、このとき、源二郎が佐平次の目の前にあらわれなかったとしたら、たとえ、真田家へ奉公をするようになったとしても、向井佐平次の一生は、おのずから、

「別のもの……」
と、なったにちがいない。
それほどに、これからの真田家の行く手は激動をはらんでいたのである。
「さて、そろそろ、まいろうか。これ、小助。馬の仕度をいたせ」
源二郎がそういったとき、数騎の馬蹄の響みが、黒門の方で聞こえた。
これは昨夜、安楽寺を去った草の者・七郎が砥石城へ、
「若殿は、安楽寺に泊まっておられます」
と、知らせたので、城から迎えの騎士があらわれたのだ。
騎士は十名であった。
その中のひとりが、源二郎へ、
「御城代が案じておわします」
といったが、源二郎は、
「さようか……」
事もなげな一言をあたえたのみである。
「小助。これならよいだろう。お前は地蔵峠の小屋へ帰れ」
「はい。そういたします」
「また、会おうな」
「はい、はい」

源二郎は、鞍を外させた自分の馬の前へ佐平次をつれて来て、
「さ、乗れ」
と、いう。
騎士たちが妙な顔つきとなったが、源二郎はかまわず、困惑する佐平次を馬の背へ押しあげておいて、
「よいか……」
ひらりと、自分も馬に跨がった。
「おれの腰に、しっかりとつかまっておれ。よいか、佐平次」
「は、はい」
「まいるぞ」
騎士たちへ声をかけ、源二郎が馬を打たせ、黒門から出て行く。
このときになって、はじめて真田源二郎が寺に泊まったことを知った安楽寺の僧たちが駆け出でて来るのへ、源二郎は鞭を持った右手を高々とあげて打ち振った。
挨拶のつもりなのであろう。
ともかく、少年にしては颯爽たるものがあった。
騎士たちの中には渋面をつくっているものもあり、苦笑をこらえているものもあった。
源二郎と佐平次を乗せた馬の前に五騎。背後に五騎。その中の一騎が源二郎へ馬を寄せて来て、

「若殿。今朝も暗いうちに、岩櫃から草の者が駆けつけてまいりまいた」
「ふうん……」
「急ぎ岩櫃へ、おもどりあるようにとのことでござる」
「父上の御指図か？」
「存じませぬ。岩櫃の御城代からの使者でござる」
「さようか、よし」
「われら、このまま、岩櫃へ御供を……と、そのように御城代から申しつかりましてござる」
「ふむ、ふむ……それもよいな」
砥石城の城代をつとめているのは、池田長門守綱重という重臣であった。

十

真田源二郎一行は、温泉けむりがたちのぼる天神岳の山間をぬけ、やがて、塩田平へ出た。
〔平〕とは、山間の平地を意味する。
現・長野県上田市の南西にひろがる塩田平は六十二平方キロといわれている。
上田へ近づくにつれ、両側の山裾が押し出して来て、いったんは、平地が括れたようなかたちになり、なおもすすむと、松本街道が西方の地蔵峠から下って来て、その街道の向こうに、ひろびろと視界がひらけてくる。

そのあたりは、「上田平」とか「上田原」とかよばれてい、千曲川のながれの彼方に、山岳を背負った斜面や台地が、くっきりとのぞまれるのである。

千曲川に沿って北へすすめば、やがて〔善光寺平〕へ達する。

〔善光寺平〕は、山国の信濃にあって、松本盆地とならぶ広袤をもつ大盆地だ。

千曲川は、その源を信濃・佐久の甲武信嶽（甲信二州の境）と国師嶽・金峰山の渓谷に発し、海之口に至って北流し、小諸・上田を経て善光寺平へ入る。

そして、八幡屋代のあたりから犀川と合流し越後へ入り、信濃川となり、日本海へそそぐのである。

このような大河の沿岸に、大小の盆地がひらけるのは当然のことであり、したがって、そこには往古から人びとの生活がいとなまれることになる。

塩田・上田の両平は山国の信濃の中でも四季の気候が比較的に穏やかであり、古代から中世にかけて人文もひらけ、奈良朝のころには、このあたりの政治の中核となって国府がおかれた。

その遺跡は、いまも上田市の東郊に残っている。

はるかむかしの塩田平は、海底にあったという説もあって、神代のころに、陸奥の国へ出かけた塩土老翁という神が、塩田の海へ立ち寄り、土地の神々に塩のつくり方を教えたという神話も残っているほどだ。

ところで……。

奈良朝のころに、寺院や貴族たちの下にあった荘園は、源氏と平氏の政権争奪の歴史を経て、鎌倉幕府の創立と共に、武家の管理下におかれた。

そして、戦国の時代がやって来る。

足利氏が創成した室町幕府になってからは、上田・塩田の両平には大小の豪族・武将が割拠し、領地争奪の血闘が、飽くこともなく繰り返された。その中の一人が真田家なのである。

「どうだ、佐平次。おれの国は、よい国であろう」

と、真田源二郎がいった。

一行は、上田平に出て、千曲川の西岸へ近づきつつあった。

「はい」

佐平次は恐る恐る源二郎の腰へ両手をあて、馬の背にゆられていた。

警固の騎士たちが、胡散顔に佐平次を見ていた。十九歳の向井佐平次が、十六歳の真田源二郎の腰へ、怖々とすがりついているのである。

一行がすすむ前面に、太陽がたちのぼってきている。

日の煌めきは、もはや夏のものといってよかった。

だが、南から吹きぬけて来る風は山々の冷気をふくんでいる。

「これ、佐平次……」

「は、はい？」
「このあたりは、むかし……さよう、父上がお生まれになったばかりのことだが、武田の御先代様（信玄）が、葛尾の城にいた村上義清と苦しい戦をなされたところだそうな」
「さようで、ございますか……」
「おう、おう」
と源二郎は、ひとかどの武士らしくうなずいて見せる。
葛尾城（埴科郡・坂城町）の村上義清は、当時、信濃の内の六郡と越後一郡を領有していたほどの強豪であって、
「義清めには、おれの祖父様も、ずいぶんと苦しめられたそうな」
と、源二郎がいう。
「はい、はい……」
ひたすら恐れ入って、佐平次は聞き入るのみだ。
つまり村上義清は、真田家と武田家にとって、
「共同の敵……」
ともいうべき猛将であった。
これがために、真田家も武田信玄をたのまざるを得なくなったのだし、信玄もまた、東信濃の攻略にとって、真田家を、
「欠くべからざるもの……」

と、したのであろう。

武田信玄と村上義清の決戦が上田平でおこなわれたのは天文十七年二月十四日で、

「寒風の吹き荒ぶ……」

凄烈な朝に、戦闘の火ぶたが切られたという。

ときに、武田信玄は二十八歳の若さであった。

すでに信玄は、諏訪頼重を攻略して南信濃を手におさめていたが、中信・東信の諸豪族を完全に屈服させてはいなかった。

「村上義清を殪せば、東信濃の攻略もすみやかになろう」

と、信玄は眥を決していたのである。

信玄がひきいる一万の武田軍は、大門峠と砂原峠を越えて塩田平へ侵入し、倉升山へ陣をかまえた。

そのころ、塩田の城には、村上義清の代官・福沢某が入っていたが、武田軍の圧倒的な軍容に手も足も出ない。

そこへ、村上義清が押し出して来た。

村上軍は約七千。

千曲川をわたって上田平の北方に展開し両軍は二キロをへだてて対峙したわけだが、辰ノ上刻（午前八時）ごろに、激突した。

そして、武田信玄にとっては、おもいもかけぬ悪戦苦闘となった。

信玄は、もっとも信頼の厚かった部将の一人である板垣信方を戦死させてしまい、混戦のうちに村上義清みずからひきいる精鋭が信玄本陣へ襲いかかり、信玄は、はじめて負傷した。

「そのときの祖父様のはたらきは、無類のものだったそうな」

と、真田源二郎が得意げにいった。

源三郎・源二郎兄弟の祖父であり、真田安房守昌幸の父である真田幸隆は、この日の戦闘に、信玄本陣の後方をまもっていたそうな。

それが、信玄本陣が乱れ立ったので、猛然と前進し、村上義清の手勢へ突き込んだ。

義清も、これまで戦うのが精一杯のところであったらしい。

信玄同様に、義清も負傷し、村上方の部将たちの戦死も続出した。

村上軍は退却したが、武田軍もまた、これを追うだけの余力を残してはいなかった。

武田信玄の家臣・駒井政武は、その筆記に、

「……二月、雪深く積もり候間、大門峠より御出馬。細雨、夕立、霙。二日。小山田出羽守出陣。十四日、板垣駿河守、甘利（虎泰）其外討死、十五日未刻申し来る」

と、書き残している。

駒井政武は古府中をまもっていて、出陣しなかったのである。

このときの戦闘は、それまで連戦連勝といってよいほど、順調に勢力を伸張させて来た若き武田信玄が、はじめて受けた痛撃だといってよい。

「これ、佐平次……」

真田源二郎がよびかけ、鞭をあげて彼方を指し、
「あれを見よ」
と、いった。
千曲川は眼前にある。
その対岸に、大峰山・東太郎山の山岳を背負った段丘がのぞまれた。源二郎の鞭はその段丘を指し示していた。
「あれが……？」
「そうだ」
何が「そうだ」なのか、向井佐平次にはわからぬ。
「あの上へ、いまに、父上が城を築かれる。われらの……真田の城をな」
「はあ……」
源二郎が愉快そうに笑った。
日は、中天にのぼりつつあった。

十一

真田源二郎一行が近づくにつれ、その段丘が、相当に嶮しい断崖の様相を呈していることが、向井佐平次にも見てとれた。
（あれへ、真田様の御城が築かれるというのか……）

それどころではないように、佐平次にはおもわれてならない。
長柄足軽の一員にすぎなかった佐平次ではあるが、甲斐の武田氏という大勢力の下に在った真田家が、武田滅亡の後に、どのような道をたどらねばならぬかということは、おのずから佐平次にも理解がつく。
これからの真田家が、織田信長に屈従して、
（生きていかねばならぬ……）
ことは明白であった。
息をつく間もなく、高遠城へ猛攻を反復して来た織田の大軍の怒濤のような軍容をおもい起こすと、いまも佐平次は、目眩をおぼえる。
「まことに、あの崖の上へ、城が……？」
と、佐平次は源二郎の背中へ恐る恐るささやいてみた。
「そうだとも」
源二郎の口調は断定的なものであった。
その声には、十六歳の少年ともおもえぬちからがこもっている。
「いまに、あの城の中で、お前はおれと暮らすことになる」
「はあ……」
夢を見ているようだ。
「いずれにせよ、信濃と上野の両国においては、父上がおらぬとおさまりがつかぬというこ

とよ」
「はあ……」
「信長だとて、家康だとて、また小田原の北条だとて……」
父・真田安房守昌幸を無視しては、上信二州の経略はできぬ、と、源二郎はいう。
「まだまだ、天下が鎮まったわけではない」
振り向いた源二郎の日に灼けた童顔が笑い、皓歯が輝くばかりだ。
向井佐平次の五体に、勃然たるものが衝きあがってきた。
（この若殿のために、おれは、また、はたらくことができる）
このことであった。
千曲川の手前で右へ迂回した一行は、川の浅瀬をえらび、水飛沫をあげて川をわたった。
あの断崖は、一行の左手へ遠ざかりつつあった。
ゆるく屈曲した道が高地へのぼっている。
馬がいななき、源二郎が、
「佐平次。しっかりとつかまっていよ」
と、叫んだ。
高地をのぼりきってしまうと、道は比較的に平坦となる。
木や草の香りが鮮烈であった。
「このあたりは、な」

「はい」
「信濃の国の内でも、もっとも住みやすいところなのだ」
「はあ……」
なればこそ、真田家の本城を、この地へ築こうというのか。
「雪も、さして降らぬ」
「ははあ……」
「おれが館の、庭のようなものよ」
いよいよ、真田源二郎の気炎が強くなってきた。
前を行く騎士たちが、時折、こちらを振り向いては苦笑をもらしているらしい。
源二郎のいうことが、どこまで本当なのか、佐平次にもわからなくなってきた。
「あれどもは、な……」
と、源二郎が前駆の騎士たちへ顎をしゃくって見せ、
「いつまでも、おれを子供とおもうているのだ。ばかなやつどもよ」
怒っているのかとおもうとそうではない。源二郎は、むしろ、たのしげに見える。
「佐平次……」
急に、源二郎の声があらたまった。
「はい？」
「おれと、お前とは、いつの日か、いっしょに死ぬるような気がしてきたぞ」

佐平次は、耳をうたぐった。
はじめは、何をいい出したのかとおもった。
すると、重ねて源二郎が、
「死ぬる日よ」
と、いうのだ。
「は……」
「死ぬる日がいっしょだと申している。おれとお前とが……」
なんとこたえてよいものか、佐平次にはわからなかった。
これが十六の少年のいうことなのか。何やら空恐ろしいおもいがする。
たわむれにいっているわけではない。
馬を打たせつつ、横顔を見せている真田源二郎の眼は底深い光を湛えてい、佐平次には不気味であった。
碧空に、積雲が悠々とうごいている。
このとき、源二郎が何故、こうしたことを口にのぼせたのか、佐平次にはわからなかった。
のちに、尋ねたことがある。
すると源二郎は、事もなげに、
「ただ、ふっと、そのようにおもうたまでのことよ」
と、こたえた。

だが、そのときは、事もなげにという様子ではなかった。
東太郎山の上に浮かぶ白い雲を仰ぎつつ、その言葉を発したときの源二郎は、自分と向井佐平次の行く末に暗示をうけたというだけではなく、もっと大きな、真田家そのものがたどって行かねばならぬ将来への予感をおぼえたにちがいない。
それは、まだ、かたちをなしていなかったにもかかわらず、源二郎を、むしろ戦慄させたようである。
生まれてより、このかた、このような体験を源二郎はもたなかったといってよい。
十六歳の彼は、突然、死の予感をおぼえた。
それが、いつであるかはわからぬ。
性来、真田源二郎の感応はするどく、幼年のころから、予言めいたことをもらしたりして、父・昌幸の失笑を買ったものだという。
向井佐平次が見た、このときの源二郎の横顔は息をのむほどに青ざめており、唇を噛みしめている皓歯が、まるで獣の牙のようにおもえた。
源二郎の前後をかためている騎士たちは、このことに、まったく気づいてはいない。
佐平次にとっては、かなり長い時間におもえたが、源二郎がふたたび快活な笑顔と弾むような声音をとりもどすまでには、二分とかからなかったろう。
「見よ、あれを……」
源二郎は鞭をあげ、前方の左手にのぞまれる山を指した。

その山は、東太郎山の山裾の一部が東面へ張り出し、屹立したかたちに見えた。
「あれが、砥石の城だ」
「はあ……」
「いまは、真田家の城となったが、あの砥石を手に入れるまでに、祖父様は、ひどい御苦労をなされた。あの城はな、先刻、お前にはなして聞かせた村上周防守（義清）の出城だったのだよ」

真田家の発祥の地といわれる真田の庄は、砥石城の山裾を北方へ一里ほど入った山ふところにある。
はじめ、武田信玄の父・信虎は、このあたりを攻略するために村上義清と同盟し、小県郡の武将や豪族たちを席捲したことがある。
それは四十年ほど前のことで、真田一族も、敵の猛威にたまりかね、源二郎の祖父・真田幸隆は上州へ落ちのび、箕輪城の長野業成のもとへ身を寄せていたそうな。
その後、武田家に内紛が起こった。
信虎の子の晴信（のちの信玄）が、父を甲斐の国から追放してしまい、武田家の当主となったのである。
信玄は、独自の戦略によって、信州へ進出しようとした。
この時信玄は、小県・佐久の両郡へ侵入するための先鋒として、真田幸隆をえらび、上州

から古府中へまねいたのであった。

武田信玄は、父・信虎がしたような、村上義清との同盟を嫌った。

同盟はできようが、自分の軍旗の下に、

「屈服する相手ではない」

と、見きわめたからであろう。

五年後の、上田原の戦いで、それが証明された。

ために武田信玄は、この猛将を打ち殪さぬ以上、佐久・小県の両郡を完全に制圧できぬと考え、真田幸隆の忠誠をたのんだのである。

もちろん、幸隆は勇躍した。

上田原の悪戦苦闘を経たのち、三年後の天文二十年に、真田幸隆は謀略をもって、ついに砥石城を攻め落としたのである。

こうして、武田信玄は信州進出の拠点を得た。

同時に、真田幸隆は十年ぶりで、父祖の地へ帰ることができたのであった。

その翌年には武田信玄が、村上義清の本城・葛尾を攻め落とし、義清は越後の上杉謙信をたより、救いをもとめた。

上杉謙信は、隣国の信州へ侵入した武田信玄を牽制するため、すぐさま川中島へ出兵し、このとき、はじめて、上杉・武田両軍の衝突が起こったのである。

十二

それから、約三十年。

武田信玄も上杉謙信も、真田幸隆も村上義清も冥府に去った。

武田家はほろびたが、上杉家は、越後の国をまもりつづけている。

「おれの家が、いま、こうして在るは、祖父様のおかげよ」

と、真田源二郎が向井佐平次にいった。

砥石城の方から、五人の騎士が疾駆して来たのは、このときである。

接近して来る源二郎一行をみとめた城の士が、これを城代・池田長門守に告げたので、

「源二郎様を、お迎えいたせ」

と、長門守が命じたからだ。

「長門殿に申しつたえよ」

源二郎が胸を張り、出迎えの騎士たちにいった。

なかなかどうして、堂々たるものである。

「おれは今夜、この者たちと真田の館へ泊まる。明日のうちには岩櫃へもどらねばならぬ」

「なれど、御城代が……」

「かまわぬ。長門殿に、さよう申しつたえよ」

凜々としていう真田源二郎の横顔を、佐平次はたのもしげに見た。理屈も何もないことな

のである。

高遠城主として、織田の大軍に立ち向かった仁科五郎盛信は、佐平次から見ると到底、自分と同じ十九歳の若年にはおもえなかった。三十にも四十にも見え、面をあげられぬほどの威厳によろわれていた。

それにくらべると、真田源二郎は、いうまでもなく一国一城の主ではないにせよ、たった二日の間に、佐平次の眼に映じた姿は、まさに多彩をきわめている。

いかにも十六の少年におもえて微笑ましく感じたかとおもうと、佐平次には計りきれぬ奇怪な言動を見せるし、いまここに、出迎えの家来たちの前へ立つと、侵しがたい威めしさが自然にただようのであった。

「行け！」

まだ、ためらっている城の士を源二郎が叱咤した。

出迎えの騎士たちは、砥石城へ去って行く。

このあたりは、城下町といえぬまでも、村落の規模が大きい。

細道へあらわれた百姓たちが、源二郎を見あげ、腰を屈めて行く。

日は、かたむきはじめていた。

「さ、まいるぞ」

源二郎が、軽く馬腹を蹴った。

「あの、な……」

いいかけて、源二郎が佐平次へ振り向き、
「おれは、お前に、なんでもいうてしまいたくなってくる」
と、いった。
この言葉も、何を意味するのか、とっさにはわからなかった。
向井佐平次が真田源二郎を見たのは、昨日がはじめてなのである。
源二郎一行は、神川に沿った道から外れ、右手の小道へ分け入った。
これは、源二郎みずからが馬をすすめて先頭に立ち、騎士たちへ、
「ついてまいれ」
と、命じたからだ。
十名の騎士は、いずれも若かった。
彼らは、怪訝そうに顔を見合わせたし、中には、
「源二郎さま……」
不安げに声をかけた者もいた。
また、源二郎の移り気が起こり、おもいもかけぬ場所へ連れて行かれるとでもおもったのか……。
源二郎は、ありありと、
（お前たちには、わかるものか……）
という表情を浮かべている。

そして、
「すこし、走るぞ」
と、佐平次にいい、馬腹を蹴った。
おどろいて佐平次が、源二郎の腰へしがみついた。
それがたのしいらしく、
「は、はは……」
高らかに笑い、源二郎が突然、右側の丘の斜面へ馬を乗りあげて行った。
土けむりがあがり、背後で騎士たちの叫び声が聞こえた。
道もついていない木立の中を、源二郎はたくみに手綱をさばき、丘をななめに突っ切り、向こう側へ駆け下って行く。
丘を下ると、細い道が曲がりくねっていて、あたりは日射しもとどかぬ深い森になっている。
森の中へ馬を駆け入れ、右に左に、源二郎は樹間を縫って走る。
源二郎の馬術は、
（なかなかのものらしい……）
と、佐平次にも看てとれたが、栗毛の馬もまた、源二郎の手足のようにうごき、走る。
樹と樹の間が一メートルほどのせまい場所も、何度か其処を通ったことがあるとしかおもわれぬほどの馴致した足どりで、源二郎の愛馬がすりぬけて行くのであった。
「この馬は利巧な馬だ。そうおもわぬか？」

「は、はい。おもいまする」
「いまに、お前にも馬をやろう」
「私に……あの、馬を……」
「そうだ。乗れるか？」
「の、乗れませぬ」
「それはよい。おれが教えてやろう」
と、源二郎は、いまから、そのことがたのしくてたまらぬかのように、
「お前を、馬の名人にしてやるぞ」
「な、なれど……」
長柄足軽の自分が馬に乗れるなどということを、向井佐平次は夢に見たことさえなかった。
「どうだ、馬は嫌いか？」
「いえ……もったいないことでござります」
「何を申す。お前が馬に乗れぬでは、おれがこうして外へ出るとき、供ができぬではないか」
「はあ……」
突然、森が切れた。
野原が眼の前にひろがっている。
野原の向こうに、こんもりとした木立が見えた。

真田源二郎は、森の中から野の一角へしずかに馬を打たせて行き、凝と、その木立のあたりを見つめた。

馬がくびをふるわせ、立ちどまった。

（何を、見ておいでなのか……？）

いつまでたっても、源二郎は馬をすすめようとはせず、視線を変えようとはせぬ。

（あの木立の中に、何があるのか？）

人の気配もなかった。

佐平次が、よくよく目を凝らすと、木立の外まわりの一部に、何やら塀のようなものが見えた。

（人が住んでいるのか？）

そうおもったとき、真田源二郎が、その佐平次の胸の内をよみとったかのごとく、

「いまは、あの木立の中に、だれもおらぬ」

ささやくように、いった。そして、ゆっくりと馬を歩ませつつ、森に沿った細道をまわり、その木立へ近づかぬままに遠ざかっていったが、依然、源二郎の視線は木立からはなれなかった。

「佐平次……」

「はい？」

「おれはな、あの木立の中の、小さな館で生まれたのだ」

「あの中で……」
「だれにも、このことをいうなよ。いわぬがよい」

十三

真田源二郎は、むずかしい顔つきになり、馬腹を蹴った。
野原を突っ切り、木立を抜けた。
「源二郎様……」
彼方の道を、馬上の騎士たちが鞭をふるって駆けつけて来るのが見えた。
源二郎が哄笑した。
何か、狂気じみている。
（おれも、十五、六のときは、このようだったのだろうか……）
身分もちがい、生活環境もちがっていたにせよ、わずか三歳年下の源二郎に、この日いちにち、向井佐平次は存分に振りまわされてしまった。
夜に入って……、
あたえられた寝床へ身を横たえてからも、佐平次の興奮は消えない。
（あの、木立の中の、小さな館で源二郎さまはお生まれになった……そのことを、口外してはならぬと申された。おれだけに……）
自分だけに、あのような、秘密めいたことを、源二郎は何故もらしたのであろうか。

そこは、小さな板張りの部屋であった。
ねむり燈台の火が、微かにまたたいている。
ふたたび、騎士たちと出会ってから、一行が真田の庄へ着くまでには、さほどの時間を要していない。
両側に山々がせまり、道の正面に、頂点の尖った山城が見えてきた。
「あれが、むかしむかしからの真田の城だ、佐平次。もっとも、いまは役に立ててはおらぬがな」
と、源二郎が鞭をあげて指し示し、
「父上は、もはや要らぬ城ゆえ、打ちこわしてしまえと申されるのだが、おれがとめた」
ぬけぬけという。
大声なので、騎士たちが笑いをかみころしているのだ。
彼らは、真田昌幸・源二郎の父子が、暮夜ひそかに、岩櫃城内の居館で語り合っている姿を見たこともなければ、その声を聞いたこともない。
奔放で偏狂な我が子を、昌幸が単に、
(あまやかしておわすのだ)
としか、看ていないらしい。
(どこまで、この若殿にたよっていたらよいのか……?)
別所から上田平をこえて来たときの、颯爽たる真田源二郎に魅せられ、

（この若殿のために、いのちがけではたらこう）

と、燃えあがってきた体内の血は、いささかだが冷えかけている。

そのくせ、頭が熱い。

いまの佐平次の興奮は、むしろ、不安なのだといってよい。

松尾山の城のふもとに、真田家の旧居館があった。

城にも館にも、おもいのほかに家来たちが詰めている。

山の裾をながれる渓流が〔濠〕の代わりになってい、居館は、石垣の上にあった。

家臣の屋敷も、いくつかは残っている。

「むかしは、もっと大きい館だったらしいが、何度も、ここは敵に攻めかけられて焼きはらわれてしまったのだ。いまの、この館は、祖父様が武田家につかえ、村上義清などを追いはらい、ここへもどって来られ、隠居所になさるおつもりで建てられたそうな」

夕餉のとき、源二郎は佐平次に相伴させながら、

「お前も、おれが死ぬる日まで、おれにつき従うことになったのだから、おれの家のことも、こうして語っておくのだ」

まじめ顔にいう。

してみると、今日いったことは、口から出まかせのことでもないらしいのだ。

「おれが家の、遠い遠い御先祖はな、滋野宿禰というお人だそうな」

「それは、どのような？」

「知らぬな、むかしのことは……いずれにせよ、京の帝につかえたてまつり、帝のおおせによって、この信濃の国へ来たお人であろうよ」

その滋野氏は、平安朝のころ、三家にわかれた。

その中の海野氏が、真田家の先祖ということになる。

「なればよ、佐平次。この信濃から上野の両国にかけて、おれの家と血を分けた武士どもが、ずいぶんとおるのだ。そこのところを、よう考えてみよ。わかるか？」

「わかりませぬ」

「そうだろうな。ま、食べよ。たくさんに食べよ」

「はい」

「おれは、まだ、のんだことはないが、お前は酒をのむか？」

「のんだことはござりますが、好きではござりませぬ」

「そうか、では、食べよ」

源二郎が、このように佐平次を、

「わけへだてなく……」

あつかうものだから、家来たちも、まさかに佐平次が武田方の長柄足軽だとはおもっていなかったろう。

「いずれにせよ、滋野の一族が、れんめんとして、たがいに助け合うて来たので、このおそろしい戦国の世を、われらも何とか切り抜けられて来たというわけだ」

もったいをつけ、まるで、自分の弟か子供にでもいい聞かせるような、源二郎の口調なのである。

「そしてな、海野信濃守棟綱様の子が、おれの祖父様だという。祖父様は、この真田の庄に住みつかれ、真田の姓を名乗り、ひとり立ちをなされた。わかったか？」

「はい」

源二郎のはなしは、簡潔をきわめている。

佐平次にも、よくわかった。

だが、一説には、海野棟綱のむすめが、真田家へ嫁ぎ、源二郎の祖父・真田幸隆を生んだともいわれている。

とすれば、すでにそのころ、真田家という豪族が別に存在していたことになるが、やはり何らかのかたちで、血のつながりはあったのではなかろうか。

真田家に関する諸系図や文書を、いまのわれわれの眼で調べて見ても、正確は期しがたいようにもおもわれる。

この物語では、後年に、

〔真田幸村〕

の名をもって、人口に膾炙することになる源二郎少年の説明を、向井佐平次ともども信ずることにしたい。

十四

その翌朝。

真田源二郎と向井佐平次が、二十名ほどの家来にまもられ、真田の庄を発った。

すでに、真田安房守昌幸は、上州の沼田城に入っている。

沼田城は、沼田万鬼斎以来の結構な構築が、そのままに温存されていた。

現代の群馬県・沼田市の台上にきずかれていた沼田城には、薄根川をのぞむ断崖に面して本丸と二の丸の曲輪がもうけられ、南へ三の丸の曲輪。その周囲にも、濠をめぐらした小さな曲輪がいくつもあった。

二の丸の内の北側に、保科曲輪とよばれる一郭がある。

かつて、沼田万鬼斎は、ここに愛妾ゆのみの居館をつくった。

真田昌幸は、沼田城へ来ると、この居館に起居することにしていた。

万鬼斎が愛妾のために、贅をつくして建てたものだけに、屋根も優美な檜皮ぶきで、合わせて十間ほどの小さい館ではあったが、武骨で質素な岩櫃や真田、砥石の館などには到底見られぬ瀟洒な雰囲気があった。

万鬼斎と愛妾ゆのみの間に生まれた沼田平八郎は、昌幸が壺谷又五郎とはかり、謀略にかけて殺害したわけだが、ゆのみは、いま、昌幸がねむっている寝間で、平八郎を生み落としたのであろう。

その朝。

真田昌幸が目ざめたとき、あかつきの闇が、まだ濃かった。

ねむり燈台の火は消えていたが、かすかな朝の光がただようともなくただよっていて、寝返りを打つと、となりにねむっている女の横顔が、先ず目に入った。

女は、健康そうな寝息をたてている。

のびのびとした肢体の、この女の背丈は、昌幸よりも高い。

いいつたえによると、沼田万鬼斎の愛妾も、背丈の高い、胸幅のひろい、堂々たる体格のもちぬしだったというが、その顔貌は、

「何物にもたとえようがない……」

ほどに、美しかったという。

それにひきかえ、真田昌幸の傍にねむりこけている女の顔は、

「くらべものにならぬ……」

と、いってよい。

いつであったか、沼田城へ来た真田源二郎が、この女の顔を評して、

「兄上。あの女の顔は、つきたての小豆餅のようなものです」

兄の源三郎信幸に密語したことがある。

「どこに、鼻があるのか、わかりませぬ。鼻の穴だけはしかとたしかめましたが……」

「ほう……さほどに鼻すじが低いのか」

「父上も、物好きな……」

と、そのとき源二郎が、さも忌々しげに顔を顰めるのを見やって、源三郎は言葉を返さず、しずかに微笑をうかべていたものだ。

「これ……これよ……」

昌幸は、女の躰をひじで突いてみた。

軽く突きあてたひじが、そのまま女のやわらかい肌身の中へ吸いこまれそうな感覚をおぼえる。

女の顔の美醜には、あまり関心がない真田昌幸にしても、この女の顔だけは、

「昼日中にまじわるときは、あやつめの顔に頭巾でもかぶせておかねば、好きごころも萎えてしまうわい」

なぞと、冗談がいえる侍臣にもらしたりする。

女の名を、お徳という。

お徳の夫は、岡内喜六といって、真田家の鉄砲足軽であったが、一昨年の春に、沼田平八郎を謀殺したときの、大手門前の戦闘で討死をしてしまったのである。ときに三十一歳。

だから、お徳も若くはない。

昌幸は、

「いくつになる？」

と、聞いたこともなかったが、二十六、七歳にはなっていよう。

岡内喜六と夫婦になってから五年目に、お徳は寡婦となったわけだ。
夫婦の中には、一人の子もない。
沼田では、お徳のことを、
「石女」
と、よんでいたらしいが、夫婦ともに健康であった。
夫が亡くなったのち、子もなかったので、お徳は、沼田城内の居館へ奉公をすることになった。
いまのところ、沼田城内には、昌幸夫人の山手殿も住んでいないことだし、侍女の数も多くはない。
お徳のように立派な体格をした女がいて、しっかりと用向きの事を果たしてくれるほうが便利でもあった。
ところが……。
居館へあがると間もなく、真田昌幸の、
「手がついて……」
しまったのである。
源二郎のみではない。
「殿も、まことに物好きな……」
「選りに選って、あの、お徳をな……」

家来たちが、蔭であきれもしたし、苦笑まじりの密語をかわしていたようでもある。
昌幸は、すでにのべたごとく、妻が痩身の美女なのに、これをあまり好まず、豊満な肉体をもつ女を好む。
その点では、申しぶんのないお徳だったのであろう。
そしてまた、お徳が岡内喜六と五年もの間、夫婦の暮らしをつづけながら、子を生まなかったことが、昌幸には気に入った。
自分が手をつけて、子が生まれたとて、戦国の武将であるからには、よろこびこそすれ、困るはずはない。源三郎・源二郎の兄弟にしても、いつなんどき、何処かの戦場で討死をとげぬものでもない。
男の子なら、何人あってもよい。
女子ならば、これを、自家にとって有利な他家へ嫁がせ姻戚をむすぶことができる。
しかし、昌幸は、
（いまのところ、子は欲しゅうない……）
のであった。
それはいうまでもなく、妻の山手殿の嫉妬が恐ろしいからである。
（恐れるわけがないのに、何故、おれは妻を恐れるのか……？）
そこが、昌幸には自分でもわからぬ。
（おれほどの男が……）

である。

だが……。

その真田昌幸の胸の底には、はっきりとしたかたちをとっていない何物かが、山手殿の妬心と警戒を肯定しているかのようであった。

ただ、昌幸は、それを口にのぼせるのがおそろしい。

いや、胸におもうことが、やりきれぬほどに、

（疎ましい……）

のかも知れなかった。

「これ……これよ……」

また、昌幸のひじがお徳を小突いた。

「むうん……」

鼻を鳴らし、お徳が、寝返りを打ち白い双腕を昌幸のくびへ巻きつけてきた。

昌幸の顔が、もろにお徳の乳房へ埋まった。

はだけた寝衣の中にこもっていたお徳の濃厚な体臭を、昌幸は、おもいきり吸いこむことになった。

化粧はまったくせぬお徳なのだが、体臭が濃く、昌幸は、そのにおいがきらいでなかった。

容貌にはふさわしからぬ濃艶なにおいなのである。

初夏のころに白い花をつける梔子の……その花の香りのような体臭であった。

「おのれは、まだ、いたのか……」
昌幸が乳房から顔をはなし、お徳を詰った。
「むうん……」
お徳は、甘えかかるのみだ。
このごろは、夜の睦語りが終わっても、そのまま、お徳は昌幸に添い臥してしまうことが多い。
「ひとねむりしたら、帰れよ」
仕方もなく、昌幸が念を入れると、
「あい」
うなずくのであるが、そのまま、朝を迎えてしまう。
お徳は、昌幸の正式の〔側妾〕にはなっていない。
そうなれば、しかるべき館をあたえ、侍女もつけ、相応の待遇をしてやらねばならぬ。
こうなると当然、岩櫃城にいる山手殿の承認を得なくてはならない。
ために昌幸は、お徳を、
「隠し女」
にしているだけなのだ。
狡いといえば狡いのだけれども、お徳がまた、自分を正式にみとめてくれとはいわない。
日中のお徳は、他の侍女たちの先に立ち、いそがしげにはたらいている。

同時に、側室でもないものが、朝の光が射しこむまで、添い寝をしているというのは、（他の見せしめにならぬ）のである。

「これ。起きぬか、徳……」

「むうん……」

「これ……」

いいさした昌幸の口が、お徳のくちびるによって封じられた。

二の丸の奥庭で、雀（すずめ）が鳴きはじめている。

「しようのないやつめ……」

舌打ちをしながらも真田昌幸が、お徳のひろやかな背中へ腕をまわしたときであった。

「殿……殿……」

控えの間へ入って来た家来の声が聞こえた。

「殿……お目ざめでござりましょうか？」

「うむ……」

「もし……殿……」

「目ざめておるわ。そこを開けるな。いま行く。待て」

昌幸は、お徳の双腕を振り放し、起きあがった。

寝衣の乱れをととのえ、控えの間へ出て行くと、家来の横道分蔵が両手をつかえている。

「何事じゃ」
「壺谷又五郎殿より、使いの者が到着いたしまいた」
「何と……」
「御城代様が、お待ちでござります」
「よし、いま行く。ひとりで行く。お前は先へ行け」
「はっ。では……」
「行け、行け」
寝間へもどると、お徳が甘えかかる。
昌幸は「それどころではないわ」と叱りつけ、お徳に手つだわせて身仕度にかかった。

天魔の夏

一

真田昌幸は、本丸の居館内にある〔対面所〕へ出て行き、壺谷又五郎がさし向けてよこした密使に会った。

密使は、又五郎が岩櫃城を出るときに同行した草の者の姉山甚八であった。

甚八は、又五郎の密書をたずさえていた。

うすくて丈夫な紙に、細字がびっしりと書きつらねてある密書を細く固く巻きしめ、その上を蠟でおおい、これを甚八は髪の中へ隠しこんで来たのであった。

対面所には、沼田城代の矢沢薩摩守頼綱も、昌幸を待っていた。

矢沢頼綱は、この年、五十二歳になる。

この、昌幸の叔父にあたる老臣は、先代・幸隆の死後、真田家の当主となった甥をたすけ、尽瘁しつづけてきた故か、年齢より十歳は老けて見えた。

岩櫃の城代をつとめている我が子の矢沢頼康を、そのまま老けさせたような風貌であった。

「三十郎が、あと二十年もすると、ああいう姿かたちになるのだな」

と、真田昌幸が、いつもいう。
顔が似ているというより、躰つきが似ている。何気ないそぶりが似ている。
それに音声が似ているものだから、昌幸は、岩櫃にいるとき頼康の声を聞いて沼田の叔父かとおもうし、沼田に来れば、薩摩守頼綱に声をかけられ、おもわず、
「三十郎か……」
と、返事をしてしまうこともすくなくない。
「甚八か。早かったな」
「はい」
すでに、蠍をはがしておいた密書を、姉山甚八が昌幸へさし出した。
「隠岐守の落ち着き先は、わかったのか？」
「はい」
「浜松か？」
「はい」
「そうか……」
さすがに、昌幸は安堵の表情をうかべて叔父を見やった。
矢沢頼綱も、うれしげに何度もうなずいている。
昌幸の弟・真田隠岐守信尹は、徳川家康の居城・浜松に屋敷をもらっているらしい。
昌幸は、壺谷又五郎からの密書をひろげ、読みはじめた。

それによると、徳川家康は相当に、
（弟めを信頼しているらしい……）
ことがわかった。
信尹は又五郎に、
「兄上のことは、わしがうまくはからうゆえ、むやみにうごかぬよう」
と、いったそうな。
家康は、上信二州における真田家の実力を高く評価している。
それに、真田家は、主家（武田家）が滅亡に至るまで、これを裏切ることがなかった。この事に、家康は注目している。
それは織田信長にしても同様であって、ほとんど勝敗が決したのちに、主家を裏切り、こちらへ味方をしたものなどには、目もくれぬ。
そうした人物では、これから先、自分の傘下へくみ入れても、
「信頼できぬ」
からであった。
徳川家康は、隠岐守信尹から、真田昌幸のことや、真田家の家風について、くわしく聞きとっていると看てよい。
家康は、甲州出陣に際し、信尹へ、
「房州（昌幸）のこと、悪しゅうはせぬ」

と、いい残して行ったそうな。

これは家康が信長に口ぞえをして、真田家の安泰をはかってやろうというのだ。

そのかわり、すべて家康にまかせ、決して逆らうようなことがあってはならぬ、と、隠岐守信尹は又五郎にいった。

織田信長は、近いうちに、徳川家康の案内で甲州から浜松へあらわれ、それから東海道を安土へ凱旋することになろう、と、又五郎は密書に書きしたためている。

ともかく、これからは、

「何事にも耐え忍ばれるよう、兄上へ申しあげてくれ」

隠岐守信尹は、さらに、

「たとえ、小田原に無体なふるまいがあろうとも、耐え忍ばれるよう」

と、念を入れたそうである。

小田原とは、北条氏政を指す。

北条氏は、

「関東の盟主」

を、自認している。

関東・北条氏の祖である北条早雲（伊勢新九郎）以来、四代にわたって関東を席捲し、武田・上杉・徳川とも兵を構えた。

南関東を制圧した北条氏が、北関東への進出を熱望したのは当然であった。

上州・沼田城を、沼田氏の内乱に乗じて手に入れた北条氏政は、利根川の西岸に、まだ残っていた上杉氏の勢力と争った。

そして真田昌幸が、この争いの中へ、突如、割って入ったのである。

昌幸は、沼田城を手に入れると共に、北条・上杉両氏の残存勢力をしりぞけ、沼田を武田氏の支配下に置いたのだ。

弟の信尹が、昌幸へ、

「小田原の無体にも、これからは辛抱なされ」

と、又五郎を通じていってよこしたのは、このことである。

いまのところ、北条氏政は徳川家康と共に、織田の傘下にあるといってよい。

北条氏政の野心は、いたずらに信長へ屈服するだけでおさまるものではないだろうが、いずれにせよ、現在の北条氏には、むかしのおもかげはない。

天下は、いまや、織田信長の手中につかまれようとしている。

信長は、関東一国なぞ、

「歯牙にもかけぬ」

のである。

天下を制圧すれば、しぜんに関東も治まるのだ。

時代は大きく、激しく移り変わろうとしている。

ゆえに、

「仲の悪い小田原とも、これからは当分、みだりに事を構えず、おとなしゅう、徳川家に従うことがたいせつである」

隠岐守信尹は、そう説いている。

真田昌幸は苦虫を噛みつぶしたような顔つきになり、矢沢頼綱へ密書をわたしてから、

「甚八」

「はい？」

「まさかに、この沼田へ、小田原の蛆虫が入って来るのではなかろうな」

「さて……」

そこまではまだわからぬ。

北条氏政を捩り、

「北条蛆虫」

と、昌幸は呼ぶ。

それほどに嫌っている。

すでに甲州の本陣で、織田信長は、上州と信州を、二将にあたえている。

森長可と、滝川一益の二将だ。

上州へは滝川一益が入って来るわけだが、そのことはまだ、浜松へとどいていない。

ために、織田信長が、もしや、上州・沼田を、

「北条氏政へ……」

あたえたりはすまいか、と、昌幸は案じたのだ。
そのようなことはないとおもうが、
（ないとも、いいきれぬ）
のである。
「殿……」
と矢沢頼綱が密書を読み終え、しずかに声をかけてよこした。
「うむ？」
「小田原は、沼田へまいりますまい」
「さようか、な……」
「信長公は、さほどに、空けではござらぬ」
「ふむ、ふむ……」
昌幸の機嫌が、いくらかよくなったようだ。
「さよう。上州を北条蛆虫へくれてやるようなれば、まさに、織田信長は空けよ」
なんとしても、北条氏政へ、沼田城を引きわたすことが、
（おもしろくない……）
真田昌幸であった。

二

北条蛆虫（氏政）について、つぎのようなはなしが残っている。
氏政が、父・氏康の跡をつぎ、小田原城主となって間もなくのことであったが、ある夜、家臣たちもいる宴の席で、突然に、
「ああ……」
と、いまは隠居の身となった北条氏康がふといためいきをもらし、箸を置いて、
「……北条の家も、わしの代で終わってしまうのか」
つぶやいた。
父の傍で食事をしていた氏政が愕然となり、
「父上、それは、何のことでござる？」
「おぬしのことよ」
「何と、おおせられます」
「いま、おぬしが飯を食べているのを見ると、おぬしは一膳の飯に汁を二度もかけているではないか」
「はあ……それが、何故……」
「まだ、わからぬのか。人は毎日、飯を食べる」
「いかにも」
「なればよ。ばかものでないかぎり、食事については何百回、何千回もの稽古をしているわけじゃ。それなるに、おぬしは、一膳の飯へかける汁の分量もまだわからぬのか。一度かけ

て足らぬので、また汁をかける。まことに、おろかなことじゃ」

「……？」

「わしの申すことが、まだわからぬか。よいか、よく聞け。朝夕におこなうことを計り知ることができぬようでは、一皮へだてた他人の肚の内にひそむ考えを知ることなど、とうていかなわぬことだわ。他人のこころがわからなくては、よい家来もついて来てはくれぬ。まして、敵と戦って勝てる道理がないではないか。なればこそ、北条の家も、わしの代で終わると申したのじゃ」

我が子を、きびしくいましめたという。

これがすなわち、真田昌幸が北条氏政を、

「蛆虫」

とよぶ由縁なのである。

いまは、あきらめきれぬところを、

（むりにもあきらめて……）

織田・徳川の傘下へ屈従する決意をした真田昌幸だが、万一にも、北条氏政が沼田を支配するようなことになれば、

（かならず、おれと争うことになる……）

昌幸はおもいきわめている。

沼田と、昌幸の岩櫃とは境界を接しているのだ。

かならず、問題が起きて来よう。
しかし、よく考えて見れば、小田原に本城をもつ北条氏政へ、信長が、
「上州をおさめよ」
と、いうわけがないようにもおもえる。
そのようなことをすれば、北条の旧地盤が、
（息を吹き返す……）
ことになるからであった。
もっとも、いまの信長は中国地方の制圧に取り組んでい、近いうちに、今度の甲州攻め同様の大規模な作戦が展開されようし、そうなれば、信頼のおける麾下の諸将を上信二州へ手放してしまうことによって、戦力に不足が生じるであろう。
だから信長が、すくなくとも中国平定がすむまでは、これに関係のない上信二州の内情をよくわきまえている北条家にまかせようとするのではないか……と、そこまで昌幸は神経をくばっていたのである。
だが、矢沢頼綱になぐさめられ、昌幸も、いくらか気を取り直したところへ、
「殿……」
姉山甚八が、ひざをすすめて、
「申しあぐることが、まだ、ござります」
「何じゃ？」

これは、壺谷又五郎が口頭をもって、
「殿へおつたえせよ」
と、いったのである。
「小田原は、こたびの甲州攻めに、何のはたらきもしておりませぬそうで……」
「何……」
昌幸と頼綱が顔を見合わせた。
この点、まだ、草の者がとどけて来る情報に欠けるものがあったのだ。
昌幸は、北条氏政は関東から出陣し、信長を助けて戦ったにちがいないと考えていた。
彼らが戦うまでもないほどに、
（呆気もなく……）
敗れ去った武田家であったにせよ、である。
自分の妹が武田勝頼夫人であるなら、それだけになお、信長への忠誠を見せておかねばならぬはずだ。
（おれならば、そうする）
しかし、氏政はぐずぐずと出兵をためらい、
「信長公は、二度と、左京大夫（氏政）の顔は見とうないと、おおせられたそうでござります」
と、甚八が又五郎の言葉をつたえた。
「あの蛆虫の大たわけめが……」

真田昌幸は手を打ち、立ちあがって足をふみ鳴らしつつ、
「蛆虫めが……あは、はは。蛆虫めが……」
さも愉快げに笑い出していた。
戦功がなければ、行賞もないに決まっている。
壺谷又五郎が浜松で得た情報だけに、これはかなりの信憑性をもっていると看てよい。
（ともあれ、蛆虫へ、この沼田を引きわたさずにすんだ……）
らしいのである。
「あは、はは……何という……何というおろか者なのだ。あの小田原の蛆虫めは……」
あたりかまわぬ大声であった。
と……急に、
「う……」
昌幸の笑いくずれた顔が、そのまま、空間に貼りついたようになった。
いつの間にか、長男の源三郎信幸が入って来ていて、矢沢頼綱の傍にすわっているのを見たからだ。
矢沢頼綱は、謀略に長け、武勇にすぐれ、一国一城の主である三十六歳の甥が、これほどまでに北条氏政の沼田入城を嫌っていたのか、とむしろ微笑ましげに、昌幸の歓喜の言動を見まもっていた。
だが、源三郎はあくまでも、ものしずかな光をたたえた双眸を父へ向けている。

いつ、対面所へ入って来たとも知れぬ、そのひそやかで落ちつきはらった十七歳の長男の前で、昌幸は、菓子をもらった童子のような燥ぎぶりを見せてしまった。

その、はずかしさが怒りに変わるのは、わけもないことであった。

「おのれは、岩櫃に留守居しておったはずだぞ」

「お知らせに駆けつけました」

「何じゃと……」

「源二郎が、今日のうちに、おそらく岩櫃へもどるとおもわれます。地蔵峠の草の者が岩櫃へ知らせてまいりました。昨夜は砥石か真田へ泊まったらしくおもわれます」

「おれは、源二郎のことを訊いておるのではない。何故、おのれが、おれに何のことわりもなく、沼田へ出てまいったかと訊いておる」

「源二郎がことを、父上が案じておわすと存じ、すぐさま、知らせにまいったのです」

「家来をさし向ければよいではないか。お前は……」

いいさした昌幸へ、矢沢頼綱が割って入るように、

「世つぎの子でおわす」

と、いった。

昌幸が、じろりと叔父をにらんだ。

何でにらんだのか、昌幸にはわからぬ。

人は、おのれの顔の表情を正しくとらえることができぬ動物なのである。

「いかにも、源三郎は世つぎ！」

昌幸が頼綱へ叩きつけるようにいい、源三郎の顔を見ぬようにして足音荒く、対面所から出て行った。

姉山甚八は困惑している。

それへ、矢沢頼綱が何事もなかったような、おだやかな声で、

「甚八は、今夜、沼田へ泊まるか？」

「いえ、すぐに浜松へもどらねばなりませぬ」

「又五郎が、さように申したのか？」

と、これは源三郎だ。

源三郎も平然としている。父の怒りが、決して自分への憎悪でないことをわきまえていた。しかし、言葉ではいいつくせぬわだかまりが、父と自分との間に在ることも承知している。

源三郎は立ちあがり、

「甚八。発つ前に、いますこし、はなしを聞きたい。待っている」

こういって大叔父の頼綱へ一礼し、対面所から去った。

三

姉山甚八は、その日のうちに沼田を発ち、壺谷又五郎が待つ浜松へ引き返して行った。

翌々日。

甲斐へ潜入して行った草の者・奥村弥五兵衛の手の者が、沼田城へ駆けつけて来た。

これは、織田信長によって決められた上信二国の新領主の名前を告げるものであった。

同じ信州といっても、森長可にあたえられた四郡は、さしあたって真田家に関係がない。

真田家の本拠である信州の小県・佐久の二郡と、上州一国をあたえられた滝川左近将監一益が、真田家にとっては重要なのである。

真田昌幸は、これからのち、滝川一益の、

〔寄騎〕

となるのだ。

すなわち、滝川麾下の武将ということになり、滝川一益に忠誠をつくすことが、そのまま織田信長への忠誠ということになる。

（滝川左近将監とは、いかなる漢か……？）

昌幸も実は、

（気が気ではない……）

らしい。

自分に、ぴたりと呼吸があってくれるような人物ならばよいが、もしも、

（小田原の蛆虫のような漢ならば……）

おそらく自分は、屈服しないだろうという予感がある。

滝川一益に屈服せぬことは、織田信長に屈服せぬことになる。

そうなったときは、
（おれも、武田のあとを追うことになろう）
このことであった。
むろん、わが庭のような上信の山野を存分に駆けまわり、激しく戦いぬき、滝川一益に苦戦せしめる。
苦戦どころか、
（滝川のみならば、断じて負けぬ）
という自信を、昌幸はもっている。
こうなると、信長は放ってはおけまい。
自身は中国征討の大事があるから、出馬しまいが、おそらく信長の命によって徳川家康と北条氏政の連合軍が、
（おれに攻めかけて来よう）
そうおもうとき、昌幸の血が熱して来る。
おもうだに愉快なことではあるが、いうまでもなく、最後には滅び絶えることを覚悟せねばならぬ。自身のみか、源三郎も源二郎も、家来たちもだ。
滝川一益を見たことはないが、その評判は、昌幸も耳にしている。
左近将監一益は、大永五年に近江の国で生まれたというから、五十八歳になる。
しかし、一説には生年不詳といわれている一益だし、いろいろ他の事実に照合してみると、

いますこし年齢が若かったようにもおもわれる。
また一説には、尾張の国の出生だともいう。
ともかく、滝川一益は、彦右衛門と称したころから織田信長に仕えており、若き日の信長を助け、かずかずの戦功を立てて来た。
「鉄砲の名手だそうな……」
と、真田昌幸が、矢沢頼綱へもらした。
高遠城が落ちたとき、総司令官・織田信忠が父・信長へ、
「左近将監なくして、このように早く、城を落とすことは成りませなんだ」
と、報告をし、信長は満足そうにうなずいたという。
つまり、それほどに信長・信忠父子は、滝川一益の智謀と武勇を、
「買っていた……」
ことになる。
滝川一益は、主・信長が戦うたびに、その先鋒となって勇戦奮闘した。
八年前に、伊勢の長島で一向一揆の反乱が起こったときも、信長は一益を信頼し、その鎮圧を命じているし、反乱平定後には、前の蟹江城主の地位をそのままに、長島城を一益にあたえている。
そして、今度の甲州攻めにも、一益は例によって先鋒をつとめ、堂々たる武勲を立てたのであった。

すくなくとも、一益の〔戦歴〕については明白である。
だれの目にも、彼の戦将としての評価は大きく映じている。
（手強い漢らしい……）
昌幸は、いよいよ一益を迎え、これに臣従することになり、さまざまに想像をたくましくしてみたが、
（どうも、おれに似た漢らしい……）
ように、おもえてくることをどうしようもなかった。

それから十日後に……。
滝川一益は、精鋭の部隊をひきい、上州へあらわれた。
伊勢・長島の本領へはもどらず、甲州攻めの軍装もそのままに、上州入国をしたのであった。
それに先立ち、一益の使者が沼田城へ馳せつけ、沼田開城の打ち合わせをおこなった。
それによると、滝川一益は厩橋城へ入り、沼田城へは、一益の甥にあたる滝川儀太夫益重が、一益の〔城代〕として入ることになったそうな。
使者の口上は、いちいち理にかない、いささかも勝者の傲りを見せない。
（これなら……）
と、矢沢頼綱は安心をしたようである。
昌幸は、むずかしい顔をしていたが、丁重に使者をもてなした。

すでに昌幸は、あれから沼田へやって来た源二郎や、源三郎を岩櫃城へ返してある。
源二郎は、向井佐平次を岩櫃へとどめておき、沼田へは連れて来なかったようだ。
（万一にも……）
と、いうことがある。
昌幸は、滝川一益を上州の地へ迎えるにあたり、岩櫃の居城の防備をかためさせておいた。
しかし、その必要もなさそうであった。
果たして、沼田へあらわれた滝川儀太夫は、精悍な武将であったが、まず、
「このたびは、さぞ、心痛のことでありましたろう」
と、武田の宿将であった真田昌幸へ、なぐさめの言葉をかけてよこした。
「かたじけなく存ずる」
さすがの昌幸も、神妙にならざるを得ないではないか。
昌幸は、ただちに、沼田城内へ待機させておいた草の者を岩櫃城へ走らせ、戦備を、
「解け」
との命をつたえさせた。
翌日。
いよいよ、滝川一益が厩橋へ入城して来た。
真田昌幸は、矢沢頼綱以下二十騎を引きつれ、沼田から厩橋へおもむき、一益に挨拶をした。
「これは、ようわせられた」

滝川一益は、ねんごろに昌幸を迎え、
「こたびは、さぞ、心痛のことでござったろう」
と、なぐさめた。
甥の儀太夫と寸分ちがわぬ言葉であった。
一目で、真田昌幸は、滝川一益に好感を抱いた。
このときの、はじめての会見によって両者は打ちとけ、それがために以後、真田家と滝川家の縁が、一益や儀太夫亡きのちも数十年にわたってつづくことになる。
滝川一益が、このとき五十八歳だとするなら、昌幸の眼には、到底そのようにはおもえなかったろう。
一益を見た瞬間に、
（源二郎に、よう似ている……）
と、昌幸はおもった。
日に灼けつくした面立ちが、ふっくらとしている。
両眼が細く、柔和である。
そして、自分や源二郎のように小兵なのが気に入った。
小兵ではあるが一益の体は、まるで力士のような筋肉によろわれていた。
「岩櫃、砥石、真田は、これまでのごとく、そこもとにおさめてもらいたい」
と、滝川一益がいきなりいった。

昌幸は、瞠目した。
そのことを昌幸は、もっとも心痛していたのである。
その昌幸の苦悩を、早くも一益は察知していた。
（安房守を安堵させなくては、行く先、どのような面倒が起こるやも知れぬ）
このことを、一益はよくよくわきまえていたらしい。
「かたじけのうござる」
おもわず、昌幸は両手をついていた。
「なんの……」
かぶりを振った滝川一益は、くだくだしいことをすこしもいわずに、ただ一言、こういった。
「安房守殿。ちからを貸してもらいたい」

四

そのころ……。
織田信長は、すでに、安土への凱旋の途上にあった。
信長の軍団は、古府中から右左口を経て、富士山の裾野を駿河の国へ入った。
「これが、富士の山か……」
信長は四十九歳のこのときまで、このように間近く、富士山を見たことがない。

若葉が青葉に移行しつつある美しい風景の中を、大勝利に酔った軍団は意気揚々とすすんだ。

長年にわたり、信長がもっとも恐れていた宿敵を屠ったいま、背後の脅威に苦しむことなく、中国の毛利氏と、四国の長宗我部氏を討つことができる。

そして、九州を平定すれば、信長の天下制覇がついに完成することになる。

信長は青木ヶ原の樹海や富士五湖の景観を、おもうさま、たのしんだ。

平穏な風土に生まれ育った織田信長は、このあたりの凄烈ともいうべき自然の、いまだ人の手を寄せつけぬ姿が気に入ったらしい。

「いずれ、このあたりに……」

信長は、初夏の陽光の中に聳える富嶽を仰ぎつつ、

「このあたりに、城を築いて見たいものよ」

と、いい、恍惚の表情をうかべた。

徳川家康は信長に先行し、道々に休み茶屋をもうけ、宿営地には立派な仮小屋を建てて、信長を瞠目せしめた。

かつて信長は、自分の娘聟であり、家康の長男でもあった三郎信康を切腹せしめている。

これは、信康の生母・築山殿が、ひそかに武田家と通じていたことから、信康へも信長のうたがいがかかった事件であった。

世上では、あまりにも、すぐれた資性をそなえた三郎信康が成長したあかつきに、信長の

子の信忠を、
「圧倒するにちがいない」
そのため、いまのうちに、
「三郎信康を切腹せしめたのだ」
という、わさもながれた。
そのうわさが耳に入ったとき、織田信長は、
「凡庸の言種よ」
歯牙にもかけずに、笑っていた。
信長にとって、次代のことなど問題ではない。
自分自身が、天下の戦乱を取り鎮める大事業を完遂すればよいのである。
「次の世のことなど、なんで、人間にわかろうか……」
であった。
三郎信康に切腹を申しつけたのは、たとえ信康が潔白であったとしても、同じ浜松の城中に住み暮らしながら、母・築山殿の内通を知らなかったという責任をとらせたのだ。
これは、徳川家康にも、
「責任を負うてもらわねばならぬ……」
ことなのである。
いかに、仲がわるいからといって、妻の築山殿と別居し、自分は岡崎城へ去った家康も、

妻と武田家との怪しい関係にすこしも気づかなかった。

これは、信長にとって、

「なんとしてもゆるせぬこと」

であったのだ。

そのころは信長の神経は張りつめきってい、僅少の油断も自分にゆるすまいとしていた。

それほどでなくては、天下平定の理想を成就させることができぬ。

女にも子供にも……いや、女や子供であればこそ、尚更に気はゆるせぬのであった。

あのとき、いざとなれば徳川家康の反乱をも覚悟せねばならなかった。

自分の命をきかず、家康・信康父子が、それこそほんとうに武田勝頼へ味方することも、信長は予想していたのである。

こうなれば、さらに背後をおびやかされることになるが、

「天下の見せしめのためには……」

あえて、忠実な同盟者である家康へも、きびしくのぞまなくてはならなかった。

（あの折の自分の、必死懸命だった胸の内を、三河守（家康）は、よくわかっていてくれたらしい）

それが、いまこそ信長に、はっきりと納得できたといってよい。

もっともたのみにおもっていた我が子を、むざむざと死なしめたあのときのことを、家康は忘れきったかのように、どこまでも徹底して、信長への忠誠を表現しようとしている。

これは、武田勝頼を討滅したこと以上に、信長にとって、
（こころ強いこと……）
であったやも知れぬ。
信長は、たしかに感動していた。
（三河守へは、大いに、むくいなくてはならぬ）
と、決意している。
そのくせ、天皇の使いとして甲州攻めを観戦に来ていた関白・近衛前久が、
「自分も、信長公と共に、富士の山を見ながら東海道を上って、京へ帰りたい」
申し出たところ、信長はすげもなく「近衛」と、呼び捨てにし、
「わごれなどは、木曾路をのぼって帰られよ」
と、同行を断ってしまった。
関白といえば、天皇を補佐する最高の職名である。
しかし信長には、口先だけで何の実力もない朝臣など、眼中になかったのだ。
その信長が、今度の家康の奉仕には、つくづくと胸を打たれた。
家康は、莫大な金をかけて、道普請までおこなった。なみなみのこころ入れではない。
本栖湖畔の仮小屋を発し、人穴を見物した信長が大宮へあらわれたとき、家康が出迎えた。
織田信長は、すぐさま、腰に帯していた吉光の脇差を、
「三河殿。うけてもらいたし」

と、家康へあたえた。
この脇差は、信長秘蔵の名刀であった。
それは、だれもわきまえていることである。
その名刀を家康へ贈ったところに、信長の心がはっきりとあらわれている。
家康は、
「かたじけなく……」
と、両手に脇差を受け、両眼をうるませた。
おもえば、武田氏という強大な敵を相手に、二人はどれほど耐え忍びつつ、悪戦苦闘をくり返して来たことだったろう。
凱旋してのち、信長は、すぐさま家康を安土へ招待し、勝利のよろこびを分かち合い、そのついでに、家康をゆっくりと京の都で、
（あそばせてやりたい）
とおもいついた。
家康は、この信長の申し入れを、よろこんでうけることにした。
翌日……。
大宮を発した織田信長と徳川家康は、浮島ヶ原へまわり、富士・愛鷹両山のながめをこころゆくまでたのしんでから、江尻へ向かうことにした。
浮島ヶ原は、愛鷹山東面の山麓、須津沼附近の五里にわたる原野である。

朝の陽は駿河湾の海上に高くのぼり、煌びやかな軍団へふりそそいでいる。
それを、草の中に埋もれ、見まもっている旅の女がいた。
女忍びの、お江であった。

五

徳川家康にみちびかれた織田の軍団が、浮島ヶ原を去って江尻へ向かうのを、お江は草に埋もれたまま見送っていた。
地蔵峠に近い渓流で、お江は追跡して来た二人のうちの一人を討ち取った。
そして向井佐平次を、真田家の草の者・奥村弥五兵衛へ託し、いま一人の敵を今度は自分が追って行ったのである。
そのとき、お江は佐平次に、
「これは自分一人のことだから、自分の手で始末をする」
と、いい、弥五兵衛が草の者に協力してもらうがよいとすすめたのに対し、
「わたし一人のことゆえ、迷惑はだれにもかけとうない」
そう、こたえている。
あれから何日が経過したろう。
およそ、一カ月ほどがすぎていた。
お江は、その間、甲斐へ入り、敵を探しもとめつつ、さらに甲斐から駿河の国へあらわれ

たことになる。

お江のいのちを狙い、甲信の国境まで追跡して来た二人の男は、これも何処かの忍びの者と看てよい。向井佐平次ですら、そう感じていた。

佐平次は、その二人のうちのどちらかが権現山・山腹の〔忍び小屋〕を襲って来た二人のうちの一人だと、いまもおもっている。あのときも、お江は一人を討ち取り、一人を逃した。逃れた一人が新たに味方を一人つれて、お江と佐平次を追って来たのではないか……。

そして、またも、お江が一人を討った。それが権現山へ来た者かどうか、そこまでは佐平次も知らぬ。

彼らが、執拗に、お江を殺害しようとしているのは、おそらく私怨あってのことにちがいない。

すでに戦争は終わり、敵は勝利を得たのである。

その上になお、忍びの者同士で争うのは、織田にも武田にも、また真田家にも関係のないことなのではないか。なればこそ、お江は「これは私一人のこと」と、いったのだ。

お江は、その敵と〔決着〕をつけようとし、単身、甲斐へ引き返して行った。

そしていま、近江・安土の本城へ凱旋する織田信長と、

「つかず、はなれず……」

のかたちで、此処まで来た。

お江は途々、信長へ奉仕する家康の姿を遠くからながめ、その奉仕の表現をもしかと見と

どけている。そうしたときのお江の目が真田家の草の者のそれになっていたことは、いうをまたぬ。

「さて……」

立ちあがったお江は、そうつぶやいて濃い草の香りに包まれながら、しばらく沈思していた。

だが、そのうちに……。

ようやく決断がついたとみえ、荷物を背負ったお江は、織田軍の後から江尻の方へ向かったのである。

徳川家康は、わが領国の内へ織田信長を迎えてから、いよいよ、饗応ぶりに念を入れた。

江尻城内での饗宴は、まことに派手やかなもので、質実剛健をほこる家康にしてはずいぶんとおもいきったもののようであった。

そのときの献立は、つぎのごとくだ。

御本膳

一、御汁、麩に白鳥

一、鱠　鯛　きくらげ

一、香の物　御飯

二献
膳（四方）
一、鮎（しもふり）
一、生鮑（針生姜）
一、胡桃あへ

三献
膳
一、栄螺
一、いり昆布
一、御汁（昆布・豆腐）
御菓子盆
胡桃　松の実
濃茶

当時としては、非常に豪華なもので、家康は特に、京都から料理人を呼び寄せた。
織田信長は、満足げに饗応を受け、大いに酒をすごし、上機嫌となり、
「四国攻めには、三七を大将にして、これに五郎左をつけることにいたそう」
などと、いい出した。

三七とは、信長の三男・織田信孝のことで、五郎左は信長の重臣・丹羽長秀をさす。

この信長の声は、居ならぶ諸将の、だれの耳へも入った。

その席には、いま中国へ出陣している羽柴秀吉とならび、信長麾下の俊英と目されている明智日向守光秀もいた。

明智光秀は、信長の言葉を聞くや、急に顔面蒼白となった。

光秀の祖は、美濃の国・明智の庄に起こり、光秀の父・明智光隆は、信長の義父にあたる斎藤道三の傘下に在ったという。

斎藤氏の内紛に乗じ、織田信長が岐阜を制したころ、すでに明智光秀は美濃を去っていた。

光秀が世に姿をあらわすのは、それから何年も後のことで、越前の朝倉義景の知遇を受け、のちに、朝倉家へ流寓していた将軍・足利義昭を信長に引き合わせ、信長もまた、この傀儡の将軍を政治的に利用し、中央進出を目ざした。

信長は、

「光秀は、見どころがある」

と、看て、京都の朝廷や、将軍と自分との間の用向きの事を、光秀にまかせるようになった。

都の上流階級や公家の間で、光秀の顔はひろい。

明智光秀は当代一流の学者であり、文学や茶道にも通じ、戦をさせてもぬかりがなかった。

信長の家臣となってからの光秀は、瞠目すべき躍進ぶりで、いまは近江・坂本城主となり、

志賀・高島の二郡と丹波一国をあたえられ、丹波の亀山にも居城がある。

光秀は、これまでに信長の命をうけ、四国の経略に苦労をしつづけて来た。

ゆえに、今度の四国攻略の司令官は、

「自分をおいて、他にはない」

と光秀はおもいこんでいたようだし、他の諸将も、これをみとめていたようなところがある。

甲州出陣にさいして、光秀は家臣たちへも、

「このたびの戦は、さしたることもあるまいが、帰ってのちの四国攻めが苦労なことじゃ」

と、もらしていたほどだ。

それが、おもいもかけずに、この江尻城中の宴席で、自分が四国攻めから除外されたことを信長の口から聞いた。

こうしたとき、光秀は、感情がすぐに面へあらわれてしまう。

知識人であるだけに神経が過敏だし、主・信長の一語一声に気をつかい、あれこれとおもいをめぐらし、苦しんだり悩んだりする。

織田信長は、常識や慣例に少しもこだわらぬ。

前に光秀が四国の事にはたらいたからといって、今度も光秀を起用すると決めこむことはない。

先ごろ、諏訪の本陣で、信長は長男・信忠と二人きりで語り合った折に、

「日向守には天下が治まったのち、また、はたらいてもらわねばならぬ」

そうもらしていたが、その声は光秀の耳に入っていない。このところ、明智光秀は信長にあまり重用されていなかったのである。

信長は、戦将としての光秀よりも、天下平定後の政治家としての彼を重視していたのではあるまいか。

ともかく……。

青ざめた明智光秀を見て、諸将たちも押し黙ってしまい、座が白けた。

信長は光秀を見て、微かに笑い、

「酔うた。ねむろうぞ」

さっと、寝所へ引きあげてしまった。

光秀の神経の鋭さを重視し、そのはたらきの有能を高く評価すると同時に、信長はまた、自分の言葉に、いちいち、おもいなやむ態を、

「おもしろがる……」

ようなところもあったのであろう。

「わしは、この口先ひとつで、日向守の顔に、赤や青の絵の具を刷いて見せよう」

などと、丹羽長秀へ冗談をいったことがある。

明智光秀が、だれに対してもそうなのかというと、それはちがう。

きびしい主の信長の言動なればこそ、

「失敗はゆるされぬ」

と、おもいきわめ、緊張するのあまり、われ知らず、そうなってしまうのであった。

一城の主となったいまでも、信長に、

「鼠」

だとか、

「猿」

だとか、よびつけられて、へらへらと笑いながら相手をしている羽柴秀吉と光秀とは、そうしたところがまるでちがっている。

たとえば信長が、蔭で光秀のことを、

「あの冬瓜が……」

などといっているけれども、これをもし、光秀に面と向かってよびかけでもしたら、おそらく光秀は屈辱と不安に色をうしない、虚脱してしまうであろう。

だから信長は、気軽に秀吉を「猿」とよんでも、光秀の前では、そのような戯れ言を決して口にのぼせなかった。

六

四月十四日。

江尻城を発した織田信長は、府中を経て宇津谷峠を越えた。

この夜は、田中城へ泊している。

お江は、城下の手前の朝比奈川のほとりで野宿をした。
（佐平次どのの、傷は癒えただろうか……）
荷物と共に背負っていた筵を松の木蔭へ敷き、身を横たえたお江は、ふと、甘やかなものが胸のうちをみたしてくるのを、どうしようもなかった。
（癒えていよう、きっと……そして、いまごろは、砥石か岩櫃の城にいるのではあるまいか……）
自分の、ふとやかな腕の中で、初々しく昂ぶっていた向井佐平次の五体を想い起こしているうち、お江の両眼からは、ふつふつと熱いものがあふれてきた。
佐平次を慕う泪ではない。
女忍びとして、これまでに、お江は何人の男を抱き、抱かれてきたろう。
おそらく、それは、
（数え切れぬ……）
ほどといってもよい。
その大半が、忍びの役目を果たすための相手であった。
女忍びには、おのれの肉体を武器にして〔忍びばたらき〕をすることができる。
これは、男の忍びがおよばぬ利点であった。
抱かれていて、相手を刺殺したことも何度かあった。
このように凄まじい情事なのだから、お江は相手の男に、ただの一度も、

「こころをうばわれた……」
ことはないといってよい。
抱いた男の数さえ知れぬ……というのはそこのところなのだ。
数というよりも、
「顔さえ知れぬ。おぼえてはいない」
と、いったほうがよいだろう。
そのくせ、お江はわが手にかけて殺害した相手の顔は、
「いちいち、おぼえている……」
と、いつであったか、壺谷又五郎にもらしたことがある。
そのとき、二人は伊那の高遠城にいて、落城前の緊迫した日々を送っていたのだが、
「おぬしとおれと、共に忍びばたらきをするようになってから、何年になろうか？」
又五郎に訊かれて、
「さあ……」
お江は苦い薄笑いをうかべ、こたえなかった。
「二十年も、三十年も、共にはたらいて来たような気がする」
又五郎は冗談ではなく、そういった。
「それは、私の父と共にはたらかれたことを、ないまぜにしてしまわれたのじゃ」
と、お江はつまらなそうにこたえたものだ。

「そうか、な……」
「そうじゃ、又五郎どの」
今度は、切りつけるような声音になっていた。
又五郎は、おどろいたように、まじまじとお江をながめていた。
お江の父・馬杉市蔵は、武田信玄がつかっていた、いわゆる〔伊那忍び〕ではない。
市蔵は〔甲賀忍び〕であった。
馬杉市蔵は、武田家につかえる伊那忍びの中に在って、両手の指で数え切れるほどに少ない甲賀忍びの一人であった。
そこに、市蔵の〔悲劇〕があったのである。
市蔵の悲痛な死は、そのまま、成長したお江にむすびついており、いま、彼女が単身、一人の敵を追っているのも、
「この身にまとわりついて来てはなれぬ……」
因縁を断ち切るがため、と、いってよいかも知れぬ。
このことについては、この物語がすすむにつれ、お江自身の言動によって、しだいにあきらかにされて行くこととおもう。
これまでの、お江にとって、通常の〔女〕としての生活はまったくなかった。
ことにお江は、女忍びとして稀有の体力と腕力をもっている。
忍びの者には、それぞれの分担があって、それが忍びの〔本道〕なのである。

闘争の技術に長じていなくとも、頭脳的な探索にたずさわっている者も多いし、武技にすぐれている者が、たとえば町民や漁師、僧侶（そうりょ）などになりきり、長年にわたって敵中に潜入し、種々の情報を送るということは、

「なるべく、避けなくてはならぬ……」

のである。

武技に鍛えられた肉体は、町民や僧侶にふさわしくないからだ。

これは、見るものに見られれば、たちどころに、

「怪しい」

と看破されてしまう。

お江のように、女忍びでありながら、血なまぐさい戦場へ出て、男をしのぐはたらきを見せるというのは実にめずらしい。

戦場に出てはたらく忍びの者を、

「戦忍（いくさしの）び」

とよぶが、女でいて戦忍びがつとまるのは、その絶頂期に二百をこえていた武田忍びの中でも、お江のほかには三、四名ではなかったろうか。

「ああ……どうしてだろう……？」

声に出して、お江はつぶやいてみた。

（佐平次どののことを想いうかべて、何故、このように泪が出てくるのだろう……？）

お江自身にもわからぬ。
女として、年下の佐平次を慕っているのではないことは、お江にもわかる。
お江はむしろ、母のように、姉のように佐平次を抱いた。
はじめは、たわむれにいざない、そのうちに佐平次の反応が激しくなり、あのようなことになってしまったのだが、だからといってお江には、向井佐平次の妻になろうとか、ならぬまでも、
「はなれまい」
と、おもいつめているわけではない。
わからぬ。
ただ無性に泪がこみあげ、胸が切なくなってくる。
(どうしてなのか……?)
お江にとって、これは、はじめての経験であった。
だからこそ、自分で自分がわからぬのである。
これまでに、お江は激しい情感に身をゆさぶられたことが、ほとんどない。
役目のために、男を抱くときも、
(男が女を抱くように……)
抱いて来たのである。
相手を殺すときも、

（男が男を殺すときのように……）

殺して来たのであった。

夜が明けたとき……。

お江の姿は、すでに朝比奈川の畔から消えている。

この日。

織田の軍団は大井川をわたり、佐夜の中山峠をこえて掛川へ入った。

信長が掛川に泊した夜、徳川家康は天竜川へ舟橋を懸けわたすために、みずから河畔にあらわれ、工事の指揮をとったといわれる。

翌日。掛川を発し、見附へ出た織田信長は、家康こころづくしの舟橋をわたることになるのだが、そのときの模様を〔信長公記〕は、つぎのように記している。

……国中の人数をもって、大綱数百筋を引はえて、舟数を寄させられ、御馬を渡さるべきためなれば、おびただしく丈夫にことに結構に懸けられたり。川の面の前後に、堅く番士を据えおき、奉行の人びと粉骨申すばかりなし。

七

天竜川の舟橋をわたり、織田信長は浜松城へ入った。

信長を迎えた徳川家康の饗応は最高潮に達した。

浜松の城下は三日ほど前から、
「名状しがたい……」
大混雑を呈していた。
舟橋を懸けるための人夫が駆りあつめられ、諸方の連絡に徳川の家来たちが馬を駆って飛びまわった。
信長をもてなすために、上方からあつめさせた珍味佳肴を運ぶ荷駄が、つぎつぎに到着する。
「家康卿、万方の御心賦、ひとかたならぬ御苦労、尽期なき次第なり。信長公の御感悦、申すにおよばず」
というわけであった。
お江は、織田の軍団のあとから浜松城下へ入ったが、
（あ……これは、いかぬ）
すぐさま、身を返した。
城下も城外も篝火にみちており、昼のように明るい。
そればかりでなく、警戒が厳重をきわめている。
城内へ収容しきれぬ士卒は、浜松城外に野営していた。
徳川の忍びの者たちが出て、浜松城下の周辺を見廻っていると看てよい。
信長は、四、五日のうちに安土へ帰り着くであろう。

お江はお江なりに、織田・徳川の軍容や両者の提携が、今後も、
「水も漏らさぬ……」
ものであることをたしかめ得た。
この報告は、今後の真田昌幸にとって、相当な収穫となるにちがいない。
（もう、これでよい。私ひとりのことは後にまかせ、いちおうは岩櫃の城へ帰ろうか……）
と、考えながら、馬込川のほとりを北へさかのぼり、三方ヶ原の台地の裾のあたりまで来たお江は、
（いずれにせよ、今夜は、このあたりで野宿をしよう）
そうなると、汗と埃にまみれつくしている躰を洗いたくなった。
こんもりとした木蔭へ入り、お江は衣類をぬぎ捨て、馬込川へしずかに躰を沈めた。
月のない、曇った夜である。
まるで真夏になったかのような暑苦しい闇が重くたれこめていた。
「ああ……」
お江は、おもわず快適の声を発した。
何日も、躰を洗っていない。
清冽な川水が皮膚から体内へながれこんできて、臓器までも洗い清められるような気がした。
頭から川へもぐりこみ、お江は子供にもどったように、水とたわむれている。

しばらくして……、
川岸へあがりかけたお江が、はっとして、ふたたび川の中へ躰を沈めた。
木蔭の、自分がぬぎ置いた衣類の傍に黒い影が一つ、蹲っているのを見たからであった。
「これ……おい……」
黒い影が低い声でよびかけてきた。
お江は、川水へ鼻のあたりまで沈めたまま、相手を凝視している。
（だれか……？）
わからなかった。
しかし、間もなく、わかってきた。
「壺谷、又五郎どのか……？」
「ようやくに、わかったな」
壺谷又五郎が立ちあがった。
「何で、このようなところに……おもいがけぬことゆえ、とっさにわかりませなんだ」
「浜松にいるのだ」
「まあ……」
「隠岐守様は、いま、浜松におわす」
「ま、何よりのこと」
「このところ、隠岐守様御屋敷に滞留している」

「なるほど……」
「城下を、それとなく見まわっていたところ、おぬしを見たので、後をつけて来たのだ」
「それなら、なぜ、早う声をかけてくれませぬ」
「かけようとおもう間に、いきなり、裸になったので……」
「まあ、いやな……」
「早く、あがらぬか」
「はい」
はずかしい様子も見せずに、お江は岸へあがって来た。
又五郎も、これを異としない。
何度も、共に忍びばたらきをしている二人だけに、男女の性別をまったく意識していないかのようだ。
躰をぬぐってから、荷物の中の着替えを出し、お江は身にまとい、先刻まで着ていた汗まみれの衣類を川水に漬けた。
「又五郎どのは、わたしのことを?」
「おお、聞いた。甲賀忍びを一人で追って行ったとか……」
「あい」
「まだ、根が絶ち切れぬのか」
「人の怨念は、忍びの者にとって、ことさらに根深いものゆえ……」

「ふうむ……」
「いっそ、わたしが、甲賀忍びの手にかかってやれば、何も彼もすんでしまうのだけれど……」
「いま、おぬしに死なれては、おれが困る」
「ほんに？」
「あらためて訊くこともあるまい」
お江はだまって、川水に漬けこんでおいた衣類を濯ぎはじめた。
又五郎も、凝と、お江の背中を見つめたままでいたが、ややあって、
「浜松の城下へ来ぬか」
「かまいませぬか？」
「向井佐平次のことなども、耳に入れておきたい」
「あ……佐平次どのは、ぶじに？」
「いま、岩櫃におるげな」
「傷は癒りまいたか？」
「癒ったらしい。源二郎様が玩具にしていると、よ」
「佐平次どのを？」
「うむ。気が合うたらしい」
「それは、よかった……それにしても、又五郎どの。お前さまが浜松にいたのなら、こうし

てわざわざ、織田の軍勢の後について来るまでもなかったのに……」
「甲賀の者を追わぬのか？」
「見うしないました」
「おぬしをつけ狙うている者は、甲賀の、何という忍びなのだ？」
「名は、猫田与助」
「ほう……」
壺谷又五郎は、通常の武士の風体をしている。
「さ、まいろう」
と、お江をうながし、
「会えてよかった。おれは明日、岩櫃へもどるのだ」
「では、いっしょに？」
「いや、折角に此処まで出て来てくれたのだ。信長について行き、安土まで行ってもらおう。どのようなことでもよい。おぬしの目に入ったことを逐一、知らせてくれい。むろん、三人ほどは後からさし向けて手つだわせよう。どうじゃ？」
「それは、かまいませぬが……」
「よし、決まった。これよりは信長も、中国攻め、四国攻めの決着をつけねばなるまいし……それに、三河守（家康）も信長に招かれ、安土へ上るそうな。戦するための忍びばたらきではないが、情報は多いほどよい。それによって真田の殿の進退にあやまちのないように

せねばならぬ」

「あい。真田の殿は、知らせて知らせ甲斐のある御方ゆえ、な……」

「そのことよ」

二人は、闇の中で眼と眼を見合わせ、強くうなずき合った。

自分たちの忍びばたらきを、真田安房守昌幸が、

「粗略にはあつかわぬ……」

ことに、又五郎もお江も、忍びの者としての満足を得ているのであろう。

そこに、常人の想像を絶する鍛練によってつちかわれた、彼らの情熱が燃えあがるのだ。

この一点において、又五郎もお江も、真田昌幸に故武田信玄の面影を看ているのである。

信玄亡きのち、武田家の諜報網は崩壊の一途をたどった。

武田勝頼は、忍びの者の活動を、

「卑しむべきもの」

と、していた。

そこには、偉大な父・信玄への反動があったともいえる。

「武人の勝利は、忍びの者などの助けによって得るものではない」

このことであった。

主人に用いられぬのだから、当然、又五郎たちの活動はおとろえた。

信玄のときのように、おもうさま、費用をかけることもできなくなったし、いのちがけで

つかみ取った情報も、
「右から左へ……」
と、打ち捨てられてしまうものだから、武田忍びの志気も闘志も次第に、うしなわれてゆく。
壺谷又五郎とお江が、真田昌幸に借りられて上州へおもむき、そのまま居ついてしまったのも、
「こなたも御当代（勝頼）を見かぎった……」
からなのである。
「さ、まいろう」
又五郎は、お江へやさしい声をかけた。
「安土へ入るのはゆるりとでよい。三日ほど、隠岐守様御屋敷で骨やすめをしてくれい。姉山甚八もいる。三人で、これからのことをじっくりと打ち合わせようではないか」

八

ところで……。
日本における〔忍びの術〕というものは、どのような経歴をもっているのであろうか。
〔忍びの兵法〕という性格ゆえに、はっきりとしたことは、むろん、わからぬ。
種々の〔資料〕は残されているが、その多くは戦乱も絶え、平穏な江戸時代になってから

書かれたものであるし、それをそのままに信ずることはできまい。

往古、日本の文化は南方諸国や中国から、海をわたってもたらされた。

武具も武器も、戦術もである。

一国の歴史は、戦乱の歴史だともいえよう。

忍びの術も、一種の兵法であって、海外からのさまざまな文明と人間とが日本へ渡来し、交流がおこなわれるにしたがい、我が国へ根をおろしたこの特殊な兵法は、独自の〔忍びの術〕として生まれ育ったにちがいない。

忍びの術といえば〔甲賀・伊賀〕の二流が、これを代表しているかのようにおもわれるが、その他に数々の流派が存在しており、すでにのべたように、武田信玄は、木曾や甲斐の山間や伊那谷に土着した忍びの者たちを選りすぐり、古今無類といわれた間諜網を完成した。

壺谷又五郎は、この〔伊那忍び〕の一人である。

それはさておき……。

甲賀・伊賀の両地における忍びの術が、何故、世にうたわれるほどのものになったかというと、

「……甲賀・伊賀は、むかしむかしのころより、戦の中心となった京の都に近く、したがって、いやでも戦に巻きこまれずにはおられなかったのじゃ。ために、技術も工夫され、仕組みも大きくなった」

お江の父・馬杉市蔵が、少女のころのお江へ、そういった。

京は、往古から日本の首都であった。
首都を制することは、日本を制することだ。
甲賀も伊賀も、山脈ひとつをへだてて隣接し、二十里そこそこの近くに京の都をのぞんでいる。
山々にかこまれ、隠れるによく守るによい甲賀と伊賀の地であり、ことに甲賀は、近江国の東南にあり、古来、京・奈良・伊勢など、政治や経済の中心であった地域への路がひらけ、山岳と川は自然の要害として甲賀の地をまもったのである。
そこで、この地をおさめる土豪が発生する。
〔甲賀武士〕とよばれる一団が、それであった。
むかし、甲賀武士たちは皇室の庇護をうけ、甲賀の地にまつられてある多くの神社の守護に任じており、いわゆる諸方の権勢とは、
「むすびつかぬ……」
存在であったそうな。
そして、もしも天皇と皇室に異変があるときこそ出でて戦うべく、平常は田畑をたがやし、土地の平穏をまもりながら、忍びの術の鍛練にはげんだものだという。
「だが、いまは、もはや、そのような天下ではなくなってしもうた……」
と、馬杉市蔵はいった。
「好むと好まざるとにかかわらず……」

甲賀武士たちも、自分たちの土地をまもるために、武器を取って戦わねばならなくなったのである。

足利八代将軍・義政のころにはじまった守護大名たちの権力争いは、十一年もの間、京の都を中心にして、激戦を反復し、熄むことがなかった。

都は灰と化し、まるで、

「地獄のような……」

世相となった。

それから、天正十年の今日まで、百十余年にわたり、日本の何処かで絶え間なく戦乱が起こっていることになる。

足利将軍をいただき、室町幕府の政治をおこなう大名たちが戦い合っていたのだから、当然、将軍や政府の威力がおとろえ、諸国の豪族や武人たちは、それぞれの権力と化して争いはじめた。

甲賀武士団は、近江の国の守護大名・六角氏を助けて戦った。

甲賀は、甲賀の土地にめぐみをかけ、これを守ってくれる大名について、足利将軍とも戦ったのである。

永正七年の二月。

足利将軍の命をうけて甲賀へ攻め寄せた細川高国の大軍を迎え、甲賀武士はこれを撃退した。

彼らの忍びの術が、おそらく縦横に駆使されたのであろう。

「そのとき、わしの父などは、十三歳の少年にすぎなかったが、京へ探りに出たり、敵の陣所へ忍び入ったりして、みごとに忍びばたらきをしてのけたそうな」

と、馬杉市蔵に、お江は聞かされたことがある。

その祖父・馬杉郷右衛門の顔を、お江は見たこともない。

郷右衛門は、伜の市蔵が五歳のときから、忍びの術を教えはじめた。

「忍びはな、闇の中でも見にゃならぬ。鳥のように飛ばねばならぬ。獣のように走るのじゃ。ゆえに、獣や鳥と同じような生きものになることよ」

まず、市蔵はそういわれた。

そしてまた、市蔵も、ひとりむすめのお江を女忍びにするとき、同じような言葉をあたえた。

ときに、お江は七歳であった。

その前年に、お江の母親が病死している。

市蔵は、妻の死によって、お江を、

「女忍びにする」

決意をかためたのやも知れぬ。

その以前にも、市蔵は、お江を裸体にし、手足や腹、腰のあたりをさすりつつ、

「この躰なら、よい女忍びになれようが、な……」

と、いっていたそうである。
これを承知しなかった妻が死んだので、
「いつもいつも、父の傍におるがよいだろう。なればさ、女忍びになれ」
市蔵にすすめられ、お江はわけもわからずにうなずいた。
「女忍びを手がけるのは、わしも、はじめてのことよ」
市蔵は、むしろ、たのしげにいった。
そして、先ず整息の訓練からはじめた。
鼻の先に、一すじの糸くずをはりつけられ、その糸くずを落とすことなく走りまわることができるようになるまで、それはたしかに、きびしい鍛練をしたはずなのだが、
「いまにしておもうと、さほどに辛いおもいをしたおぼえもないような……」
お江は、いつであったか壺谷又五郎にそうもらしたことがある。
「それはな、女忍びの育て方は別だからだ。おぬしの父ご・馬杉市蔵殿は、そこのところをよくわきまえていたに相違ない。おれなどには、到底できぬことだが……」
と、又五郎はこたえた。
なんといっても、整息の訓練は、忍びの術の〔基本〕である。
おのれの呼吸を、それこそ、
「自由自在に……」
あやつれるようにならねば、何事も為し得ぬ。

忍ぶことも、走ることも、闘うことも……すべてが呼吸一つによって左右される。
敵中へ潜入するとき、呼吸は最小限にとどめておかねばならぬ。
おもいきり呼吸をすると、
「躰から匂いが発し、気配が起こる」
と、馬杉市蔵は、お江に教えている。
それは、事実であった。

九

お江の父・馬杉市蔵は、もともと、甲賀の豪族・山中大和守俊房の配下であった。
それが何故、甲賀からはなれて、武田家直属の〔忍び〕となったのか……。
そのいきさつを手短にのべておきたい。ひいてはそれが、甲賀忍びのありかたを語ることにもなるし、現在、真田の草の者となっているお江にも関わり合ってくることになる。
山中大和守俊房の家は、古いむかしから甲賀の地に土着し、甲賀豪族の中で、もっとも重きをなしているといってよい。
山中家は代々、伊勢大神宮の領地となっている柏木郷の代官をつとめると共に、
「鈴鹿山の守護」
の役目をも兼ねてきた。
近江の国・甲賀郡柏木郷の惣社として知られる若宮八幡宮の近くに、山中大和守の屋敷が

ある。

杣川の流れへかけわたしたはね橋をわたると屋敷門に達し、飯道山の峻嶮を背後に、二町四方の石垣塀をきずいた堂々たる城構えだ。

甲賀の忍びたちは、それぞれの豪族たちの下に属してい、山中家の忍びを、

「山中忍び」

と、よぶ。

伴家の忍びならば、

「伴忍び」

である。

お江は、甲賀の地を知らぬ。

亡父が少年のころから、修行のためにこもったという飯道山も知らぬし、山中屋敷も知らぬ。

「頭領様……」

馬杉市蔵は、山中大和守のことをそうよんだ。

「頭領様のお指図を受けるときは、奥庭の隅の大銀杏の根元まで行き、凝と待っているのじゃ。すると、な。銀杏の前の、土蔵の白い壁が一尺四方ほど開いて、頭領様のお顔がのぞき、指図を下されたものよ」

と、市蔵はお江に語った。

曾祖父の代から山中家の忍びをつとめてきた馬杉市蔵でさえ、頭領と仰ぐ山中大和守を見るのは、そのときだけであった。

山中屋敷の内も、門から奥庭へ至る通路だけのみを見たにすぎない。

先代、先々代の大和守のときも、そうであったという。

そして……。

そのうちに、戦乱の時代は大きく変わってきた。

だれが、いつ、天下の覇権をつかみとるかという期待が生まれるほど、大勢力の拮抗が顕著になってきたからであった。

同時に、忍びの術の重要さを知った諸方の大名たちは、甲賀・伊賀の地から、争って忍びの者を雇い入れようとした。

甲賀武士たちも、ちからおとろえた六角氏（佐々木家）のみを、たよりにしてはいられない。

中には、どこまでも六角氏と運命を共にしようと決意している杉谷家のような甲賀武士もいたが、大半の豪族は山中大和守を中心にして結束し合い、諸国へ間諜をはなち、その報告とにらみ合わせ、有力とおもわれる大名や武将たちへ、忍びの者を選抜して送りこんだのである。

これによって大きな報酬を得たことはもちろんだが、同時に、

「どの大名が天下をとっても、甲賀の地が安全であるよう……」

に、はかったわけだ。
伊賀の忍びたちには、そのころから、甲賀のような結束がうしなわれていたらしい。
各個が、それぞれに忍びばたらきをし、同じ伊賀忍び同士がいのちをかけて闘うこともめずらしくはなかった。
伊賀は、そのような風土と歴史を背負っていたからであろう。
古くから、甲賀のように、勅命によって土地や山や神社を守護するという役目をあたえられていなかった所為もあろう。
山中忍びの馬杉市蔵が三十余年前に、武田家へ雇われ、他家の忍びをふくめ、合わせて二十数名が甲斐へおもむいたのも甲賀頭領の指令によってである。
当時、武田信玄は二十代後半の若さで、父・信虎を追放し、武田家の当主となり、信州進出に苦闘をつづけていた。
それはちょうど、武田家と真田家が、
「同盟の誓い」
をむすんだ前後のころだ。
信玄は、そのとき、自分の諜報網の不備をさとり、武田忍びを甲賀忍びと共にはたらかせることによって、忍びの技術を発達させ、組織をもととのえようとしたのであった。
このために信玄は、莫大な報酬を甲賀へ支払っている。
甲賀は、武田家と婚姻の関係にあった駿河の太守・今川義元のもとへも忍びの者を送って

いた。

それは、馬杉市蔵が武田家に雇われて行く前のことであったが……。

今川義元は、安祥城にたてこもる織田軍を一掃し、三河の国へ喰い込んで来た織田家の楔を追い退けようとしたことがある。

そのとき、山中大和守は市蔵をよびつけ、あの白壁の隠し窓から顔を見せ、

「甲斐へおもむくことがきまったお前に気の毒じゃが……ぜひにも手足の戦忍びが今川家でほしい。甲斐へ行くのは一足遅れてもよいから、すぐさま今川家へ行ってもらいたい」

と、いった。

市蔵は四名の手足をつれて駆けつけ、先に今川家へ入っていた甲賀忍び十名を指揮し、たくみに農夫となって織田方の募兵に応じ、歩兵として安祥城へ入りこんだものである。

それを見すまして、今川軍が城の総攻めにかかった。

馬杉市蔵ら甲賀忍びは、城の内部にあって今川軍を引き入れ、内側から大手の木戸へ火をはなち、城内の織田軍を攪乱した。

安祥城の織田軍は、全滅した。

当時、織田家の当主は信長ではない。

信長の父・織田信秀であった。

それから約十一年後に、信秀亡きのち、家をついだ織田信長が、今川義元を桶狭間に奇襲し、この大敵の首を討ち取ろうとは、だれが予想したろう。

このときに、また、時代は大きく変わった。
馬杉市蔵は、すでに武田家へ定着していた。
妻を迎え、お江をもうけていた。
武田家に雇い入れられた甲賀忍びは、いわゆる武田と甲賀の取引なのである。
報酬を得て、甲賀は忍びの術を武田信玄へ提供した。
武田家を敵と看るわけでもなく、主としてうやまったわけでもない。
それなのに馬杉市蔵が、甲斐の国の女を妻に迎え、子までもうけたというのは、どういうわけなのだろうか。
市蔵の妻、すなわち、お江の母は、壺谷又五郎の遠縁にあたる。
してみれば、又五郎とお江には微かながらも、
「血のつながり……」
が、あるといってもよい。
市蔵が、武田忍びの縁につながる女と夫婦になり、子までもうけたということは、山中大和守にとって、
「おもしろくない」
ことになった。
これが敵中へ入りこみ、敵の女と夫婦になって、敵を安心させ、敵の情報を得るということなら、当然なすべきことといわねばならぬ。

しかし、そうではない。

甲賀の指令ひとつで、市蔵たちは武田家から、いっせいに引きあげることもあり得るのである。

妻や子を得るというのは、とりも直さず、

「武田家になじんだ……」

ことに他ならぬ。

果たして、そのときが来た。

その後の織田信長が、破竹の勢いをもって岐阜城（稲葉山城）を攻略し、尾張・美濃の大国をつかみ取ったとき、山中大和守は、

（これは……）

瞠目した。

さらに信長は、外交・戦略・建設の妙を発揮しつつ、近江の国へせまった。

ここに至って山中大和守は、諸般の状勢と、織田信長のめぐまれた豊饒の領国と、首都・京への最短距離にある有利さを合わせておもいめぐらし、

（いずれ、天下は織田のものになろう）

と、見きわめをつけた。

山中大和守は全力をつくし、信長に接近しはじめた。

忍びの者を評価しなかった信長が、山中大和守を受けいれたのは、ひとえに大和守の工作

と実績を、
「なるほど……」
と、みとめたからである。
そうなったとき、山中大和守は、武田家に入れておいた甲賀忍びに、
「引きあげよ」
との密命を下した。
甲賀忍びたちは、ある夜、いっせいに古府中の城下を脱し、甲賀へ帰った。
そのとき、帰らなかった甲賀忍びが四人ほどいた。
その中の一人が馬杉市蔵であり、他の三人はいずれも、以後の武田家のためにはたらき、死に絶えてしまっている。
これは、何を意味するのであろう。

十

「そのころの武田の忍びたちの躰には、熱い血がながれていた」
と、市蔵はいい、
「忍びとて人の血をもっている。むかしの甲賀の忍びにも、あたたかい血がながれていたが、このごろは、その血も冷えた」
お江に、そういったことがある。

市蔵は、別に、くどくどと語りはしなかった。
しかし、いまになってみると、父が甲賀へもどらなかった理由が、お江にもはっきりとのみこめてきている。
戦乱の様相が終末に近づくにつれ、甲賀の頭領たちは、以前のような親密の協力をしなくなった。
それぞれに、
「おもうところへ……」
味方をするようになった。
それというのも、それぞれが、
「これぞ、天下人になる人物だ」
と、目ざす大名が一つにならなかったからであろう。
また、杉谷家のように、
「ほろび去るのを覚悟の上……」
で、六角氏・佐々木義賢（近江・観音寺城主）の味方となり、執拗に、織田信長の首をねらう甲賀武士もいた。
こうなると、同じ甲賀の山中大和守とも杉谷家は敵対することになる。
かつては、たとえ敵味方にわかれていても、甲賀の目ざすところは一つにしぼられていたのだから、たがいに闘ったり傷つけ合ったりすることはなかった。

双方が情報をつたえ合い、こころを通じ合い、

「甲賀をまもるため……」

の、忍びばたらきをしていたからであった。

だが、近年は、山中忍びと杉谷忍びが必死に闘い合うこともめずらしくなくなり、一人が一人を殺せば、怨恨も生まれ、憎悪もわくのが道理であって、

「もはや、同じ甲賀の忍びたちだからといって、こころをゆるせなくなった……」

のである。

十二年前の元亀元年の夏。

北近江を制圧すべく姉川へ出陣した織田信長は、浅井・朝倉の連合軍と戦った。

このときすでに、佐々木義賢は信長の攻撃をうけ、観音寺城を追われていたが、杉谷家の頭領・杉谷信正は配下の忍びたちをひきつれ、姉川の戦場へ戦忍びに出た。

むろん、織田方の山中大和守は手をつかねていない。

山中忍びも戦場へ出て、ここに甲賀の忍び同士の凄絶な闘いがおこなわれたという。

そして杉谷忍びは、頭領以下、姉川において全滅したとつたえられている。

甲賀の、大小合わせて五十余家もある頭領たちの間が、このようになってしまうと、

「ついには、同じ頭領の下にはたらく忍びたちの血も、冷えてくる……」

ことになる。

頭領にも、果たして、自分の配下が自分を裏切ることなくはたらいているのかどうか、と、

うたがいの芽がきざしはじめた。

掟がきびしくなり、事態によっては、忍びのはたらきを別の忍びが密かに監視し、これを頭領へ告げるということにもなってきた。

こうなると、当然、同じ家の忍び同士でも、

「うかつにこころをゆるせぬ」

ことになる。

それに引きかえて、信玄在世のころの武田忍びはどうであったろう。

彼らは結束し、甲賀から派遣されて来た忍びたちへも、惜しむところなく自分たちの術技をしめし、甲賀忍びからも学ぼうとした。

信玄みずからの統率によって、組織は日に日にととのえられた。

甲賀忍びたちは、

「われ知らず……」

熱中し、久しく忘れていた生気をとりもどし、大声で笑う快感をも味わうことができた。

それは一つに、武田信玄の間諜網完成へかけた熱意があったからだといえる。

古府中の居館内の〔御くつろげ所〕にいて、看経ノ間の床下へ忍びの者をよびつけた信玄は、ときによって、

「あがれ」

看経ノ間へ忍びの者をよび、報告を訊きとったり、指令を発したりした。

気に入りの小姓だった真田昌幸さえも、入ったことのない看経ノ間だったのである。
甲賀から来ている忍びたちでも、必要ならば、いささかもこだわることなく、
「よべ」
と、信玄はいった。
馬杉市蔵は何度も、信玄と二人きりで言葉をかわしている。
白壁の隠し窓から、眉毛ひとすじうごかさぬ冷厳な顔と鋭い眼ざしで指令を下す自分たちの頭領には、到底のぞめぬことであった。
こうした信玄のあつかいによって、武田家の忍びたちは、
「忍びたちは油断がならぬ。卑しい奴どもだ」
という目で見られたことが、ほとんどない。
役目の上から、正規の家来として仕えることはできなかったが、待遇は同じである。
知らず、甲賀忍びたちは金で雇われた身を忘れ、はたらくようになった。こうなると、
「教えてはならぬ……」
忍びの技術も、武田忍びへつたえてしまうことになる。
（これはいかぬ……）
と、山中大和守がおもったのは、武田家へ出ていた甲賀忍びの中に、大和守へ密告する者がいたからであろう。
大和守は、密かに全員引きあげの指令を発し、馬杉市蔵ほか数名が、これに、

「背いた……」
のであった。
彼らは、あえて、甲賀の裏切り者となったわけだ。
山中大和守は、市蔵らを、
「生かしてはおけぬ」
と断じた。
完全に〔武田忍び〕となった馬杉市蔵たちと、甲賀・山中忍びの間に、これは公的な〔忍びばたらき〕を別にした争闘が開始された。
それが、いまも……市蔵たちが死に絶えたいまも、ただひとり、甲賀・山中忍びの血をひいているお江と山中忍びとの間につづけられているのだ。
「忍びとて、人の子よ。人の子のあたたかい血が冷えては、真の忍びばたらきはできぬと、わしは武田家へ来てさとったのじゃ」
と、馬杉市蔵は、お江にいったことがある。
壺谷又五郎とお江が、信玄亡きのち、真田家の草の者となった心情も、市蔵と同じものだったのではあるまいか。

四月十七日。
織田信長は浜松を発し、この夜は吉田へ泊し、家康の重臣・酒井忠次へ貞光の太刀と黄金

二百枚をあたえ、これまで自分の接待に奔命してくれた徳川の家来たちへ、それぞれ、ほうびをあたえている。

信長は、あたえられることのみを知り、あたえることを知らぬ大将ではなかった。

二十日に岐阜へ入った信長は、岐阜城主の長男・信忠と別れ、四月二十一日の夕暮れに安土の本城へ凱旋をした。

浜松城下の真田隠岐守邸へとどまり、ゆっくりと躰をやすめていたお江が、壺谷又五郎に見送られ、姉山甚八と共に浜松を出発したのは、同じ日の朝であった。

十一

その夜も、お江は、向井佐平次の夢を見た。

それも、ただの夢ではない。

お江は、よく、佐平次のことを、

（いまごろ、岩櫃の城で何をしていることやら……）

おもいうかべてみる。

だが、それは、佐平次に対して、

（わたしの弟のような……）

想いをめぐらすだけのことであって、このところ毎夜のように見る夢の中の佐平次は別人のようなのだ。

夢の中の佐平次は、躰つきまでがちがっている。
たくましく厚い胸肌に体毛が密生しているし、顔はたしかに佐平次なのだが、十九歳の若さは失われていて、何やらするどい、狡猾そうな眼の色をしていて、あくまでも猛々しくお江に振る舞うのである。
ふとい腕をのばし、必死に抵抗するお江の躰から小袖をはぎとり、厚顔に抱きすくめてくる。
佐平次の口から、獣のような大きくて赤い舌が出た。
ちがうというなら、夢の中の、
（わたしもちがう……）
のである。
泣きむせびながら、弱々しく、佐平次に押し倒され、躰中をもみしだかれ、骨も肉も粉々になってしまうほど、男に翻弄されている自分の姿を目ざめてからおもいうかべて見て、
（なぜ、あのような夢を見るのであろう。いえ、見なくてはならぬのか……？）
どう考えても、お江にはわからなかった。
夢は、おのれの胸底に潜み隠れている想いを、
（おもいもかけぬかたちをとって……）
見せてくれると聞いている。
まことなのだろうか……。

いまのお江は、どう考えても、向井佐平次を愛欲の対象に見てはいない。
だが、夜毎、佐平次は夢にあらわれ、おもうさまお江を陵辱し、高笑いを残して去って行くのである。
目ざめると、いつも、躰中があぶら汗にぬれてい、夢の中の身悶えがこのように躰へのこされているのかとおもうと、苦笑までが消えてしまうおもいがする。
今夜の夢には、佐平次のほかに、もうひとり、別の男があらわれた。
佐平次は、裸身のお江の髪の毛を両手でつかみ、暗い寝間の中を何か喚き散らしながら、お江を引きずりまわしはじめた。
夢のことゆえ、いかに髪の毛をつかまれても痛みはおぼえない。
むしろ、恍惚となり、お江は佐平次のなすがままになっている。
「これでもか……これでもか……」
勝ちほこる佐平次が、お江の乳房を足で踏みにじる。
その足へしがみつき、頬をこすりつけながら、お江は横眼づかいに寝間の片隅を見ている。
片隅には「ねむり燈台」の灯りが、淡く、ひとりの男の姿を浮きあがらせている。
その男の横顔から瞬時も目をはなさず、佐平次の蹂躙に躰をまかせているのだ。
（いまか、いまか……）
と、お江は、男がこちらを見るのを待ちかまえている。
それはつまり、佐平次の暴力に屈している自分を、男に、

（見せつけてやりたい……）
からなのであろう。
しかし、男は冷然と背中を見せたまま、こちらに一瞥もあたえぬ。
男が見てくれぬ口惜しさに、お江は怒り、昂奮し、ついにたまりかねて、
「去ね！」
自分におおいかぶさっている向井佐平次を、激しく突き退けた。
すると……。
あれほどに男のちからを揮っていた佐平次の躰が、苦もなく突き飛ばされてしまい、寝間の向こうに黒い口を開けている穴のようなものの中へ吸いこまれてしまったではないか……。
その瞬間に、男が振り返った。
男の顔は苦渋にゆがみ、哀しみをたたえている。
お江がそれと見て、異様な叫び声を発した。
歓喜の叫びといってもよい。
夢の中の叫びで、お江は目ざめた。
ねむり燈台の火が、微かにまたたいている。
わら屋根の下に設けられた板敷きの一間に、しずかな雨音がこもっていた。
「ああ……」
半身を起こしたお江の寝衣が乱れきっていて、いつものようにねっとりと汗ばんだ乳房が露

出されている。
お江は、しばらくの間、茫然とうごかなかった。
今夜の夢に、はじめてあらわれた男の顔をおもいうかべたとき、お江は、すべてが、
（わかった……）
ようなおもいがした。
見まいとし、われから懸命に目をそらしていた深淵をのぞき見たおもいがしている。
「もし……もし……」
隠し梯子の下で、権左の声がしているのに、お江は気づいた。
「もし……お江どの……」
「あい。起きています」
「姉山甚八殿が、もどりまいたぞ」
「さようか……」
梁に仕掛けてある綱をゆるめると、隠し梯子が軋をたてて下りて行く。
此処は、京の都から南へ二里ほどはなれた下久我の村の百姓・権左の家である。
権左はただの百姓ではない。
十五年も前に、武田忍びの一人として、はるばると甲斐の国から出て来たのである。
そして、壺谷又五郎や、又五郎の亡父・草庵などのはからいにより、下久我村の百姓として住み着いた。

いうまでもなく、此処は武田忍びの〔忍び宿〕であった。
上方における情勢の変転を、権左は十余年にわたって武田家へ送りつづけた。
武田家が滅亡したいま、壺谷又五郎は早くも、真田家のために、下久我の忍び小屋を役立てようとしている。
権左は壺谷家の下忍(したしの)びで、又五郎の指令のままにうごく。
下久我の忍び宿を知っている武田忍びは、又五郎・お江のほかに五、六名のはずだし、そのほとんどは、死に絶えてしまっている。
姉山甚八と共に浜松城下を発したお江が、この家に入ってから半月ほど経ていた。
姉山甚八は、安土で、お江と別れた。
安土城へ凱旋した織田信長の、今後の動向を探るためである。
安土は、開放的な信長の城下だけあって、他国から入り込む商人たちへの監視がきびしくない。
（安土に住みたい）
とおもえば、その日からでも住みつくことができるそうな。
それから二度ほど、甚八は下久我の忍び小屋へやって来たが、安土に格別の異状はないということであった。
浜松を発した織田信長に遅れること二十余日にして、徳川家康が信長の招きに応じ、浜松を出て安土へ向かったことだけは、お江の耳へもとどいている。

安土城へ帰った信長は、後から来る家康をもてなすために、こころをくだいているらしい。
今日明日のうちにも、徳川家康の一行が安土へ到着するであろう。
「甚八どのか……」
隠し梯子を下りて来たお江に、安土から駆けつけて来た姉山甚八が、
「いよいよでござる」
と、いった。
「信長が、中国すじへ出陣か？」
「そのとおりでござる」
徳川家康一行は一昨日の五月（現・六月）十五日に、梅雨空の下を安土城下へ到着したという。
意外に早い。
織田信長は、家臣・丹羽長秀を近江の番場まで出張せしめ、家康一行の宿所を設営させたそうである。
安土城下は、家康歓迎の準備で活気がみなぎり、信長は家康をもてなすための新鮮な魚介・野菜・珍菓などの調達をさせるため、家来を八方へ飛ばした。
家康一行の接待役は、明智日向守光秀に命じられた。
このところ、いわゆる、
「髀肉の嘆……」

を、かこっていた明智光秀にとって、この役目は名誉の事といわねばならぬ。

信長は、十八・十九・二十の三日間にわたって安土城内へ家康を招き、豪華をきわめた祝宴を張り、みずからこれをなぐさめる予定であった。

ところが、十七日の午後……というのは今日の午後であったが、中国に出兵して毛利軍と戦いつつある羽柴秀吉が、突如、主の織田信長へさし向けた急使が安土へ駆けつけて来た。

「それがしのみにては、決着がつきかねまする。ぜひとも御大将の御出馬をたまわりたし」

と、秀吉がいってよこしたのである。

信長が出馬せぬかぎり、

「毛利には勝てませぬ」

というのである。

十二

羽柴秀吉は、この四月に、備前・岡山を中国攻めの本拠とし、備中へ進撃した。

そしていま、秀吉は、備中・高松城を包囲している。

秀吉は、城のまわりへ堤を築き、せきとめた川の水を引きこんだものだから、高松城は湖沼の中に浮きあがったかたちになり、城兵が飢餓状態となっている。

高松城には、毛利方の勇将・清水宗治が五千の兵をひきいてたてこもり、これを囲む羽柴軍は三万余。城兵は手も足も出ぬ。

毛利家では、当主の毛利輝元をはじめ、一族の小早川隆景・吉川元春が大軍を編成し、
「高松城を見殺しにはできぬ」
と、出動の準備にかかった。
羽柴秀吉は、
「この期を待っていた……」
のであった。
甲州攻めから帰ったばかりの主人・織田信長に出馬を請うことは、いささか気の毒でもあるが、ここはやはり、信長に大軍をひきいて出陣してもらい、一気に決戦へもちこんでしまったほうがよい、と、秀吉は直感し、決意している。
甲州では、信長の本軍に、ほとんど損傷がない。
「楽々と、大勝利をおさめられたのだから、疲れてはおわさぬにちがいない」
と、秀吉は信長を看ている。
とにかく、信長は勝利の上潮に乗っている。乗りきっている。
（いまこそ、御大将に出馬をしていただけば、かならず勝てよう）
秀吉の直感は、決意から信念に変わりつつあった。
果たして……。
秀吉からの懇請を受けた信長は、
「ふむ。やはり、わしが出て行かねばおさまらぬのか」

上機嫌であった。

甲州での大勝利が、信長の英気を層倍のものとしている。

「よし。猿に申しつたえよ」

と、信長が秀吉の使者にいった。

名も身分も無いと同様な雑兵だった若いころの秀吉を側近く召し使い、ついに自分の片腕ともいえるほどの武将に仕立てあげた信長である。

藤吉郎とよばれた若いころからしわだらけの老け顔で、痩せた小さな体軀の秀吉を、信長は、

「鼠よ」

とか、

「猿よ」

と、よびならわし、秀吉が一国一城の主となったいまも、はばからずに、その愛称をもってよぶ。

秀吉もまた、平気なのである。

なるほど秀吉は武将であるが、腕力はまずしい。みずから先頭に立ち、槍を揮って戦うなどということは、まちがってもせぬ。

腕力のかわりに、秀吉は、明敏をきわめた頭脳のはたらきを〔武器〕にしている。

軍団を指揮しての戦ぶりには、信長でさえも瞠目することがあった。

戦っても、なるべく〔出血〕を最小限にとどめようとする秀吉は、近年の主・信長のすばらしい威勢をたくみに利用し、戦わずして敵を懐柔してしまうのだ。

何事にもこだわりがなく、ほがらかな秀吉の相手になると、だれもが、否も応もなく、秀吉の人柄に、

「ひきつけられてしまう……」

のである。

信長でさえ、そうなのだ。

信長の激しい癇癖も秀吉の前では、恐ろしさをうしなってしまう。

罵倒し、このごろではさすがにせぬが、以前は秀吉の頭を扇で打ち叩いたこともあった。

すると秀吉は、おくめんもなく、

「痛うございます」

と、いうのだ。

その一言と、そのときの〔猿〕の表情を見ては、信長も二の句がつげなくなる。

秀吉は、信長の眼の色ひとつで、信長の意中を察した。

「胸がすくほどに……」

それは、す早い。

しかも忠実に、秀吉は信長の命令を遂行した。

世子の信忠も、秀吉には深い信頼をかけており、自分の跡をついで、いずれは〔天下人〕

となるであろう信忠を補佐する上に、
（猿ほどの男は、一人もおらぬ）
とさえ、信長はひそかにおもいきわめている。
信長は、すぐに浜松へ帰って出陣の仕度をするといい出た家康に、まず、ゆるりと京・大坂・堺などを見物してから帰国し、それから出て来て下さればよいとすすめ、先に家康が献上した金二千両のうち、千両を返し、
「京見物の費用になされ」
といい、家来の長谷川秀一を、わざわざ家康一行の案内につけてよこした。
信長は、三日の間、じゅうぶんに家康をもてなし、家康が安土を発って上方見物に向かったのちに出陣することにした。それほどに、家康へ対して神経をつかっていたのである。
そのかわりに、家康の接待役を命じられていた明智光秀の任を解き、
「日向守は、急ぎ帰城して、中国攻めの先陣をいたすよう」
と、下命した。
光秀の代わりに、堀秀政が家康の接待をつとめることになった。
明智光秀は、ただちに家来たちを引きつれ、
「近江・坂本の居城へ帰りまいた」
と、姉山甚八が、お江に告げた。
「なるほど……」

「お江どの。どのようにいたそう？」
「いずれにせよ、この三人で仕てのけねばならぬが……」
「いや、これより中国すじまで、われらも織田勢の後を追うて行くとなれば、とても人数が足り申さぬ。壺谷又五郎殿へ申しつたえ、三人ほどは手を貸してもらわぬと……」
「又五郎どのへの連絡は、すぐにつきますのか？」
「浜松まで行けば、つなぎがつくことになっています」
「では、行ってくれますか？」
「心得た」
「わたしは、信長のうごきを見ていましょう。真田家が信長と戦うわけではないゆえ、何事にもゆるゆるとしてのければよいこと」
「なるほど」
「中国での、毛利方との戦ぶりと、その決着を、いち早く、真田の殿のお耳へ入れることのみを考えていればよいことゆえ……」
「いかさま……」
「わけもないこと」
と、お江は自信ありげに笑って見せた。
「わしも、手つだいを……」
権左がいい出た。

権左は、もう六十に近い老いた忍びであるが、そこは常人とちがい、足腰も達者なら、目も耳もしっかりしている。

「いえ、権左は此処をはなれてはならぬ。権左はどこまでも、下久我の百姓でいてもらわぬと、この忍び宿が用をなさぬ」

権左は、うなずいた。

「甚八どの。では、すぐに浜松へ……」

「心得た」

「安土まで、共にまいろう。わたしは、信長の後についていましょう」

こういって、お江は権左と手短に打ち合わせをすませ、身仕度にかかった。

十三

天正十年六月一日（現代の六月三十日）の朝。

お江は下久我の〔忍び宿〕を出て、京へ向かった。

このところ、お江は二日か三日に一度ほど、下久我へ帰って来ては、また、出て行く。そのたびに、物売りや農婦に変装し、織田信長一行から目をはなさぬようにしている。

織田信長は、去る二十九日に京へ入った。わずか百余名の近臣を従えたのみで宿所の本能寺へ滞留している信長は、後続の軍団が京・大坂に集結するのを待ち、中国へ出陣するらしい。

すでに、

（京の都は、わが庭も同様である……）

という余裕が、こうした信長の態度に、はっきりと感じられる。

信長から中国出陣の先鋒を命じられた明智光秀・細川忠興・筒井順慶・池田恒興などの諸将は、それぞれの居城で出陣の準備を急いでいた。

その間に信長は、息・信忠と共に公家方や諸方の名士と交歓をつくしている。信忠も手勢五百余をひきい、京の二条衣棚の妙覚寺へ入っていた。

信忠の軍団も、やがて岐阜から京へ到着することになっている。

安土を発し、京へ向かうときの織田信長を、農婦に姿を変えたお江は、沿道へひれ伏しながら見とどけておいた。

そのときの信長は、わずか五十名ほどの近臣を従えたのみで、派手やかな夏小袖を身にまとい、南蛮わたりの羽毛のついた黒ビロードの帽子をかぶり、まるで野遊びにでも出かけるような出陣ぶりであった。

宿所の本能寺は四条西洞院にあり、南北二百メートル、東西百メートルの敷地をもつ。その周辺に掻上の塀をめぐらし、内側には、土居を築き、木戸を設けて人の出入りを警戒することはもちろんで、万事が〔城構え〕になっている。

信長は、仏殿・客殿などのほかに、自分が起居する居館や大きな馬小屋を設け、二百人ほどの一行の宿営がいつでも可能にしてあった。

お江は、六月一日の朝、茄子や白瓜、ささげなどの野菜を籠に入れ、農婦の物売り姿となって、忍び宿を出ようとするとき、権左が、
「姉山甚八どのは、まだ、もどってまいりませぬか？」
「今日明日には、もどって見えよう」
「気がかりなことで……」
「なんの。いまのわれらは真田家の草の者じゃ。織田信長を相手に戦うた甲斐の武田がほろびつくし、真田安房守さまは、信長の旗の下に生きねばならぬこととなった。わずか一年のうちに権左、天下はこのように変わったのじゃ」
「は、はい……」
「なれば、これより、真田家は信長にたよって生きねばならぬ。信長のこころにかない、信長に目をかけられ、できるかぎりに、上へ上へ伸びて行かねばならぬ」
「さようでございますなあ」
「そのためには、織田信長という大将の仕様を知っておかねばならぬ。信長の躰の中に、どのような血がながれているか、よくよく知っておかねばならぬ。信長の戦ぶりも心得ておき、これより先、安房守さまが功名の役に立てなくてはならぬのじゃ」
「はい、はい」
「こたび、わたしたちが信長について中国へ行くのも、そのためじゃ」
「ようわかりましてござる」

「なれど、浜松にいる壺谷又五郎どのが、そのようなことをせずともよい、と、いわるるなれば、わたしたちも岩櫃の城へ帰ることになろう」

「では、この家も、さびしゅうなりますなあ」

「なんの。これよりは天下のうごきが京の都を心底にしてうごいて行くことになろう。この忍び宿の役目は、いよいよ、大切なものとなる。権左も長生きをして、わたしたちのために……いえ、真田の殿のおんために、はたらいてもらわねばならぬ」

「はい、はい」

下久我を出たお江が京の町へ入ったのは、辰ノ下刻（午前九時）ごろであったろう。

梅雨空が、いくぶん明るんで来ており、

（今日いちにちは、降っては来まい……）

と、おもわれた。

京へ入る要所要所には木戸が設けられてい、折しも織田信長が滞京中でもあり、京都所司代・村井貞勝によって念入りの警備がなされているが、信長の意向もあって、行商人や町人たちの出入りに対しては、まことに寛容なのだ。

信長が天皇おわすところの京の都の治安や行政をととのえるようになってからは、一時、戦火を恐れて立ち退いていた町民たちも陸続と帰りもどって来たのである。

町すじには活気がみなぎっており、このごろでは飯や焼き魚などを売る〔飯屋〕もあらわれた。

町外れの道すじで、荷を担いで来て雑炊や団子を売る者もいる。人びとが自給するほかの食物を、

「売ったり買ったり……」

することができるようになったのは、取りも直さず、戦火が絶えたということになる。いま、信長の宿将・羽柴秀吉が中国で毛利軍と戦っていることなど、京の町びとにとっては、まるで異国の出来事としかおもわれぬし、これから信長が出陣して毛利軍を圧倒し、またしても勝利の栄光に輝くことを、

「当然のこと……」

と、看ているのであった。

十四

お江は、本能寺のまわりを二度三度と、歩いて見た。

近江・坂本の城から、丹波・亀山の城へ移って来ている明智光秀は出陣の準備を完了し、娘聟でもあり家老の一人でもある明智秀満を、この日、本能寺へさし向け、中国出陣の日時を信長にうかがわしめた。

信長は、これに対し、

「明日、明後日のうち、日向守の都合よろしきときをえらび、出陣いたすように」

と、いった。

心得た明智秀満が七名の家来と共に本能寺を出て、馬に鞭をくれ、丹波・亀山の方へ疾駆し去るのを、お江は見とどけた。

（明智が、出陣のときを問い合わせにまいったのであろ）

すぐに、お江は推察している。

明智光秀が一万三千の軍隊をひきい、出陣しようとしている丹波・亀山の城は、老の坂をこえて京都までわずかに五里余の近距離にある。

この日は朝から、本能寺の織田信長を訪問する客が引きも切らぬ。

正親町天皇の信託が厚く、関白、太政大臣をつとめたほどの、朝廷における権力者である近衛前久をはじめ、甘露寺経元・勧修寺晴豊など四十余名の公家たちや、高名な僧侶たち、それに京都周辺の豪族などが、いずれも、信長の機嫌をうかがいにあらわれたのであった。

ちかごろの京都では、

「このさい、織田信長を将軍に任じ、幕府をひらかせ、天下を治めさせてはどうか……」

天皇が、その内意をもらされたという風評でもちきりなのだ。

天皇も朝廷も、信長に追放された名のみの足利将軍・義昭を、完全に、

「見はなしてしまった……」

と看てよい。

信長が何と考えているか、それは知るよしもないが、この日、信長は近衛・甘露寺・勧修寺の三朝臣と本能寺の客殿・奥の間で長い間、密談をかわしている。

それが終わって、大書院にもどった信長が、島井宗室など茶人の点前で茶会をもよおしはじめたころ、お江は、

（今日は、これまで……）

本能寺から遠ざかることにした。

お江は、

（信長が京を出陣するのは四日か五日の朝……）

と、見こみをつけている。

それまでには、姉山甚八が三、四名の草の者をつれて、下久我の忍び宿へもどって来よう。

いずれにしても、今度の役目は、別に、

（いのちがけの忍びばたらきではない……）

のである。

それゆえに、お江のこころものびやかなものになっている。

（今夜のうちには、おそらく、甚八どのからの連絡があるに相違ない）

だから、下久我へは帰るつもりでいるお江であったが、梅雨の晴れ間の明るさは、日暮れ間近のものともおもわれず、

（いますこし、岐阜中将がいる妙覚寺のあたりを見まわって来よう）

そうおもい直し、お江は、本能寺の北側を六角の通りへ出ると、室町筋へ向かった。

室町の通りへ近づくにつれて、町家が多くなった。

お江は、籠に残っていた野菜を、捨て値で売りさばきつつ、歩んでいる。
常楽寺という寺院の北側の土塀に沿って、室町通りへ入ろうとしたお江が、
（あっ……）
飛鳥のように、人込みへ隠れた。
十メートルほど先の室町通りを行く一人の男に気づいたからである。
それは、お江もさすがに女忍びの目をもっていたからであろう。
まるで、男の顔が十メートルをへだてた彼方から躰をはなれ、お江の眼の中へ飛び込んできたかのようであった。
男は気づかぬ。
蓬髪の、むさくるしい髭で顔を埋めたかぶり乞食なのである。
路上にねむるときに頭からかぶる菰を巻いて左腕に抱え、右手に杖をもち、よたよたと歩む姿は六十にも七十にも見えるが、この男はまだ、四十をこえたばかりのはずだ。
男は、甲賀・山中忍びの猫田与助であった。
与助は、傷ついた向井佐平次をたすけて甲斐から岩櫃へ脱出しようとするお江を追って来て、お江や真田の草の者たちの反撃に合い、姿をくらました。
その与助を、お江は単身でなおも追跡し、ついに見失ってしまっている。
さいわいに猫田与助は、お江を見なかった。
（見られてはいない……）

と、お江はおもった。

そこで、与助の後をつけることにした。

与助は、ほとんどうしろを振り返らずに歩んで行く。

去年の春ごろから、京の都には〔かぶり乞食〕が増えて来た。

これも、やはり都市の繁栄があるからこそなのであろう。

猫田与助は、室町の通りを北へ行く。むろん、乞食姿は変装なのだ。

室町の通りは、当時の京都の目ぬき通りといってよい。

さまざまな商家が軒をつらねている。

行く手の左側に、織田信忠（のぶただ）が宿所にしている妙覚寺の大屋根がのぞまれた。

と……。

猫田与助が、すっと右手の細道へ切れこんだ。

お江は、すぐに足を速めなかった。

与助が曲がった細道は、表通りの家々の裏手に通ずるものだし、うかつに駆け寄ったりしたら、どのような、

（落とし穴があるやも知れぬ……）

のである。

お江は檜笠（ひのきがさ）をかたむけるようにし、その細道へ近づいて行った。

夕暮れどきなので、行き交う人びとも多い。

その人込みの間から、細道をはさんでいる両側の家を見まわし、お江は胸が躍った。
細道の右角の家は、刀師のものであった。
左角は扇師の家だ。
いまも十七、八の若者が表へならべた色とりどりの扇や、柄の長い団扇を店の内へ仕舞いかけている。
そして、店の内では白髪の、品のよい顔だちをした老爺が、扇の骨に糊を打っている。
お江は、その老いた扇師の顔に見おぼえがあった。
この老爺は、新田庄左衛門といい、かつては、お江の父・馬杉市蔵などと共に、甲賀・山中家から武田信玄のもとへ派遣された忍びの者であったからだ。
のちに、甲賀頭領・山中大和守から、
「引きあげよ」
との密命が下ったとき、新田庄左衛門は忠実に命をまもり、他の忍びたちと共に甲賀へ脱出している。
（ここに、庄左衛門が住んでいるからにはまさに……）
まさに、猫田与助は扇師の家の裏手から入って行ったにちがいない。
扇師の家が、甲賀・山中忍びの〔忍び宿〕であることはもはや明白であった。
お江は、人込みにまぎれて扇師の家の前を通りすぎ、妙覚寺の手前の辻を左へ折れた。
そこへ屈み込み、草鞋のひもを直している様子を見せながら、お江は彼方の扇師の家を、

笠の内から横目でうかがった。
だれも出ては来ぬ。
お江を追って来る気配もない。
（よし！）
たちまちに、お江は決意をした。
そして、別の道をとり、足を速め、お江は下久我へ帰って行ったのである。

下久我の家へ帰ったお江は、裏手で水を浴び、汗をながした。
それから権左が仕度をしてくれた麦飯と、焼茄子に味噌をぬりつけたものを食べ、屋根裏の部屋へ入った。
姉山甚八は、まだ、あらわれぬ。
権左は、お江のことを、
（疲れて、ねむってしまわれたらしい）
と、おもっていた。
二日の午前一時頃、お江が隠し梯子から下りて来たのを見て、権左が、
「また、出られますのか？」
目をみはった。
お江は、いつものような変装ではない。

足ごしらえも厳重にしており、灰色の筒袖の上着をつけ、脇差を腰にしているではないか。しかも、おそらく忍び道具が入っているとおもわれる革袋を小脇へ結びつけているのである。

「こ、これは、いずこへ？」

「権左。案じることはない」

「なれど……」

「わたし一人のことじゃ」

「何と申されます」

「ただ……」

「ただ？」

「今日の夜になっても、わたしがもどらぬときは、姉山甚八どのへつたえておくれ。いえ、甚八どのへというよりも、これは壺谷又五郎どのへの伝言なのじゃ」

「……」

「よいかえ？」

「は……」

「お江は、甲賀の綱を断ち切りに行った、と……」

「甲賀の綱を……あの、断ち切りに……？」

「さよう」

「……」

権左は息をのんだ。

この老人も、馬杉市蔵・お江の父娘の事情と宿命については、おぼろげながらわきまえていた。

「では……」

「もし……」

「とめるな、権左」

その一声を残し、お江は戸外の闇に消えた。

ちょうど、そのころ……。

丹波・亀山の城を発した明智光秀は、一万三千余の兵をひきいて老の坂へ進軍しつつあった。

中国攻めの先鋒としての出陣なのであろうが、それにしては腑に落ちぬ。

織田信長は、

「今日明日のうち、都合のよいときに出発せよ」

たしか、そのように命じてあるはずだ。

とすれば、一万数千の軍隊を何も好んで夜更けに進発させる必要はないことになる。

だが、明智軍は深夜の闇の中を粛々として老の坂へ向かいつつあった。

老の坂を下って半里ほどのところに、沓掛という村がある。

沓掛で、道が二つに別れる。
一は、東進して桂川をわたり、京へ入る道。
一は、右へ折れ、山崎から天神の馬場を経て中国へ向かう順路であった。
明智軍が老の坂をのぼりつめたころ、お江は京の町へ潜入していた。
鴨川沿いの道を、お江は北へすすみつつあった。
蒸し暑い暗夜である。
鴨川の河原に、一つ二つと、蛍が飛んでいた。

十五

このごろの京の町には、二階建ての家が多くなった。
織田信長によって都の治安がたもたれ、町家の人びとも腰を落ちつけて、それぞれの職にはげむようになったあらわれといえよう。
乞食姿の猫田与助が入って行った扇師の家も、板屋根の二階建てであった。
板屋根といっても、そこは京の都の町屋だから、きれいに削りあげた板を張った上へ青竹の桟をいくつもわたし、渋縄で結びつけてある。
細道を曲がったお江は、家並みの裏側を通っている道をこえて、突き当たりの竹藪の中へ身を潜めた。
当時の京都は、四条通りを中心にした下ノ京と、皇居の北、すなわち上ノ京に町屋が密集

していた。

室町通りも、このあたりまで北へあがると、下ノ京の北の外れということになり、表通りには一応、家もならびつつあったが、裏へまわると、かつての戦火を浴びた焼け跡がそのままになっていたり、竹藪や木立がひろがっていたりする。

竹藪の中にいて、お江は屈みこんだまま身じろぎもせぬ。

だが、両手は音もなくうごき、何かしているようだ。

空が白むまでに、まだ二時間ほどはあろう。

風はまったく絶え、日中の熱気の褪めきらぬ闇が、重苦しくたれこめている。

やがて……。

お江が、うごき出した。

竹藪の中から這い出したお江は、でき得るかぎり呼吸をつめ、すこしずつ、扇師の家の裏手へ近寄って行く。

常人のごとく、おもうさまに呼吸をすると、どうしても気配が起こる。また、体臭もただよう。それは常人にわからぬほどのものであっても、相手が猫田与助や新田庄左衛門のような、ひとかどの忍びの者の感官を、

（あざむくことはできぬ……）

のである。

また、扇師の家が甲賀・山中家の〔忍び宿〕だとしたら、敵の襲撃や探索に備えるため、

（どのような仕掛けが、この家にしてあるか、知れたものではない……）

のである。

いま、お江は、単身で扇師の家を襲撃しようとしていた。

だが、目ざす相手は、

（猫田与助ひとり……）

であった。

新田庄左衛門を、

（殺害しようとはおもわぬ……）

が、この場合、庄左衛門とも闘わねばなるまい。

お江が与助へ襲いかかるのを、庄左衛門は、手を束ねて見てはいまい。

庄左衛門は、与助同様に、山中大和守配下の忍びの者である。

ゆえに、はからずも路上で、お江を見かけたとしたら、これを黙って見逃しはすまい。何故なら、お江は甲賀・山中家に背いた裏切り者であったし、かつては同じ家に仕えていた山中忍びを何人も手にかけているからだ。

しかし、お江ひとりを探し出してまでも、これを成敗するというほどの執念をもってはいまい。

お江の父・馬杉市蔵が生きていたころは、市蔵たちを討つために数人の忍びを甲賀からさし向けた山中大和守も、市蔵や他の裏切り者が死に絶えたいまは、

「見かけたら、お江とても容赦するな」
と、指令をあたえているにせよ、お江をわざわざ追いもとめているわけではない。
だが、猫田与助のみはちがう。
彼も頭領の指令によってはたらく忍びである以上、勝手なふるまいはゆるされぬが、もしも、
「好きにいたせ」
と、山中大和守にいわれたなら、たとえ草の根を分けても、お江を探し出して、いのちを絶たねば熄むまい。
それには、それだけの理由がある。
お江もまた、壺谷又五郎の指令もなく、真田家・草の者としては別に殺害せずともよい猫田与助を、これほどの危険を冒してまで、
（討ちとらねばならぬ！）
と、決意したのは、また、それだけの理由があるからであった。

竹藪を出たお江は、扇師の家の垣根まで接近した。
暁闇の中に、小さな光が一つ、明滅しつつたゆたっている。蛍であった。
垣根の際に身を伏せたお江の手には、いつの間にか長さ五尺ほどの細竹が持たれている。
これは一種の〔継ぎ竿〕のようなもので先端に仕掛けがほどこされていて、細くて丈夫な

麻糸が先端から竿を持つお江の手もとにまでのびていた。
この麻糸をあやつり、竹竿の先端の仕掛けをうごかし、さまざまなはたらきをさせるのである。

すでに、竹竿の先端には油紙に包まれた小さな物が結びつけられている。
お江は垣根の外から、竹竿の先端を扇師の家の床下へさしこんだ。
そして麻糸をあやつると、先端についていた油紙の包みが、床下へ落ちた。
ひとにぎりほどの包みであったが、中には火薬がつめこまれている。
包みには、油をぬりこめた紐がついており、お江がしずかにしずかに竹竿を手もとへ引き寄せるにつれ、その紐も竿の先端と共に手繰り寄せられて来た。
垣根の外まで手繰り寄せた竹竿から油紐を外し、継ぎ竿を一つにたたみ、腰へ差し込んだお江は呼吸をととのえ直し、そこに身を伏せたまま、かなり長い時間をうごかなかった。
あたりに異常がないと看て、お江は半身を起こした。
それから、また、竹藪へ引き返し、火打ちをつかって蠟燭を灯した。
それからまた、あたりの気配に耳をすまし、呼吸をととのえ、垣根の際までもどって行く。
それから、垣根の外へ出ている油紐へ蠟燭の火を移した。
微かな炎を起こして、油紐は燃えすすむ。
その行く手の床下には、油紐に包まれた火薬が在る。

これは、つまり、火薬をもって、扇師の家を爆破するつもりなのである。
下久我(しもこが)の忍び宿の地下蔵にあった火薬の分量を、お江は慎重に計ってきた。
火薬をあつかうことは、あまり得手ではないお江だけに、何度も、おもいまよった。
だが、つまるところは、
（これよりほかに仕様がない）
と、おもいきわめた。
新田庄左衛門(にったしょうざえもん)と猫田与助(ねこだよすけ)がいる忍び宿へ単身で打ち込んで行っても、与助を討ち取るのは、まさに至難の事といわねばなるまい。
二人のほかにも、また、別の山中忍びが泊まり込んでいるやも知れぬのだ。
そこで、火薬をもって扇師の家を爆破する。
それによって二人が死んでくれれば申し分がないけれども、確定的なものではない。
階下に寝ている者に重傷をあたえることは可能だが、その者が庄左衛門であるか、与助であるかは不明なのだ。
また、もっと大量の火薬を使用することも考えた。
そうなると、
（わたしたちには、何の関(かか)わり合いもない……）
両隣の家にまで、害をおよぼすことになる。
真田家・草の者の助力をも、

「これは、わたしひとりのことゆえ……」

と、拒みつづけてきたお江だけに、関係のない人びとを傷つけることは、どうしてもできぬ。

お江が計量した火薬は、扇師の家を半壊させ、両隣の家を若干、損破させるほどのものといってよい。

十六

ゆっくりと、油紐をつたって、火は床下へ向かいつつある。

お江は腰の革袋を探り、四箇の鉄片を手につかんだ。

それは手指ほどの長さと太さをもち、尖端がするどく、根元に二カ所ほどの凹みがついた一種の手裏剣であった。

権現山の忍び小屋を襲った猫田与助たちが投げ撃ってきたものと同じ手裏剣なのだ。

お江の右手は、すでに脇差をぬきはらっていた。

家が爆破されると同時に、お江は中へ飛び込み、猫田与助の生死をたしかめ、もし彼が生きていたなら、すかさずこれを討ちとるつもりであった。

火薬の爆発によって、驚愕した敵の感官のはたらきも、闘う力も、おそらく半減されるにちがいなかった。

お江は爆発にそなえ、また、身を伏せた。

そのとき……。

お江は異様な物音を聞いた。

物音というよりも、彼方の暁闇が音をたててゆれうごいたような……何とも表現のしようがない響みといったほうがよいだろう。

（あっ……？）

と、おもった。

その衝撃の実体をつかめぬままに、お江は愕然となった。

異様な響音は、南西の方、およそ五、六百メートルのあたりで起こり、絶えることなく急激に高まった。

響音は、お江の直感でいうと、

（戦場のもの……）

だったのである。

いまこのときの京都に、戦が始まることはあり得ないはずだ。

（何か……？）

おもわず立ちあがって、お江が本能的に飛び退ったとき、扇師の家が轟音をたてて幾条もの火箭を噴き出した。

転瞬……。

お江は、真田家・草の者としての意識を取りもどした。

響音の性質からいって、それは、
（一瞬のためらいもゆるされぬ……）
ことだったからである。
爆破した忍び宿をかえりみることなく、お江は身をひるがえして響音の方へ走り出した。
常楽寺の角を西へ曲がって走りつつ、
「あっ……あっ……」
おもわず、お江は叫んでいた。
行く手に、数え切れぬほどの松明がゆれうごいているのを見たからであった。
地を蹴って、お江は常楽寺の土塀へ飛びあがっている。
馬蹄の響きが地面を揺るがすようにきこえた。
もはや、うたがう余地はない。
どこの軍勢か知らぬが、夜明け前の京の都へ、突如、侵入したのである。
これが、明智日向守光秀がひきいる一万三千の軍勢だとわかるまでには、いますこし、お江に時間をあたえねばなるまい。
明智光秀は、
「中国へ出陣」
をふれ出し、丹波・亀山の城を出発した。
光秀は、数日前に、中国攻めのための火薬や、大荷駄を中国に向けて先発せしめてある。

麾下の将兵たちも、
（なんで、夜ふけに出なくてはならぬのか？）
と、おもいはしても、中国へ向けての進発であることを、すこしもうたぐっていなかったろう。
ところが、老の坂を下って沓掛の村まで進んだとき、明智光秀は、全軍に、
「しばし、休め」
の令を下した。
ここで、光秀は、
「京の本能寺にある織田信長を討つ！」
の決意をあきらかにし、光秀に大事決行を打ちあけられた二十五名の家来は、それぞれの部隊を指揮し、全軍の編成替えをおこない、桂川をわたって、一気に京都へ突入したのであった。
光秀の家老・斎藤利三は先鋒となって京へ入るや、本能寺へ至る町々の木戸を押さえ、後方から突入する明智軍の通過を容易ならしめた。
明智軍は、たちまちに桂川を押しわたった。
桂川をわたれば、一里半ほどで本能寺に達する。
この、明智光秀の謀叛を、本能寺に眠っている織田信長一行は、
「夢にもおもわぬ……」

のであった。
だれの目にも、これは、
「信じがたい……」
謀叛といってよい。
これを知ったとき、お江も、
（日向守光秀は、天魔に魅入られた……そうとしか、おもえぬ。おもえぬ……）
興奮の胴ぶるいが熄まなかったほどだ。
明智光秀は、羽柴秀吉とならび、信長麾下の宿将として、もっとも忠実で、しかも立身が目ざましかった人物である。
お江から看れば、何一つとして、
（信長に叛く理由がない……）
のだ。
それだけに、明智光秀の本能寺奇襲は成功の確率をもっていた。
本能寺の信長は、わずか百数十名の家来を従えているのみだし、妙覚寺の息・信忠も五百の手勢を引きつれているだけなのだ。
織田父子の中国攻めの本軍は、まだ、京へ到着していない。
明智軍は、二重三重に本能寺を包囲するや、一斉に鉄砲を撃ちかけた。
ときに、天正十年六月二日の午前三時ごろといわれる。

ついで、天地もどよめくような明智軍の鬨の声があがり、将兵が本能寺へ突入した。

織田信長の決断は早かった。

「これまでのことよ」

と、笑ったのである。

「御立ち退きを……」

と、すすめる侍臣へ、信長は、こういった。

「日向守ほどの男が、おもいきわめて仕てのけたことよ。逃ぐるはむだじゃ」

それから、弓矢を持ち、奥御殿の回廊へ出て、信長は闘うことにした。

敵が堂宇の内外や庭から押しつめて来たとき、弓を捨てた信長は小姓・高橋虎松がさし出す十文字の鎌槍をつかみ、闘いつづけながら、

「奥殿へ火をかけよ！」

と、命じた。

光秀に、おのれの首は、

「やらぬ！」

と、おもいきわめていたのである。

間もなく、奥殿から黒煙と火焔が噴き出し、信長は槍を捨てて、その中へ駆け入った。

火と煙が物凄い音響と風を起こし本能寺が火焔に包まれてゆくさまを、お江は、常楽寺の本堂の大屋根の上からながめていた。

すでに、お江は、扇師の家も猫田与助も念頭にない。
真田家の草の者としての自分に立ち返っている。
（先ず、このことを一時も早く、真田の殿のお耳へ入れねばならぬ）
このことであった。
お江の血は、さわいでいる。
（信長も信忠も、生きてはいない）
と、おもうからである。
これだけ完璧な包囲を破り、生きて逃げられるはずはない。
と、すれば、
（これからの天下は、どうなることか？）
であった。
絶対の威力をそなえた英雄が、いま、わけもなく死にかかっている。いや、すでに死んでしまったといってよい。
（また、戦じゃ）
それも、遠い中国や四国、九州でのことではない。
ふたたび、戦火は中央に燃えひろがることになろう。
これは、戦将・真田昌幸にも擡頭の機会があたえられたことにもなるのだ。
白みかけた空の下で、京の町が明智軍の跳梁にまかせている。

常楽寺のまわりも人馬の響(とよ)みにみたされ、それが北へ移動しつつあるのは、妙覚寺の織田信忠への攻撃が開始されようとしているのか……。

お江は、常楽寺の大屋根をすべり下りて行った。

（第二巻につづく）

解説

重金敦之（しげかねあつゆき）

フランス国鉄がその最新技術を誇る新幹線TGV（テジェヴェ）は、スイスのジュネーブとパリのあいだを三時間半で走り抜ける。レマン湖畔からそんなに遠くないジュネーブ駅をすべるように離れたTGVは、まもなく国境を越えると徐々にスピードをあげていく。東京で予約した席がダブルブッキングになっていて、客が右往左往しているのにもかかわらず、車掌は悠然としたもので、そのうち客のほうで勝手におさまりをつけてしまっていた。

銘醸ワインで知られるブルゴーニュ地方に入ったTGVはソーヌ川を渡ると、かつてのブルゴーニュ公国の首都ディジョンを経てフランスの中心、イル・ド・フランスへ向かっていく。麦秋の薄茶色とジャガイモ畑の緑のモザイク模様が車窓から繰り返し過ぎ去っていくのを眺めながら、私はオランダの歴史家ホイジンガの名著『中世の秋』の一節を思い起こしていた。

〈ルネサンス、あるいは啓蒙主義の時代の歴史をつらぬいてひびいている、大胆な生の喜び、偉大な行為をなしとげる力への信頼という調べは、ここ、十五世紀のフランス・ブルゴーニュ世界にあっては、ほとんどきかれなかった。

この時代がのちに伝えた言葉をたどってみれば、歴史叙述、詩人の著作、説教あるいは教会関係の小冊子、いたるところ、文書類にさえも定着されているのは、ただもう、争い、憎しみ、悪意、貪欲、野蛮、悲惨の記憶ばかりである。＝堀越孝一訳・中公文庫〉

池波正太郎さんの『真田太平記』は、天正十年（一五八二年）の武田氏滅亡から、元和八年（一六二二年）、真田信之が信州上田から松代へ移封されるまでの、およそ四十年間の日本が舞台である。真田一族の興亡を基軸に、激しく揺れ動いた戦国末期の世の流れ、人の動きを照射している。悠久の歴史の流れから見れば、刹那ともいえる短かさかもしれないが、ここに書き込まれた人間のドラマは多彩である。この物語の成り立ちからかかわってきた私としては、年代はやや異なるが、どうしても中世フランスの時代と比較したくなってしまう。また、それは池波さんを語るときにけっして無益なことではないと思うのだ。

＊　＊　＊

「週刊朝日」編集部にいた私が、池波さんに連載小説をお願いしたのは昭和四十七年（一九七二年）の春だった。場所は小田原の食堂「だるま」で、当時連載していたエッセイ『食卓の情景』の取材中だったと記憶している。刺し身や天ぷらなど、お互いに好きなものを注文し、取り分けながら銚子の数を増やしていった。

「江戸の市井をテーマにした人情話なら一年、真田一族を取り上げるとなれば三年ぐらいはかかるかもしれないね」

そういう池波さんへ私は即座に、「真田でいきましょう」と答えていた。

池波さんと真田氏との縁は深い。昭和三十一年（一九五六年）に、池波さんが初めて書いた時代小説が松代時代の真田家の執政、恩田木工民親を主人公にした長編であった。この『恩田木工』は直木賞の候補になり、それから時代小説の作品が増えていく。四年後の三十五年、やはり真田家に江戸から送り込まれた隠密をテーマにした『錯乱』で直木賞を受賞したことはよく知られている。

とりわけ真田氏と血縁関係があるわけでもないし、信州が出身地というのでもない。しかし、真田氏にかかわる小説を発表していくうちに愛着をおぼえ、また友人知己も信州の地に増えていったのだろう。もともと嫌いな土地だったら、はなから題材を得ようとは思わなかったろうし、少年時代から信州へはよく出かけていたというから、気にいった風土が池波さんを呼び寄せ、また小説を育てあげていったといえるのかもしれない。

結局、「週刊朝日」に連載が始まったのは昭和四十九年（一九七四年）一月四・十一日合併号からで、五十七年（一九八二年）十二月十日号までの四百四十九回におよぶ大長編小説となった。原稿用紙の枚数にして九千枚となる。「週刊朝日」の小説といえば、吉川英治氏の『新平家物語』がよく知られているが、こちらは七年で三百五十四回だから、おそらく『真田太平記』は週刊誌の連載小説として稀有の記録と思われる。小田原の「だるま」で語り合ったとき、私はもちろんのこと、池波さん自身もこんなに長くなるとは夢にも思わなかったに違いない。

ところで、物語は豊臣秀吉と徳川家康という二大勢力のあいだにあって、信州の小さな領

国を守る真田家の命運を基調にして雄大に繰り広げられていく。敵と味方に分かれることになった源三郎信幸（後の信之）と源二郎信繁（後の幸村）の兄弟は大坂冬の陣のあと再会するが、幸村は夏の陣で戦死、信之は徳川秀忠によって上田から松代へ移っていく。

関ヶ原や大坂の陣を通じて、お江を初めとする真田家の草の者と甲賀忍びの凄絶な暗闘が繰り広げられるのも、物語の重要な因子となっている。向井佐平次の息子、佐助も草の者として活躍するが、読者は佐助に猿飛佐助のイメージを重ねてもいっこうに差し支えない。

池波さんは、「時代小説」について次のように書いている。

〈昔も今も、人間のあり方というものが、それほど違っていないことに気がつくと同時に、一つだけ大変に違っていることも出てくる。それは「死」に対する考え方である。昔の人々は「死」を考えぬときがなかった。いつでも「死」を考えている。それほど、世の中はすさまじい圧力をもって、武士といわず百姓といわず商人といわず、あらゆる人間たちの頭上を押えつけていたのである。

現代でもしかり。人間ほど確実に「死」へ向って進んでいるものはない。しかし、現代は「死」をおそれ「生」を讃美する時代である。そして「死」があればこそ「生」があるのだということを忘れてしまっている時代なのである。戦国の世の人たちは天下統一の平和をめざし、絶えず「死」と「生」の両方を見つめて生きている。そこにテーマが生まれてくる。

‖『新年の二つの別れ』・朝日新聞社刊〉

今巻で真田源二郎（幸村）と向井佐平次が初めて出会うシーンを思い起こしてみたい。

十六歳の少年、源二郎は佐平次に向かって、「おれと、お前とは、いつの日か、いっしょに死ぬるような気がしてきたぞ」といってのけ、佐平次はただなにもわからず、空恐しいおもいにとらわれる。源二郎はこのとき、死の予感を突然に感じ、真田家がたどらなくてはならない将来への暗示をおぼえたのだ。

いずれにしても、池波さんのすべての小説を通じていえることなのだが、「人間、いつかは死ぬ」という単純にして明快な思想が底辺にたゆとうている。

ふたたび、ホイジンガの『中世の秋』からの引用を許されたい。

〈すべて、この世のおごりには終りがあるとの、永遠につきない嘆きをかなでる三つのメロディーがあった。第一のメロディーをかなでるのは、かつてその栄光一世を風靡した人びとは、いまいずこにある、というテーマ。第二のメロディーをかなでるのは、ひとたびは、この世の美とうたわれたものすべてが、腐り崩れていくさまをみて恐れおののくというテーマ。そして、第三に、死の舞踏のテーマ、この世のなりわいを問わず、老幼の別なく、死はすべての人をひきずりまわす、という。

後期中世は、死に関して、ふたつの極端な考えかたしか知らなかった。権勢、栄誉、享楽、諸行は無常、美もまた過ぎゆくとの嘆きと、至福のうちに救われる魂を想っての喜びと。この両極のあいだにあるものは、すべて無視された〉

いってみれば、小説の作業というのは、死をめぐる嘆きと喜びのあいだにあるものを発掘することといえる。ホイジンガのいう「無視された両極のあいだ」を埋める作業といっても

いいだろう。

この『真田太平記』には、さまざまな生と死が描かれ、そこには権謀、怨念、忍従、忠誠、功名、愛憎など、人間が持つ性と業、欲望と本能の表裏があますところなく表白されている。実在した人物と池波さんが創り出した多くの登場人物たち――虚実ないまぜて数百人に及ぶキャラクターを掌の上でもて遊ぶごとく、奔放自在に躍動させ、歴史上の一時期を明晰に截断した時代小説は、『真田太平記』のほかに例を見ないのではないかと思う。長く次代に読み続けられるであろう「文化遺産」といっても過言ではないだろう。

池波さんは、『真田太平記』連載中の昭和五十二年（一九七七年）、『回想のジャン・ギャバン』（平凡社）の取材で、初めてフランスを訪れている。私もたまさか機会を得て、さし絵の風間完画伯とともに、パリのキャフエで落ちあい、一夕をともに過ごした。

ノルマンディー、マルセーユ、ニース、リヨンを回ってきた池波さんは初めてのフランスというのに、そんな素振りは少しも見せず、すっかりパリに溶けこんでいた。

「四十年間フランス映画を見てるから、言葉はできないけどすっとはいれるんですよ。違和感がない。居心地が悪いなんて、ちっとも感じません」

そういって、パリの旧市場近くの「ピエ・ド・コッション」やモンパルナスの「クーポール」などでフランス料理を堪能し、サン・マルタン運河に映画「北ホテル」をしのび、「フォリー・ベルジュール」でショウを観るなど、精力的に動き回っていた。

その後も、何回となくヨーロッパを訪ね、多くの紀行文や掌編を発表し、またお得意の彩

管を振るっていることは、読者諸賢もよくご存知のはずだ。この池波さんの人生のゆとりが、作品の深みと奥行きを生み出していることはいうを待たない。都会人特有の澄明な世界観と些細なことにも興味を抱く好奇心が『真田太平記』を単なる「時代小説」に終わらせず、偉大なエンターテインメント（本当は池波さんはこの言葉をあまり快く思っていないのだが、あえて使わせていただく）に昇華させた秘密があるのではあるまいか。

＊　＊　＊

最近、十年ぶりにパリを訪れることができた。ジュネーブからのＴＧＶはパリのリヨン駅に着く。その夕刻、シャンゼリゼ大通りから、ジョルジュ・サンク通りへちょっと入ったキャフエを訪ねてみた。丸いテーブルは十年前とまったく変わっていないように思われた。黒いソフト帽をかぶって細目の葉巻をくゆらせながら、エスプレッソを飲んでいる池波さんにばったり会えるような気がしたものである。

（昭和六十二年八月、朝日新聞編集委員）

この作品は朝日新聞社より、昭和四十九年十二月から五十八年四月まで全十六巻本として刊行され、その後、新装版が昭和五十九年十一月から六十年二月まで全十八巻本として刊行された。

文字づかいについて

新潮文庫の日本文学の文字表記については、原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは新仮名づかいに改める。

二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。

三、常用漢字表、人名用漢字別表に掲げられている漢字は、原則として新字体を使用する。

四、年少の読者をも考慮し、難読と思われる漢字や固有名詞・専門語等にはなるべく振仮名をつける。

新潮文庫最新刊

瀬戸内寂聴著

いよよ華やぐ（上・下）

91歳、84歳、72歳――妖にして艶やかな女三人のそれぞれの愛の煉獄。瀬戸内文学の山嶺を越えた「愛と救い」の果てしなきドラマ。

帚木蓬生著

安楽病棟

痴呆病棟で起きた相次ぐ患者の急死。新任看護婦が気づいた衝撃の実験とは？　終末期医療の問題点を鮮やかに描く介護ミステリー！

唯川恵著

「さよなら」が知ってるたくさんのこと

泣きたいのに、泣けない。ひとりで抱えてるのは、ちょっと辛い――そんな夜、この本はきっとあなたに「大丈夫」をくれるはずです。

桐野夏生著

ジオラマ

あたりまえのように思えた日常は、一瞬で、あっけなく崩壊する。あなたの心も、変わってゆく。ゆれ動く世界に捧げられた短編集。

河野多恵子著

赤い脣黒い髪

くちびるへの偏愛「赤い脣」、右半身を恋人にゆだねる「片冷え」など、偏執、誘惑を軸に大人の女のエロチシズムを描く短編集7編。

団鬼六著

檸檬夫人

「お願い、私の口の中へお出しになって」――。ますます盛んな〈緊縛の文豪〉が描出する、切ないほどの愚かさに満ちた男と女。

新潮文庫最新刊

藤本ひとみ著

暗殺者ロレンザッチョ

刺客の手を逃れ、フランス宮廷に身を隠したフィレンツェ大公暗殺者は、王太子妃カトリーヌの求めに応じて自らの過去を語り始めた。フランスの教会で中世フレスコ画を修復する日本人男性アベ。傍らを行き過ぎるわけありの男たち女たち。哀歓溢れる濃密な人生模様。

藤田宜永著

壁画修復師

W杯出場、ベルージャ移籍で世界デビューを果たしたヒデ。報道では分からない彼の本音と日常生活が綴られたヒデ・メール第一弾！

中田英寿著

nakata.net 1998

戦後最大の企業破綻事件を引き起こしたのは、凡庸な失敗の連鎖だった——。封印された文書から組織犯罪を暴く傑作ドキュメント。

読売新聞社会部

会社がなぜ消滅したか
—山一証券役員たちの背信—

この男がいなければ、戦後復興の象徴〝東京五輪〟はなかった——フレッド・和田勇の苛烈な生涯を描いたドキュメント・ノベル。

高杉良著

祖国へ、熱き心を
—東京にオリンピックを呼んだ男—

52歳からの後半生に、夢を実現した伊能忠敬。彼の足跡を2年かけて歩き通した人たち。満足できる人生を志す人への力強いエール。

佐藤嘉尚著

伊能忠敬を歩いた

新潮文庫最新刊

松本昭夫著

精神病棟の二十年

電気ショック、インシュリン療法、恐怖の生活指導……。二十一歳で分裂病に罹患、四十にして社会復帰した著者が赤裸に綴る異様な体験。

企画・デザイン
大貫卓也

マイブック
—2002年の記録—

白いページに日付だけ。これは世界に一冊しかない、2002年のあなたの本です。書いて描いて、いろんなことして完成させて下さい。

T・クランシー
S・ピチェニック
伏見威蕃訳

流血国家（上・下）

トルコ最大のダム破壊、米副領事射殺、ダマスカス宮殿爆破——テロリストの真の狙いとは？ 好評の国際軍事謀略シリーズ第四弾！

サガン
河野万里子訳

逃げ道

フランスの農村で出会った上流階級のスノッブな男女と農家の親子。全く違う階級どうしの違和感が巻き起こす人間喜劇と残酷な結末。

D・ベニオフ
田口俊樹訳

25時

明日から7年の刑に服する青年の24時間。絶望を抑え、愛する者たちと淡々と過ごす彼の最後の願いは？ 全米が瞠目した青春小説。

D・バリー
東江一紀訳

ビッグ・トラブル

陽光あふれるフロリダを舞台に、核爆弾まで飛び出した珍騒動の行方は？ 当代随一の人気コラムニストが初挑戦する爆笑犯罪小説！

真田太平記（一）天魔の夏

新潮文庫



い－16－34
全12冊

昭和六十二年九月二十五日　発行
平成十三年十月二十日　四十一刷

著者　池波正太郎
発行者　佐藤隆信
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（〇三）三二六六―五四四〇
読者係（〇三）三二六六―五一一一

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Toyoko Ikenami 1974　Printed in Japan

ISBN4-10-115634-4 C0193





定価：本体629円(税別)

天正10年(1582年)3月、織田・徳川連合軍によって戦国随一の精強さを誇った武田軍団が滅ぼされ、宿将真田昌幸は上・信二州に孤立、試練の時を迎えたところからこの長い物語は始まる。武勇と知謀に長けた昌幸は、天下の帰趨を探るべく手飼いの真田忍びたちを四方に飛ばせ、新しい時代の主・織田信長にいったんは臣従するのだが、その夏、またも驚天動地の事態が待ちうけていた。**全12冊**

ISBN4-10-115634-4

C0193 ¥629E